

公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(18)

東九州自動車道建設(鹿屋串良JCT～曾於弥五郎IC間)に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

天神段遺跡3

(曾於郡大崎町)

縄文時代早期編

第2分冊

2018年3月

鹿児島県教育委員会
公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター

総目次

【第1分冊】

巻頭図版1
巻頭図版2
序文
報告書抄録
天神段遺跡位置図
例言・凡例
目次

第I章 発掘調査の経過
第1節 調査に至るまでの経緯
第2節 整理・報告書作成作業
第II章 遺跡の位置と環境
第1節 地理的環境
第2節 歴史的環境
第III章 調査の方法と順序
第1節 調査の方法
第2節 順序

第IV章 発掘調査の成果
第1節 縄文時代早期の概要
第2節 遺構
【第2分冊】
第3節 1 遺物
土器 (I類土器～IV類土器)
【第3分冊】
第3節 1 2 3 遺物
土器 (VI類土器～IX類土器)
土製品
石器
第V章 自然科学分析
第1節 概要
第2節 テフラ分析
第3節 放射性炭素年代測定
第VI章 総括
【第4分冊】
写真図版

第2分冊目次

目次	
第IV章 発掘調査の成果	1
第3節 遺物	1
1 土器	1
(1) I類土器	3
(2) II類土器	3
(3) III類土器	12
(4) IV類土器	21
(5) V類土器	21
(6) VI類土器	37

(7) VII類土器	49
(8) VIII類土器	56
(9) IX類土器	63
(10) X類土器	63
(11) XI類土器	74
(12) XII類土器	101
(13) XIII類土器	114
(14) XIV類土器	119
(15) XV類土器	159

挿図目次

第246 図	I類土器出土分布図	4
第247 図	I類土器	5
第248 図	II類土器出土分布図	6
第249 図	II類土器(1)	7
第250 図	II類土器(2)	8
第251 図	II類土器(3)	9
第252 図	II類土器(4)	10
第253 図	II類土器(5)	11
第254 図	II類土器(6)	12
第255 図	II類土器出土分布図	13
第256 図	II類土器(1)	14
第257 図	II類土器(2)	16
第258 図	II類土器(3)	17
第259 図	II類土器(4)	18
第260 図	II類土器(5)	19
第261 図	II類土器(6)	20
第262 図	IV類土器出土分布図	22
第263 図	IV類土器	23
第264 図	V類土器出土分布図	24
第265 図	V類土器(1)	26
第266 図	V類土器(2)	27
第267 図	V類土器(3)	28
第268 図	V類土器(4)	29
第269 図	V類土器(5)	30
第270 図	V類土器(6)	31
第271 図	V類土器(7)	32
第272 図	V類土器(8)	33
第273 図	V類土器(9)	34
第274 図	V類土器(10)	35

第275 図	V類土器(11)	36
第276 図	V類土器(12)	37
第277 図	VI類土器出土分布図	38
第278 図	VI類土器(1)	39
第279 図	VI類土器(2)	41
第280 図	VI類土器(3)	42
第281 図	VI類土器(4)	43
第282 図	VI類土器(5)	44
第283 図	VI類土器(6)	45
第284 図	VI類土器(7)	46
第285 図	VI類土器(8)	47
第286 図	VI類土器(9)	48
第287 図	VI類土器出土分布図	50
第288 図	VII類土器(1)	51
第289 図	VII類土器(2)	52
第290 図	VII類土器(3)	53
第291 図	VII類土器(4)	54
第292 図	VII類土器(5)	55
第293 図	VII類土器出土分布図	57
第294 図	VII類土器(1)	59
第295 図	VII類土器(2)	60
第296 図	VII類土器(3)	61
第297 図	VII類土器(4)	62
第298 図	VII類土器出土分布図	64
第299 図	VIII類土器(1)	65
第300 図	VIII類土器(2)	66
第301 図	VIII類土器出土分布図	67
第302 図	IX類土器(1)	68
第303 図	IX類土器(2)	69

第 304 頁	因	X 類土器	(3)	70	第 354 頁	因	X 類土器	(10)	131
第 305 頁	因	X 類土器	(4)	71	第 355 頁	因	X 類土器	(11)	132
第 306 頁	因	X 類土器	(5)	72	第 356 頁	因	X 類土器	(12)	133
第 307 頁	因	X 類土器	(6)	73	第 357 頁	因	X 類土器	(13)	134
第 308 頁	因	X 類土器	出土分布圖	75	第 358 頁	因	X 類土器	(14)	136
第 309 頁	因	X 類土器	(1)	76	第 359 頁	因	X 類土器	(15)	137
第 310 頁	因	X 類土器	(2)	77	第 360 頁	因	X 類土器	(16)	138
第 311 頁	因	X 類土器	(3)	78	第 361 頁	因	X 類土器	(17)	139
第 312 頁	因	X 類土器	(4)	79	第 362 頁	因	X 類土器	(18)	141
第 313 頁	因	X 類土器	(5)	81	第 363 頁	因	X 類土器	(19)	142
第 314 頁	因	X 類土器	(6)	82	第 364 頁	因	X 類土器	(20)	143
第 315 頁	因	X 類土器	(7)	83	第 365 頁	因	X 類土器	(21)	144
第 316 頁	因	X 類土器	(8)	84	第 366 頁	因	X 類土器	(22)	145
第 317 頁	因	X 類土器	(9)	85	第 367 頁	因	X 類土器	(23)	147
第 318 頁	因	X 類土器	(10)	86	第 368 頁	因	X 類土器	(24)	148
第 319 頁	因	X 類土器	(11)	88	第 369 頁	因	X 類土器	(25)	151
第 320 頁	因	X 類土器	(12)	89	第 370 頁	因	X 類土器	(26)	151
第 321 頁	因	X 類土器	(13)	90	第 371 頁	因	X 類土器	(27)	152
第 322 頁	因	X 類土器	(14)	91	第 372 頁	因	X 類土器	(28)	153
第 323 頁	因	X 類土器	(15)	92	第 373 頁	因	X 類土器	(29)	154
第 324 頁	因	X 類土器	(16)	94	第 374 頁	因	X 類土器	(30)	155
第 325 頁	因	X 類土器	(17)	95	第 375 頁	因	X 類土器	(31)	156
第 326 頁	因	X 類土器	(18)	96	第 376 頁	因	X 類土器	(32)	157
第 327 頁	因	X 類土器	(19)	97	第 377 頁	因	X 類土器	(33)	158
第 328 頁	因	X 類土器	(20)	98	第 378 頁	因	X 類土器	出土分布圖	160
第 329 頁	因	X 類土器	(21)	99	第 379 頁	因	X 類土器	(1)	161
第 330 頁	因	X 類土器	(22)	100	第 380 頁	因	X 類土器	(2)	163
第 331 頁	因	X 類土器	出土分布圖	102	第 381 頁	因	X 類土器	(3)	164
第 332 頁	因	X 類土器	(1)	103	第 382 頁	因	X 類土器	(4)	165
第 333 頁	因	X 類土器	(2)	105	第 383 頁	因	X 類土器	(5)	166
第 334 頁	因	X 類土器	(3)	106	第 384 頁	因	X 類土器	(6)	167
第 335 頁	因	X 類土器	(4)	108	第 385 頁	因	X 類土器	(7)	168
第 336 頁	因	X 類土器	(5)	109	第 386 頁	因	X 類土器	(8)	169
第 337 頁	因	X 類土器	(6)	111	第 387 頁	因	X 類土器	(9)	170
第 338 頁	因	X 類土器	(7)	112	第 388 頁	因	X 類土器	(10)	172
第 339 頁	因	X 類土器	(8)	113	第 389 頁	因	X 類土器	(11)	173
第 340 頁	因	X 類土器	出土分布圖	115	第 390 頁	因	X 類土器	(12)	174
第 341 頁	因	X 類土器	(1)	116	第 391 頁	因	X 類土器	(13)	175
第 342 頁	因	X 類土器	(2)	117	第 392 頁	因	X 類土器	(14)	177
第 343 頁	因	X 類土器	(3)	118	第 393 頁	因	X 類土器	(15)	178
第 344 頁	因	X 類土器	出土分布圖	120	第 394 頁	因	X 類土器	(16)	179
第 345 頁	因	X 類土器	(1)	121	第 395 頁	因	X 類土器	(17)	180
第 346 頁	因	X 類土器	(2)	122	第 396 頁	因	X 類土器	(18)	182
第 347 頁	因	X 類土器	(3)	123	第 397 頁	因	X 類土器	(19)	183
第 348 頁	因	X 類土器	(4)	124	第 398 頁	因	X 類土器	(20)	184
第 349 頁	因	X 類土器	(5)	125	第 399 頁	因	X 類土器	(21)	185
第 350 頁	因	X 類土器	(6)	127	第 400 頁	因	X 類土器	(22)	187
第 351 頁	因	X 類土器	(7)	128	第 401 頁	因	X 類土器	(23)	188
第 352 頁	因	X 類土器	(8)	129	第 402 頁	因	X 類土器	(24)	189
第 353 頁	因	X 類土器	(9)	130	第 403 頁	因	X 類土器	(25)	190

表目次

第 21 頁	表	I 類土器觀察表	191	第 36 頁	表	X 類土器觀察表	(1)	198	
第 22 頁	表	II 類土器觀察表	(1)	191	第 37 頁	表	X 類土器觀察表	(2)	199
第 23 頁	表	III 類土器觀察表	(2)	192	第 38 頁	表	X 類土器觀察表	(3)	200
第 24 頁	表	IV 類土器觀察表	192	第 39 頁	表	X 類土器觀察表	(4)	201	
第 25 頁	表	V 類土器觀察表	193	第 40 頁	表	X 類土器觀察表	(1)	201	
第 26 頁	表	VI 類土器觀察表	(1)	193	第 41 頁	表	X 類土器觀察表	(2)	202
第 27 頁	表	VII 類土器觀察表	(2)	194	第 42 頁	表	X 類土器觀察表	(3)	203
第 28 頁	表	VIII 類土器觀察表	(1)	194	第 43 頁	表	X 類土器觀察表	(1)	203
第 29 頁	表	IX 類土器觀察表	(2)	195	第 44 頁	表	X 類土器觀察表	(1)	203
第 30 頁	表	X 類土器觀察表	(1)	196	第 45 頁	表	X 類土器觀察表	(2)	204
第 31 頁	表	X 類土器觀察表	(2)	196	第 46 頁	表	X 類土器觀察表	(3)	205
第 32 頁	表	X 類土器觀察表	(1)	197	第 47 頁	表	X 類土器觀察表	(4)	206
第 33 頁	表	X 類土器觀察表	(1)	197	第 48 頁	表	X 類土器觀察表	(1)	207
第 34 頁	表	X 類土器觀察表	(1)	197	第 49 頁	表	X 類土器觀察表	(2)	208
第 35 頁	表	X 類土器觀察表	(2)	198					

第4章 発掘調査の成果

第3節 遺物

本道跡で出土した縄文時代早期の遺物は、主にVI層～VII層にかけて出土した。抽出した遺物の分類を述べる。

I 土器

縄文時代早期該当の土器は、器形・文様・器面調整を考慮してI類～X類に分類した。以下、各類の特徴を略述する。

I 類土器

器形は底部から口縁部まではほぼ直線的に立ち上がり円筒形を呈する。底部は平底である。

文様は口縁部に貝殻腹縁線による刺突文が、1～2段施される。

胴部外面には、横位や斜位の浅い貝殻条痕が施される。内面には貝殻条痕が工具によるナデが行なわれている。

II 類土器

器形は底部から口縁部まで直線的に立ち上がり円筒形であるが、一部波状口縁を呈するものもある。

文様は口縁部上端に貝殻やヘラ状工具による縦位や斜位の刺突文が施される。

外面には横位や斜位の貝殻条痕が明瞭に施されている。文様意匠として意識的に施されているものと考えられる。

器面調整は内面にケズリが行なわれるものが多い。

III 類土器

器形は底部から口縁部まではほぼ直線的に立ち上がるものと口縁部がわずかに外反するものがあり、円筒形を呈する。また、口縁部が波状を呈し、やや丸みを帯びた角部を形成する角筒形がある。さらに、レモン形の器形もある。円筒形、角筒形、レモン形とも底部は平底である。

文様は口縁部に貝殻刺突線文を施し、胴部は貝殻条痕を施した後、沈線や刺突により幾何学状のモチーフを描く。口縁部上位に1～4段の貝殻刺突文を施すものや楔形突起を貼り付けるものもある。底面境には、ヘラ状工具による刻目が施されるものもある。

器面調整は外面に横位や斜位の条痕、内面にケズリが施される。

IV 類土器

器形は口縁部が外傾し、胴部は直線的に底部へ至る円筒形の器形を呈する。底部は平底である。

文様は口縁部には貝殻文による刺突が巡り、胴部には

貝殻による押し文が全面に施される。

内面は丁寧なナデが施される。

V 類土器

器形は口縁部が外反するものと直口するものがあり、ややバケツ形を呈する。一部、胴部に膨らみのあるものもある。底部は平底である。

文様は口縁部に横位、斜位、羽状の貝殻刺突文を施す。口縁部に瘤状突起が付くものもある。

外面は綾杉状を基本とする貝殻条痕文が施される。これは、文様意匠として意識的に施されているものと考えられる。内面は丁寧なナデが行われている。

VI 類土器

口縁部が直口ないしわずかに内湾し、胴部は直線的もしくはややすぼまりながら底部へ至る筒形の器形を呈する。

文様は外面のほぼ全体に貝殻刺突文が施される。口縁部と胴部の2帯に分けて施文するものと口縁部から胴部下半まで1帯で施文するものがある。口縁部から胴部上半にかけて瘤状突起が付くものもある。

器面調整は内外面ともにナデが行われている。特に、外面はミガキ状の丁寧なナデが行われた上で、施文されているのが特徴的である。

VII 類土器

器形は口縁部が直口ないし内湾する。胴部は直線的もしくはすぼまりながら底部へ至る筒形の器形を呈する。

文様は先端を細く加工した棒状工具による短沈線が羽状に施される。また、VI類の主な文様である貝殻刺突文が併用されるものも含む。

器面調整はミガキ状の丁寧なナデが行われている。

VIII 類土器

器形は口縁部が直口するか、ゆるやかに内湾するバケツ形を呈する。口縁部内面が肥厚するものもある。口唇部は平坦面を有し、内傾する。

文様は口縁部上端に横位の短沈線や条線を施し、口縁部下位より胴部下半は短沈線や条線で鋸歯状文や縦位の流水文を施す2帯構成のものと、口縁部から胴部下半まで1帯で施文するものがある。

器面調整はミガキ状の丁寧なナデが行われる。

IX類土器

器形は口縁部は直口するものとわずかに外傾するもの等がある。胴部は直線的もしくはややすぼまりながら底部へ至る筒形の器形を呈する。

文様は口縁部から胴部上半に集約されており、貝殻条痕を横位のみにも施文するものと横位と縦位に施文するものがある。

器面調整は内面に丁寧なナデが行われている。

X類土器

口縁部はやや外傾もしくは直口し、胴部はすぼまりながら底部へ至る器形を呈する。底部は丸味を帯びた尖底である。器壁が非常に厚いのが本類の特徴である。器壁厚は底部中心部で5～5.5cm、胴部で2～2.5cm、口縁部で1～2cm程度を測り、他類の土器と比較しても群を抜いている。

文様は施されない、いわゆる無文土器である。器面調整は内外面ともに貝殻条痕かナデが行われている。

XI類土器

原体を回転し施文する一群を本類としてまとめた。

器形は口縁部が大きく外反するものとやや外反するものがあるが、一部直口するものもある。胴部は直線的もしくはやや膨らみながら底部にむけてすぼまる器形を呈する。

文様は外面及び口縁部内面に施文具を回転することにより施文する。押型文、縄文、捺糸文に分けられるが、それ以外の原体で回転施文するものも含まれる。

器面調整はナデもしくはケズリが行われている。

XII類土器

口縁部が大きく外反し、胴部で屈曲し、底部にむけてすぼまる器形を呈する。底部は平底であるが、一部上げ底もある。

文様は外面及び口縁部内面に押型文、捺糸文、細条線文、ミミズばれ文、沈線等を施す。

器面調整は内外面ともにナデが行われている。

XIII類土器

口縁部は外反し、胴部はやや膨らみ、底部にむけてすぼまる器形を呈する。

文様は口縁部から頸部にかけて刻目突帯を巡らし、胴部に瘤状突起、貼り付け突帯、沈線文、刺突文を施す。

器面調整は内外面ともにナデが行われている。

XIV類土器

肥厚した口縁部は外反し、胴部は膨らみ、底部にむけてすぼまる器形を呈する。

文様は口縁部から胴部上半にかけて、沈線や刺突を施

す。また、瘤状突起を施すものもある。胴部は地文として単節縄文や結節縄文を施すもの、沈線と刺突を施すものがある。

器面調整は内外面ともに丁寧なナデが行われている。

XV類土器

口縁部は大きく外反し、頸部でくびれ、胴部はやや膨らみ、底部にむけてすぼまる器形を呈する。底部は平底であるが、一部上げ底のものもある。

文様は口縁部から頸部にかけて沈線や刺突を施す。胴部は網目状捺糸文を施した後、横位沈線で区画するものや、網目状捺糸文もしくは捺糸文を施し、沈線で区画するものがある。

器面調整は内外面ともに丁寧なナデが行われている。

XVI類土器

口縁部は外反し、頸部でややくびれ、胴部は膨らみ、底部にむけてすぼまる器形を呈する。

文様は口縁部にかけて貝殻刺突文、沈線文を施す。胴部は貝殻条痕文や条線文を施し、沈線で区画するものもある。

器面調整は内外面ともにナデが行われている。

XVII類土器

口縁部は外反し、頸部でくびれ胴部が膨らみ底部に向けてすぼまるものと、口縁部が直口し胴部は底部にむけて直線的にすぼまる器形のものがある。

文様は貝殻や幅の狭い瓣歯状を呈した工具による条痕文を施す。また、口縁部から胴部上半付近に刻目のある突帯や微隆線を貼り付ける。

内外面ともに丁寧なナデもしくはヘラケズリが行われている。

XVIII類土器

口縁部が直口し、胴部は径の小さい底部にむけて直線的にすぼまる器形を呈する。

文様は貝殻腹縁や幅の狭い瓣歯状を呈した工具による条痕文を施す。

内面はナデもしくはヘラケズリが行われているものや条痕調整を行うものがある。

XIX類土器

X類以外の無文土器をⅧ類と分類した。

XX類土器

I～Ⅷ類までに分類できなかったものである。

以上の分類に従って、抽出した土器を記述する。

(1) I 類土器 (第 246・247 図 236~252)

I 類土器は外面に浅い貝殻条痕調整もしくはナデを行い、口縁部に1~2段の貝殻刺突文を施す一群である。

236~242は口縁部外面に貝殻腹縁を縦位に押し当て押し引き状の刺突を1段施す。いずれも口唇部外端に刻目を施し、236・237・241・242は小波状の口唇部となる。また、240以外は内面に稜をもつ。236~240は押し引き状の刺突の下位に横位の刺突を1段施す。240は縦位の刺突幅が幅2.2cm程度の弧状を呈し、放射肋の溝幅も広いことから、やや大きい貝殻を用いている。器面調整は横縦位の工具によるナデを行うが、236の内面には一部条痕調整もみられる。

243・244は口縁部外面に貝殻刺突文を縦位に1段施す。243は口縁部に貝殻刺突文を縦位、斜位に1段施している。243・244とも口唇部には貝殻による刻目が施される。243の外面調整はナデ、244は貝殻条痕後にナデが施される。また、いずれの内面も丁寧なナデを行っている。

245~247は口縁部に逆「く」の字状を呈するような貝殻腹縁部による斜位の連続刺突文を2段施す。貝殻を器面に対して寝かせるように斜めに押し当て、施文している。いずれも口唇部先端を内傾させ、後を作り出す。245の内面は横縦位の工具で丁寧なナデを行うが、247は剥落のため明確に確認できない。

248~252は口縁部に貝殻腹縁による斜位の連続刺突文を1段施す。貝殻を器面に対して斜めに押し当て、施文している。口唇部を平坦に成形し、内面を面取りをするように内傾させ、わずかな段を作り出している。外面は貝殻条痕を横位、斜位に施す。

(2) II 類土器 (第 248~254 図 253~305)

II 類土器は外面に明瞭な貝殻条痕を施し、口縁部に1~2段の貝殻腹縁やヘラ状工具による刺突文を施す一群である。

253・254は縦位の貝殻刺突を1段施している。貝殻腹縁を器面に対し、縦位に直交するよう押し当て、刺突を施している点がI 類土器と異なる。いずれの口唇部にも先端を舌状に加工した工具により刻目を入れている。外面は横位の明瞭な貝殻条痕を施している。

255~266はヘラ状工具による刺突を縦位に1段施す一群である。内面は縦位のケズリを行っている。外面は横位の明瞭な貝殻条痕を施す。254以外は口唇部に刻目を入れている。253・256・260・264・265には、焼成後に穿孔した縦長の補修孔が確認できる。257は底面は欠損しているが、底面外周に粘土紐を巻き付けるように輪積みして胴部を成形している。258の胴部内面は縦位のケズリを行い、口縁部内面付近の横位のケズリとナデを行い、器壁を薄くしている。口縁部内面の横位のケズリの調整幅と外面の刺突文の施文幅は、ほぼ同程度である。

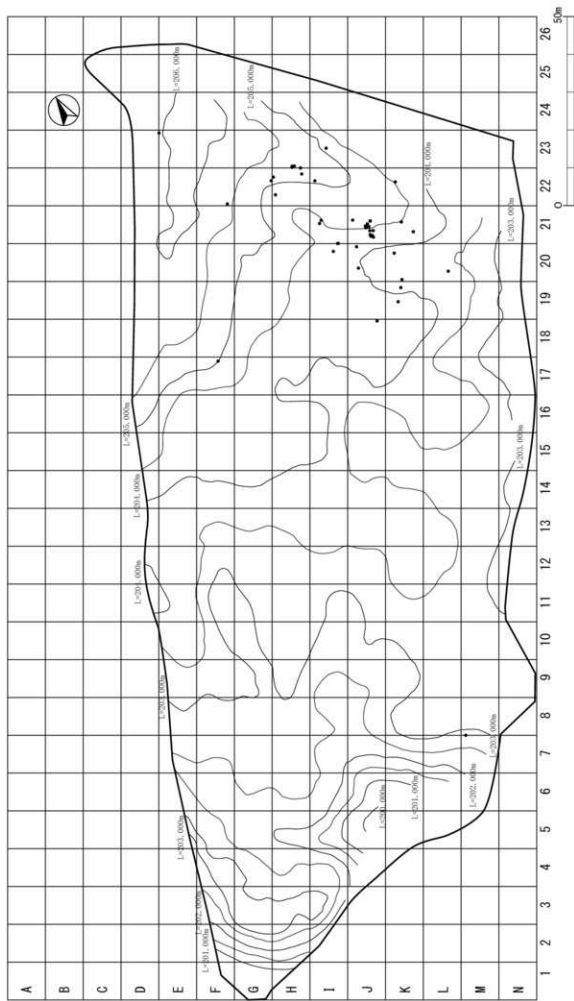
266は口縁部の一部に波頂部をもつ点などが他と異なる器形である。波頂部付近は角筒土器にみられるような明瞭な角部ではないが、やや屈曲するような成形が行われている。

267・268はヘラ状工具による刺突文を縦位に1段施した後、下位に連続刺突文を1~2条施す一群である。縦位の刺突を密接に施した後、267はその下に先端を舌状に加工した棒状工具による刺突文を左から右に行っている。施文を器面から離さずに連続的に施文するため、溝状の圧痕が形成される。268は施文を器面から離して施文しているため、独立した刺突痕となっている。いずれも口唇部には施文を浅く連続押し、刻目を入れている。

269~275は口縁部にヘラ状工具による刺突を縦位に2段施した一群である。外面は横位の明瞭な貝殻条痕が施された後に刺突が施文される。内面は底部付近を斜位に、その後胴部上面までを縦位に、口縁部付近を横位、斜位にケズリとナデを行っている。270~272は口唇部に施文をやや強く押し、明瞭な刻目を入れている。269には焼成後に穿孔した縦長の補修孔が確認できる。

276~283は口縁部外面に縦位の刺突を1~2段施し、胴部外面に横位の明瞭な貝殻条痕を施した後、縦位や斜位の浅い条痕や沈線を重ねて施文するものである。276~281は口縁部外面にヘラ状工具による縦位の刺突を施す。刺突は276~278が1段、279~281が2段である。282は貝殻腹縁で、283は先端部を三又状に加工した工具で縦位の刺突を1段施している。また、胴部は横位の貝殻条痕を施した後、条痕や沈線を重ねて施文している。276は胴部上半に弧状のモチーフを描くような浅い条痕を重ねて施文している。277は貝殻条痕を施した後、貝殻腹縁の向きを変えるか、別の大きさの貝殻腹縁を用いて縦位の浅い条痕を部分的に施している。279~281は先端の細い棒状工具による沈線や鋸歯状のモチーフを描いている。282は貝殻腹縁が棒状工具により3本1単位の縦位の浅い沈線と刺突と条痕を重ねるように施文している。283は口縁部の刺突に用いた工具で浅い刺突を縦位に施し、口唇部をやや内傾するように成形している点が特徴的である。283以外は口唇部にヘラ状工具を浅く押し、刻目を入れている。277は内面を横位と縦位のケズリを行い、器壁を薄く成形している。

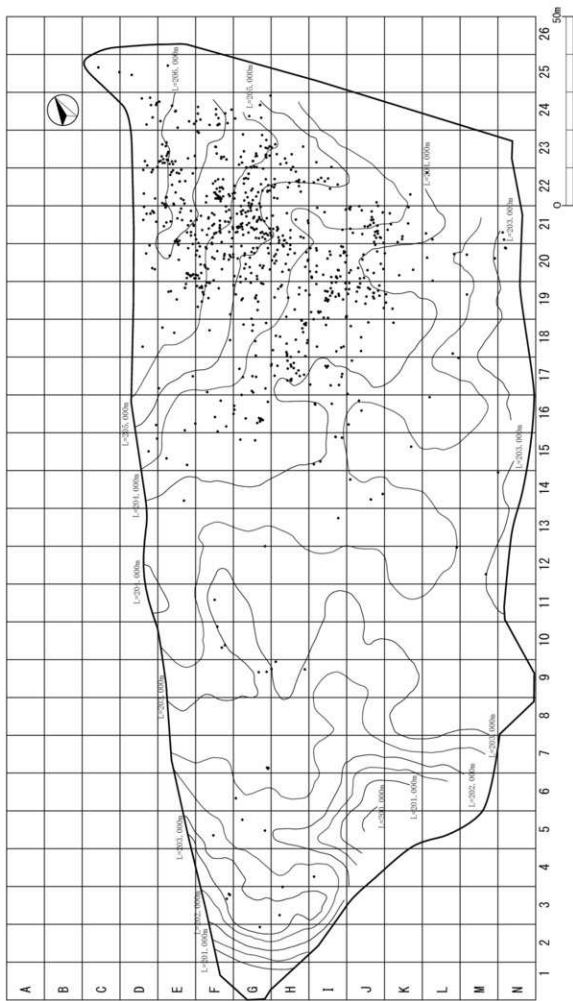
284~305は胴部から底部にかけて残存するものである。284~300は底面境まで横位、斜位の明瞭な貝殻条痕を施すものである。胴部内面部分は縦位、斜位のケズリを行っている。底部外面はケズリの後、ナデを行っている。284は底面境付近に棒状工具による刺突を部分的に施している。285・288・289・291・293は粘土版を円形に成形し、その外周部分に1段目の粘土紐を巻き付けて胴部を輪積み成形したと考えられる。底部内面には、成形



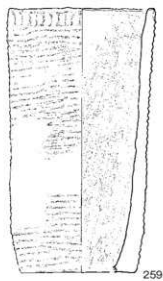
第 246 图 I 型土器出土分布图



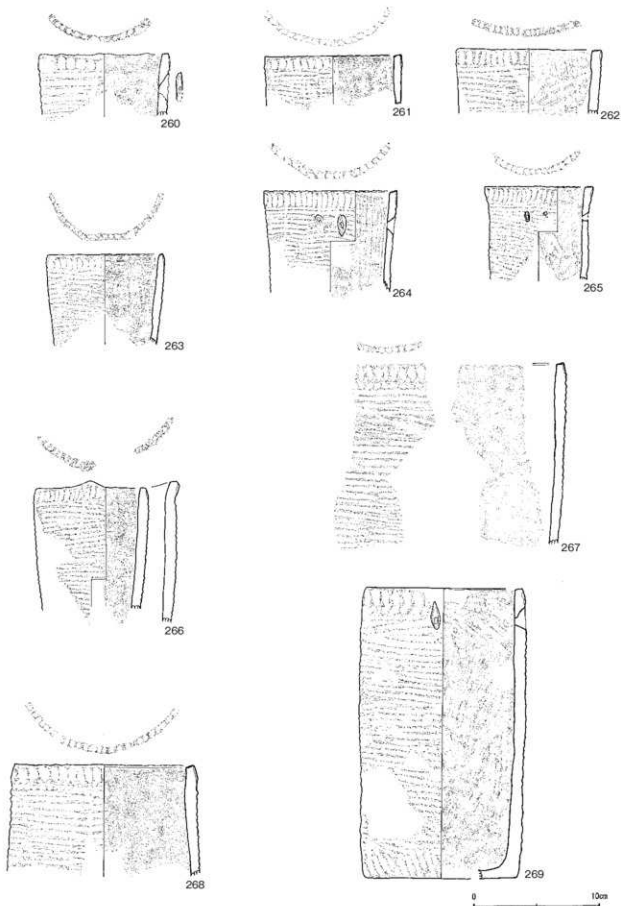
第247圖 I類土器



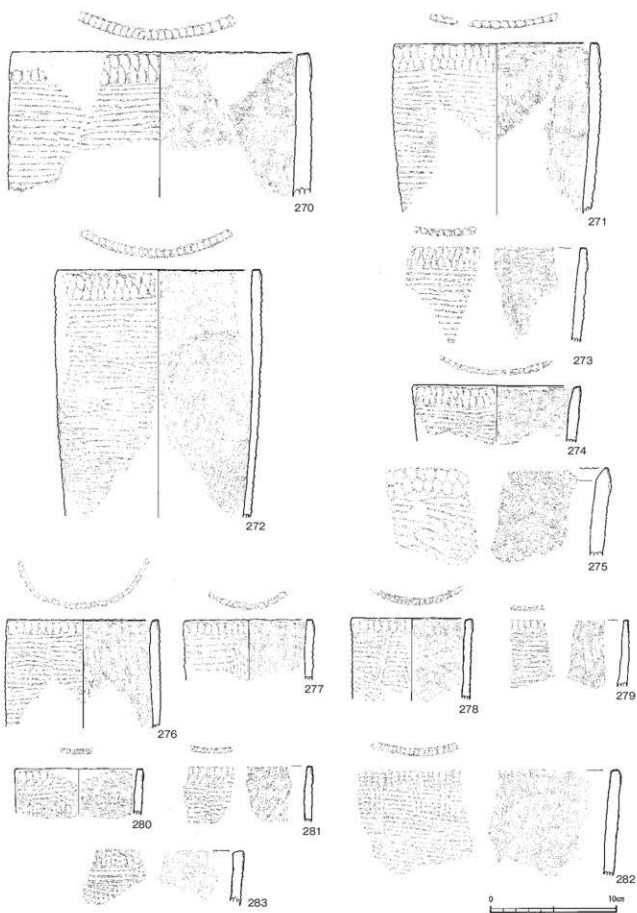
第 248 图 II 類土器出土分布図



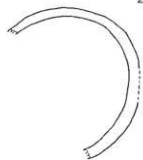
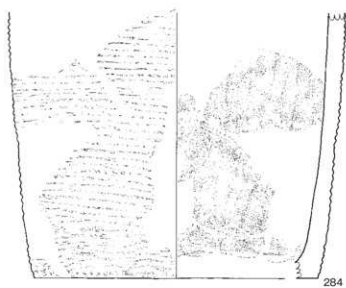
第 249 图 II 類土器 (1)



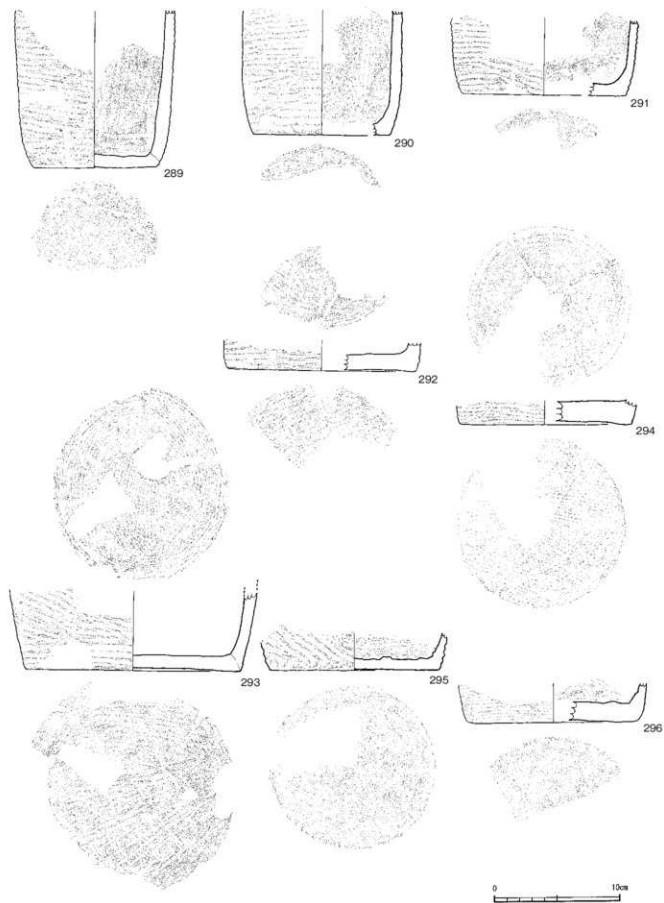
第250图 II類土器(2)



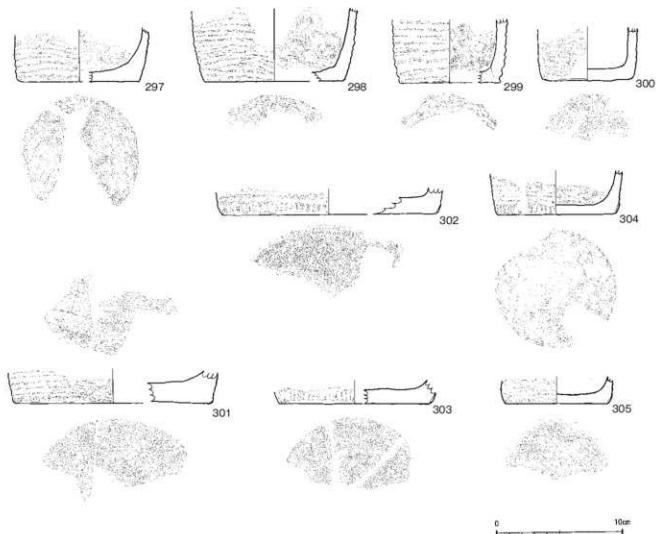
第251図 II類土器(3)



第 252 図 II 類土器 (4)



第253図 II類土器(5)



第254図 II類土器(6)

時と思われる指おさえ痕や工具痕も確認できる。胴部内面は底部との接合部分より少し上まで横位のケズリが、それより上は縦位のケズリが行われている。287は角部のような屈折部分はないもの、緩やかなカーブを呈する胴部片である。293は底部内面の外縁を繊維状の工具で時計回りにケズリを行い、内側を弧状にケズリを行っている。294は底部内面をヘラ状工具で外縁を同心円状に、内側は直線的にケズリを行った後、全体的にケズリ痕を消すような丁寧なナデを行い、平滑化をはかっている。

301～305は横位の貝殻条痕を施した後、底面境付近に縦位の沈線を施すものである。底部内面はヘラ状工具でケズリを行い、底部外面は丁寧なナデを行っている。

なお、273に付着した炭化物で年代測定を実施したところ、8,793 - 8,618calBCの値が得られた。

(3) III類土器(第255～261図 306～347)

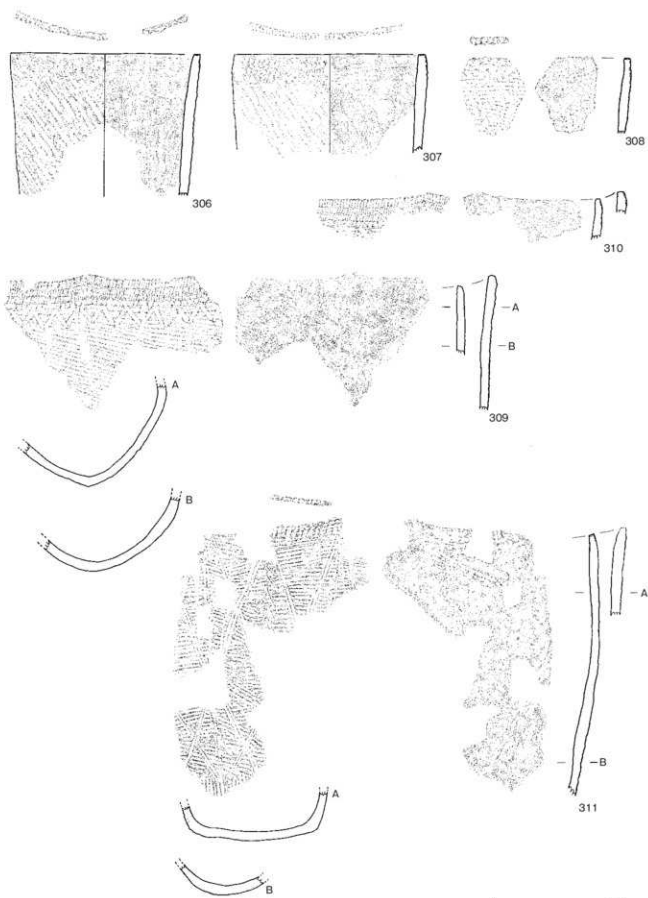
III類土器は口縁部に貝殻刺突線文を施し、胴部は貝殻条痕を施した後、沈線や刺突により幾何学状のモチーフを描く一群である。口縁部上位に1～4段の貝殻刺突文を施すものや楔形突起を貼り付けるものもある。円筒形以外にも、角筒形やレモン形の器形も存在する。

306～318は口縁部上位に縦位の貝殻刺突文を、口縁部下位に横位の貝殻刺突線文を施し、胴部を斜位の沈線で施文する一群である。口唇部には棒状工具による浅い刻目を入れているものもある。

306～308は円筒形の器形となる。306・307は口縁部上位を逆「E」字状の叉状工具により縦位の刺突を2段施した後、口縁部下位に横位の貝殻刺突線文を施している。308は棒状工具を用いて円形刺突を3段施した後、胴部は横位、斜位の貝殻条痕の上に斜位の貝殻刺突線文



第 255 图 皿類土器出土分布图



第256图 III類土器(1)

を鋸歯状に施している。口唇部には、細かい刻目を密接に入れていく。

309~318は角筒形土器である。309・310は口縁部上位に縦位の連続する貝殻刺突を3段施した後、横位の貝殻刺突線文で区画を行っている。その上から棒状工具による沈線で、鋸歯状のモチーフを描いている。311・312は口縁部上位に縦位の貝殻刺突を施し、下位は横位の貝殻刺突線文を施している。胴部には横位の貝殻条痕の上から2本1単位の斜位の沈線により「X」字状のモチーフを描いている。斜位の沈線を施した後、角部は縦位の垂下沈線を、胴部中央には縦位の波状の垂下沈線を施している。313は貝殻刺突線文による区画線のより波状の3本1単位の垂下沈線を施している。314は横位の浅い貝殻条痕を施した後、口縁部にヘラ状工具により1段、貝殻腹縁により1段の計2段の縦位の連続刺突を施している。施文具を変えることにより、下位部分は横位の刺突線文による区画線と同様の効果を図っていると考えられる。315は口縁部外面に縦位の連続する貝殻刺突を3段施している。1段目は貝殻の放射肋と放射溝の間隔が非常に狭い小振りの貝殻を用いたと考えられるが、2及び3段目の刺突はそれよりも大きい貝殻が施文具として用いられており、サイズの異なる貝殻を用いたことにより、異なる刺突具を用いた314と類似したような施文効果となっている。

角筒形を呈する中でも309・311・313・318は、上角下凹の器形になると考えられる。309・311・313は口縁部である。角部がゆるやかな部分の胴部内面は指おさえ痕や器壁が厚い箇所が確認でき、はじめに底部から胴部下半を円筒器形に、胴部上半より上位を角筒器形に変化させ成形していることがわかる。318は胴部である。横位の貝殻条痕を施した後、角部から底部に向かってヘラ状工具による縦位の刺突が施される。さらに、角部と角部の間にも、同様の施文具で浅い縦位の刺突を施している。刺突の一部が交点になるように、方向の異なる斜位の沈線により「X」字状のモチーフが描かれる。この沈線は、交点となる刺突を貫くように施文されることはない。このことから刺突は、沈線を施す際の起点と終点になるよう割付けの基準となっていると考えられる。313・314には、焼成後に穿孔したと考えられる縦長の補修孔が確認できる。

319~330は口縁部外面に横位の貝殻刺突線文を施し、胴部には横位または斜位の条痕を施した後、縦位や斜位の貝殻刺突線文を施す一群である。

319~322は円筒器形の口縁部である。319は縦位の貝殻刺突線文を胴部下半まで施した後、口縁部下位より斜位の貝殻刺突線文を方向を違えて施すことにより菱形のモチーフを描いている。320は縦位の貝殻刺突線文の間隔が狭いために、斜位の貝殻刺突線文によるモチーフ

も間延びしている。口縁部下位に焼成後の穿孔による縦長の補修孔が確認できる。322は口縁部がやや外傾する器形である。口縁部下位より胴部上半にかけて、3.7cm程度の間隔で縦位に楔形突起を3段貼り付けている。胴部は楔形突起の延長線上に1段、次の楔形突起までの中間に1段の間隔で縦位の貝殻刺突線文を施している。その際に楔形突起の両脇にも刺突を施している。その後、斜位の貝殻刺突線文で鋸歯状のモチーフを描いている。

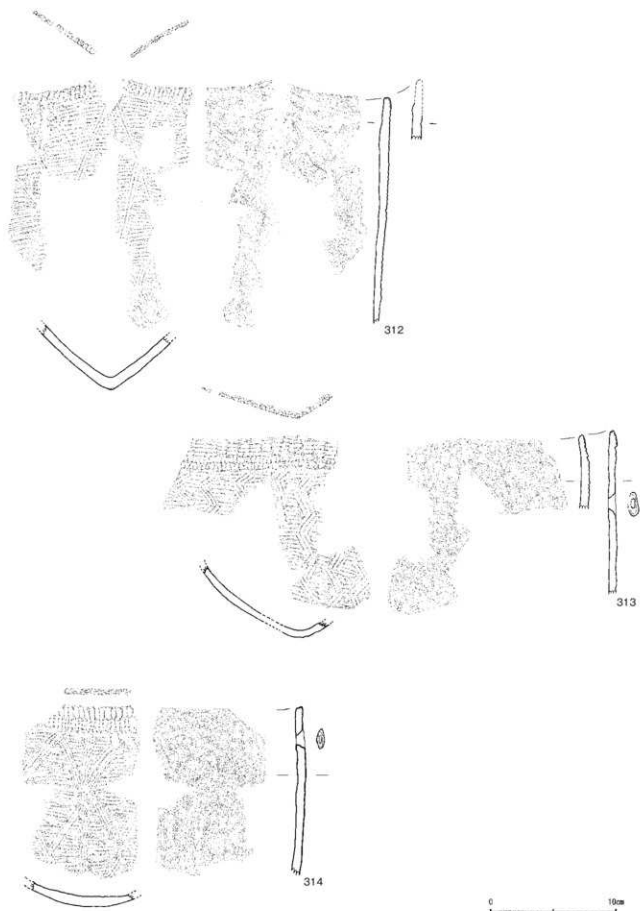
323・324は円筒器形の胴部である。外面は横位の貝殻条痕を施した後、縦位や斜位の貝殻刺突線文を施している。いずれも内面に縦位や斜位の口縁部である。波状口縁のもの

は、波頂部間を湾曲するように口縁部を成形している。内面は湾曲に沿うように横位の、胴部は縦位・斜位のケズリが行われている。いずれも口唇部には、細かい刻目を入れている。口縁部の横位の貝殻刺突線文は、325が4条、326・327は3条、328は5条施されている。胴部は縦位の貝殻刺突線文を施した後、その間を斜位の貝殻刺突線文により、325は鋸歯状の、326は「X」字状のモチーフを描いている。角部には縦位の貝殻刺突を施している。327は楔形突起が剥落している箇所から、貝殻刺突線文を施した後に楔形突起を貼り付けていることが確認できる。

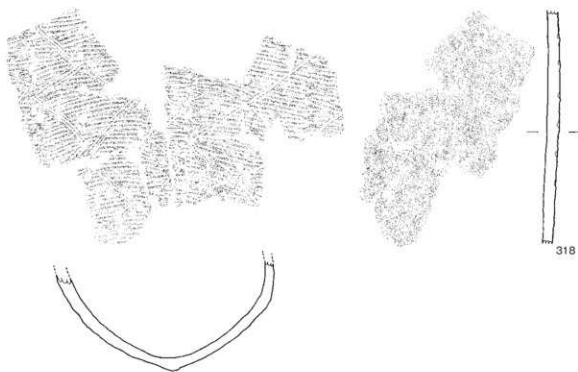
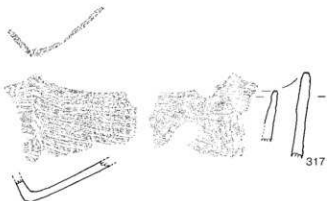
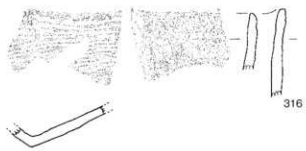
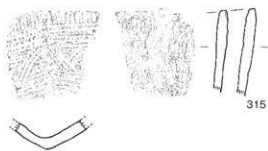
329・330は角筒器形の胴部である。縦位の貝殻刺突線文の間を斜位の貝殻刺突線文により、329は幾何学状の、330は鋸歯状のモチーフを描いている。

331~336は口縁部下位から胴部に縦位の貝殻刺突線文を密接に施文する一群である。すべて円筒形の器形である。口唇部の平坦面には、斜位の細かい刻目を入れている。331は口縁部がやや外傾する器形である。外面は、口縁部上位に縦位の連続する貝殻刺突線文を1段施している。332は器壁厚が0.8cm程度とやや厚いのが特徴的である。外面は口縁部に貝殻腹縁による横位の貝殻刺突線文を2条施した後、下位はやや肥太した楔形突起を縦位に上から2段貼り付け、楔形突起間に縦位の貝殻刺突線文を充填している。貝殻刺突線文は、2つの楔形突起をはみ出ない範囲で施されている。333は楔形突起付近が外傾することから口縁部付近の胴部と考えられる。細身の楔形突起を縦位に2段貼り付けた後、縦位の貝殻刺突線文を密接に施している。334・335は外面に密接した縦位の貝殻刺突線文を施しているのに対して、336はやや外傾することから口縁部付足の胴部とされている。また、焼成後に穿孔した縦長の補修孔も確認できる。

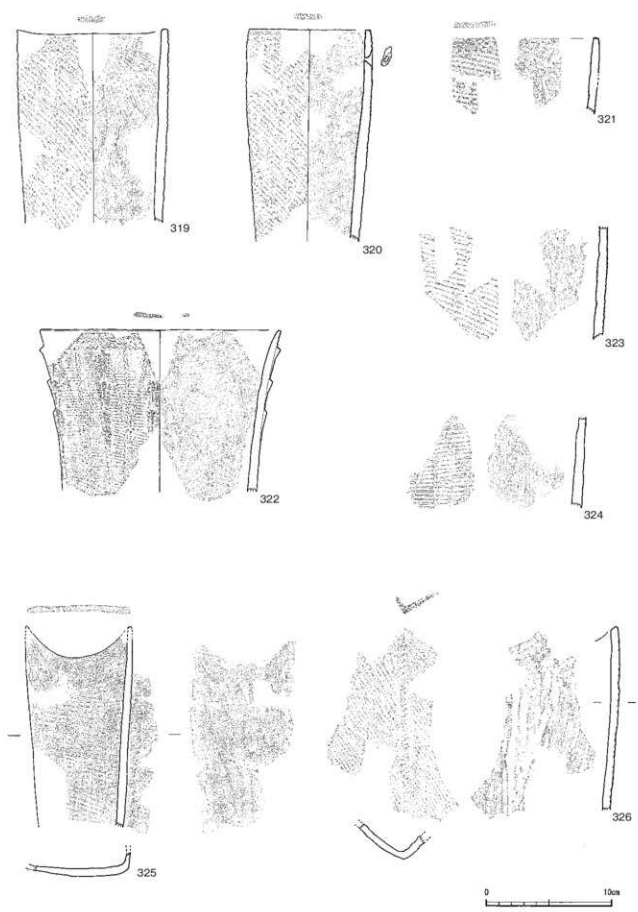
337~347はⅢ類土器の底部である。その中でも、337~342は円筒器形の底部である。Ⅱ類土器と同様に底部外周に粘土紐を巻き付け接合し、胴部を輪積み成形している。337~340は外面を横位の浅い貝殻条痕を施した後、底面境付近に縦位の沈線を施している。341は



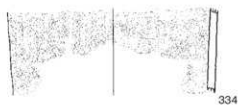
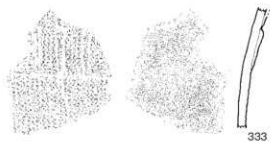
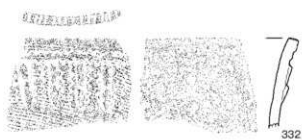
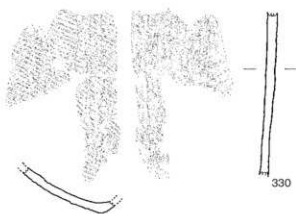
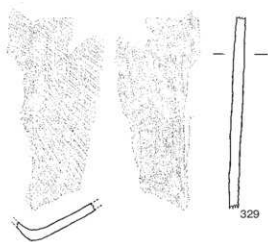
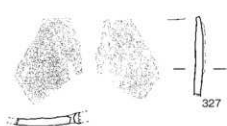
第257图 III類土器(2)



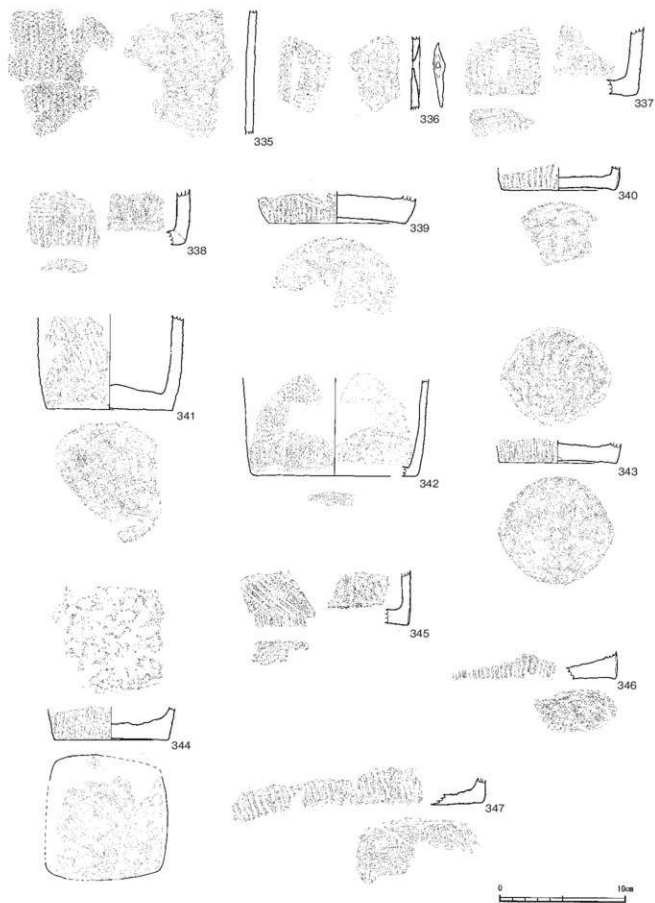
第258図 III類土器(3)



第 259 図 III 類土器 (4)



第260図 III類土器(5)



第261図 III類土器(6)

外面に斜位の貝殻条痕を施した後に縦位の貝殻刺突線文を施している。342は縦位の貝殻刺突線文を底面境まで密接に施している。343はレモン形の器形である。底部円盤をレモン形に成形後、外周部分に粘土紐を巻き付け、底部内面に胴部内面端を撫でつけるように接合している。底部外面中央には、棒状工具による回転穿孔による未貫通の孔がある。344~347は円筒器形の底部である。344は底面の器壁厚が1.7cm程度とやや厚い底部である。底部内面は成形時のヘラ状工具痕や指おさえ痕が明瞭で凹凸も激しい。底部と胴部の接合部分には、わずかに隙間がみられ、底部外周部分に粘土紐を巻き付けて成形したことがわかる。角部付近も同一の粘土帯がカーブしていることから円筒形と同じように輪楕形である胴部成形と考えられる。外面は底面境付近に縦位の沈線が密接に施される。底部外面はナズリと丁寧なナデが行われる。345は胴部外面を斜位の貝殻条痕を施した後、縦位の貝殻刺突線文を3条施している。347は底部と胴部に丁寧なナデを行い、接合していることが内面から確認できる。底部内面の粘土を胴部側に伸ばすことによって接合部分に生じる隙間を埋めている。底面境付近の短沈線は、幅が他に比べ広く、間隔もやや疎である。

(4) IV類土器 (第262・263図 348~356)

IV類土器は口縁部に貝殻刺突を施し、胴部に貝殻による横位の押し文・刺突文が全面に施される一群である。348~350は口縁部である。348は口縁部がやや外傾する器形である。内面は丁寧なナデを行い、外面は横位の貝殻条痕を施した後、口縁部上位には横位の貝殻刺突線文を2条施す。その下には、貝殻刺突線文に直交するように先端を尖らせた棒状工具による刺突を1段施す。さらに口縁部下位には、縦位、斜位の貝殻刺突文を楔形状に施文している。口唇部の平坦面には、斜位の刻目を入れている。349は口縁部上位に斜位の貝殻刺突を施し、口縁部下位には横位の貝殻刺突線文を施している。350は口縁部上位に1条、下位に2条の横位の貝殻刺突線文で区画し、その中を斜位の貝殻刺突を密接に施文し充填している。口唇部の平坦面には、斜位の刻目を入れている。

351~356は胴部である。351・352は内面に丁寧なナデを行っている。外面は横位の浅い押し文を1条施し、その下・貝殻腹縁かヘラ状工具による横位の条痕を施している。さらにその下位には、横位の浅い押し引きが部分的に施文されているのが確認できる。このように押し文と条痕文を交互に施文するのが特徴的である。353~356は横位の貝殻腹縁による押し文・文様の連続刺突文を器面全面に施している。353~356は文様、胎土等が類似することから、同一個体の可能性が高いと考えられる。

(5) V類土器 (第264~276図 357~439)

V類土器は口縁部に斜位・羽状・縦位・横位等の刺突

文、胴部外面に綾杉状の貝殻条痕文等が施される一群である。器形は口縁部が外反するもの、外傾するもの、直口するものがある。底部は平底である。内面はナデが行われている。本類は口縁部形態と刺突方法やモチーフで細分した。

357~374は口縁部が外反し、口縁部外面に貝殻腹縁部による斜位の刺突を施す一群である。口唇部刻目の位置でさらに2つに分けられる。

357~360は口唇部内端に刻目を入れる一群である。357は口縁部外面の上下に横位の貝殻刺突をそれぞれ1段施した後、斜位の貝殻刺突を施している。358は口縁部上位に横位の貝殻刺突を2段施し、その下位に斜位の貝殻刺突を施している。この貝殻刺突は一部ナデ消されている。360は口縁部が大きく外反する器形である。波状口縁を呈しているが、波頂部は欠損している。胴部外面は綾杉状のモチーフが崩れ、斜位の貝殻条痕で空間を埋めるような施文が行われている。357・358・360は口唇部内端に浅い斜位の刻目を入れているが、359は先端を舌状に加工した工具により明瞭な刻目を入れている。

361~374は口唇部外端もしくは平坦面に刻目を入れる一群である。361は口縁部が大きく外反する器形で、口唇部の平坦面にヘラ状工具による浅い刻目を入れている。362・363の口唇部外端に施される刻目は、棒状工具を斜位に押し当てて施文している。刻み痕は米粒状である。366は器壁が薄く成形され、内面のナデも非常に丁寧である。口縁部外面の斜位の貝殻刺突の間隔は疎であり、一部ナデ消されている。367は2単位の波状口縁を呈すると考えられる。外面は浅い貝殻条痕を施した後、頭部に横位の貝殻刺突線文を3段施し、口縁部と胴部の区画を行っている。その後、口縁部に斜位の貝殻刺突を、胴部に縦位の貝殻刺突線文を施している。胴部の貝殻刺突線文は、胴部下半まで及ぶ長いものと胴部上半までの5~6cmの短いものを間隔を空けて交互に施文している。368は胴部の綾杉状の貝殻条痕が崩れ、横位に施されている。369は大型の器形である。胴部は横位の浅い貝殻条痕をやや間隔を空けて施した後、その間を鋸歯状のモチーフを描くように斜位の貝殻条痕で充填している。370~373は斜位の貝殻刺突を施した施文具で口唇部外面にも横位の刺突を行っている。また、胴部の鋸歯状の貝殻条痕は非常に明瞭で、刺突に用いた貝殻腹縁部を用いている。372は2単位の波状口縁を呈すると考えられる。また、斜位の貝殻刺突は施文具を下方に引くように施文している。373は口縁部から底部までを復元することができる。胴部の貝殻条痕は底面境まで及んでおり、左から右へ斜位に施文している。

375~377は口縁部が外反し、口縁部外面に貝殻腹縁部による斜位の刺突を方向を変えて施すことにより羽状のモチーフを描く一群である。375・376は貝殻刺突の上段

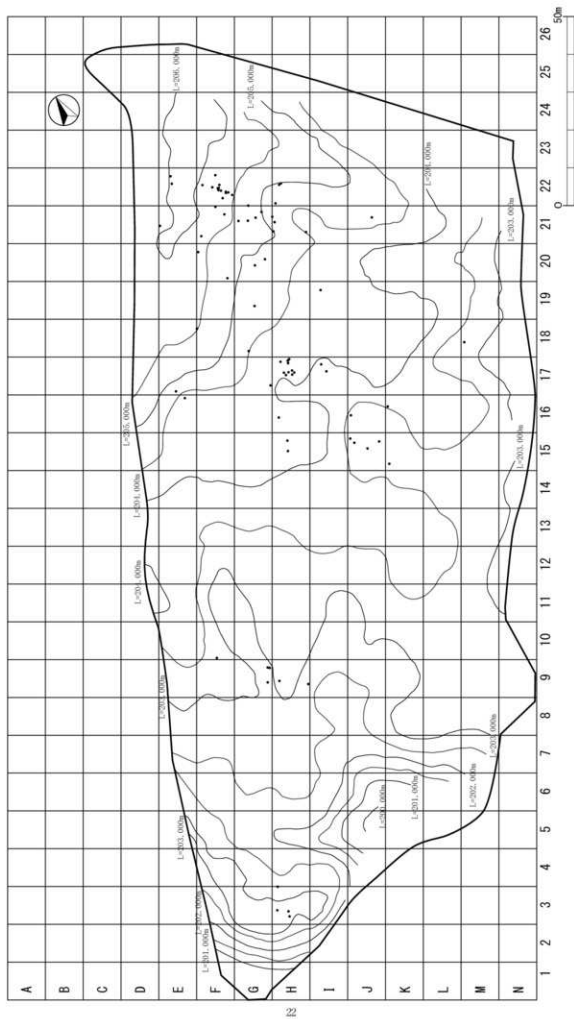
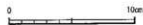
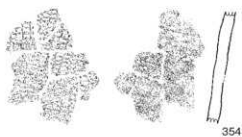
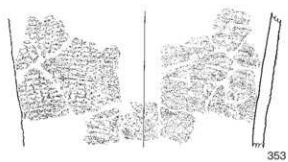
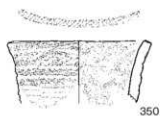
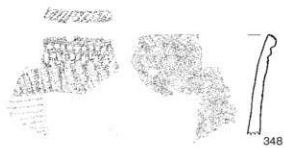
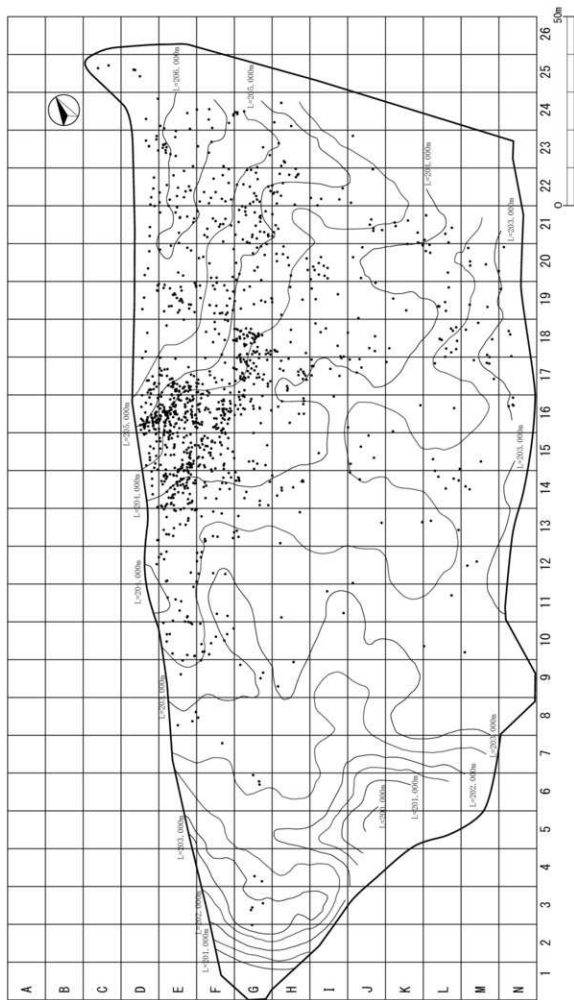


图 262

第 262 图 IV 类土器出土分布图



第 263 图 IV 类土器



第 264 图 V 型土器出土分布图

が右上がり、下段が右下がりとなる。いずれも口唇部内端に斜位の浅い刻目を入れている。377は口縁部から底部までが復元できる。底面は残存しないが、底部円盤の外周部分に粘土紐を巻き付け、輪積みによる成形を行っている。内面には横位の横維状の捺痕が確認でき、丁寧なナデを行っている。外面は貝殻腹縁部による綾杉状の条痕を施した後、口縁部は375・376とは逆方向の貝殻刺突による羽状のモチーフを描いている。口唇部外面には、米粒状の刻目を入れている。底面境の外面には、先端が爪形状の工具で浅い刻目を入れている。

378は口縁部が外反し、口縁部外面に方向の異なる斜位の貝殻刺突を交差させて施文している。右上がりの刺突を行った後、右下がりの刺突を行っている。口唇部には、斜位の浅い刻目を入れている。

379~382は口縁部が外反し、口縁部外面に貝殻腹縁部による縦位の刺突を施す一群である。379は貝殻刺突の上部一部斜位の短沈線が確認できる。

380~382は大型の器形である。いずれも、口縁部外面の縦位の貝殻刺突は、浅く施文されている。胴部の綾杉状の貝殻条痕は非常に明瞭である。口唇部平坦面から内端に施される斜位の刻目は先端の細い棒状工具により入れられている。

383~401は口縁部が外反もしくは外傾し、口縁部外面に貝殻腹縁部による横位の刺突を施している。口唇部刻目の有無と刻目の位置で3つに分けられる。

383~388は口唇部内端に斜位の刻目を密接に入れる一群である。386~388は横位の貝殻刺突を施した後、その下に斜位の貝殻刺突を施している。387・388の口唇部は、やや肥厚している。

389~394は口唇部平坦面及び外端に浅い斜位の刻目を入れる一群である。口縁部はやや外傾する。389は胴部の綾杉状の貝殻条痕が整然と施されているが、390の口縁部付近は横位に貝殻条痕が施されている。また、口唇部外端から平坦面にかけて貝殻刺突が施され、口縁部の上位付近に及ぶ箇所もあり、口縁部文様と一体化している。内面は縦位、斜位のケズリが行われている。391は口縁部以外に、胴部の貝殻条痕の上に縦位・斜位の貝殻刺突を施している。393・394は口縁部外面に横位、その下に斜位の貝殻刺突を施している。斜位の刺突痕が明瞭で、施文幅は短い。特に393は388と施文が類似している。394の横位の貝殻刺突は非常に浅く、明瞭さに欠ける。

395~401は口唇部に刻目が見られない一群である。395は口縁部が大きく外反し、2単位の波状口縁を呈すると考えられる。口縁部外面に6~7段の密接した横位の貝殻刺突を施す。底面境付近には、棒状工具による縦位の短沈線を一定の間隔で施している。396は口唇部のみを外傾させている。胴部外面には浅い縦位の貝殻条痕

を施す。398は口縁部外面の横位の貝殻刺突は施文幅が不統一で、やや乱雑に施文されている。胴部も棒状工具による縦位・斜位の沈線が不規則に施されている。399・400も横位の貝殻刺突がやや乱れて施文されている。401は外反する口縁部である。口唇部は丁寧なナデが行われ、平坦化されている。口縁部外面に横位の貝殻刺突を2段施し、その下に施文幅の短い斜位の貝殻刺突を施す。胴部の貝殻条痕も施文する貝殻腹縁部の幅が短く、綾杉状のモチーフが乱れている。

402~405は口縁部が外反し、口縁部外面に貝殻刺突以外の施文を行う一群である。

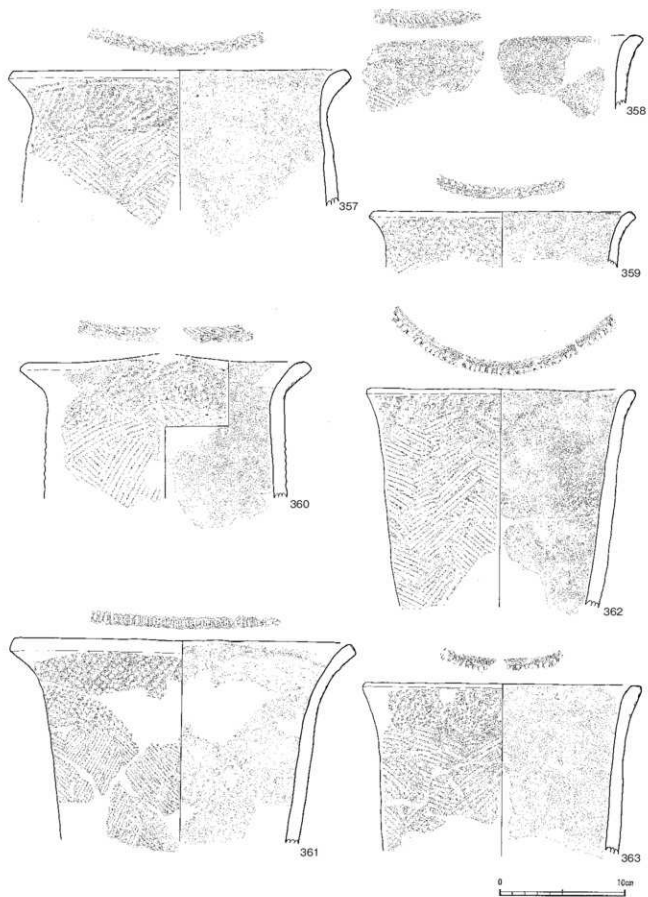
402・403は口縁部外面に棒状工具による斜位の刺突を方向を違えて3段行っている。口唇部には、同様の施文具で浅い斜位の刻目を入れている。404は棒状工具による横位の浅い連続刺突を3段行っている。405は胴部に斜位の貝殻条痕を施した後、口縁部外面に縦位の貝殻刺突を密接に施している。最後に、頸部付近に横位の貝殻条痕が一部施される。

406~412は口縁部が直口もしくはわずかに外傾する一群である。

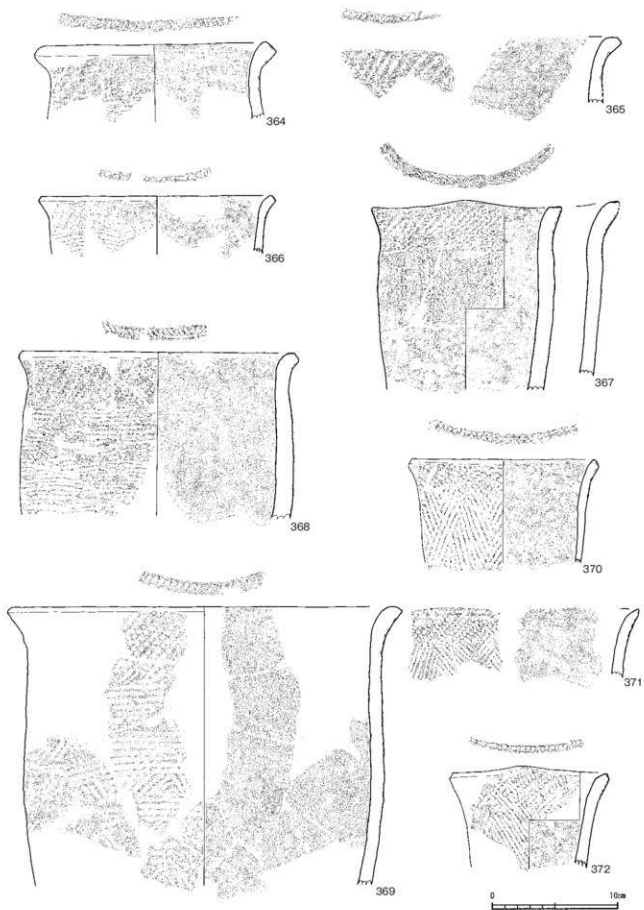
406は口縁部外面に右上がり斜位の貝殻刺突を施しているが、一部右下がり斜位の貝殻刺突を施し羽状のモチーフを描いている。また、斜位の貝殻刺突より下位の胴部との境付近に横位の貝殻刺突を施す箇所がある。さらに、口唇部には貝殻刺突を行い、底面境付近には浅い刻目を入れている。407はわずかに外傾する口縁部で口唇部を舌状に成形し、刺突を部分的に施している。口縁部外端に斜位の貝殻刺突を施した後、貝殻条痕が施されている胴部との境付近に横位の浅い刺突を施している。408・409は横位に近い斜位の貝殻刺突を密接に施している。410は口縁部外面に縦位の貝殻腹縁部による刺突を施している。口唇部の平坦面に貝殻腹縁部を口唇部に対して上方より直交するように押し当て刺突を行っている。411は外面を口縁部から胴部にかけてヘラ状工具により非常に浅い鋸歯状の沈線を密接に施した後、口縁部の沈線をナデ消し、同様の施文具で横位の刺突を2段施す。胎土に金雲母を多く含んでいる。

413~421は胴部で、貝殻条痕の施文方向で3つに分けられる。

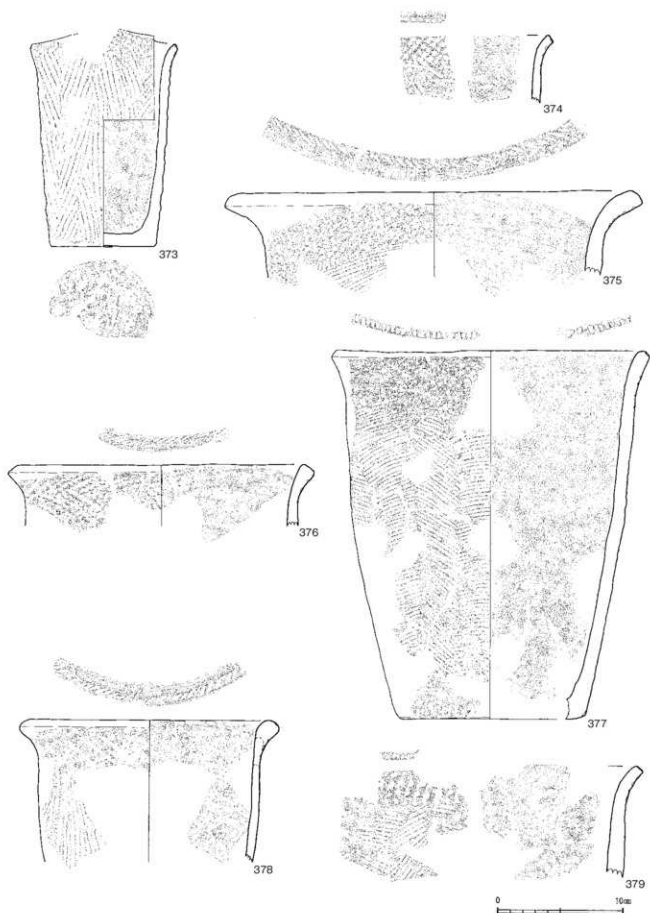
413~417は綾杉状の貝殻条痕を施す一群である。413は胴部上半が外反し、底部に向けて直線的にすぼまる。綾杉状の明瞭な貝殻条痕を施した後、上位に縦位の貝殻刺突を施している。380・381・382と施文や調整が類似している。414は底部付近に横位の貝殻条痕を施している。415は口縁部付近に方向の異なる斜位の貝殻刺突を交差させて施文している。右上がりの刺突を行った後、右下がりの刺突を行っている。その下に、横位の貝殻刺突を施している。378と文様、調整、胎土等が類



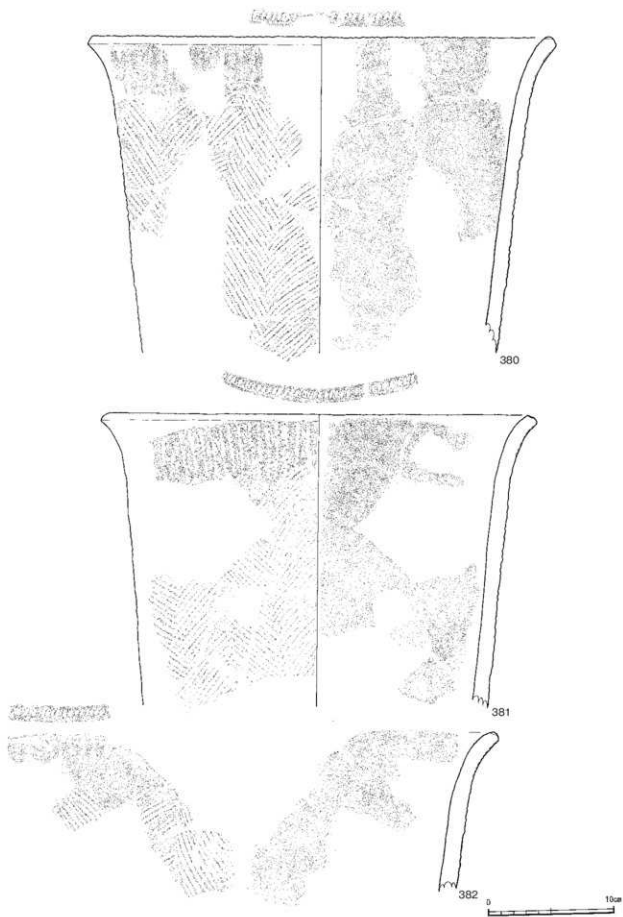
第265図 V類土器(1)



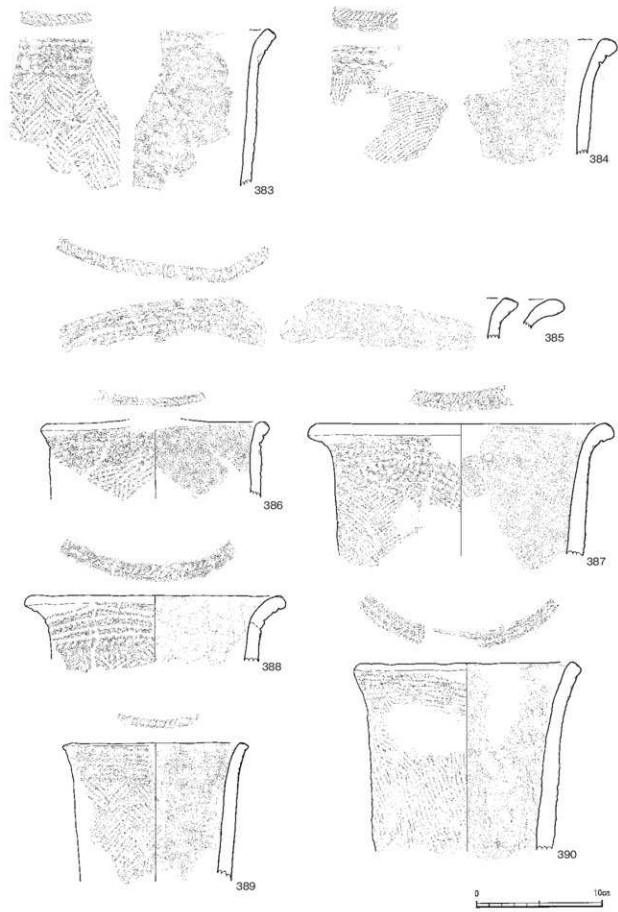
第266图 V類土器(2)



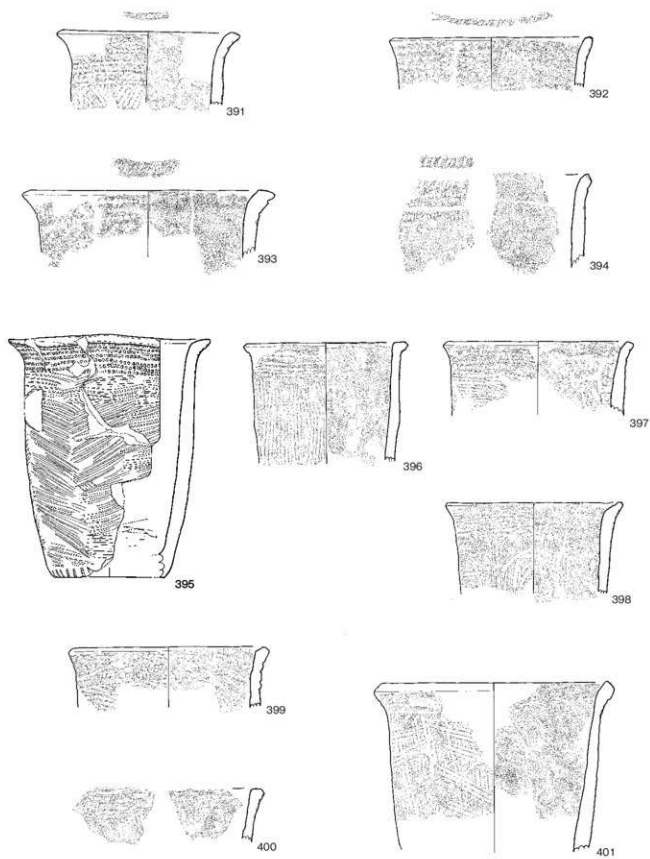
第267図 V類土器(3)



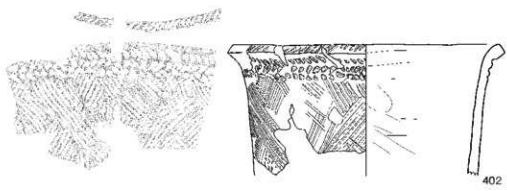
第268図 V類土器(4)



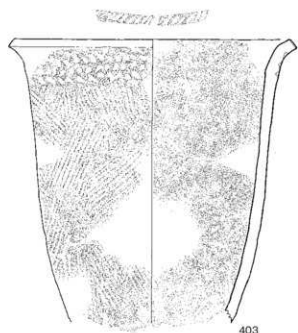
第269図 V類土器(5)



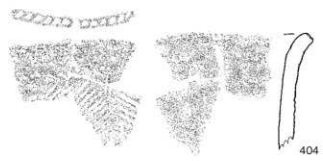
第270図 V類土器(6)



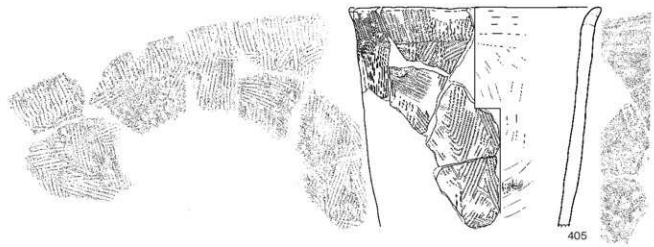
402



403



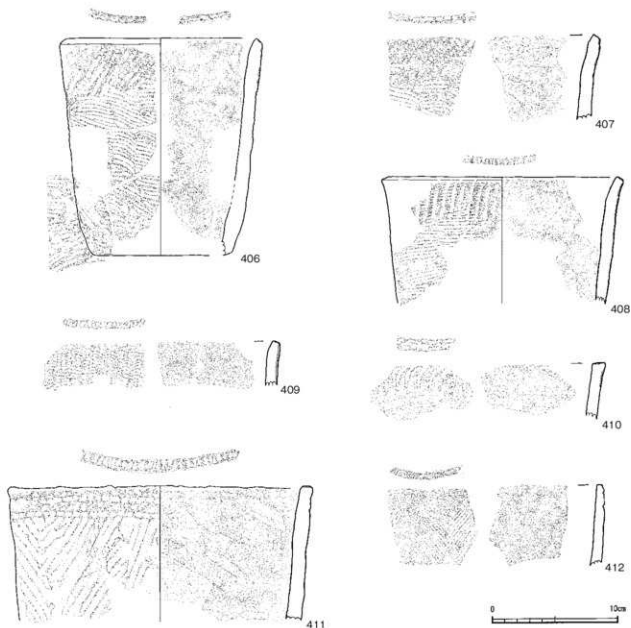
404



405



第 271 図 V 類土器 (7)



第 272 図 V 類土器 (8)

似することから、同一個体の可能性が考えられる。416 は上位の残存部分は少ないが、貝殻腹縁部による斜位の刺突を方向を違えて施すことにより羽状のモチーフを描いている。この刺突は上段が右上がり、下段が右下がりである。

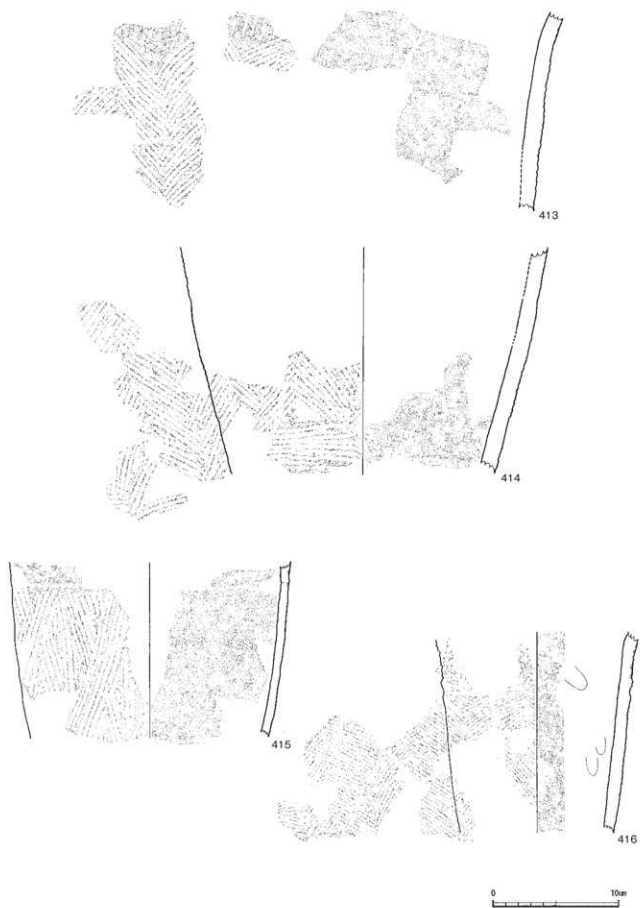
418・419 は斜位の貝殻条痕を施す胴部である。418 は明瞭な貝殻条痕であるが、部分的にへら状工具による沈線が重ねて施文される。419 は浅い貝殻条痕でやや不規則に施文している。上位に斜位の貝殻刺突をわずかに親

察できる。また、胎土に白色粒子を多く含む。

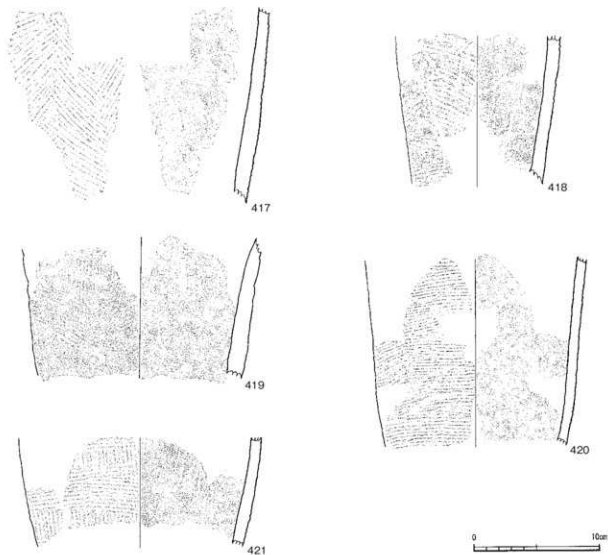
420・421 は横位の貝殻条痕を施す胴部である。421 は帯状の空白部ができるように横位の貝殻条痕を間隔を空けて施した後に、空白部を縦位の貝殻条痕で充填している。

422～439 は底部である。底面境付近の胴部外面の貝殻条痕の方向と底面境付近の刻みの有無で分類した。

422～432 は底面境付近に横位の貝殻条痕を施した後、刻目を入れる一群である。422 は底部外周部分と胴部が



第273図 V類土器(9)



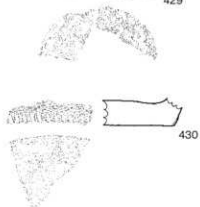
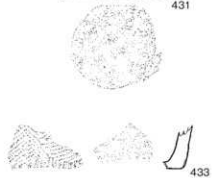
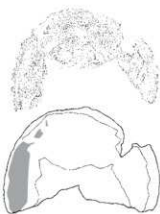
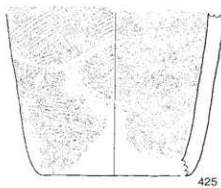
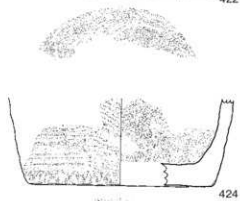
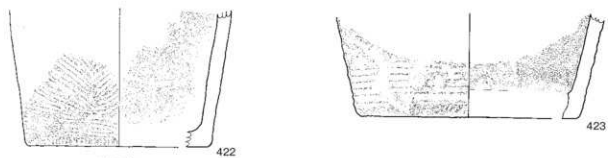
第274図 V類土器(10)

残存している。底部円盤の外周部分に粘土紐を巡らせ、その上に粘土紐を輪積みし、胴部を成形している。底部内面側の粘土を少し伸ばすようにして胴部と接合している。内外面ともに丁寧にナデを行っている。423は綾杉状の貝殻条痕を施した後、その下位に横位の貝殻条痕を施している。底面境付近に斜位の刻目が、部分的に入れられている。424は横位の貝殻条痕の施文幅がやや広く、刻み痕は米粒状である。425の底面境付近には磨耗し判然としない箇所もあるが、刻目を確認できる。428・429の底面境付近には横位の貝殻条痕が断続的に施され、刻目もやや乱雑に入れられている。428は胎土に白色粒子が多く含まれている。430・431は胴部外面があまり残存していないが、横位の貝殻条痕が確認できる。431はやや上げ底気味の底部で、内外面とも丁寧にナデを行っている。底面境付近の刻目は棒状の工具で短沈線

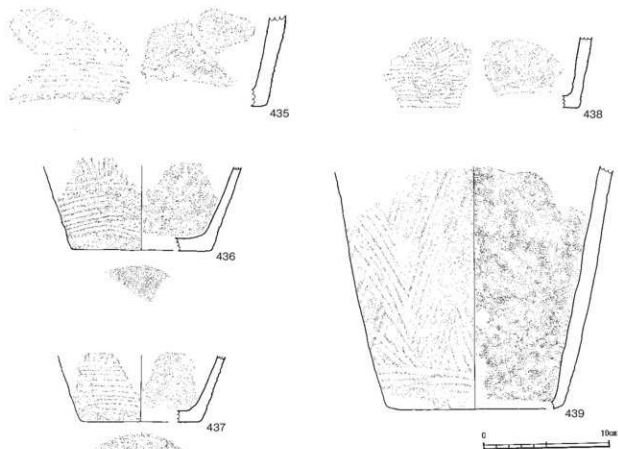
状に入れられている。また、胎土に細かい白色粒子が含まれている。432は胴部外面の横位の貝殻条痕がわずかに観察できる。また、底部内面には、白色の付着物が部分的に確認できる。

433・434は底面境付近まで斜位の貝殻条痕を施した後、刻目を入れる一群である。433は細い短沈線状の明瞭な刻目を、434は米粒状の刻目を入れている。

435～439は底面境付近に横位の貝殻条痕を施すが、刻目は入れない一群である。435は整然とした綾杉状の貝殻条痕を施した後、横位の貝殻条痕を施している。胎土に白色粒子を多く含む。436・437は底面境付近の横位の貝殻条痕の施文幅がやや広い。438は胴部外面の斜位の貝殻条痕が乱雑に施され、横位の貝殻条痕も断続的に施されている。439はヘラ状工具により非常に浅い鋸歯状の沈線を密接に施した後、底面境付近には同様の沈線



第275図 V類土器(11)



第276図 V類土器 (12)

を横位に施している。胎土に金雲母を多く含んでいる。411と同一個体の可能性が高い。

なお、357に付着した炭化物で年代測定を実施したところ、8,295 - 8,202calBCの値が得られた。

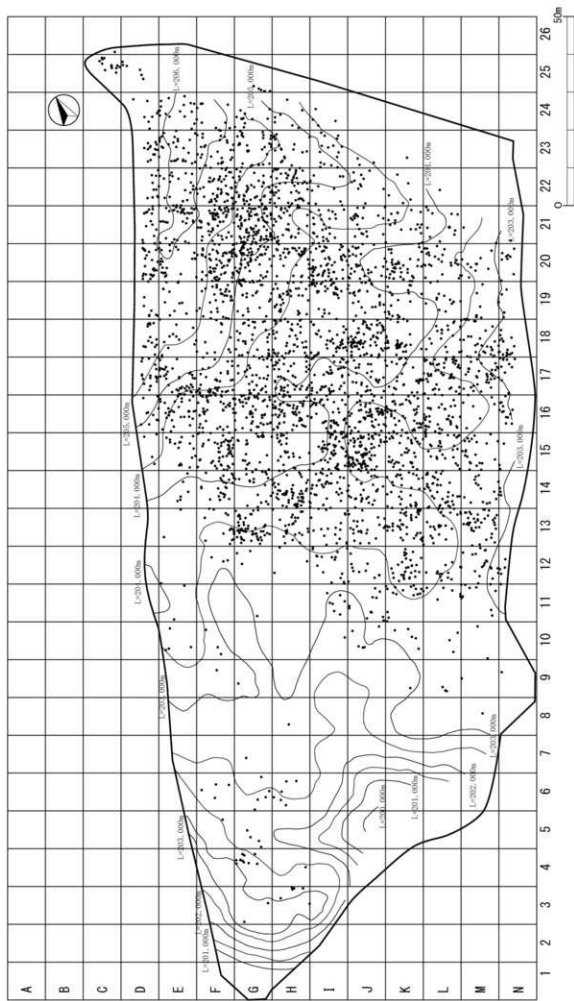
(6) VI類土器 (第277~286図 440~521)

VI類土器は貝殻刺突文を施す一群である。口縁部と胴部の2帯に分けて施文するものと口縁部から胴部下半まで1帯で施文するものがある。貝殻刺突の施文方向と文様構成により細分した。

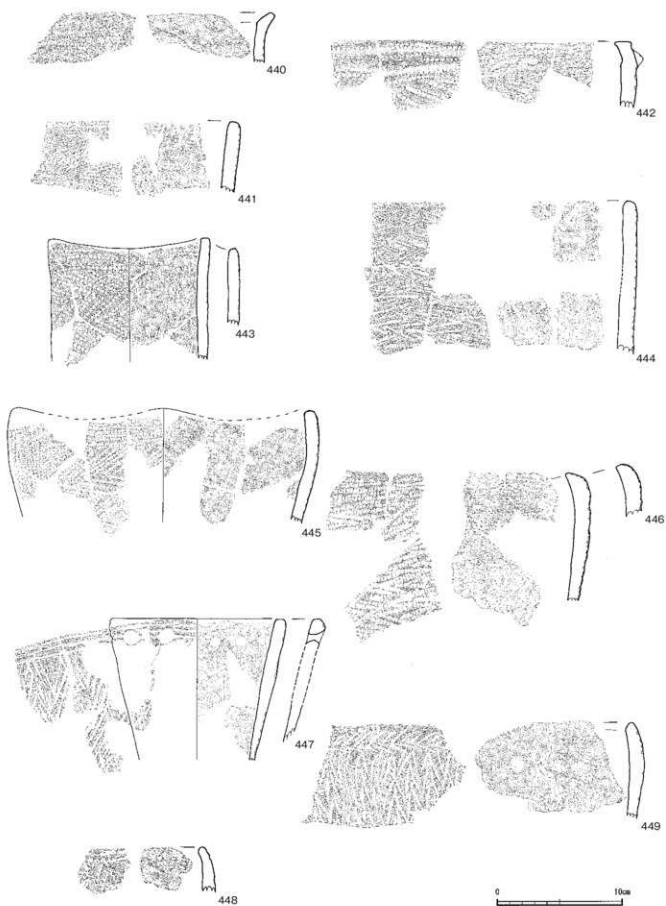
440~446は口縁部外面に横位の貝殻刺突文を施し、胴部に斜位もしくは斜位の方向を違えて、「く」の字状の貝殻刺突文を施す一群である。いずれも口唇部はミガキ状の丁寧なナデを行う。内面はナデを行うが、440・445・446は口唇部と同様にミガキ状の丁寧なナデを行う。440は口縁部がやや外反する器形である。口縁部内面に明瞭な稜をもち、ミガキ状の丁寧なナデを行っている。口縁部外面上位は丁寧にナデを行ない無文部とし、頸部から横位、斜位の貝殻刺突文を施している。441は口縁部外面に横位の貝殻刺突文を2段施した後、右上がりの斜

位の貝殻刺突文を1段、その下位に横位の貝殻刺突文を施している。442は横位のやや太めの瘤状突起を貼り付けた後、口縁部外面と瘤状突起に横位の貝殻刺突文を、胴部に斜位の貝殻刺突文を施す。ヘラ状工具を口縁部内面に横位に当て、粘土を口唇部に押し出すようにして口唇部の平坦面を作り出している。443は波状口縁を呈している。胴部内面は縦位のケズリを行い、口縁部内面は丁寧なナデを行っている。444は口縁部外面に横位の貝殻刺突文を施した後、「く」の字状の貝殻刺突文を全面に施している。胎土に白色粒子を多く含む。445は4単位の波状口縁を呈すると考えられる。波頂部より縦位の貝殻刺突文を施し、割付けを行った上で、口縁部外面に横位の貝殻刺突文を施し、その下位に「く」の字状の貝殻刺突文を施している。446は波状口縁を呈し、口縁部が内湾する器形である。口唇部外面から口縁部上位にかけて、横位の貝殻刺突文を、その下位に「く」の字状の貝殻刺突文を密接に施している。

447~449は口縁部外面に横位もしくは「く」の字状の貝殻刺突文を施した後、胴部に「ハ」の字状の貝殻刺突



第 277 图 VI 期土器出土分布图



第 278 图 VI 类土器 (1)

文を施す一群である。447は口縁部外面に横位の貝殻刺突文を3段施した後、胴部に「ハ」の字状の貝殻刺突文を施す。口唇部内面をミガキ状の丁寧なナデを行っている。焼成後穿孔の補修孔が2か所確認できる。胎土に白色粒子を多く含む。449は口縁部がやや内湾する器形である。口唇部は内傾し、平坦面は丁寧にナデを行っている。口縁部外面に「く」の字状の貝殻刺突文を施した後、胴部に「ハ」の字状の貝殻刺突文を施す。

450~462は口縁部外面に横位の貝殻刺突文を施した後、胴部に縦位もしくはやや斜位の貝殻刺突文を施す一群である。一部、貝殻刺突を模した先端を逆「C」字状に加工した施文具による刺突を施したのものを含む。450・451は波状口縁を呈する。ただし、451は波頂部付近は残存していない。いずれも口唇部の平坦面は、ミガキ状の丁寧なナデを行っている。452は口縁部外面の横位の貝殻刺突の施文幅が広いのが特徴的である。胴部に縦位の貝殻刺突文を密接に施している。453は口縁部外面に横位の貝殻刺突文を3段施した後、胴部に縦位の貝殻刺突文を密接に施している。焼成後穿孔の補修孔が2か所確認できる。胎土に白色粒子を多く含む。454は口縁部外面に横位と縦位の貝殻刺突文を交互に施す。口唇部及び内面にミガキ状の丁寧なナデを行っている。455は口縁部外面に横位の貝殻刺突を2段、その下位に斜位の貝殻刺突文を1段、さらにその下位に「く」の字状の貝殻刺突文を施している。内面は全体的にナデを行っているが、胴部内面に一部縦位のケズリ痕が確認できる。456は口縁部がやや内湾する器形である。口縁部外面に横位の貝殻刺突文を施した後、胴部に縦位の貝殻刺突を密接して施すが、一部無文部が確認できる。457は口縁部外面に一定の間隔で縦位の貝殻刺突文を施した後、横位の貝殻刺突文を施している。胴部には斜位の貝殻刺突を施している。458はやや内湾する器形であるが、口唇部外面は外傾するように成形されている。口唇部外面の横位の貝殻刺突と口縁部外面の横位の貝殻刺突が一体化して施文されている。胴部外面はやや間隔を空けて斜位の貝殻刺突文が施される。459・460は4単位の波状口縁を呈すると考えられる。459は口縁部内面から口唇部に向けて粘土を押し出して成形し、内面部分がやや厚い口唇部となっている。口縁部外面は波頂部の下に縦長の豆粒状の突起を貼り付け、横位の貝殻刺突文を施している。胴部は縦位、斜位の貝殻刺突文を密接に施している。なお、口縁部には補修孔が穿たれている。460は波頂部付近の口縁部外面に縦位の貝殻刺突文を施した後、その周辺に横位の貝殻刺突文を、胴部に縦位及び斜位の貝殻刺突文を施している。461・462は先端を逆「C」字状に加工した施文具による刺突を施している。461は豆粒状のやや横長の突起が2か所確認できる。口縁部外面は横位の刺突文を施した後、胴部に縦位の刺突文を密接に施してい

る。459と同様に口縁部内面から口唇部に向けて粘土を押し出して口唇部に肥厚する部分を作り出している。胴部内面にはミガキ状の丁寧なナデを行っている。462も461と同様のやや横長の豆粒状の突起を貼り付けた後に、刺突文を施している。突起より上位に、焼成後穿孔の円形の補修孔が確認できる。

463・464は口縁部に縦位の貝殻刺突文を施した後、胴部に横位もしくは斜位の貝殻刺突文を施す一群である。463は口縁部に縦位の貝殻刺突文を施した後、胴部に横位の貝殻刺突文を2段施している。さらに、その下位に斜位の貝殻刺突文を施している。胎土に白色粒子を多く含む。464は波状口縁を呈する。波頂部付近の口縁部外面は間延びした「く」の字状の貝殻刺突文を施す。それ以外の口縁部外面は縦位の施文幅の短い貝殻刺突文を施す。胴部は斜位の貝殻刺突文を不規則に施している。

465~477は器面全面に「く」の字状の貝殻刺突文を施す一群である。短沈線による同様のモチーフを持つものも含む。470は焼成後穿孔の円形の補修孔が2か所確認できる。いずれも補修孔下位の内面側に、未貫通の穿孔が確認でき、位置を変えて穿孔し直したと考えられる。466・473の口唇部は内傾している。470・477は胎土に白色粒子を多く含む。472はやや鋭角に「く」の字状の刺突を行っている。471・474・476は斜位の短沈線により「く」の字状のモチーフを描いている。いずれも口縁部が内湾する器形である。胴部にはミガキ状の丁寧なナデを行っている。474・476は口唇部成形時にはみ出した粘土が口唇部外面にまで及んでいる。

478は器面全面に「ハ」の字状の貝殻刺突文を施している。口縁部がやや内湾する器形で、口唇部を内傾するように成形し、丁寧なナデを行っている。胎土には金雲母がやや多く含まれている。

479~495は器面全面に横位の貝殻刺突文を施している一群である。479は口縁部外面に焼成後、回転技法で穿孔したと考えられ、やや縦長の補修孔が確認できる。479・482・483は口唇部にミガキ状の丁寧なナデを行っている。480は口縁部外面に縦位の瘤状突起を貼り付けた後、横位の貝殻刺突文を施している。481は大振りの貝殻を用いて、間隔を空けて横位の刺突を行っている。内面には、ヘラ状工具による横位のナデを行ったと考えられる明瞭な調整痕が確認できる。483は外面に成形時の指おさえ痕が複数確認できる。484は口縁部~胴部外面に間隔を空けて不規則に横位、斜位の貝殻刺突文を施す。内面は口縁部付近を横位の、胴部を縦位のケズリで器面調整を行っている。485・490は外面から焼成後穿孔したと考えられる円形の補修孔が確認できる。486・488は横位の貝殻刺突文を密接に施している。489はやや大振りの貝殻の腹縁部を用いて横位の刺突を行っている。胎土に粒子の大きい白色粒子を非常に多く含んでいる。



450



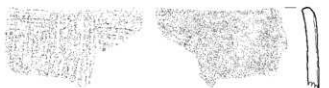
451



452



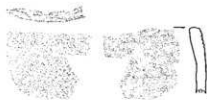
453



454



455



456



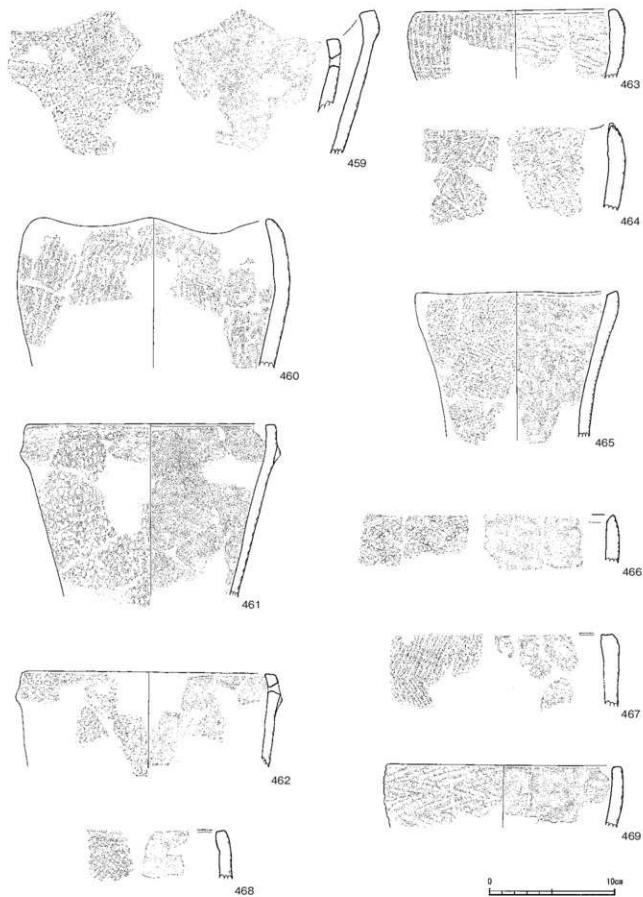
457



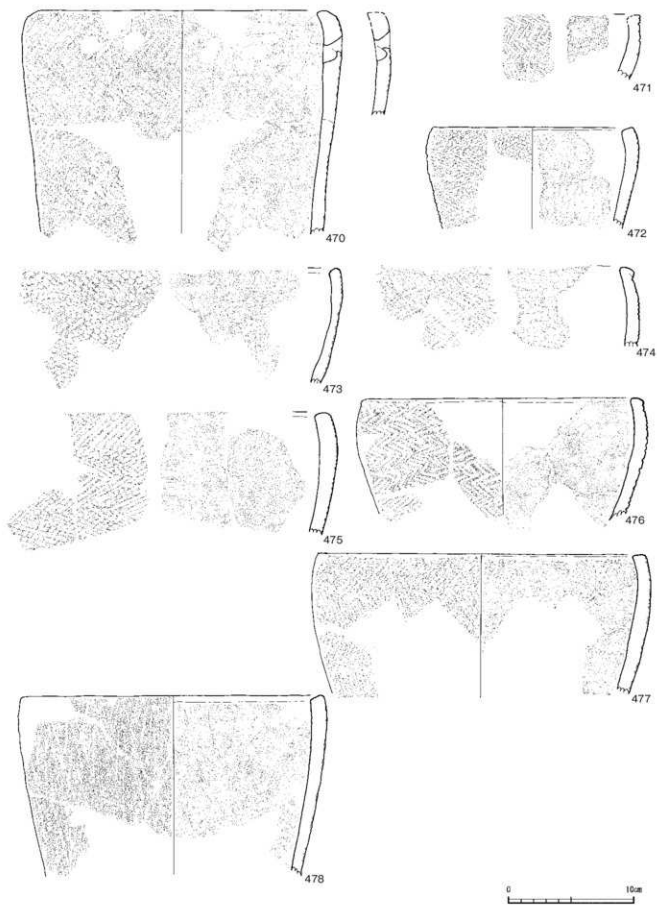
458



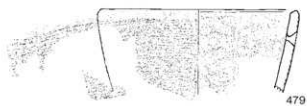
第279図 VI類土器(2)



第280図 VI類土器(3)



第 281 図 VI類土器 (4)



479



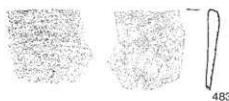
480



481



482



483



484



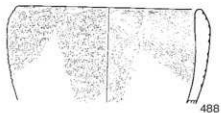
485



486



487



488



489



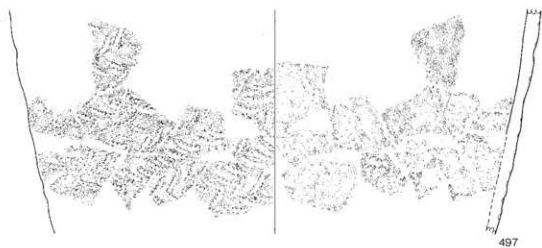
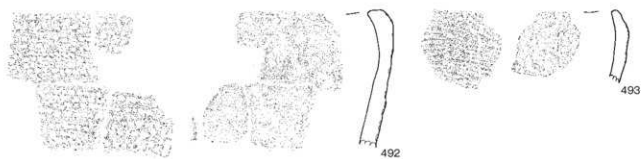
490



491



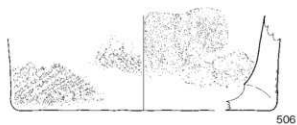
第282图 VI类土器(5)



第283図 VI類土器(6)



第284図 VI類土器(7)



506



507



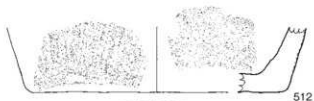
508



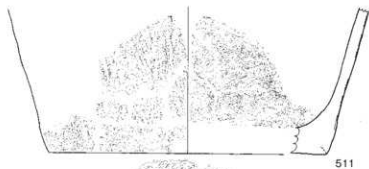
509



510



512



511



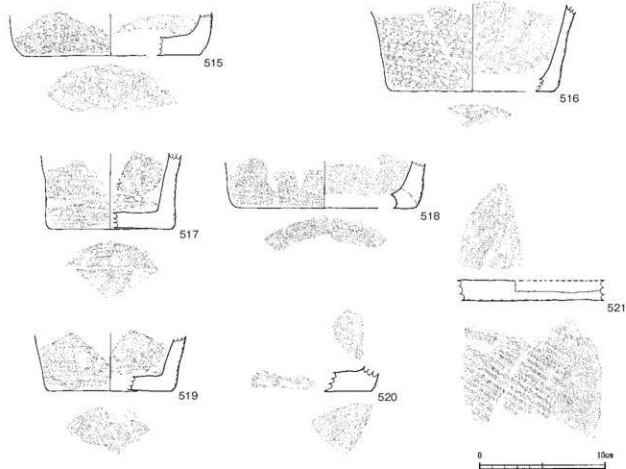
513



514



第285图 VI类土器(8)



第286図 VI類土器(9)

490は内面にミガキ状の丁寧なナデを行っている。491の胴部の横位の貝殻刺突は、やや間隔を空けて乱雑に施文されている。494は口唇部の平坦面にミガキ状の丁寧なナデを行っている。

496～505は胴部である。

496～500は外面に「く」の字状の貝殻刺突文を施す一群である。496・497は短い貝殻刺突文を「く」の字状に構成する。内面はミガキ状の丁寧なナデを行っている。498は「く」の字状の貝殻刺突文を施した後、横位の貝殻刺突文を施している。499は比較的大型の土器と考えられ、「く」の字状の貝殻刺突文を器面全面に密接に施している。胎土に金雲母や粒子の大きい白色粒子を多く含む。498・499ともに内面は胴部下半を縦位の、胴部上半を横位のケズリを行った後、ナデを行っている。500は胴部下半から底部付近の部位である。「く」の字状の貝殻刺突文を施した後、底面境付近は、横位の貝殻刺突文を密接に施す。底部近くの胴部内面は、ミガキ状の非常に丁寧なナデを施している。胎土に白色粒子を多く含

む。

501～503は外面に「ハ」の字状の貝殻刺突文を施す一群である。501はやや大振りの貝殻を施文工具として用いている。横位の貝殻刺突文を施し、区画を行った後、「ハ」の字状の貝殻刺突を施している。内面はヘラ状工具による丁寧なナデが行われている。502は胴部下半から底部付近の部位で、比較的小型の土器である。底部と接合する部分に、接合痕が明瞭に確認できる。外面は小振りの貝殻を用いて刺突を行っている。底面境まで「ハ」の字状の貝殻刺突文を密接に施している。503はやや間延びした「ハ」の字状の貝殻刺突文を施している。内面は縦位のケズリを行った後、ナデを行っている。

504・505は外面に横位の貝殻刺突文を密接に施す一群である。504は胎土に白色粒子を多く含む。505は底部との接合痕が確認できる。

506～521は底部である。

506～511は外面に「く」の字状の貝殻刺突文を施す一群である。その刺突の一部と考えられる斜位の貝殻刺突

を施すものも含む。506は底部と胴部の接合の際に生じた隙間や接合痕が内面で確認できる。胴部は底部円盤の上に粘土を輪積みし、成形したと考えられる。特に、底面境との胴部の粘土紐は太く、器壁を厚くして安定した底部となっている。底部外面は丁寧なナデを行ない、平滑化をはかっている。胴部外面は底面境付近まで貝殻刺突文を施している。507は内外面ともにミガキ状の丁寧なナデを行っている。胎土に白色粒子、小石を多く含む。508は底部円盤外周の上のやや内側に胴部成形用の粘土紐を置き、輪積みしたため外面の胴部と底部との接合部分が一部くびれている。509・510は「く」の字状の貝殻刺突文の一部と考えられる斜位の貝殻刺突文が確認できる。511は内外面ともにミガキ状の丁寧なナデを行っている。底面境付近の外面の無文部は、底部外面と同様に特に丁寧なナデを行っている。

512～515は外面に縦位、もしくは縦位に近い斜位の貝殻刺突文を施す一群である。512は縦位の貝殻刺突文を密接に施している。胎土に粒子の大きい白色粒子を非常に多く含む。514は小振りの貝殻を用いて縦位の刺突を施している。貝殻を押し出す幅を狭くすることにより、Ⅶ類土器やⅧ類土器に見られるような短沈線を模したような貝殻刺突文の一部を施している。内外面とも丁寧なナデを行っている。また、底面境との外面には508のようなくびれが確認できる。513は胴部内面の一部に縦位のケズリを行っている。

516～520は外面に横位の貝殻刺突文を施す一群である。516は底面境までやや大振りの貝殻を用いて横位の刺突を密接に施している。胴部内面は縦位のケズリを行った後、ナデを行っている。517・519は比較的小型の土器で、内面は丁寧なナデを行っている。外面は横位の貝殻刺突文を底面境付近まで密接に施している。518はやや間隔の空いた横位の貝殻刺突文を施している。胎土に白色粒子や小石を多く含む。519・520は底部外面に木葉痕が確認できる。

521の底部外面には網代痕が確認でき、ケズリを行っている。内面の半分以上が剥落しているが、残存部にはヘラ状工具によるナデが観察できる。

(7) Ⅶ類土器 (第287～292図 522～558)

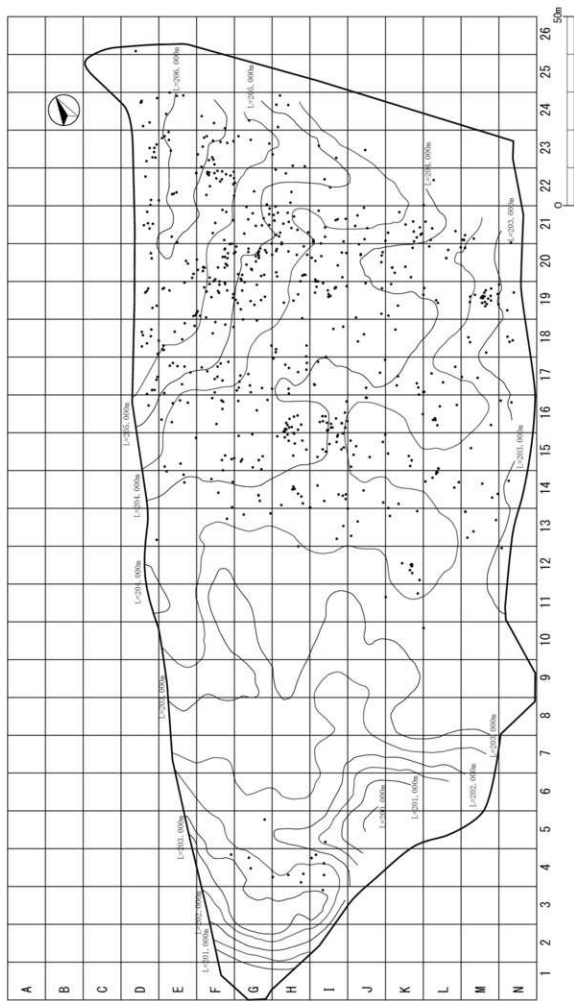
Ⅶ類土器は、先端を細く加工した棒状工具による短沈線を羽状に施文する一群である。Ⅵ類土器の主要な文様要素である貝殻刺突と組み合わせる施文しているものもある。施文の方向と文様構成により細分した。

522～549は口縁部である。

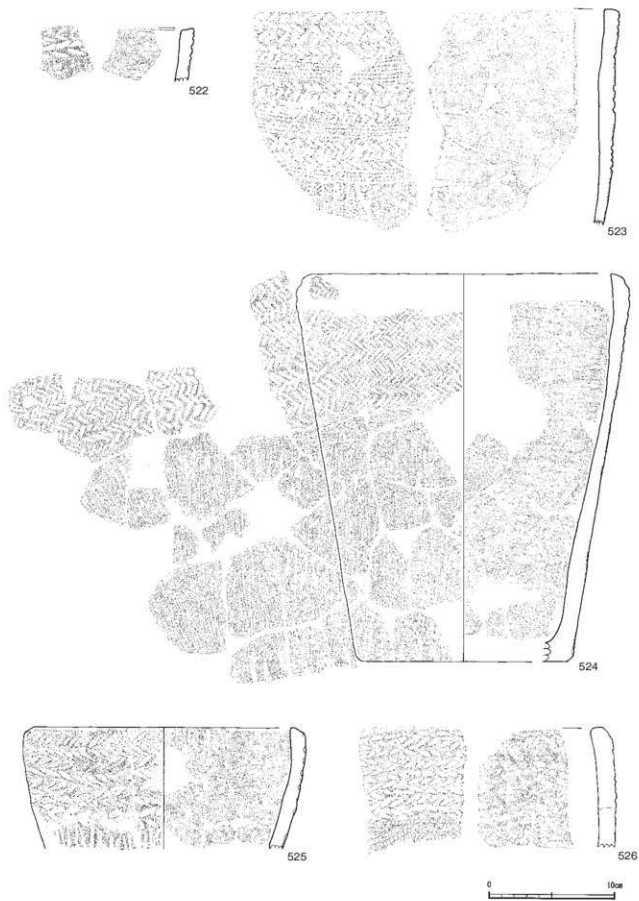
522～529は口縁部外面に羽状の短沈線文や貝殻刺突文を横方向に展開し、胴部に縦位や斜位の貝殻刺突文を施す一群である。胴部に貝殻腹縁部による縦位の短沈線を施すものも含む。胎土に白色粒子、小礫を多く含む。522は口縁部が直口する。外面は口縁部に羽状の短沈線

を施した後、横位の貝殻刺突文を1段施し、その下位に斜位の貝殻刺突文を密接に施文している。口唇部及び内面は、ミガキ状の丁寧なナデが行われている。523は直口する口縁部である。外面は口縁部に羽状の短沈線を施した後、その下位に横位の貝殻刺突文を密接に施す。これらの施文を胴部上半まで交互に行った後、胴部下半には縦位、斜位の貝殻刺突を密接に施す。524は口縁部が内湾する比較的大型の土器である。口縁部に羽状の短沈線を施した後、横位の貝殻刺突で胴部下半との区画を行っている。胴部下半の縦位の貝殻刺突は、底面境まで密接に施している。内面は丁寧なナデを行っている。525は口縁部に貝殻腹縁部による羽状の刺突を施した後、胴部との境付近のみに棒状工具による羽状の短沈線を施す。胴部は縦位の貝殻刺突を密接に施す。口唇部はミガキ状の丁寧なナデを行っている。526は器壁厚が1.5cm程度とやや厚い。外面は口縁部に横位の短沈線を1段施した後、横位の貝殻刺突で胴部下半との区画を行っている。527は内湾する器形である。外面は口縁部に羽状の短沈線を施した後、下位に横位の貝殻刺突文を1段施し、さらに下位に貝殻腹縁部による縦位の短沈線と横位の貝殻刺突文を施す。内傾した口唇部には丁寧なナデを行っている。528は口縁部が大きく内傾する器形である。外面は口縁部に羽状の短沈線を施した後、屈曲部を境に胴部は斜位の貝殻刺突文を施す。529は4単位と考えられる湾曲の大きい波状口縁を呈する器形である。外面は口縁部に羽状の短沈線を施した後、横位や斜位の貝殻刺突文で胴部との区画を行っている。下位に一部残存している横位の貝殻刺突文から、これらの区画は一定の間隔で行われたと考えられる。胴部は、この横位の貝殻刺突文間に「ハ」の字状の貝殻刺突文を施す。

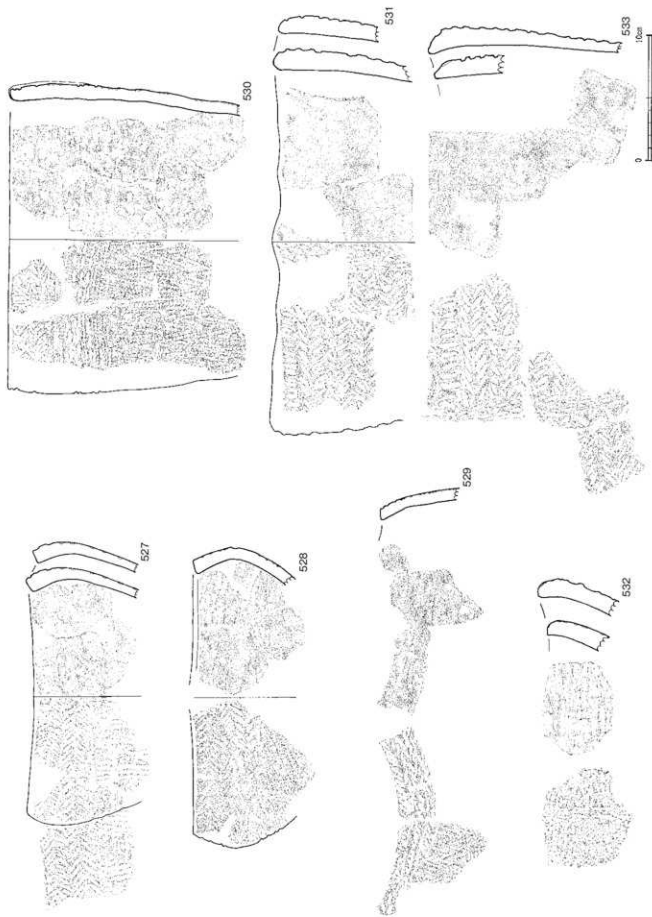
530～535は口縁部外面に縦位の施文で割り付けを行い、その間に横位の施文を行う一群である。530は口縁部外面に縦位の微隆線状の突起を口唇部から口縁部文様帯の部分に貼り付け、突起の側面に縦位の貝殻刺突を施す。その後、口縁部に間隔を置いて横位の貝殻刺突文を施すことにより割り付けを行っている。そして、上位の区画には羽状の短沈線を、下位の区画には短沈線を横方向に展開させている。胴部は「ハ」の字状の貝殻刺突文を密接に施す。531～533は波状口縁を呈する器形である。531と533の外面は波頂部より縦位の短沈線による割り付けを行った後、口縁部上位に縦位の短沈線を、その下位に羽状の短沈線を横方法に展開する。両者は同一個体と考えられる。532は外面を波頂部より縦位の短沈線を施した後、口縁部上位に横位の貝殻刺突を、下位には斜位の貝殻刺突を施文する。内面はミガキ状の丁寧なナデを行う。534は口縁部外面に縦位の貝殻刺突文を一定の間隔を空けて密接に施文し、その間に横位の羽状の短沈線



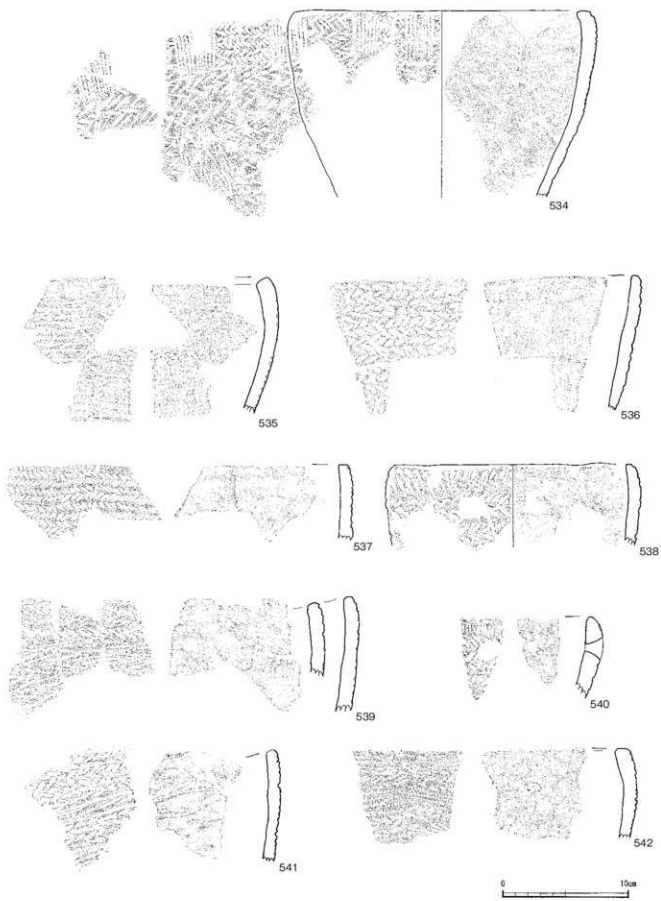
第 287 图 瓦类土器出土分布图



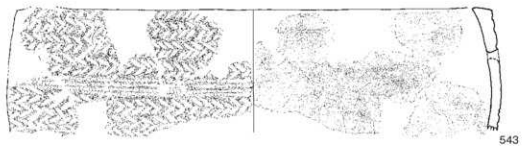
第288図 VII類土器(1)



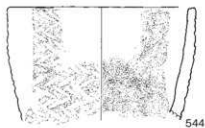
第 288 図 Ⅵ類土器 (2)



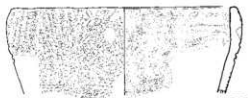
第290図 VII類土器(3)



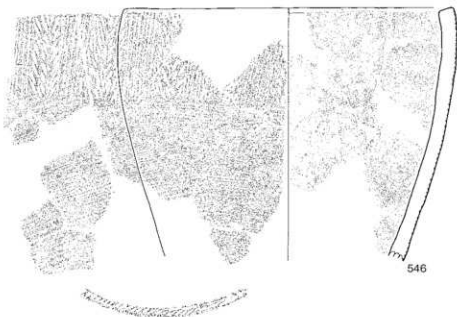
543



544



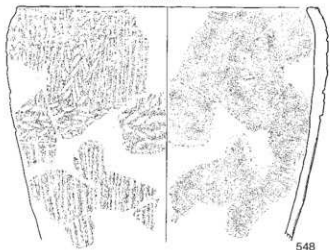
545



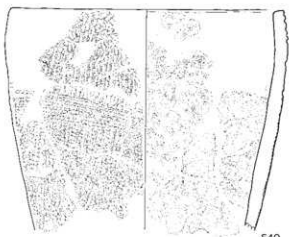
546



547



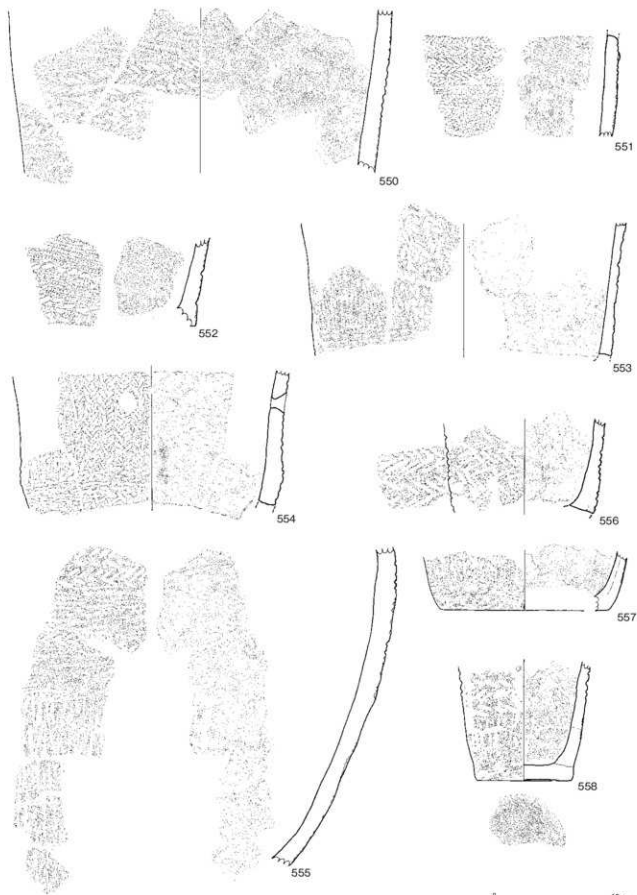
548



549



第 291 図 VII 類土器 (4)



第292図 VII類土器(5)

と「く」の字状の貝殻刺突文を交互に施文している。胴部は「く」の字状の貝殻刺突文を施した後、その下位には「く」の字状と「ハ」の字状の短沈線を交互に施文している。535は内湾する器形で、内傾する口唇部をもつ。外面は口縁部を先端の細い棒状工具により縦位の刺突を行った後、横位の沈線を施している。

536~543は口縁部の文様を横方向に展開する一群である。一部胴部に斜位の貝殻刺突を施すものも含む。536・538は外面に横位の羽状の短沈線を繰り返して施文している。537は口縁部外面に横位の貝殻刺突を2段施した後、横位の羽状の短沈線を繰り返して施文している。口唇部、内面ともにミガキ状の丁寧なナデを行っている。539は緩やかな波状の沈線を呈する。口縁部上端に横位の短沈線を1段施した後、横位の羽状の短沈線を施す。その下には、「く」の字状の貝殻刺突を密接に施す。540は口縁部上端に縦位の短沈線を施した後、羽状の短沈線を施している。外面から穿孔したと考えられる円形の補修孔が1か所確認できる。内面は丁寧なナデを行っている。541は口唇部がやや磨耗しているが、緩やかな波状の沈線を呈すると考えられる。文様は543と類似するが、口縁部外面に横位の羽状の短沈線を施した後、下位に密接した横位や斜位の貝殻刺突文を施す。この施文パターンが繰り返されると考えられる。542は口縁部がやや内湾する器形である。外面に横位の貝殻刺突と横位の羽状の短沈線を繰り返して施文している。胎土に小礫を多く含む。543は口縁部が内湾する大型の土器である。口縁部外面に横位の羽状の短沈線を施した後、横位の貝殻刺突文を4段施す。さらにその下に横位の羽状の短沈線、横位の貝殻刺突文を施している。口唇部・内面ともにミガキ状の丁寧なナデを行っている。

544~549は口縁部外面に、縦位もしくは斜位を基調とした施文を行う一群である。544は鋸歯状のモチーフを描くように縦位の短沈線を外面全面に施している。羽状ではないがこの類に含めた。545は口縁部がやや肥厚し、やや内湾する器形である。口縁部外面を斜位の貝殻刺突で鋸歯状に施した後、その中に横位の羽状の短沈線の一部充填している。胴部との境付近に横位の貝殻刺突を密接に施す。口縁部外面に未貫通の補修孔が1か所確認できる。546は大型の器形である。口縁部外面に549と同じような施文を行った後、胴部下半まで横位の貝殻刺突を密接に施文している。胎土に白色粒子と小礫を多く含む。547は口縁部外面に、縦位の短沈線と同様の施文具で縦位の刺突を施している。内外面ともミガキ状の丁寧なナデを行っている。548は口縁部が内湾するやや大型の器形である。口唇部平坦面には棒状工具による刺突が、口唇部外端にはヘラ状工具による刻目が入る。口縁部外面に、縦位の貝殻刺突と羽状の短沈線を交互に施文している。その下に横位の羽状の短沈線と

貝殻刺突を施し、胴部との区画を行った上で、胴部は密接した縦位や斜位の貝殻刺突を施している。549は548と同様に口縁部外面に縦位の羽状の短沈線を交互に施文しているが、一部施文が乱れ、横位の羽状の短沈線を施す箇所がある。その下に横位の貝殻刺突を4段施した後には、胴部はやや間延びした「ハ」の字状の斜位の貝殻刺突を施している。

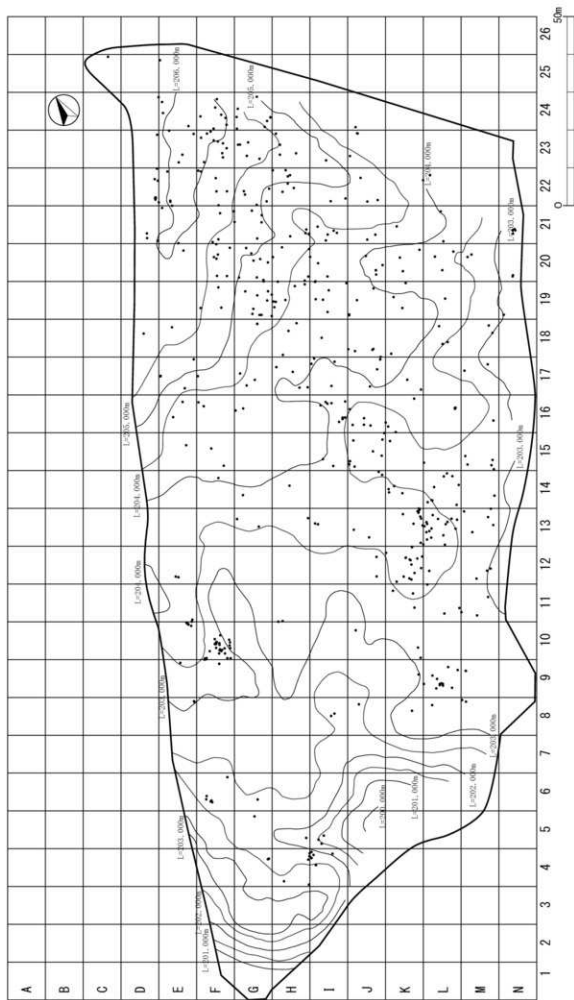
550~555は胴部である。550はやや大型の器形である。外面に横位の貝殻刺突を間隔を空けて2段施し区画を行う。上位と下位の区画には「く」の字状の貝殻刺突文を、中位の区画には羽状の短沈線を横位に施す。551は外面に横位の微隆線状の突起を貼り付け、突起の上も含め横位の短沈線を密接に施した後、横位の貝殻刺突を2段施す。その下に「く」の字状の斜位の貝殻刺突を施す。552は底部近くと考えられる。外面は底面境付近までやや乱れた横位の貝殻刺突と斜位の短沈線を交互に施文している。553は縦位の羽状の短沈線と縦位や斜位の貝殻刺突を横方向へ繰り返して施文し、横位の短沈線で胴部下半との区画を行っている。554は胴部中央外面に屈曲する影らみをもつ器形である。先に屈曲部に横位の短沈線を施し区画を行った上で、胴部上半、胴部下半に縦位の羽状の短沈線と縦位の貝殻刺突をそれぞれ施している。外面より穿孔したと考えられる円形の補修孔が1か所確認できる。555は外面に羽状の短沈線を横位に施し、その下位には横位や斜位の貝殻刺突文を施す。これを2回繰り返して文様を構成し、胴部下半は縦位や斜位の貝殻刺突を密接に施している。

556~558は底部である。556は底部との接合痕が明瞭に確認できる。底部円盤上の外周部分に沿うように粘土紐をのせ、胴部を輪積み成形したと考えられる。内面は丁寧にナデを行っているもの、外面は胎土中の粒子の大きい白色粒子や小礫が多く確認でき、器面調整が粗い。横位の羽状の短沈線を底面境まで施文している。557は胴部外面に縦位の貝殻刺突と縦位の短沈線を交互に施文し、底面境付近は無文部としてミガキ状の丁寧なナデを行っている。558は筒状の小型の器形である。底部と胴部との接合面付近で剥離痕と考えられる亀裂が内外面から明瞭に確認でき、556と同様に底部円盤上に粘土紐をのせ、胴部を輪積み成形している。外面は横位の羽状の短沈線を施し、底面境付近のみ縦位の貝殻刺突を施す。胎土に白色粒子を多く含む。

なお、525に付着した炭化物で年代測定を実施したところ、10,241 - 10,156calBPの値を得た。

(8) Ⅷ類土器 (第293~297図 559~599)

Ⅷ類土器は、樹菌状工具や貝殻腹縁部により条線や沈線を施す一群である。同様の文様効果を図ったと考えられる縦位、斜位の短沈線や縦位の刺突を施す一群もⅧ類に含む。文様要素と文様構成で細分した。



第 233 图 罐类土器出土分布图

559～578は口縁部である。

559～566は口縁部に横線帯の文様を施し、胴部に縦位の条線や短沈線を施す一群である。559は内傾するように成形した口唇部をもち、口唇部や内面に丁寧なナデを行っている。口縁部外面に斜位の貝殻刺突文を1段施した後、縦位に一定の施文幅で、貝殻腹線部による縦位の条線文と斜位の貝殻刺突文を繰り返し施している。内面は横位のケズリと丁寧なナデを行っている。560は口縁部外面に横位の貝殻腹線部による条線と斜位の貝殻刺突文を施した後、縦位に一定の施文幅で貝殻腹線部を用いた斜位の刺突文、縦位の条線文、横位の刺突文を交互に施文している。口唇部はミガキ状の丁寧なナデを施す。内面は横位のケズリとナデを行っている。561は口唇部外端が緩やかな波状を呈している。口縁部上端より縦位の沈線で波状文を描き、その後口縁部上位に横位の沈線を2条施す。内面は横位のケズリを行った後、ナデ調整で仕上げている。562・563は口縁部外面に横位の貝殻刺突文を3～5段施した後、櫛歯状工具による縦位の短めの条線を器面全面に施す。胎土に白色粒子を多く含む。564は口縁部外面に横位の貝殻刺突文を3段施した後、「ハ」の字状の条線文を胴部下半まで施す。口唇部と内面は、ミガキ状の丁寧なナデを行っている。565は口縁部がやや内湾する器形である。口縁部外面に横位の貝殻刺突文を6段施した後、条線で曲線文を描く。胎土に白色粒子を多く含む。566は口縁部が内湾する器形である。口縁部外面を櫛歯状工具による横位の短沈線を施した後、胴部は横位、縦位、斜位の短沈線を器面全面に施す。割付けを行った痕跡は確認できないが、全てを不規則に施文している状況でもない。

567～570は口縁部から胴部まで縦位の条線や沈線による施文が行われる一群である。567は内傾する口唇部で、緩やかな波状口縁を呈すると考えられる。口縁部外面より「く」の字状のモチーフを条線で縦方向に連続して描いている。568は口縁部が内湾する器形である。外面に3本1単位の工具による条線で縦位の波状文を施す。口唇部、内面ともにミガキ状の丁寧なナデを行っている。569・570の外面はいずれも条線で縦位の曲線文を描き、口唇部にミガキ状の丁寧なナデを行っている。

571～578は口縁部に棒状工具で縦位、斜位の短沈線や縦位の刺突を施す一群である。571は外面を間延びした「C」字状に加工した工具で縦位に刺突を施している。572は縦位に短沈線を密接に施す。口唇部はミガキ状の丁寧なナデを施す。573は先端をヘラ状に加工した工具による沈線で口縁部付近は「く」の字状のモチーフを、その下位は一部施文が乱れるものの「ハ」の字状のモチーフを描く。内面は丁寧なナデを行っている。574は口縁部外面に横位の短沈線を1段施した後、その下位には斜位の短沈線を施す。胎土に小礫を多く含む。575は口縁

部外面に横位の沈線を1条施した後、下位には斜位の短沈線を施す。一部羽状を呈する部分もあるが、短沈線を施す工具は先端がヘラ状に加工されており、種類の施文とは異なる。576は波状口縁を呈すると考えられる。口縁部外面に横位の沈線を1条施した後、「ハ」の字状の沈線を施している。577・578は口縁部外面に、横位の沈線を1条施した後、縦位の短沈線を施す。口唇部はミガキ状の丁寧なナデを行っている。

579～591は胴部である。

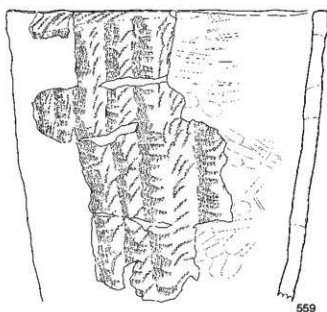
579～581は胴部に縦位の条線を施す一群である。579・580は外面に3本1単位の工具による条線で縦位の波状文を施す。580は底部付近と考えられる。568と同じ個体の可能性がある。内面は縦位のケズリを行った後、ナデを行っている。581は外面に3本1単位の工具による条線を斜位に施す。

582～591は胴部に棒状工具により縦位、斜位の短沈線や縦位の刺突を施す一群である。582は外面に3本1単位の工具による縦位の短沈線をやや間隔を空けて施文している。内面はミガキ状の丁寧なナデを施す。583～585は、外面に先端を細く加工した棒状工具を器面に深く押し当て縦位の沈線を描いている。これらは同一個体の可能性がある。586は外面に縦位の短沈線と斜位の沈線を施している。内面は丁寧なナデを行っている。587は外面に先端を細くした工具で縦位の短沈線と、先端を舌状に加工した工具で沈線を描いている。内面は横位のケズリを行っている。588は外面を縦位、斜位の短沈線を密接に施している。内面はミガキ状の丁寧なナデを施す。589・590は先端を舌状に加工した工具による縦位の刺突を密接に施す。589の内面の一部はミガキ状の丁寧なナデを施す。591は器壁厚が0.5cm程度と底部付近としては薄いことから、小型の器形と考えられる。

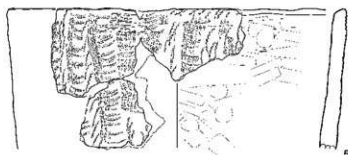
592～599は底部である。

592は外面に3本1単位の工具による条線で縦位の波状文を施す底部である。内面はミガキ状の丁寧なナデを行っている。568と同じ個体の可能性がある。

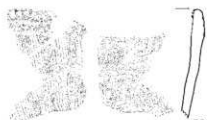
593～599は外面に棒状工具により縦位、斜位の沈線や短沈線、縦位の刺突を施す一群である。他の甕類土器の胎土、焼成、調整等が類似するものも含む。593は外面に縦位、斜位の沈線を施すが、底面境付近は無文である。内面は丁寧なナデを施す。594は外面に底面境付近まで斜位の沈線を施し、胎土に白色粒子、金雲母を多く含む。やや上げ底気味の底部である。595は外面に、やや間隔を空けて縦位の短沈線を施すが、底面付近は無文である。断面に底部と胴部の接合痕が確認できる。内盤上に粘土紐を置き、胴部の輪積みを開始したと考えられる。596は外面に斜位の沈線で「ハ」の字状モチーフを描いている。底部と胴部の接合痕が明瞭に確認できる。595と同様の方法で胴部を成形したと考えられるが、底面境付近



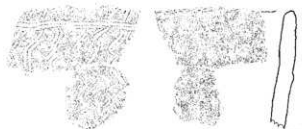
559



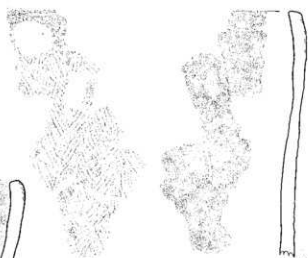
560



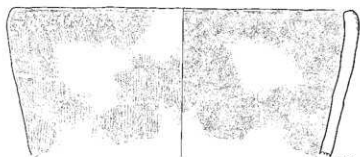
562



561



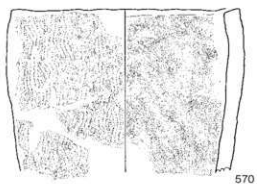
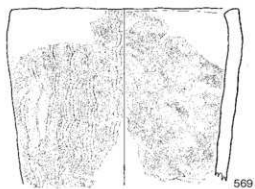
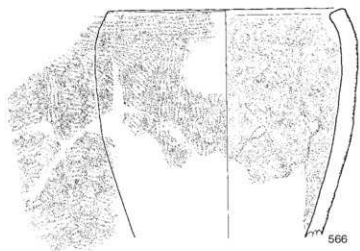
564



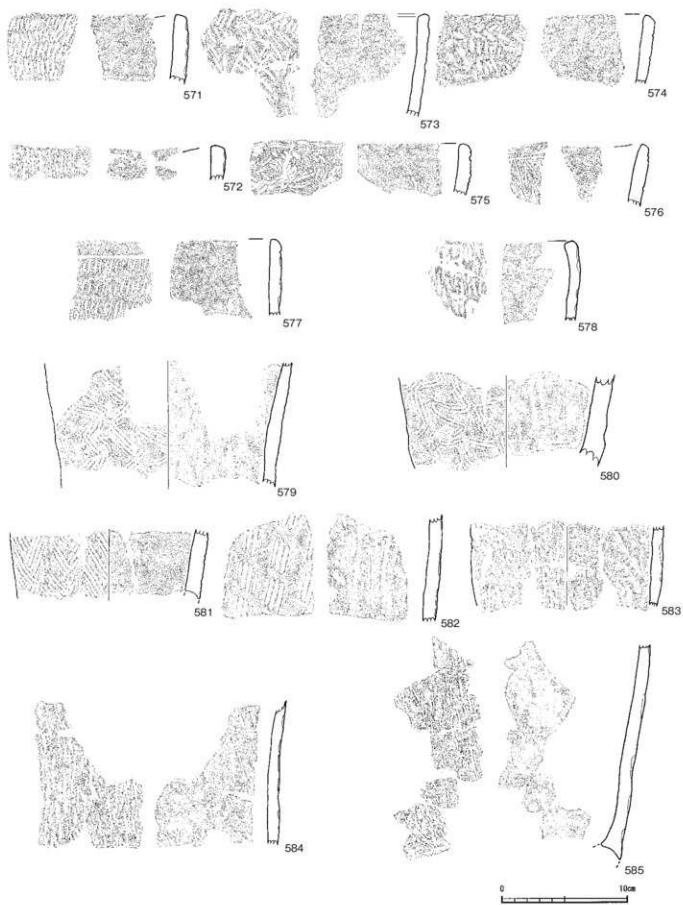
563



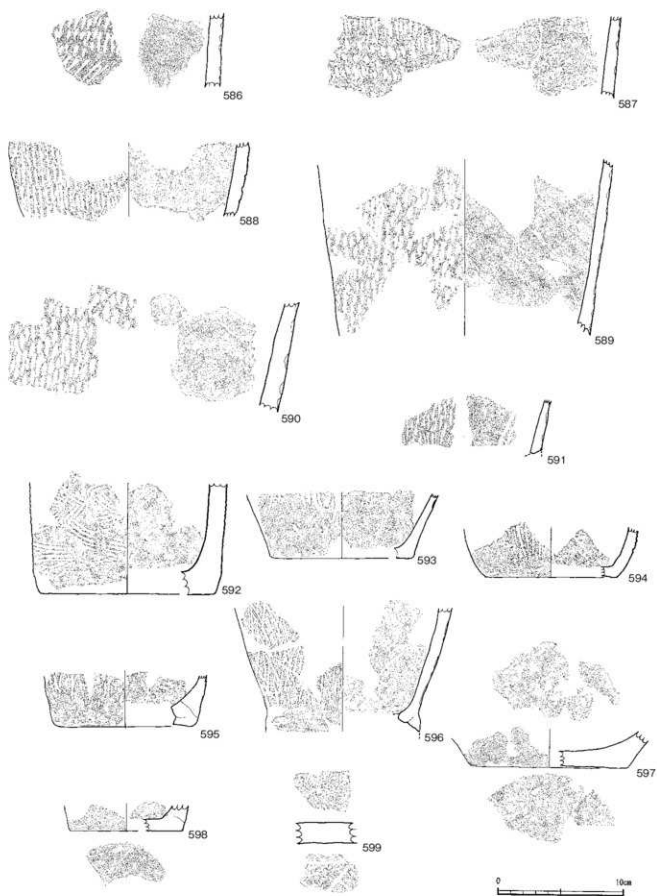
第294图 VII类土器(1)



第295図 VII類土器(2)



第296図 VII類土器(3)



第297图 VII类土器(4)

がややぐびれていることから、底部円盤外周のやや内側に粘土紐を置き輪積みを開始したと考えられる。597・598・599の文様は、確認できない。VI類・VII類土器の可能性もあるが、他のⅧ類土器と胎土、調整、焼成等が類似している。598・599は底部外面に木葉痕が確認できる。

(9) IX類土器 (第298~300図 600~618)

IX類土器は円筒形の器形に、口縁部~胴部上半に貝殻条痕を施す一群である。横位と縦位に施すものと横位のみを施すものがある。文様構成により細分した。

600~608は口縁部から胴部外面に縦位の貝殻条痕を施した後、横位の貝殻条痕を密接に施す一群である。ただし、縦位の貝殻条痕は部分的であったり、わずかに残っているものが多い。また、横位の貝殻条痕で、緩やかな波状のモチーフを描くものも含む。

器形は口縁部がわずかに外凸するもの(600-601-602)、直口するもの(603-606)、わずかに内湾するもの(607-608)がある。また、口唇部が舌状を呈するもの(601-606)、平坦面を有するもの(600-607-608)に細分できる。調整は口唇部から内面にかけミガキ状の丁寧なナデ、もしくは丁寧なナデを行う。

600は口縁部がわずかに外反し、胴部下半が底部に向けてすまは比較的大型の器形であると考えられる。外面は横位の貝殻条痕が胴部下半まで及び、縦位の貝殻条痕も一部確認できる。胎土に小礫を多く含む。601・608は口縁部外面に縦位の貝殻条痕をわずかに観察できる。また、横位の貝殻条痕は一部波状を呈する部分がある。胎土に小礫を多く含む、色調は明赤褐色である。602・606は外面に縦位の貝殻条痕がわずかに確認できる。いずれも外面より穿孔したと考えられる円形の補修孔が1か所確認でき、胎土は長粒の角閃石を含み、色調は灰黄褐色である。603・604は縦位の貝殻条痕が明瞭に残り、横位の貝殻条痕は細かな波状となる。内面を口縁部は横位のケズリ、胴部は縦位のケズリを行った後、ナデを行っている。胎土に小礫を含む。604は外面から穿とうとした未貫通の補修孔と考えられる痕跡が1か所確認できる。605は横位の貝殻条痕の一部に、先に施文した縦位の貝殻条痕が確認できる。胎土に1mmを越える長粒の角閃石を多く含む、色調は灰黄褐色である。口唇部もミガキ状の丁寧なナデを行う。607は縦位の貝殻条痕が部分的に施文される。なお、口縁部内面の煤状の炭化物を年代測定した結果、10,157 - 9,980calBPの値が得られた。

609~615は口縁部~胴部外面に横位の貝殻条痕を密接に施す一群である。器形は口縁部が直口するもの(609-610)、内傾するもの(611)、やや内湾するもの(612-613)、内湾するもの(614-615)がある。609は口縁部外面にやや浅い横位の貝殻条痕を密接に施している。口唇

部及び内面は、非常に丁寧なナデを行っている。胎土に金雲母を含む。610の口唇部は外削けを呈し、ミガキ状の丁寧なナデを行っている。611はやや小型の器形である。胴部外面は縦位のケズリを行った後、ナデを行っている。胎土に角閃石を含み、色調は灰黄褐色である。612は口唇部に平坦面を有し、口縁部外面に横位の貝殻条痕を密接に施す。一部緩やかな波状を呈する箇所がある。613・614は横位の条痕で波状のモチーフを描いている。いずれも口唇部は舌状を呈し、内面には丁寧なナデを行っている。615の横位の貝殻条痕は施文後にナデが部分的に行われている。

616~618は胴部である。616は外面に縦位の貝殻条痕を密接に施した後、横位の貝殻条痕を施している。内面は縦位のケズリを行った後、丁寧なナデを行っている。胎土に角閃石を多く含む、色調は灰黄褐色である。617は胴部上半に横位の貝殻条痕を密接に施す。文様と無文部の境界あたりから底部部に向けてすまはる器形となる。胴部下半は被熱により剥落している部分もあるが、縦位のケズリを行っていることが確認できる。内面は縦位のケズリを行った後、ナデを行っている。胎土に長粒の角閃石を多く含む、色調は灰黄褐色である。618は外面に横位の貝殻条痕を密接に施しているが、一部に縦位の貝殻条痕が確認できる。胎土は白色粒子や小礫を含み、色調は明赤褐色である。

なお、2点の本類土器に付着していた炭化物で年代測定を実施した。その結果、607の炭化物は10,157 - 9,980calBP、618の炭化物は10,179 - 9,887calBPの値を得た。

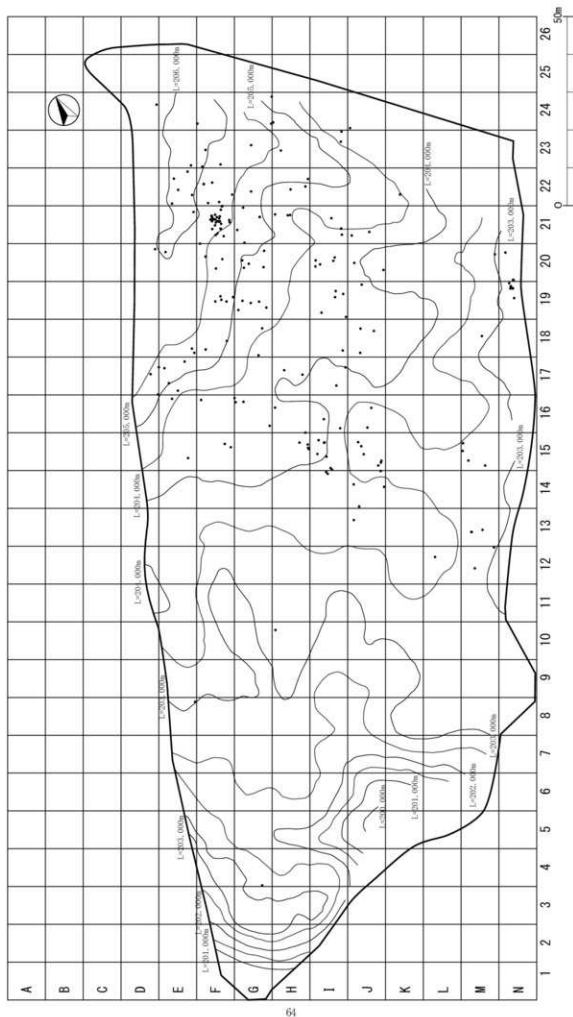
(10) X類土器 (第301~307図 619~646)

X類土器は、口縁部がやや内傾もしくは直口する器形である。器壁が非常に厚いのが特徴の無文土器である。ナデ、貝殻条痕などの器面調整を行う。器形や器面調整で細分した。

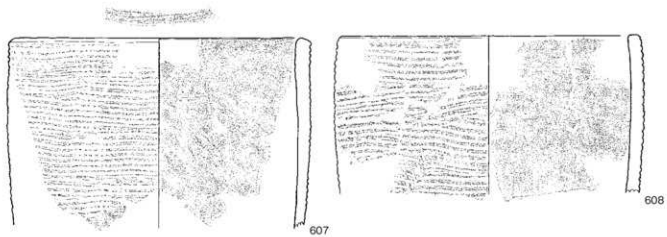
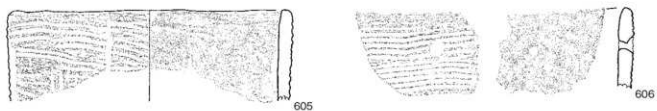
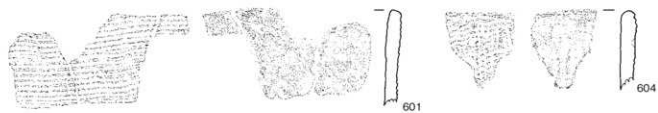
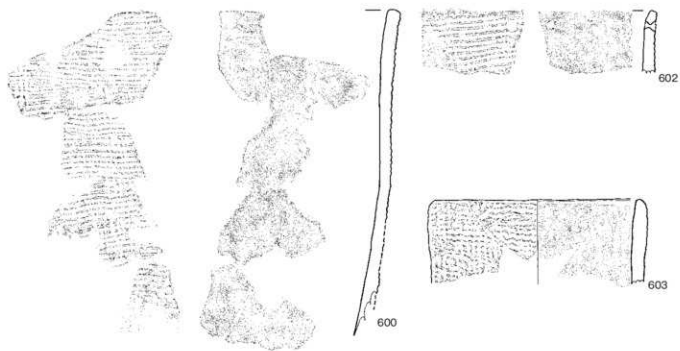
619~633は口縁部である。

619~621は内傾する口縁部の内外面に浅い貝殻条痕を施す一群である。また、口唇部にも割目を入れたような斜位の貝殻条痕が一部施される。さらに、成形時の指おさえ痕が多く確認できる。胎土の色調はいずれも明赤褐色である。619は口唇部を外面より一部折り返して成形したことが断面より確認できる。口縁部に焼成前に穿った円形の孔が確認できる。内面の孔の周辺には粘土を円形に貼り付けてあり、貼り付け後に穿孔していると考えられる。620・621は口縁部が内傾する器形と考えられる。621は外面の一部が被熱により剥落しているが、周辺に煤状の付着物が確認できる。

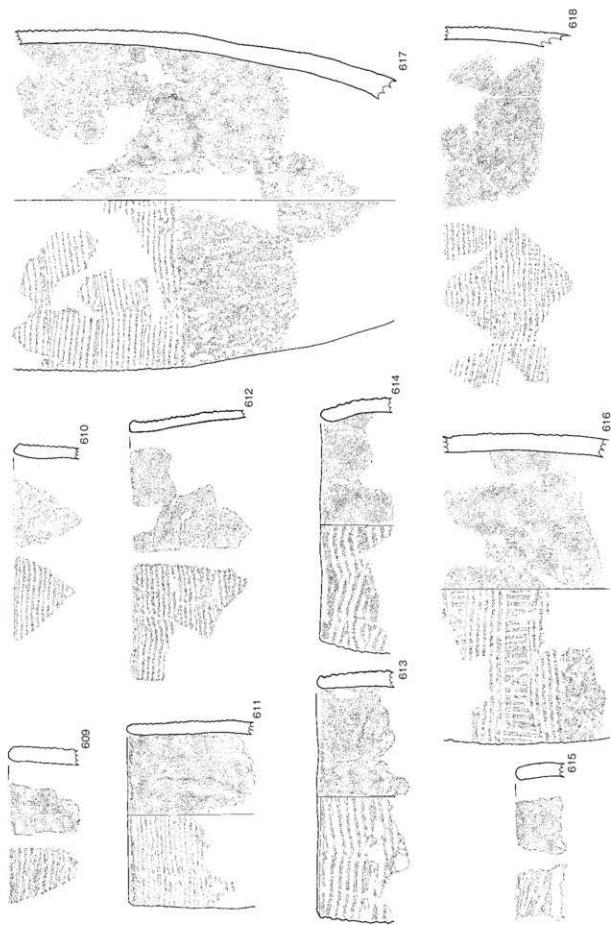
622は口縁部がやや内傾する器形で、内外面ともに横位のナデを行ったと考えられる横線状の擦痕が確認できる。口唇部の平坦面は非常に丁寧なナデを行っている。



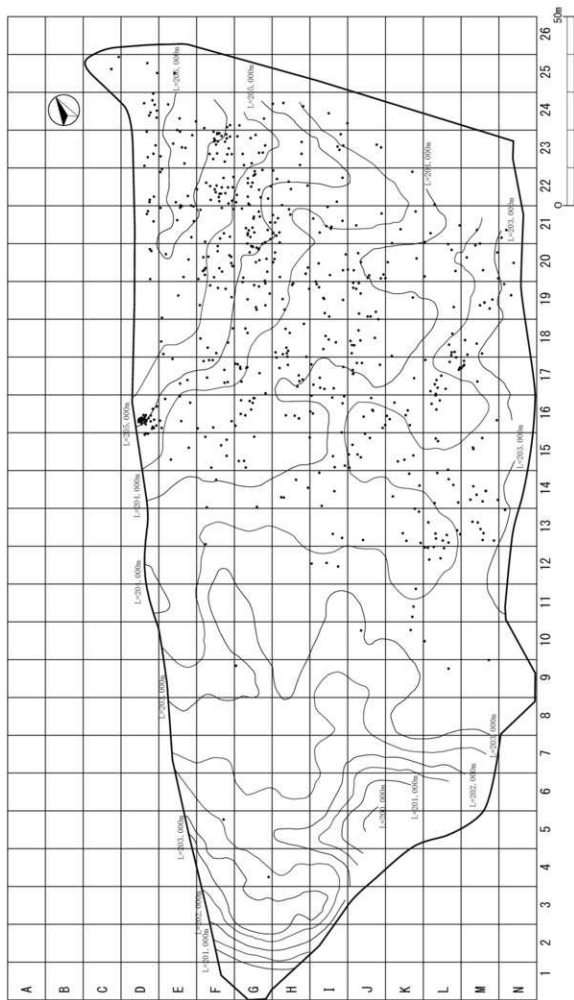
第 238 图 区划土器出土分布图



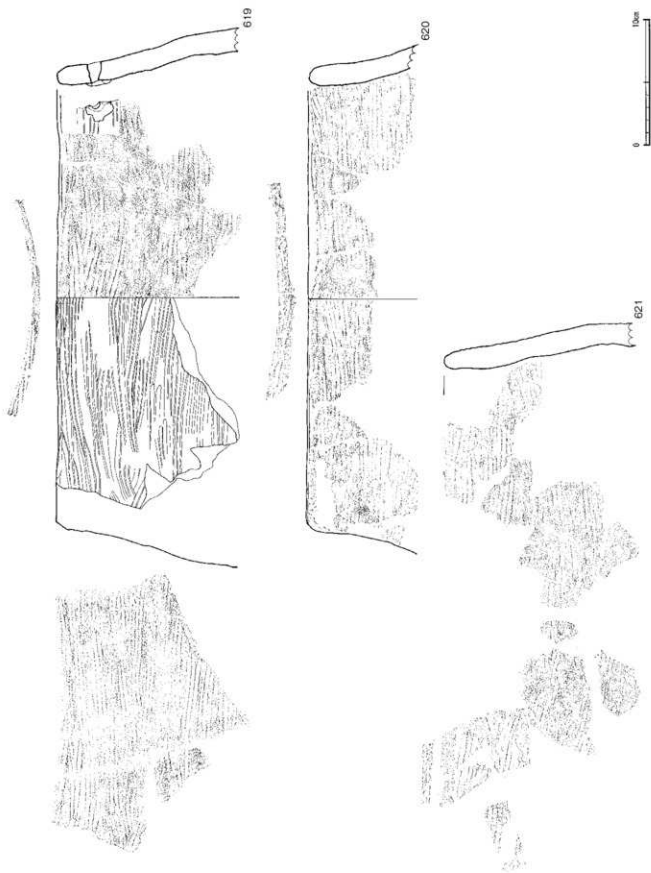
第299图 Ⅹ类土器(1)

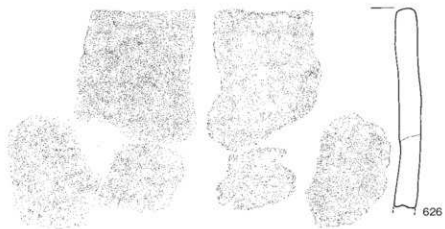
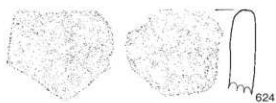
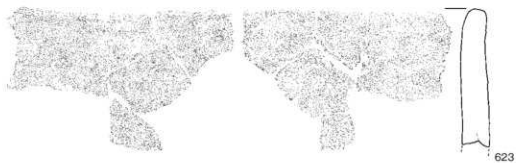
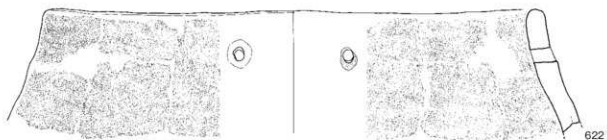


第 300 图 瓦质土器 (2)

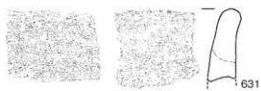
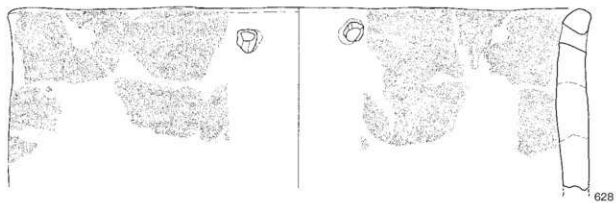


第 301 图 X 类土器出土分布图





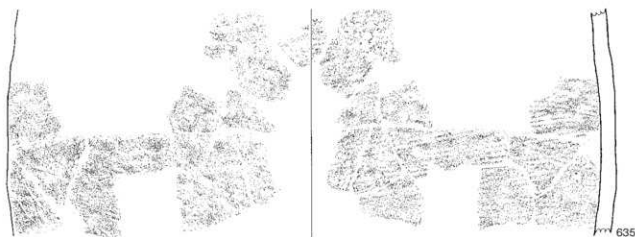
第 303 図 X 類土器 (2)



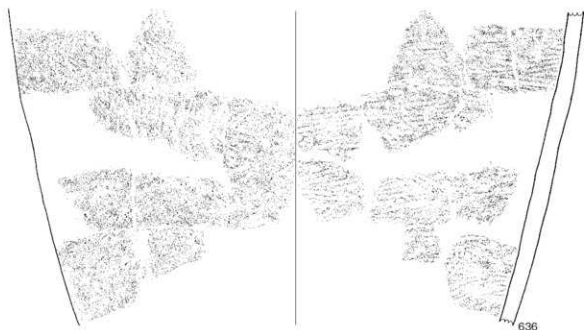
第304図 X類土器(3)



634



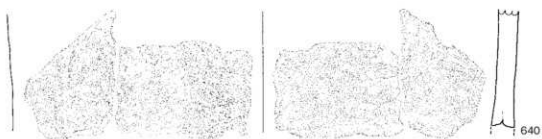
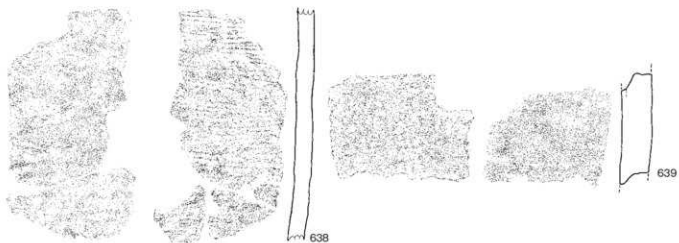
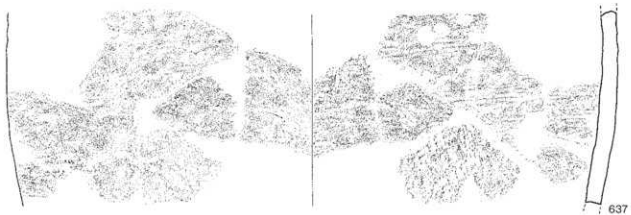
635



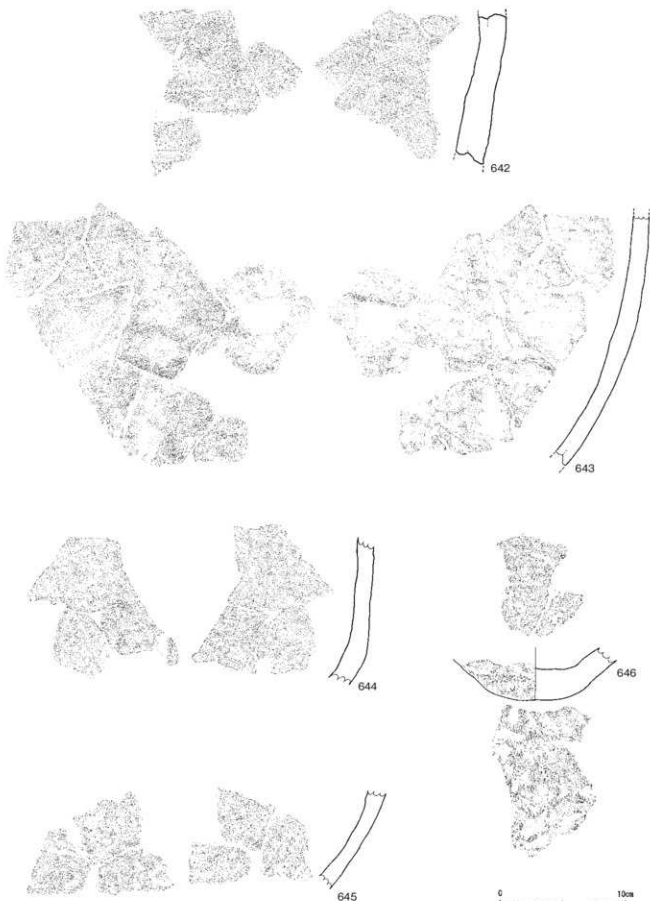
636



第305図 X類土器(4)



第306図 X類土器(5)



第307図 X類土器(6)

胎土に白色粒子や金雲母を多く含む。口縁部に焼成前に穿った孔が1か所確認できる。

623～626は口縁部が直口する器形で、内外面にナデを行う一群である。623は胎土に小礫、白色粒子を多く含む。624の外面には横位の擦痕が確認できる。625・626の外面には縦位や斜位のナデを行ったと考えられる繊維状の擦痕が、内面は横位の同様の擦痕が確認できる。胎土には塊状の軽石質の白色粒子を多く含む。また、粒子の小さい白色粒子、金雲母も含む。色調は灰黄褐色である。

627～633は直口する口縁部の端部が若干外反し、内外面ともナデを行う一群である。いずれも口縁部外面に外反させるためのくびれがある。内外面とも横位のヘラ状工具による擦痕や成形時の指おさえ痕が確認できる。627は他に比べ器壁厚がやや薄い。628は口縁部に焼成前に穿たれた円形の孔が残る。穿孔に用いた棒状工具の痕跡が、孔の下部に一部確認できる。胎土は小礫、白色粒子を多く含む。629は胎土に小礫、白色粒子を多く含む。胎土に混和剤として混入したと考えられるような繊維痕が確認できる。また、断面には630と同様の接合痕が見られる。630の外面には横位の擦痕が、内面には沈線状の圧痕が一部確認できる。文様というよりは調整時に生じたものと考えられる。胎土には塊状の軽石質の白色粒子を多く含む。また、粒子の小さい白色粒子や金雲母も含む。色調は灰黄褐色である。断面より接合の一部が確認できる。輪積みする粘土紐の上方を舌状に成形し、次に接合する粘土紐の下方をわずかに又状に開いた状態で下の粘土紐を挟み込むように接合したと考えられる。631・632・633は胎土に小礫、白色粒子を多く含む。633は口縁部に孔が穿たれて、孔の断面より穿孔する過程が確認できる。まず、内面側から穿孔を開始し、次に外面側は内面側より孔を一回り大きくなるように、棒状工具を外面で回転させ孔を広げるように穿孔している。

634～645は胴部である。

634～638は内外面もしくは内面に貝殻条痕を施す一群である。ただし、内面のみ貝殻条痕が確認できるものは外面をナデ消した可能性もある。いずれも胎土に小礫、白色粒子を含み、色調は明赤褐色である。内面には、成形時の指おさえ痕が多く確認できる。634は内外面に浅い貝殻条痕を施し、外面には煤状の付着物が確認できる。635～638は内面のみ浅い貝殻条痕を施し、外面はミガキ状の丁寧なナデを行う。

639～645は内外面にナデを行う一群である。成形時の指おさえ痕が内外面ともに確認できる。640・642は胎土に小礫、金雲母を含む。内外面ともに横位のナデを基調としながらも、外面は部分的に縦位や斜位の繊維痕が確認できる。641はやや外反する胴部下半である。胎土

に白色粒子を多く含む、色調は灰黄褐色である。641は上方に接合部分を舌状に成形した箇所があり、642は下方に接合部分を又状に開いた箇所が確認できる。630と同様の接合方法であったと考えられる。643・644・645は底部付近と考えられる。643は内外面ともに横位を基調とした丁寧なナデを行っているが、底部に近い部分が特に丁寧である。胎土に混和剤として混入したと考えられるような繊維痕が確認できる。644・645は胎土に白色粒子を多く含む、644は金雲母も多く含む。外面はミガキ状の丁寧なナデを行っている。

646は丸底の底部である。底部付近は器壁厚が約2.5cmある。直径が10cm程度の粘土塊を口径に対して極端に小さい丸底に成形し作り出したと考えられる。底部外面には、ミガキ状の丁寧なナデを行っている。また、煤状の付着物も確認できる。胎土は白色粒子を多く含む、混和剤として混入したと考えられるような繊維痕も確認できる。

(11) XI類土器 (第308～330図 647～862)

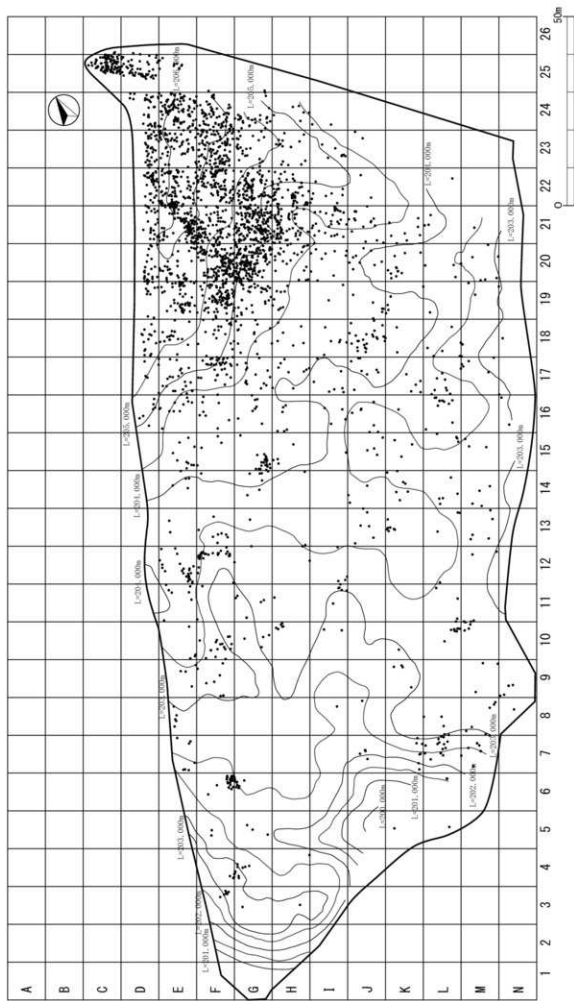
XI類土器は、原体を回転することにより施文する一群である。原体の種類により楕円押型文を施す一群、山形押型文を施す一群、連珠押型文を施す一群、波状押型文を施す一群、ネガティブな押型文を施す一群、縄文を施す一群、摺糸文を施す一群、変形摺糸文を施す一群、短枝回転文を施す一群に大別し、さらに、施文方向、器形、調整等により細分した。なお、647～859は深鉢形土器、860～862は壺形土器と考えられる。

647～660は外面に楕円押型文を横位に施す一群である。なお、647～650及び658～660は、器壁が薄いことから2分の1の縮尺で掲載している。

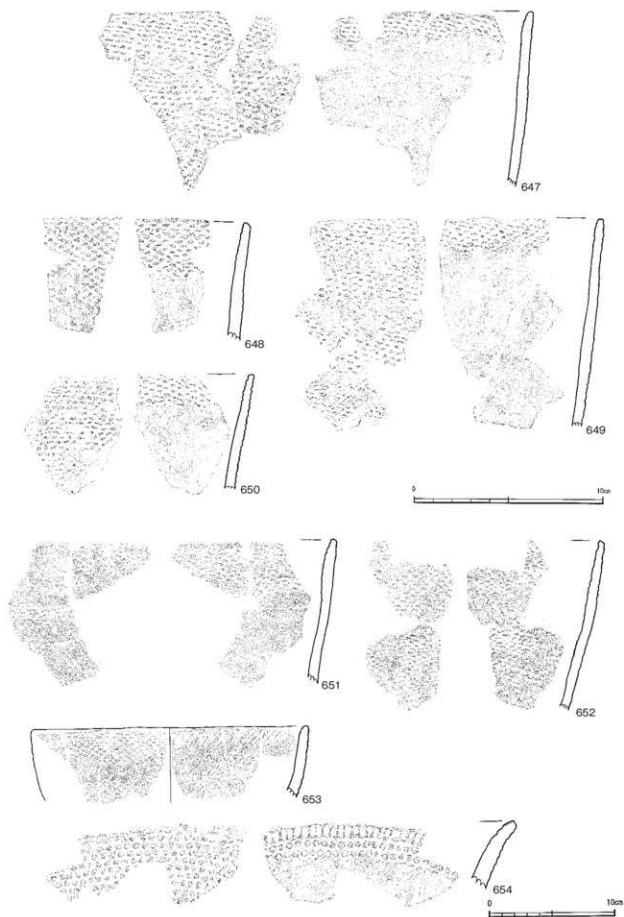
647～653は口縁部で、わずかに外傾しながら直口する器形である。器壁はいずれも薄く、0.5cm～0.8cmである。また、色調は褐色である。口唇部を舌状に成形する。外面の楕円押型文は小粒である。特に、647・648・651～653は楕円押型文を帯状に施し、その一部をナデ消すことにより幅狭の無文帯を設けている。内面には外面と同様に楕円押型文を横位に施文するが、653のみ斜位の沈線文を施す。内面の横位の施文幅は、647・649・650が1.2cm～1.5cmである。これは原体1単位幅の施文であると考えられる。648の施文幅はやや長く2.6cmで、2単位幅の施文である。651は3単位幅の施文を行っているが、一部文様をナデ消している。652は内面の施文が、胴部上半に及んでいる。

647・649・650の胎土には繊維痕が確認でき、653の胎土には金雲母を含む。647・650は外面に、649は内面に煤状の付着物が確認できる。647・649～653の内面には、指おさえ痕が確認できる。649・653は外面の楕円押型文を施した後、口唇部に非常に丁寧なナデを行っている。

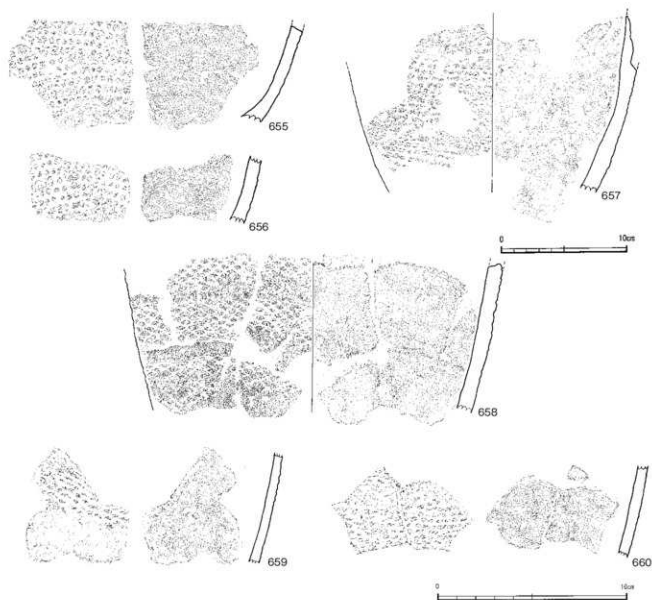
654は口縁部が外反する器形である。口縁部外面に横



第 308 图 X 类土器出土分布图



第309図 XI類土器(1)



第310図 XI類土器(2)

位の楕円押し型文を施している。内面には横状文を施した後、横位の楕円押し型文を施している。それより下位は丁寧なナデを行っている。胎土に角閃石を含み、色調は灰黄褐色である。

655～660は胴部である。

655～657は器面全体に大粒の楕円押し型文を横位に施す。内面はナデを行っている。657は楕円押し型文を施した後一部文様をナデ消した箇所がある。655は底部に近い部位である。底面境付近は、施文せずに丁寧なナデを行っている。658～660は器壁が薄く、小粒の楕円押し型文を帯状に横位に施す一群である。特に659・660は器壁厚が0.4cm～0.5cmと非常に薄く、胎土に繊維痕が確認できる。659は文様、調整、胎土等から649と同一個体

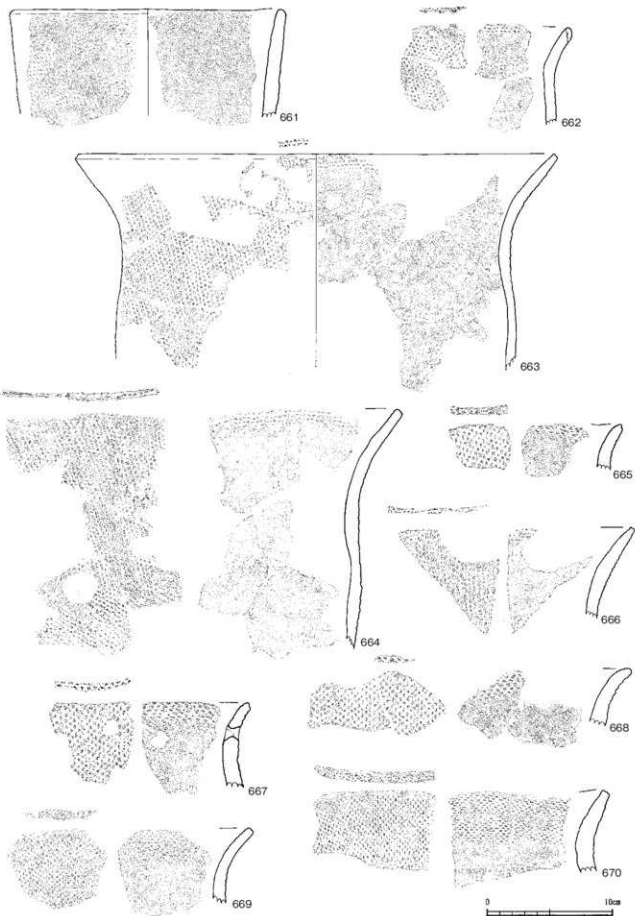
の可能性が高いと考えられる。

661～717は外面に楕円押し型文を縦位もしくはやや斜位に施す一群である。口縁部形態や内面調整・内面施文等により細分した。

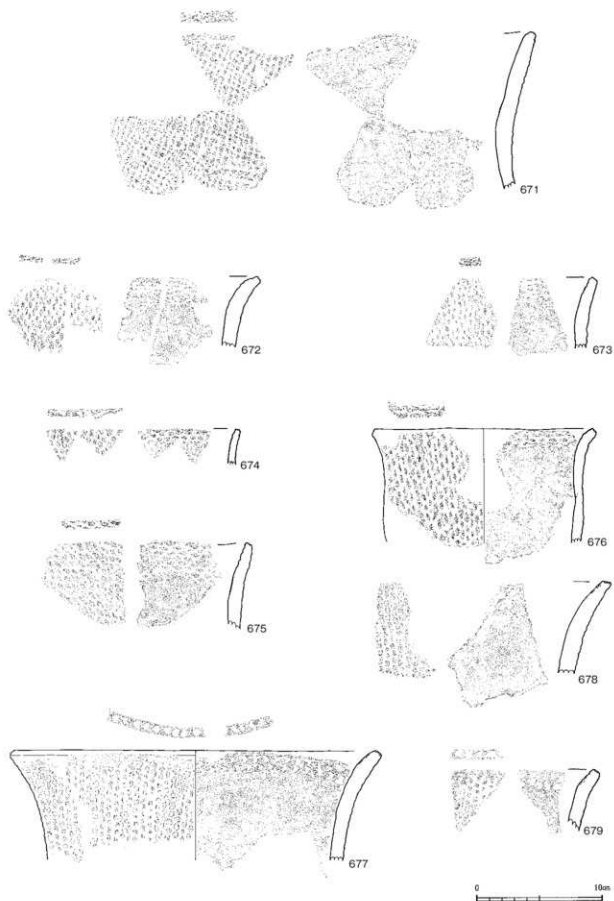
661～687は口縁部で、直口するものと外反するものがある。

661は口縁部が直口する器形で、口唇部を舌状に成形する。外面は小粒の楕円押し型文を斜位に施す。口縁部付近は一部横位に施す箇所もある。施文は器面全面に及ばず、部分的で規則性はない。内面はナデを行い、胎土に小礫や白色粒子を非常に多く含む。

662～676は口縁部が外反する。内面の器面調整は丁寧なナデ、内面の施文は横位の楕円押し型文である。口唇



第311图 XI类土器(3)



第312図 XI類土器(4)

部にも楕円押型文を施す。662～670は小粒、671～676はやや大粒の楕円押型文である。663・664の胴部内面には、成形時の指おさえ痕が確認できる。667は内面に焼成後穿孔の未貫通の孔があり、その上方には、外面から穿孔したと考えられる補修孔が1か所確認できる。これは外面から穿孔をやり直したものと考えられる。

内面の横位の施文幅は多くが原体1単位幅の施文と考えられるが、670は2単位幅の施文である。671・675・676は、緩やかな波状口縁を呈する。671の口縁部内面の施文幅は、非常に狭い。外面は楕円押型文を斜位に施した後、口唇部直下に沈線が一部確認できる。内面には成形時の指おさえ痕が多く確認できる。胎土に角閃石を含み、色調は灰黄褐色である。676は小型の器形である。内面には内傾接合と考えられる接合痕が確認でき、成形時の指おさえ痕も多く見られる。また、煤状の付着物も確認できる。

677～679は口縁部が外反し、内面調整は丁寧なナデである。口唇部と内面には半截竹管による逆「C」字状の刺突を施す。内面の刺突は横位に2段である。逆「C」字状を呈することから竹管の内皮側を左側にし、器面に對して直交するように刺突を施している。外面の楕円押型文は、やや大粒である。

680～684は口縁部が外反し、口縁部内面はナデを、胴部内面はケズリを行う。また、内面には横位もしくは斜位の楕円押型文を施す。楕円押型文はやや大粒である。さらに、口唇部を平坦に成形し、楕円押型文を施す。680の内面には、楕円押型文を横位と斜位に施す。680・681・683・684は、胎土に小礫や金雲母を多く含む。680・681は文様、調整、胎土等が類似することから同一個体の可能性が高いと考えられる。682は器壁が薄く、0.6cmである。外面には楕円押型文を施し、米粒状の粘土を横位に貼り付けた箇所が確認できる。683は口唇部から口縁部内面にかけて、煤状の付着物が確認できる。684は緩やかな波状口縁を呈すると考えられる。内面は楕円押型文を斜位に施す。

685～687は口縁部が外反し、口縁部内面はナデを、胴部内面はケズリを行う。また、内面に小粒な楕円押型文を横位に施す。さらに、口縁部内面に明瞭な稜をもつ。口唇部にも楕円押型文を施す。胎土に小礫や白色粒子を多く含む。685は緩やかな波状口縁を呈する。外面には、1.5cm～2.0cm幅で帯状に文様をナデ消した箇所がある。

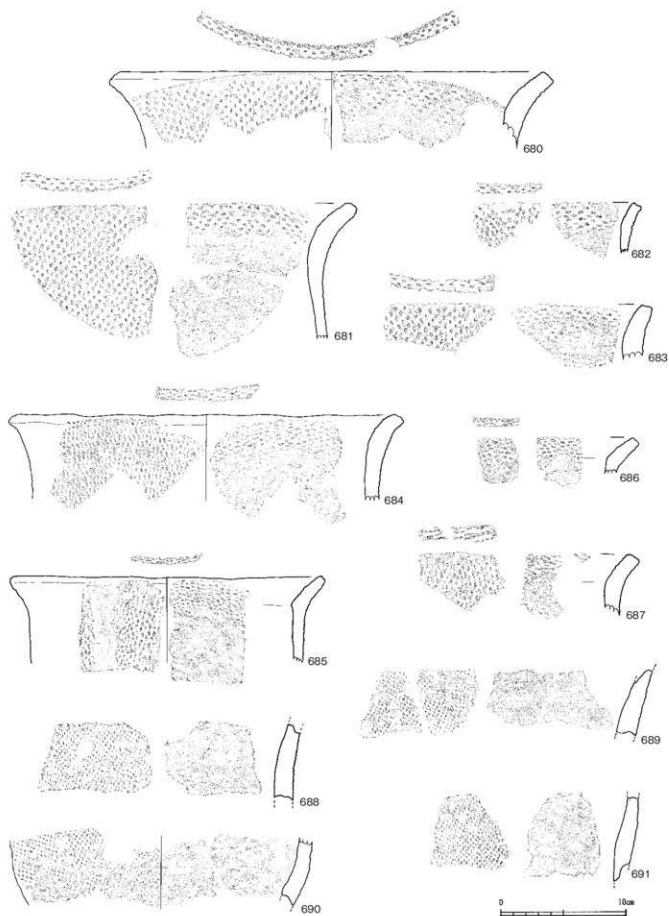
688～707は胴部で、外面に楕円押型文を縦位もしくはやや斜位に施す。

688～697は内面に丁寧なナデを行う。688～695は小粒の楕円押型文、696・697はやや大粒の楕円押型文である。692・694は胎土に金雲母を多く含む。688・689・691は接合痕が確認でき、689は擬口縁状を呈す。これらは

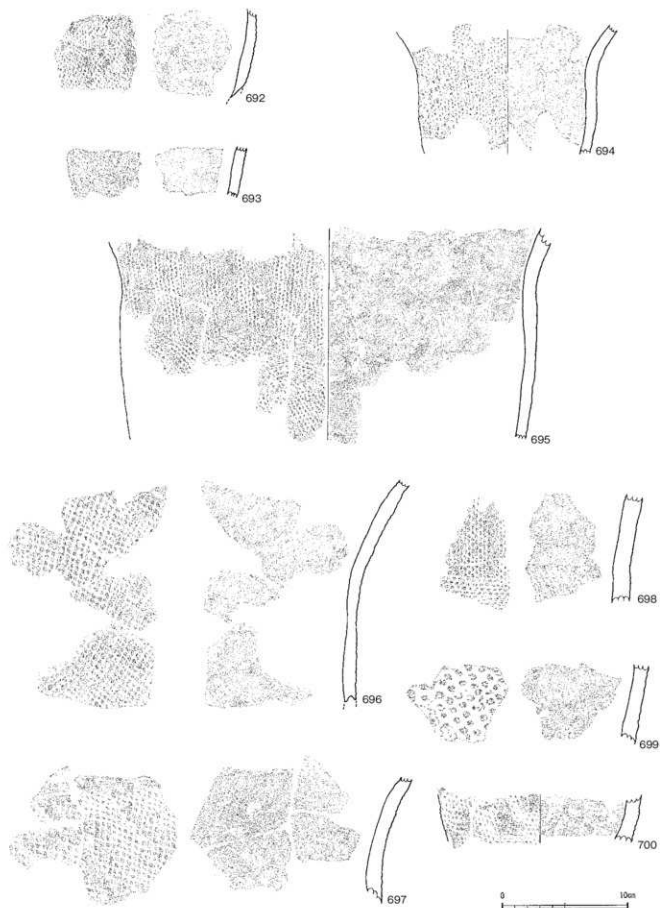
文様、調整、胎土等が類似することから同一個体の可能性が高いと考えられる。691は外面の一部が剥落したような幅広い凹部に、内面に楕円押型文を施している。690・692は底部付近で、内面に指おさえ痕が確認できる。694は小型の器形で、内面に丁寧なナデを行っている。695はやや大型の器形である。外面は頸部付近を境に上半は縦位の、下半は斜位の楕円押型文を施す。縦位から斜位へ移行する部分の一部に施文を行わない箇所がある。内面は胴部下半に指おさえ痕が多く確認できる。696・697は内面に横位の施文が確認できることから、口縁部付近と考えられる。外面は斜位の楕円押型文を施した後、上位に棒状工具による沈線を施している。内面に成形時の指おさえ痕が多く確認できる。胎土に角閃石を含み、色調は灰黄褐色である。口縁部片である671と胴部の696・697は、文様、調整、胎土等が類似することから同一個体の可能性が高いと考えられる。

698～707は内面にケズリを行う。698・700は小粒の楕円押型文、699・701・702は大粒の楕円押型文、703～707は長粒の楕円押型文である。698・700は楕円押型文を横位に施した後、縦位、斜位に施している。また、一部帯状に文様をナデ消している。内面は横位のケズリを行っている。701・702は胴部下半である。外面は楕円押型文を密接に施し、内面は縦位や斜位のケズリを行っている。胎土に白色粒子を多く含む。703は器壁を薄くするために、ヘラ状の工具により内面に縦位や斜位のケズリを行っている。胎土に金雲母を多く含む。707は底部付近と考えられる。外面は底面境までは施文をせず、底面境付近は丁寧なナデを行っている。内面は横位のケズリを行っている。胎土に白色粒子、金雲母を含む。705は外面を底面境付近まで楕円押型文を縦位に施した後、横位に施している。内面は横位のケズリを行っている。

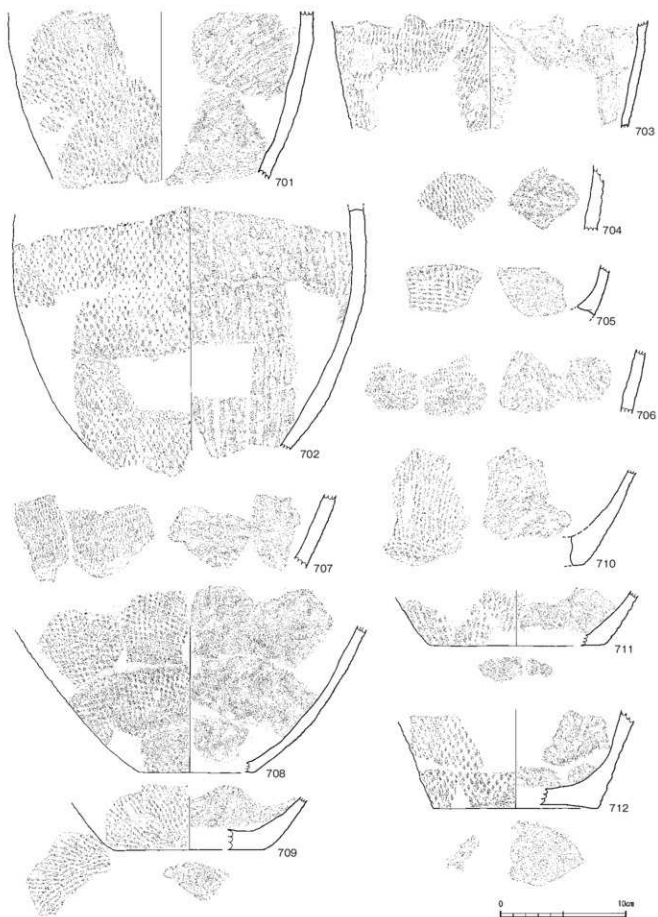
708～717は底部で、すべて平底であると考えられる。外面に楕円押型文を縦位もしくは斜位に施す。底面境付近のみ横位に施すものもある。708の内面調整はナデ、709～717の内面調整はケズリを行っている。底部円盤に粘土紐を巻き付けるように貼り付けた後、胴部を輪組み成形していると考えられる。ただし、712・713・716は、やや上げ底気味になるように粘土紐を高台状に巻き付けている。底部と胴部の接合に際しては、内面で胴部の粘土を底部側に伸ばし付けるようにして接合している。708は底部に向けて胴部下半が急にすぼまる器形である。外面はやや大粒の楕円押型文を斜位に密接に施している。内面は成形時の指おさえ痕が確認できる。胎土に小礫、角閃石を含む。色調は灰黄褐色である。709・710は外面に小粒の楕円押型文を斜位に密接に施すが、底面境付近のみ横位に施す。底部外面は丁寧なナデを行っている。胎土に小礫、金雲母、白色粒子を含む。



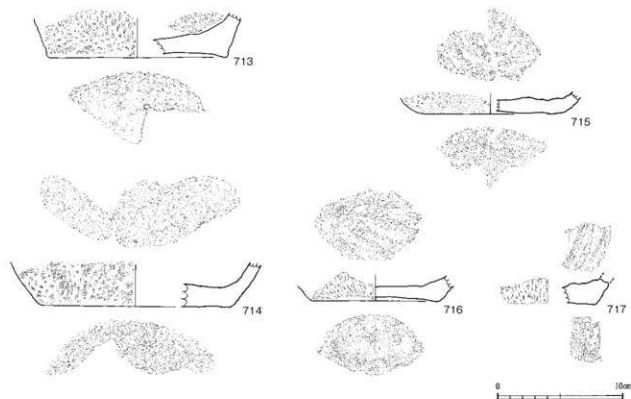
第313图 XI类土器(5)



第314图 XI类土器(6)



第315图 XI类土器(7)



第316図 X類土器(8)

711～715はやや大粒の楕円押し型文を斜位に施している。712・713は底面境付近のみ一部横位に施文している。713は底部外面の外周部分の一部にまで施文が及んでいる。711～714は底部外面にナデを行っているが、715はケズリを行った後、軽くナデを行っているため工具痕が明瞭である。716・717は長粒の楕円押し型文を施している。胎土に小礫、白色粒子を多く含む。716は底部内面を斜位に、717は同心円状にケズリを行ったと考えられる。716は上げ底気味の底部外面に非常に丁寧なナデを行っている。

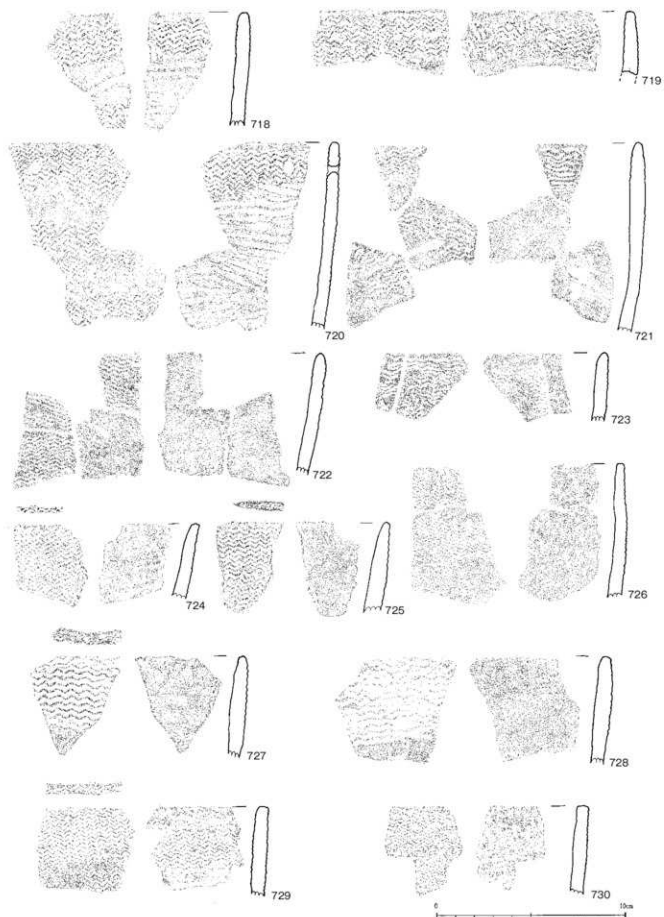
718～736は外面に山形押し型文を横位に帯状に施す一群である。これらは器壁が薄いことから2分の1の縮尺で掲載している。

718～730は直口する口縁部で、内面調整はナデを行う。718～723・729は、内面にも山形押し型文を横位に施す。器壁はいずれも薄く、0.4cm～0.6cmである。色調は褐色である。口唇部を718～728は舌状に成形し、729・730は平坦面を作り出している。718・720～722は、内面調整を行った工具痕が確認できる。720は内面の施文後にヘラ状工具による非常に丁寧なナデを行っているが、721・722は内面の施文や工具痕も一部ナデ消している。720は焼成後、内外面より穿孔した補修孔が確認できる。725・727・729は、口唇部にも山形押し型文を施している。

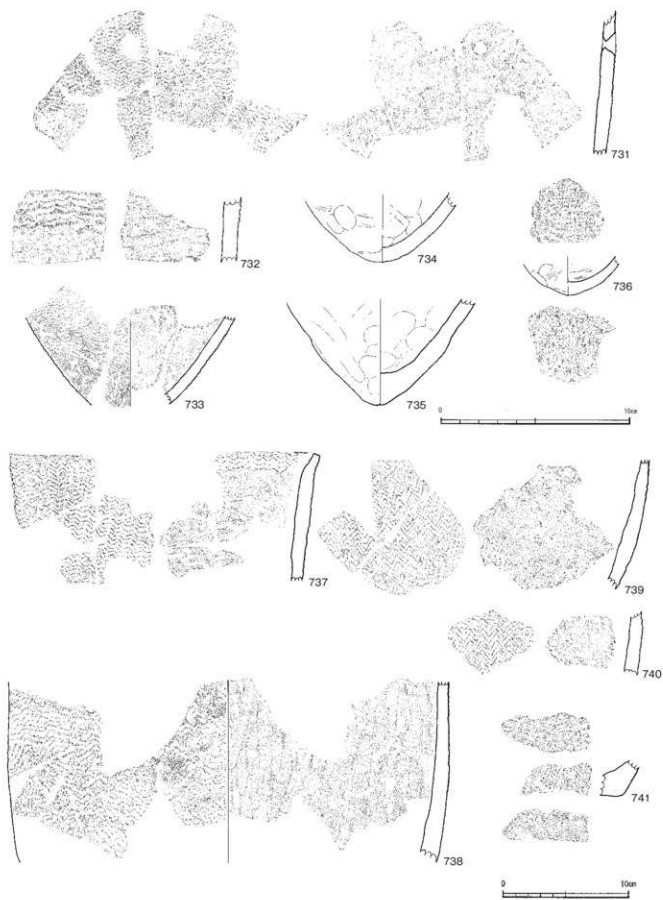
724・725は内面に非常に丁寧なナデを行っている。726は外面の山形押し型文が1段目と3段目は非常に浅く施されているが、2段目は明瞭に施文されている。内面には指おさえ痕が多く確認できる。胎土に白色粒子を多く含む。繊維痕が確認できる。727・728は内面に繊維状の擦痕や指おさえ痕が確認できる。729は外面の無文帯は丁寧なナデを行っている。口唇部内面も一部文様をナデ消している。730は内面に指おさえ痕が確認できる。

731・732は胴部で、内面はナデを行っている。731は外面に横位の山形押し型文が帯状に施されるが、底部に向かう下位の一部は斜位に施す箇所がある。また、繊維状の擦痕や指おさえ痕も確認できる。焼成後内外面より穿孔した補修孔が確認できる。

733～736は底部である。横位の帯状の山形押し型文は733しか確認できなかった。734～736は無文である。他の口縁部と成形方法、調整、胎土等が類似していることからここに加えた。ただし、無文土器の一部や器壁が非常に薄く、小粒の楕円押し型文を横位に帯状に施す一群の底部の可能性もある。733は底面付近が残存していないが、尖底の底部と考えられる。横位の帯状の山形押し型文は底面付近まで施しているが、先端部は無文で丁寧にナデを行っている。内面もナデを行っている。尖底部分の器壁は735は肥厚しているが、734・736は薄い。こ



第317图 XI类土器(9)



第318図 XI類土器(10)

れは底部の作り出しに際して、735は粘土塊から、734・736は粘土板の状態から成形した差異と考えられる。734・735は内外面に指おさえ痕や胎土に繊維痕が確認できる。736は内外面ともに非常に丁寧なナダを行っている。

737~741は外面に山形押型文を横位に密接に施す一群である。

737は口縁部である。口縁部がやや外傾する器形で、口唇部を平坦に成形している。内外面に横位の山形押型文を明瞭に施している。内面の横位の施文幅は1.4cmである。原体1単位幅の施文であると考えられる。内面はナダを行っている。

738~740は胴部である。内面に縦位、斜位のケズリを行っている。胎土に小礫、白色粒子を多く含む。738は胴部下半に山形押型文が斜位に施されている。内面の縦位の工具痕は、幅広く明瞭である。胎土に金雲母を含む。739・740は横位の山形押型文を明瞭に施している。文様、調整、胎土等が類似することから同一個体の可能性が高いと考えられる。

741は底部である。山形押型文を底面境付近まで横位に施す。底部外面は指おさえ痕が確認でき、丁寧にナダを行っている。内面はケズリを行っている。

742~782は外面に山形押型文を縦位もしくはやや斜位に施す一群である。

742~752は口縁部である。いずれも内面に山形押型文を横位に施している。743・746~752は、口唇部にも山形押型文を施している。

742~745は内面にナダを行う一群である。742は口縁部が外反する器形である。器壁はやや薄く、口唇部は舌状に成形されている。内外面にはやや間延びた山形押型文を浅く施す。743は波状口縁を呈すると考えられる。内面の押型文は波状口縁に沿うように横位に施されている。744は口縁部から胴部下半まで復元することができ、口縁部が外反し、胴部が若干膨らみ底部に向けてすままる器形である。口唇部は平坦に成形している。外面は山形押型文を口縁部から胴部上半を縦位に、膨らみのある胴部中央付近は横位に、胴部下半は斜位に施している。内面は横位の山形押型文を施している。施文幅は1.4cmで、原体1単位幅の施文であると考えられる。内面は丁寧にナダを行っている。745は口縁部がやや外傾する小型の器形と考えられる。内面はミガキ状の非常に丁寧なナダを行う。外面は間延びた山形押型文を縦位に密接に施す。内面は指おさえ痕が確認できる。

746~752は内面にケズリを行う一群である。746~748はやや外反する口縁部である。胎土に金雲母を多く含む。749はやや外傾する口縁部である。750~752は口縁部が外反する器形で、内面に明瞭な稜をもつ。750は口縁部内面に横位の山形押型文を施し、丁寧にナダを行っ

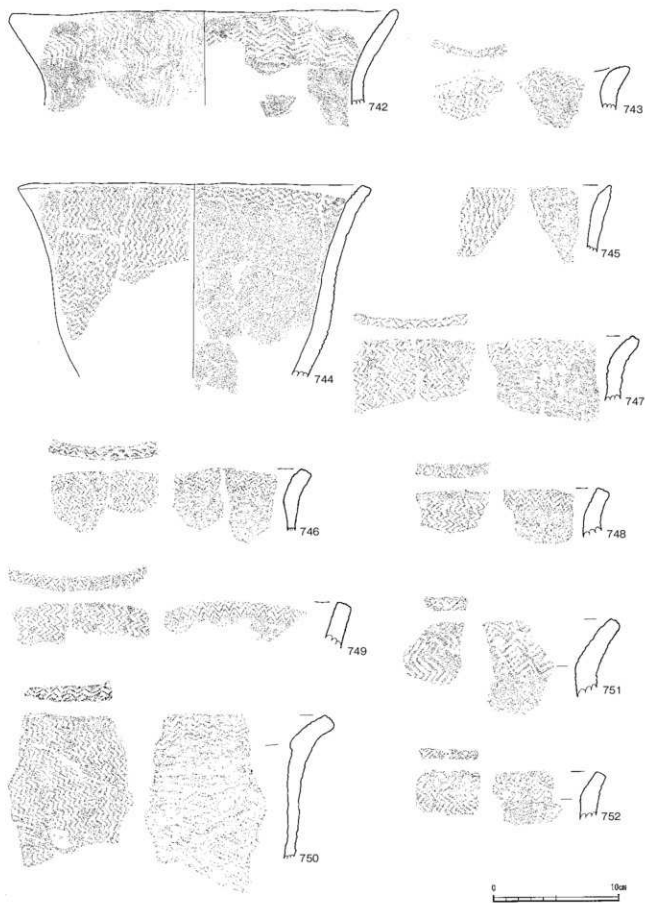
ているが、稜より下位は横位、斜位のケズリを行っている。胎土に小礫、金雲母、白色粒子を多く含む。

753~771は胴部で、外面に山形押型文を縦位もしくは斜位に施す。

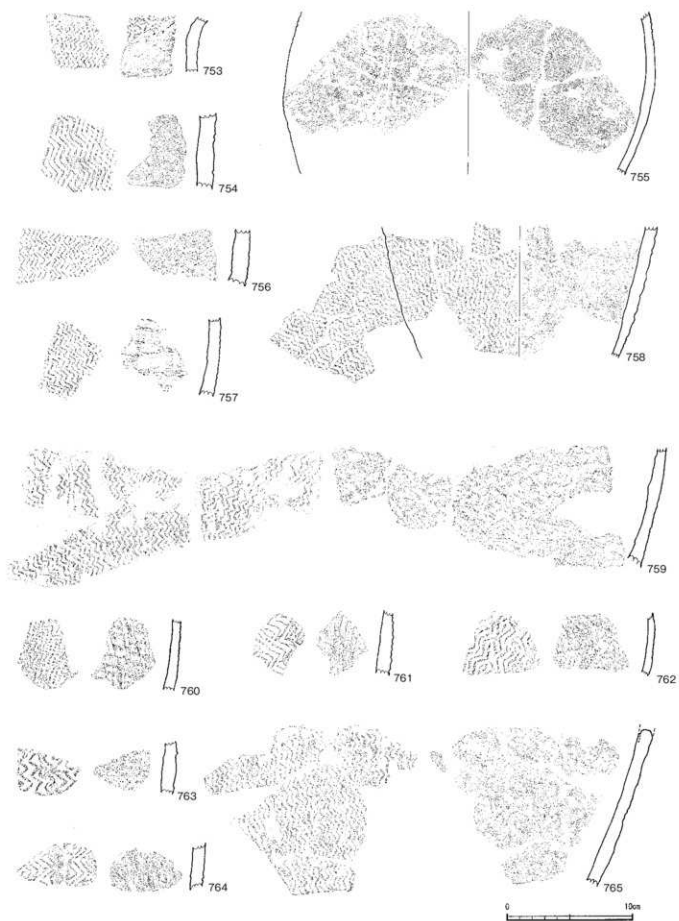
753~755は内面にナダを行う一群である。753は内面に横位の山形押型文を施しており、外面も上位で横位のナダを行った後、縦位の山形押型文を施しているところから、口唇部のみが剥落した口縁部付近と考えられる。内面は横位の施文が施されない箇所は丁寧にナダを行っている。754はやや間延びた山形押型文が非常に明瞭に施されている。内面はミガキ状の非常に丁寧なナダを行っている。胎土に金雲母、白色粒子を多く含む。755は胴部が膨らむ器形である。外面は胴部上半に斜位のやや間延びた山形押型文が非常に浅く部分的に施される。胴部下半は無文でナダを行っている。内面は湾曲を作るための内傾接合の痕跡や指おさえ痕が確認できる。

756~771は内面にケズリを行う一群である。756は外面に山形押型文を縦位に明瞭に施す。757~760は外面に山形押型文を縦位に浅く施す。757は内面に横位のケズリを行い、工具痕が明瞭に確認できる。758は底部に向けて胴部下半が直線的にすままる器形である。外面は斜位の山形押型文を密接に施す。器面は指おさえ痕が多く確認できる。内面は斜位のケズリを行い、繊維状の擦痕が確認できる。759は大型の器形と考えられる。外面は縦位、斜位の山形押型文を施すが、部分的に施されない箇所には丁寧にナダを行っている。758同様に外面は成形時の凹凸が確認できる。内面は横位、斜位のケズリを行っている。胎土に小礫、金雲母、白色粒子を多く含む。760は内面に縦位、斜位のケズリを行う。胎土に金雲母を多く含む。762は外面にやや間延びた山形押型文を斜位に施す。器壁が0.5cmと薄い。761は外面にやや長大な山形押型文を縦位に密接に施す。内面は縦位のケズリを行う。763・764は外面にやや長大な山形押型文を間隔空けて縦位に施す。764の外面は無文部はナダを行っている。765~771は底部付近である。外面に成形時の指おさえ痕が確認できる。765は外面にやや間延びた縦位の山形押型文を施す。胎土に小礫、白色粒子、金雲母を多く含む。内面は丁寧にナダを行っている。766・768は縦位、767・769~771は斜位のケズリを行っている。767・770は外面に山形押型文を一部施さない部分がある。

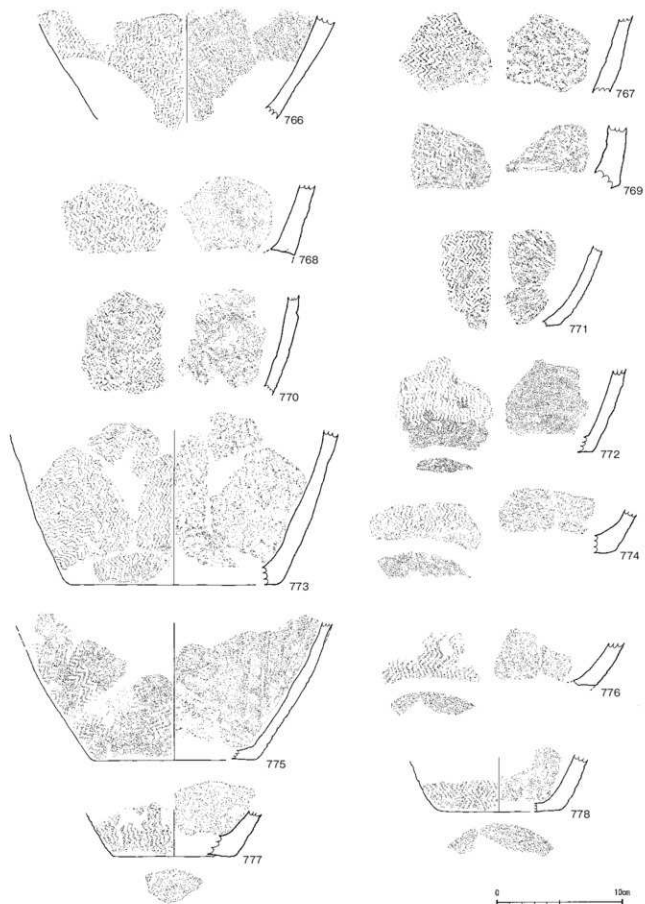
772~782は底部である。外面に山形押型文を縦位もしくは斜位に施す。772のみ内面にナダを行っている。他はケズリを行っている。772は外面に山形押型文を縦位に密接に施す。また、横方向の指おさえ痕が多数確認できる。さらに、底面境付近は、無文でミガキ状の非常に丁寧にナダを行っている。底面もわずかに残存しているが、底部外面にも同様のナダが行われている。773も



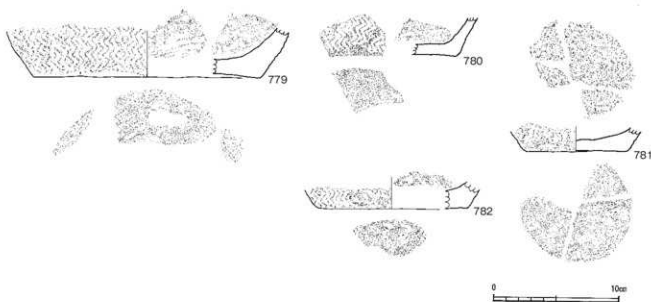
第 319 图 XI 类土器 (11)



第320图 XI類土器(12)



第 321 图 X 类土器 (13)



第 322 図 XI 類土器 (14)

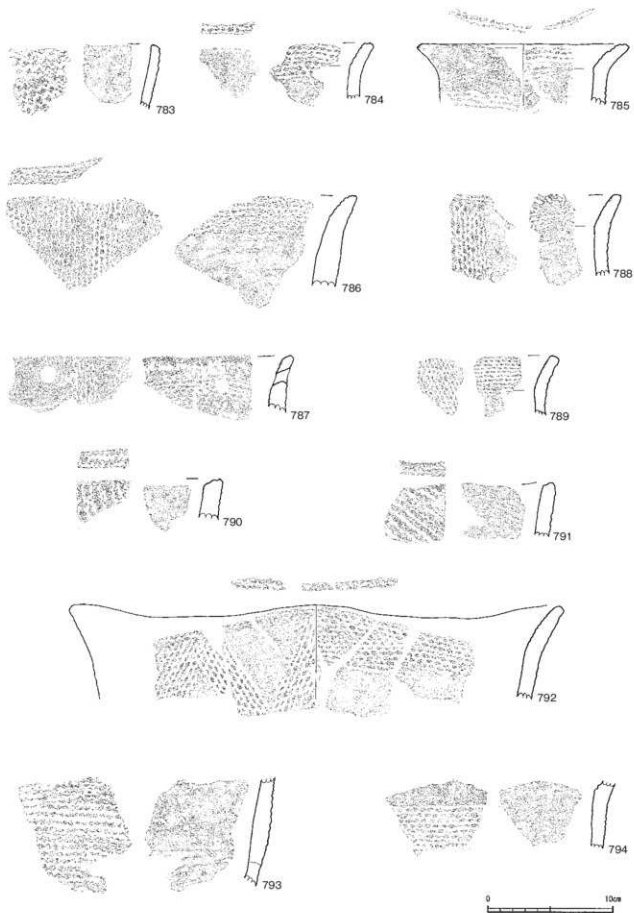
外面に横方向の指おさえ痕が多数確認できる。外面は縦位の山形押型文を底面境付近まで密接に施す。内面は幅広いヘラ状工具による斜位のケズリを行っている。胎土に小礫、金雲母を多く含む。774の底面境付近は無文で、底部外面まで丁寧なナデを行っている。胴部内面は斜位のケズリを行っている。775は山形押型文を、間隔を空けて縦位、斜位に施す。無文部と底部外面はナデを行っている。底部の器壁は薄い。胎土に小礫、金雲母を多く含む。776・777は微細な山形押型文を縦位に施す。775～777の底部と胴部は底部円盤の外周部に粘土紐を巻き付け、胴部を外側に傾斜するように成形し、その後、胴部から底部内面に粘土を伸ばして接合している。底部外面はナデを行っている。胎土に金雲母を含む。778は山形押型文を縦位に底面境付近まで施すが、施文具の向きを交互に変え、菱形のモチーフとなっている。一部無文の箇所はナデを行っている。内面や底部外面はケズリを行っている。779はやや大型の底部である。外面は明瞭な山形押型文を縦位に密接に施す。内面と底部外面の外周部分はケズリを行っているが、底部外面の内側は丁寧なナデを行っている。底部円盤外周に粘土紐を高台状に巻き付け、底部円盤外面もヘラ状工具により器壁を一部薄く成形することによりやや上げ底気味の底部となっている。780は器壁が薄く、内面には横方向のケズリを行っている。外面は山形押型文を底面境まで縦位に密接に施す。底部外面は丁寧なナデを行う。胎土に小礫、金雲母、白色粒子を多く含む。781も底部外面の内側に同様の成形時の工具痕が確認できる。ただし、底部外面すべて丁寧なナデを行っている。

783～798は連珠押型文を外面に施す一群である。連珠とは、それぞれの粒が独立している楕円押型文と異なり楕円の粒が連なるような文様を指す。

783～792は口縁部である。783～785は外面の連珠押型文を横位に施すものである。783は口縁部がやや外傾しながら直口する器形で器壁が薄い。口唇部、内面にミガキ状の非常に丁寧なナデを行っている。外面の連珠押型文は、大粒で密接に施される。胎土に金雲母を含み、色調は褐色である。784・785は内面に明瞭な稜をもち、口縁部が外反する器形である。いずれも口唇部、口縁部内面に横位の連珠押型文を施し、内面の稜より下位はケズリを行っている。785の口縁部外面は無文で丁寧なナデを行うが、頸部付近から胴部にかけて横位の連珠押型文を密接に施す。なお、784の外面は無文であるが、785と同様の施文と考えられるために本類に含めた。

786～788は口縁部外面に連珠押型文を縦位に、内面に横位の連珠押型文を施す。786の口唇部は舌状を呈し、口縁部がやや外反する。器壁が2.0cmとかなり厚く、内面はナデを行っている。787・788は外面に縦位の連珠押型文を施し、部分的にナデ消している。787には焼成後内外面から穿孔したと考えられる補修孔が、1か所確認できる。788は口縁部が外反する器形で内面に明瞭な稜をもち、ナデを行っている。やや長粒の連珠押型文を外面は縦位に、内面は横位に施す。内面の横位の連珠押型文を施した後、口唇部内面には棒状工具による横位の刺突を1段施す。内面の稜より下位はナデを行っている。

789～791は外面に斜位の連珠押型文を施すものである。789は口縁部がやや外反する器形である。口唇部は



第323図 XI類土器 (15)

平坦に成形し、丁寧にナデを行っている。小粒の連珠押型文を外側は斜位に、内側は横位に施す。790・791は口縁部が直口する器形である。791は緩やかな波状口縁となる。いずれも口唇部が内傾する。また、口唇部に連珠押型文を施しているが、791は部分的に無文の箇所は丁寧にナデを行っている。内側は790・791ともケズリを行っている。

792は4単位の波状口縁を呈する比較的大型の深鉢と考えられる。外面は連珠押型文を帯状に方向を変えて斜位に施す。無文部はナデを行っている。口縁部内面に横位の連珠押型文を施す。内側はケズリを行った後丁寧にナデを行っている。胎土に長粒の角閃石を非常に多く含む。

793・794は胴部である。793は外面を横位の連珠押型文を密接に施す。内側は非常に丁寧にナデを行っている。胎土に金雲母、白色粒子を多く含む。794は内面上部に横位の連珠押型文を施していることから、口縁部付近と考えられる。外面は上位が無文で丁寧にナデを行っている。下位は横位の連珠押型文を密接に施す。内側はケズリを行っている。785と文様、調整、胎土等が類似することから同一個体の可能性が高いと考えられる。

795～798は底部で、外面に横位の連珠押型文が施される。795は小型の底部である。外面の底面境付近は無文で、斜位のケズリを行っている。内側もケズリを行っている。底部外面に木葉痕が確認できる。796は外面を底面境付近まで横位の連珠押型文を施す。底部外面、内側はナデを行っている。797は外面に横位の連珠押型文を密接に施すが、一部斜位の箇所がある。底面境付近は無文で、底部外面とともにミガキ状の非常に丁寧にナデを施す。内側は縦位の斜位のケズリを行った後、ナデを行っている。798は比較的大型の深鉢である。胴部中央から底部まであり、残存状況も良好である。外面は底面境まで施文が及ぶ。内側はナデが行われている。795～798は底面境付近の胴部が底面より僅かにやや内側から立ち上がっていることから、底部内盤の外周上に粘土紐をのせ、胴部を輪積み成形したと考えられる。

799～813は波状押型文を施す一群である。波状押型文とは山形押型文がやや変形し、波状を呈するものを指す。さらに、押型文の太さで細分した。

799～807は外面にための波状押型文を施す一群である。

799・800は口縁部である。799は口縁部がやや外反し、胴部下が底部へ向けてすまます器形を呈する。口唇部は平坦に成形し、丁寧にナデを行っている。外面はための波状押型文を口縁部から胴部上半にかけて縦位に、胴部下は横位に、さらにその下位には斜位に施す。口縁部内にも横位のための波状押型文を施す。それより下位は丁寧にナデを行っている。800は口縁部がやや外傾

する器形である。外面はための波状押型文を縦位に間隔を空けて施す。無文部は丁寧にナデを行う。口縁部内側には横位のための波状押型文を施し、それより下位はナデを行っている。なお、土器付着の炭化物を放射性炭素年代測定した結果、9,455～9,271calBPの結果が得られた。

801～804は胴部である。801は外面施文の一部に間隔の開いた箇所がある。内側は丁寧にナデを行う。802は底部付近と考えられる。外面はための波状押型文を上部は縦位に、下部は横位に施す。内側は丁寧にナデを行う。799・801・802は、文様構成や調整、胎土等から同一個体の可能性が高いと考えられる。804は底部付近と考えられる。外面はための波状押型文を縦位、斜位に施し、底面境付近は無文で丁寧にナデを行っている。内側はナデを行っている。

805～807は底部である。805は小型の土器である。外面はための波状押型文を底面境付近まで縦位に密接に施す。底部外面、内側はナデを行っている。807は底面が僅かに残存し、平底と考えられる。外面はための波状押型文を横位に施す。底面境付近は無文でミガキ状の非常に丁寧にナデを行っている。内面調整も同様である。胎土に小粒、金雲母、白色粒子を多く含む。

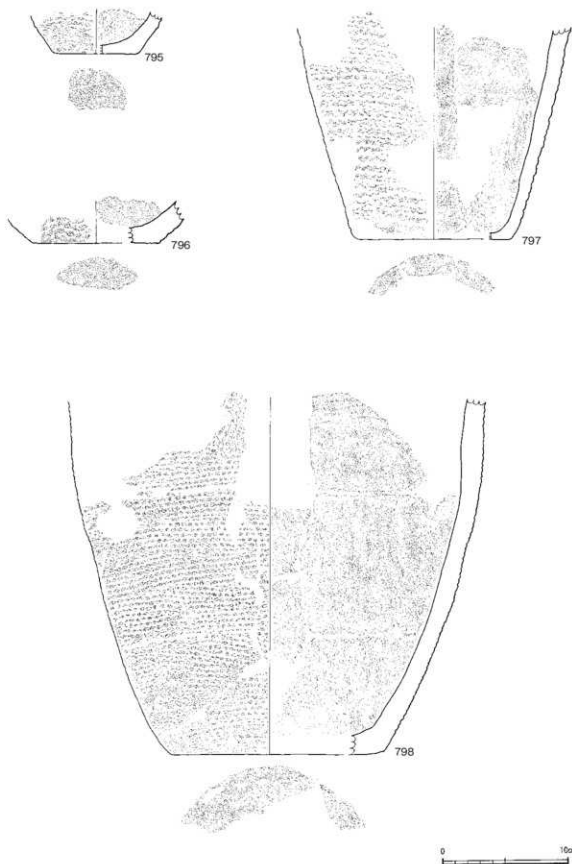
808～813は外面に細めの波状押型文を施す一群である。

808・809は口縁部である。いずれも口縁部がやや外反する器形である。808は内面に明瞭な稜をもつ。外面は口縁部を縦位の、頸部は横位の細めの波状押型文を施す。口唇部内面に短い横状文を施し、口縁部内側には横位の細めの波状押型文を施す。それより下位は横位のケズリを行う。809は外面に細めの波状押型文を口縁部上位は横位に、下位は斜位に施す。口唇部や口縁部外面の一部は丁寧にナデを行う。口縁部は横位の細めの波状押型文を施した後に、口唇部内面より横状文を施す。波状押型文より下位はケズリを行っている。

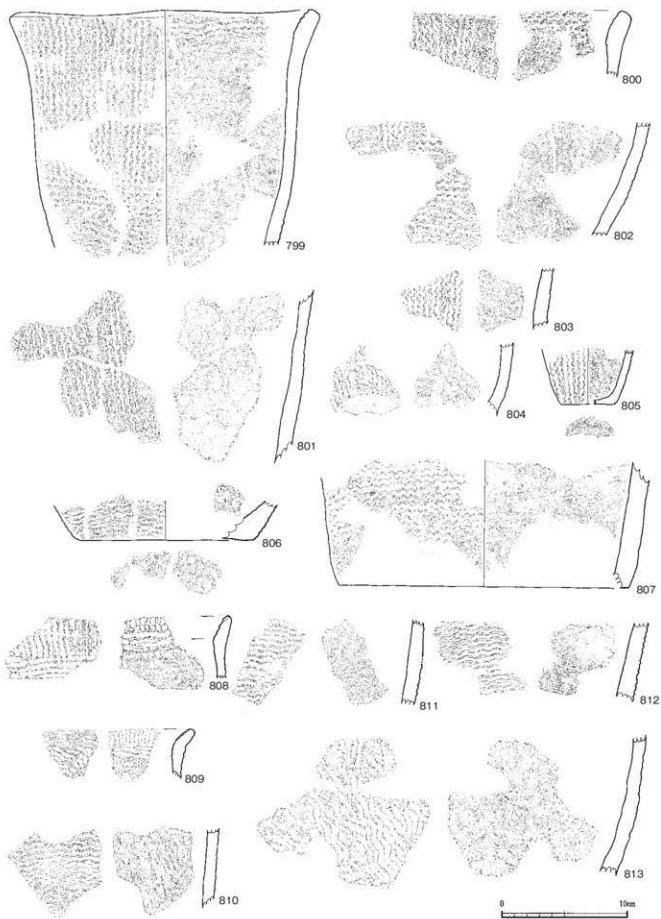
810～813は胴部である。810～812は外面に横位の細めの波状押型文を施す。内側は丁寧にナデを行う。813は外面に斜位の細めの波状押型文を施す。一部施文を行わない箇所があり、丁寧にナデを行う。内側は縦位、斜位のケズリを行う。

814～817はネガティブな押型文を施す一群である。814～816は菱形、817はキャタピラー状となる。814は口縁部に向けて直線的に開く器形と考えられる。外面は縦位もしくは斜位の施文を行う。内側はケズリを行った後、丁寧にナデを施す。816は外面の文様を一部ナデ消した箇所がある。817の外面は原体を縦位に施文したと考えられる。

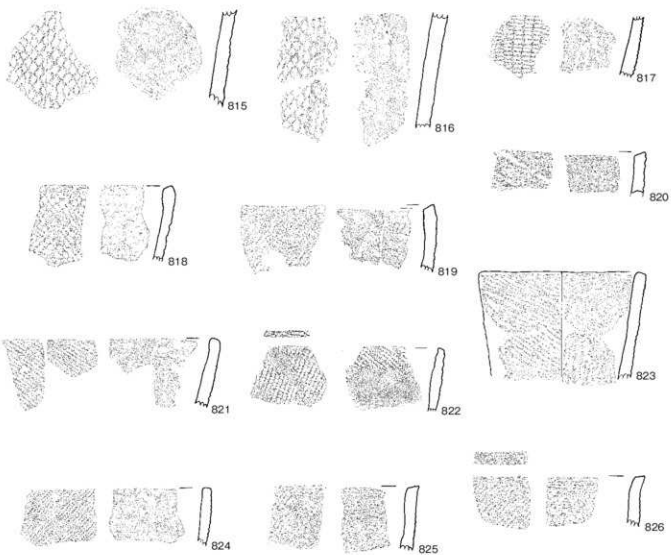
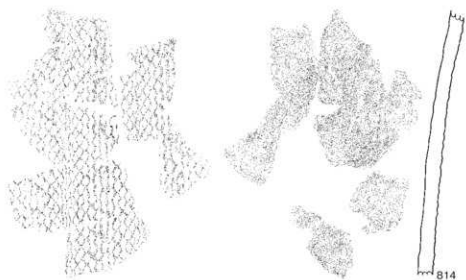
818～826は縄文を施す一群である。口縁部はやや内傾するか直口する器形である。いずれも内側はナデが行



第 324 図 XI 類土器 (16)

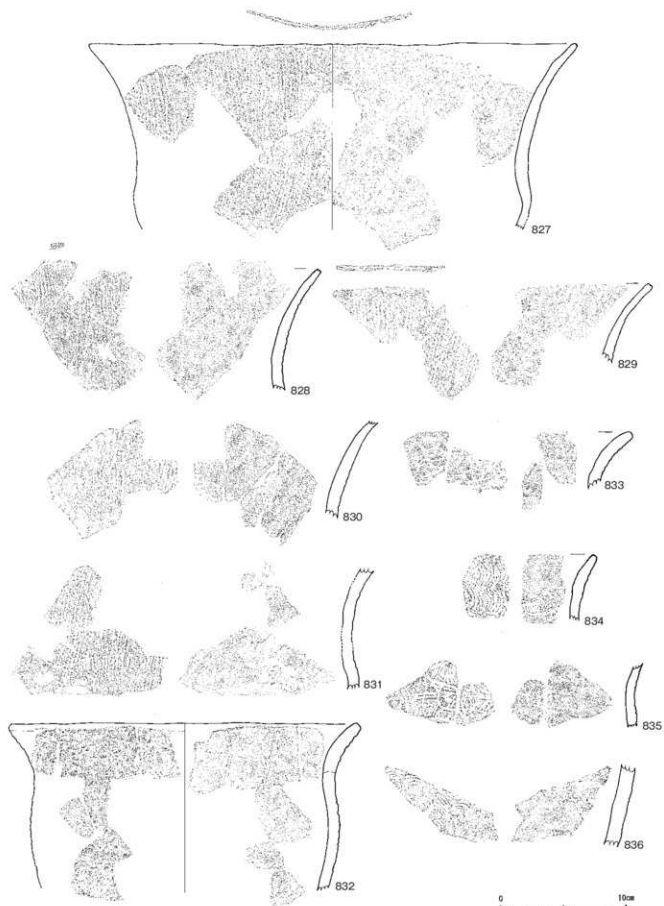


第325図 XI類土器(17)

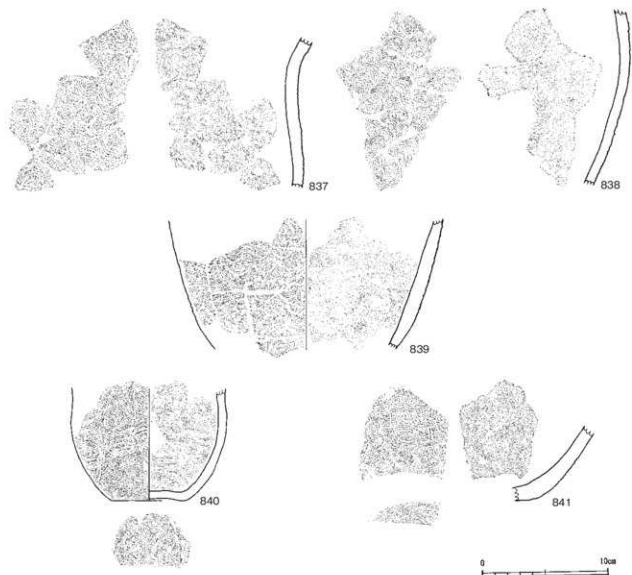


0 10cm

第 326 图 X 类土器 (18)



第327图 XI类土器(19)



第 328 図 XI類土器 (20)

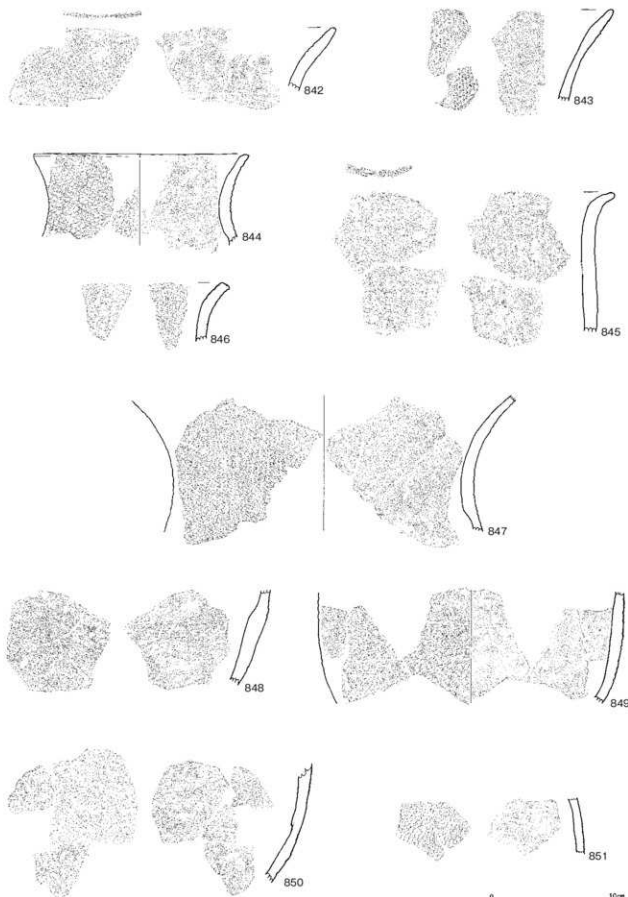
われるが、特に 818・819 はミガキ状の丁寧なナデを行う。818～820 は口唇部に内傾する平坦面をもつ。821・823 は口縁部が直口する器形で、口唇部を平坦に作り、内面までナデを行っている。文様、調整、胎土等から同一個体の可能性が高いと考えられる。825・826 の口唇部は平坦で、口唇部外端が外側へ張り出す。818・819・824・825・826 は単節斜行縄文 LR を、820 は単節斜行縄文 RL を、821・823 は無節斜行縄文 R を横位に施す。822 は外面に単節斜行縄文 LR を、内面には単節斜行縄文 RL を横位に施す。胎土に 818 は金雲母を、819・821・823 は小礫、金雲母、白色粒子を、820・825 は角閃石を多く含む。

827～831 は燃糸文を施す一群である。いずれも文様、調整、胎土等から同一個体の可能性が高いと考えられる。827～829 は口縁部、830・831 は口縁部に近い胴部である。

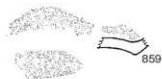
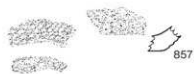
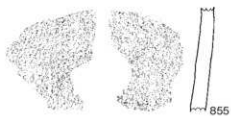
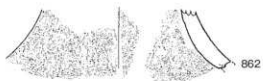
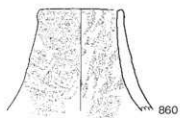
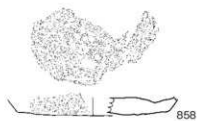
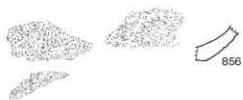
口縁部が大きく外反し、胴部中央で屈曲し、底部にむけてすぼまる器形である。器壁は全体的に薄く、0.5～0.7cm である。外面は無節斜行縄文 R の原体を軸に密接に巻き付けて、縦位に施文している。口唇部には無節斜行縄文 R の原体を押し込んでいる。口縁部外面上位は 0.5cm 程度の無文部があり、ナデを行っている。内面は指おさえ痕が多く確認でき、ナデを行っている。胎土に小礫、金雲母、白色粒子を含む。

832～841 は変形燃糸文を施す一群である。

832～834 は口縁部である。832 は口縁部が外反し、胴部中央で膨らみ、底部にむけてすぼまる器形である。外面に無節斜行縄文 R の原体を軸に巻き、連弧状の変形燃糸文を横位に施す。文様が乱れて施されている。口縁部外面の一部に「8」の字状を呈する箇所がある。胴部上



第 329 図 XI類土器 (21)



第 330 图 XI 类土器 (22)

半に文様を一部ナデ消した箇所がある。内面は丁寧にナデを行っている。834は口縁部がやや外反する器形である。口縁部外面に無節斜行縄文Lの原体を軸に巻き、密接した連弧状の変形摺糸文を縦位に施す。内面は上位に丁寧なナデを行い、下位はケズリを行っている。

835~839は胴部である。835は外面に無節斜行縄文Rの原体を軸に巻き、「8」の字状の変形摺糸文を縦位に施す。内部に数条のやや斜位の縦糸が確認できる。836は胴部下の一部分と考えられる。外面は無節斜行縄文Lの原体を軸に巻き、波状の変形摺糸文を縦位に施す。無文部は文様をナデ消したと考えられる。胎土に小礫、金雲母、白色粒子を多く含む。837は上位が外反し、下位が膨らみながらすぼまる器形である。外面は無節斜行縄文Rの原体を軸に巻き、連弧状の変形摺糸文を横位に密接に施す。弧状の内側には、数条の横糸が確認できる。内面はケズリを行った後、丁寧にナデを行っている。838・839は底部にむけてすぼまる部分と考えられる。838は837と原体や調整等が類似するが、弧状の向きが異なる。839は連弧状の変形摺糸文が施されるが、832と同じようにやや乱れて施文される。内面はケズリを行った後、丁寧にナデが行われる。

840・841は底部である。840は小型の土器である。球状の胴部でやや上げ底気味の底部である。外面は無節斜行縄文Lを軸に巻き、変形摺糸文を横位に施す。文様をナデ消し、斜位、横位の文様の一部分が確認できる。内外面ともに丁寧なナデを行っている。841は底部へむけてすぼまる器形である。外面は無節斜行縄文Rの原体を軸に巻き、連弧状の変形摺糸文を斜位に施す。内部に数条横糸が確認できる。底部外面は丁寧にナデを行っている。内面は縦位のケズリを行った後、ナデが行われる。

842~859は外面に短枝回転文を施す一群である。短枝とは、木の枝の先端近くにある長枝から短く伸びる木の枝を指す。短枝回転文は、短枝もしくは類似する施文原体を回転して施文を行う。

842~846は口縁部である。842は口縁部が大きく外反する器形と考えられる。短枝回転文を外面は横位、斜位に、内面は横位に施す。施文間隔は内外面ともにまだらである。内面は成形時の指おさえ痕が確認でき、ナデを行っている。胎土に小礫、褐色粒子を多く含む。843・844は口縁部が大きく外反する器形である。短枝回転文を843は外面に横位と一部は斜位に、内面は横位に、844は外面に横位に施す。さらに、口唇部にも施す。内面はナデを行う。845は口縁部がやや外反する器形である。短枝回転文を外面は横位、縦位、斜位に、口縁部内面は磨耗して判然としないが横位に施す。内面はケズリを行う。

847~855は胴部である。内面を847~851はナデを、852~855はケズリを行っている。847は口縁部付近と考

えられる。外面は短枝回転文を横位に施す。内面は指おさえ痕が確認でき、丁寧にナデを行う。胎土に金雲母を多く含む。848は短枝回転文を不規則に施す。内面は幅広いのヘラ工具による横位のナデを行っている。胎土に小礫、金雲母を含む。849・850はやや大粒の圧痕が残る短枝回転文を施す。一部無文の箇所は丁寧にナデを行っている。内面は指おさえ痕が確認でき、ケズリを行った後、ナデを行っている。850は内傾接合の痕跡が確認できる。文様、調整、胎土等から同一個体の可能性が高いと考えられる。851は外面に施文方向は判然としませんが、短枝回転文を密接に施す。内面は丁寧なナデを行う。852は外面に短枝回転文を縦位、斜位に施す。内面は斜位のケズリを行う。胎土に金雲母を含む。853は外面に短枝回転文を密接に施す。内面は斜位のケズリを行う。854は底部付近である。接合痕から底部円盤の外周上に粘土紐をのせ、胴部を輪積み成形したと考えられる。855は外面に短枝回転文を浅く施し、内面は斜位のケズリを行う。

856~859は底部である。856~858は内面にナデを行っている。859は底部外面にナデを行っている。856~858は底部と胴部の接合部分から底部円盤の外周上に粘土紐をのせ、胴部をやや外側に開くように輪積み成形したと考えられる。859は底部円盤の外周に粘土紐が高台状になるように巻き付け、上げ底になるように成形している。外面は底面境付近まで短枝回転文を密接に施す。

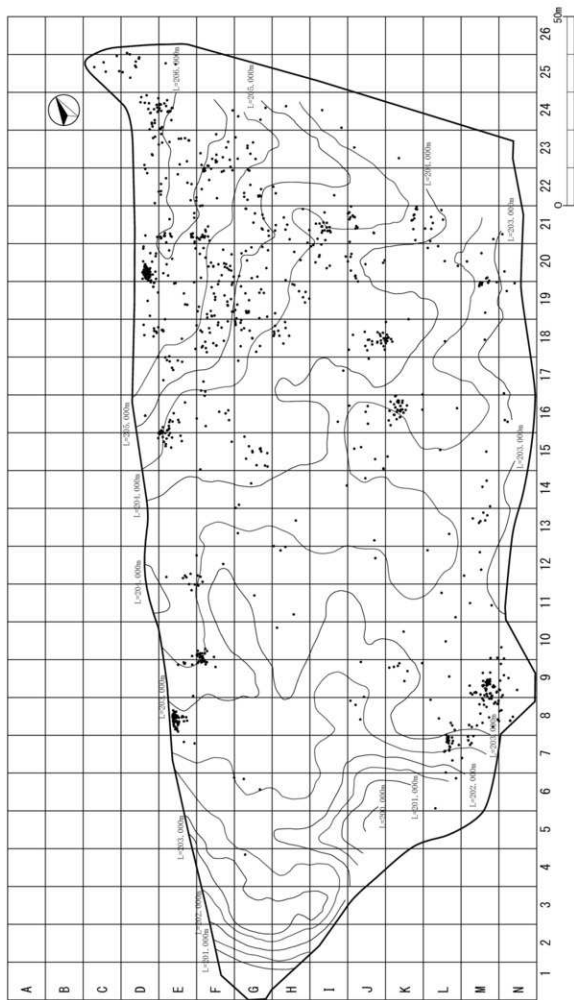
860~862は壺形土器である。860は口縁部である。外面は縦位の山形押型文の方向を違えて施文することにより、菱形のモチヤを描いている。内面にはヘラ状工具による縦位の調整痕が多く確認できる。861・862は頸部である。861は文様、調整、胎土等で860と同様であることから、同一個体の可能性が高いと考えられる。862は外面に短枝回転文を施す。内面は肩部の湾曲に沿うようにヘラ状工具による縦位の調整痕が確認できる。胎土に小礫、金雲母、白色粒子を多く含む。

なお、本類土器に付着した炭化物で年代測定を行った。その結果、647に付着した炭化物は8,300 - 8,234calBC、720に付着した炭化物は8,217 - 7,936calBC、800に付着した炭化物は9,455 - 9,271calBPの値が得られた。

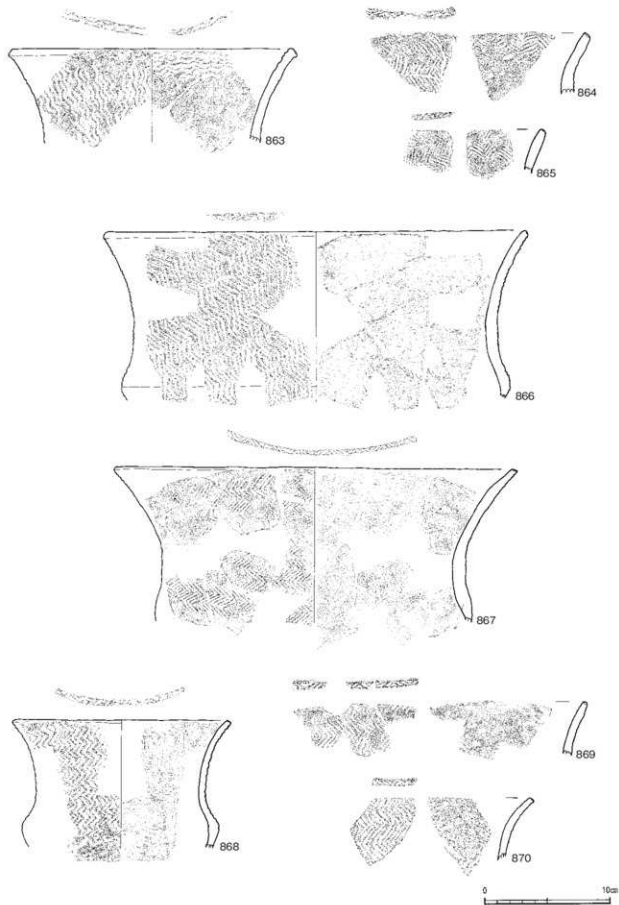
(12) Ⅱ類土器 (第331~339図 863~943)

Ⅱ類土器は口縁部が大きく外反し、胴部で屈曲し、底部にむけてすぼまる器形を呈する。文様は外面及び口縁部内面に、押型文、摺糸文、細条線文、ミミズばれ文、沈線文等を施す。器面は内外面ともにナデを行う一群である。胎土に白色粒子、金雲母を含むものが多い。

863~890は外面に山形押型文を縦位もしくは斜位に施す一群であるが、波状押型文も含む。さらに、文様構成、調整等により細分した。



第 331 图 L 型土器出土分布图



第332図 XI類土器(1)

863～875は口縁部である。

863～865は山形押型文を外側だけでなく、内面には横位に、さらに、口唇部にも施す一群である。863は口縁部外面上位にナデを行い無文部とし、その下から山形押型文を施す。内面は横位の山形押型文を施し、その下位には丁寧なナデを行う。胎土に角閃石を多く含む。864は外面に山形押型文をやや斜位に施す。内面には成形時の指おさえ痕が確認できる。内面は863と同様に山形押型文より下位はナデを行う。胎土に小礫を多く含む。865は外面、内面、口唇部ともに山形押型文をやや浅く施す。口縁部内面上位にナデを行い無文部とし、その下位に山形押型文を横位に施す。

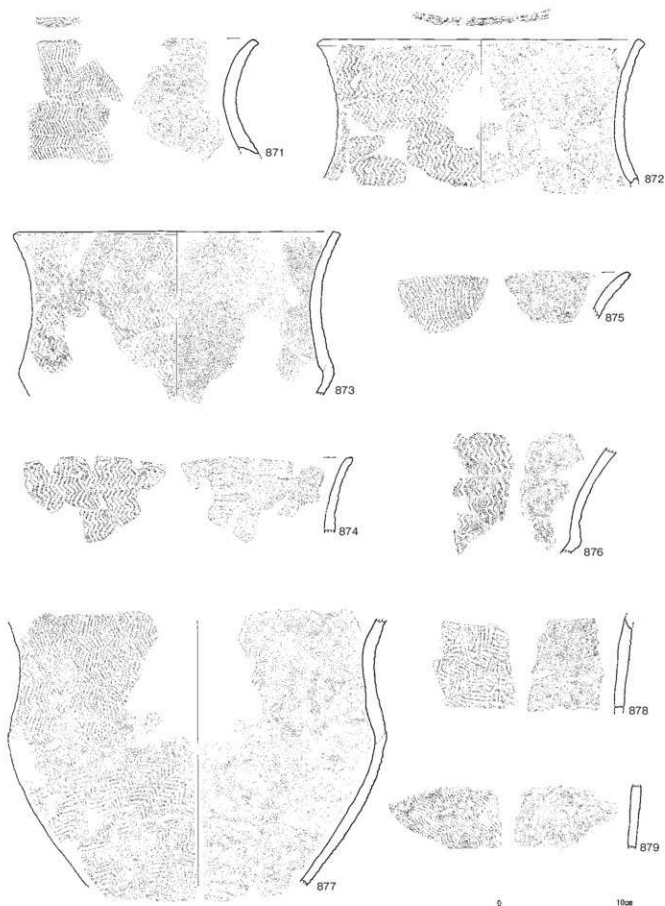
866～875は外面のみに山形押型文を縦位もしくは斜位に施す一群である。866～871は口唇部にも山形押型文を施す。いずれも口縁部が外反する器形と考えられる。866は大型の器形である。外面の口縁部から屈曲部の下位まで斜位の間延びした山形押型文を密接に施す。外面、口唇部ともに山形押型文は明瞭である。屈曲部内面付近には接合痕や指おさえ痕が一部確認できるが、口縁部内面は丁寧なナデを行い、器面の凹凸は少ない。867は外面に山形押型文を縦位に浅く施す。一部文様をナデ消した箇所がある。口唇部に施された山形押型文は明瞭である。施文は口縁部から胴部上半まで及び、屈曲部より下位は非常に丁寧なナデを行う。口縁部から胴部上半内面は、横方向の繊維痕を確認でき、丁寧なナデを行う。屈曲部内面には、接合痕や指おさえ痕が確認できる。868は小型の器形である。外面に明瞭な山形押型文を縦位に密接して施す。867と同様に施文は、屈曲部より上の口縁部から胴部上半までである。口縁部内面は丁寧なナデを行う。屈曲部は胴部下半上位に、胴部上半部分の粘土紐を内傾接合し、上半部分が内傾するように指おさえによる成形を行っていると考えられる。屈曲部内面上位には、接合に際して生じた指おさえ痕が多数確認できる。869は外面の山形押型文の一部ナデ消した箇所を確認できる。口縁部内面には、指おさえ痕と調整時の横方向の繊維痕が確認できる。胎土に小礫を含む。870は外面に山形押型文を縦位に密接に施す。内面は丁寧なナデを行う。871・872はやや間延びした明瞭な山形押型文を縦位に施す。口縁部付近の内面には丁寧なナデを行い、その下位には成形時の指おさえ痕が多く確認できる。胎土に小礫を多く含む。873は屈曲部の内面に接合痕が確認できる。胴部上半と胴部下半の接合方法は、868と同様で内面に指おさえ痕が多く確認できる。外面は口縁部付近や屈曲部より下位で、山形押型文を一部ナデ消した箇所がある。口唇部は丁寧なナデを行っている。胎土に小礫を多く含む。874は文様、調整、胎土等で873と同一個体の可能性が高いと考えられる。875は外面に間延びした山形押型文を浅く縦位に施す。内面は横方向

の繊維状の細かい擦痕が確認でき、丁寧なナデを行う。

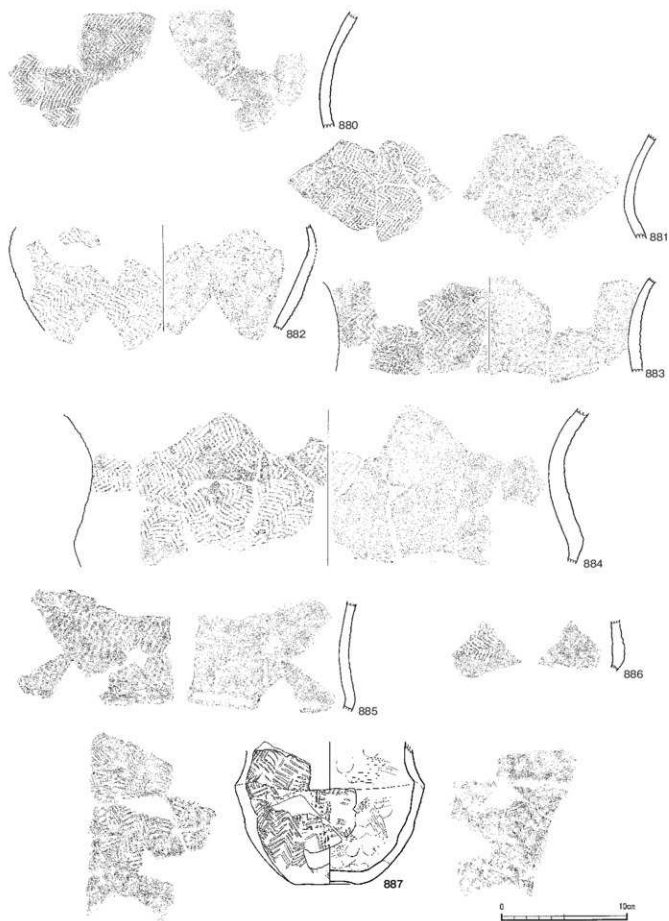
876～886は胴部である。

876～883は全面に文様が施される一群である。胴部上半のみ、胴部下半のみの破片も含む。876は外面に胴部上半は縦位に、屈曲部付近は横位に明瞭な山形押型文を施す。内面は指おさえ痕が確認でき、丁寧なナデを行う。877は大型の器形である。外面はやや間延びした山形押型文を胴部上半は縦位と一部やや斜位に、胴部下半は斜位に施す。胴部上半の一部は、原体の左右を逸えて施文する箇所がある。屈曲部付近は、内外ともに胴部上半部分を胴部下半に接合した際のナデ付け痕が一部確認できる。屈曲部で胴部上半部分を胴部下半上部に内傾接合し、外面部分は、胴部を伸ばし付けられるように胴部下半に接合していると考えられる。さらに、内面には指おさえ痕が多数確認できることから、指頭による器壁の厚さの調整を行いながら、外反するように器形の成形を行っていると考えられる。878は外面に山形押型文を斜位に不規則に施す。下部に接合痕が確認でき、屈曲部に接合する胴部上半付近の破片と考えられる。内面には、指おさえ痕や横方向の繊維状の細かい擦痕が一部確認できる。胎土に小礫を含む。879は外面に間延びした液状押型文を斜位に施す。内面はヘラ状の工具痕が部分的に確認でき、色調は灰黄褐色である。880は外面に山形押型文を浅く縦位に施す。部分的に施文を行わない箇所や文様をナデ消した箇所がある。内面に横方向の繊維痕が一部確認できる。881は外面に山形押型文を縦位に浅く施す。内面は丁寧なナデを行う。882は胴部下半の破片と考えられる。外面に山形押型文を斜位に密接に施す。内面には指おさえ痕が多く確認できる。胎土に小礫を多く含む。883は間延びした山形押型文を縦位、もしくはやや斜位に施す。内面は下位に指おさえ痕が確認でき、胴部上半を外反するように成形した際のものと考えられる。上位はナデをやや丁寧に行う。胎土に小礫を多く含む。

884～886は胴部上半のみに施文する一群である。884は大型の土器である。外面は上位に山形押型文を縦位に、屈曲部に近い下位は横位に施す。横位の施文幅は1.5cm程度あり、原体1単位分の幅であると考えられる。胴部下半は丁寧なナデを行う。内面には、屈曲部付近に胴部上半を接合した際のナデ付け痕が一部確認できる。胎土に小礫を非常に多く含む。885は胴部下半はほとんど残存していないが、胴部上半の施文が屈曲部よりやや上部で終わり、屈曲部付近は丁寧なナデを行い無文であることから施文は胴部上半のみと考えられる。文様は指木では山形押型文がほぼ全面に縦位、やや斜位に施されているように見えるが、左半分は文様を浅くナデ消しており、文様が判然としない箇所がある。右半分の山形押型文には、一部微隆線状の部分があるが原体を回転させ



第 333 图 Ⅱ 类土器 (2)



第334图 Ⅺ类土器(3)

施文したと考えられる。886は外面に胴部上半下位まで山形押型文を縦位に密接に施し、屈曲部下位はナデを行う。

887は底部で、小型の土器である。外面は間延びした山形押型文を胴部上半と屈曲部付近は斜位に、胴部下半は横位や一部斜位に施す。底面境付近は文様を一部丁寧にナデ消している。屈曲部の接合や成形は877に類似するが、胴部上半内面は横方向の細かい繊維状の擦痕が確認でき、指おさえ痕の凹凸が胴部下半に比べ少なく、ナデが丁寧である。上げ底状の底部で、底部円盤の外周に粘土紐を巻き付け胴部を輪積み成形していると考えられる。その際に、高台状に巻き付けることにより上げ底を作り出している。

888～890は外面に山形押型文を縦位に施した後、沈線施す一群である。888は緩やかな波状口縁を呈すると考えられる。外面は口縁部から胴部上半にかけて山形押型文を縦位に密接に施す。その後、2本1単位の半截竹管状の工具で口縁部上位、胴部上半のくびれ部、屈曲部付近に横位の沈線で割り付けを行い、その区画内を弧状の沈線でモチーフを描いたと考えられる。弧状の沈線は左から右へ施される。内面は口縁部下に山形押型文を横位に施す。それより下位はナデを行っている。屈曲部付近は指おさえ痕が確認できる。胎土に石英、角閃石を含む。889は胴部上半から屈曲部付近である。外面は山形押型文を胴部上半は縦位に、屈曲部は横位に施した後、2本1単位の半截竹管状の工具で横位の沈線を施す。一部波状を呈する箇所もある。内面は屈曲部付近に幅0.9cmの横位方向のヘラ状の工具痕が確認できる。890は胴部上半の一部である。888と文様構成、調整、胎土等が類似することから同一個体の可能性が高いと考えられる。

891～900は外面に菱形押型文を施す一群である。菱形押型文とは、同一原単位上方向の異なる山形の印刻を施すことで、菱形の押型文が施されるものである。山形押型文の施文原単位を方向を逸えて菱形状を呈するものは異なる。菱形の中央部に粒状、縦線状の押型文が施されるものもある。

891～897は口縁部である。891～892は外面、口縁部内面、口唇部にも菱形押型文を施す。891は外面の菱形押型文をナデ消した箇所があり、横方向の繊維状の細かい擦痕が確認できる。口縁部内面に指おさえ痕が確認できる。内面は丁寧なナデを行った後、口縁部は横位の菱形押型文を施す。892の外面に施される菱形押型文は浅い。内外面とも菱形押型文の中央部は粒状の文様となる。893は外面に斜格子状の菱形押型文を縦位に施す。胎土に小礫を含み、色調は灰黄褐色である。894の外面には、口縁部のやや下がった位置から密接な浅い菱形押型文を縦位に施す。菱形押型文の中央部は粒状の文様と

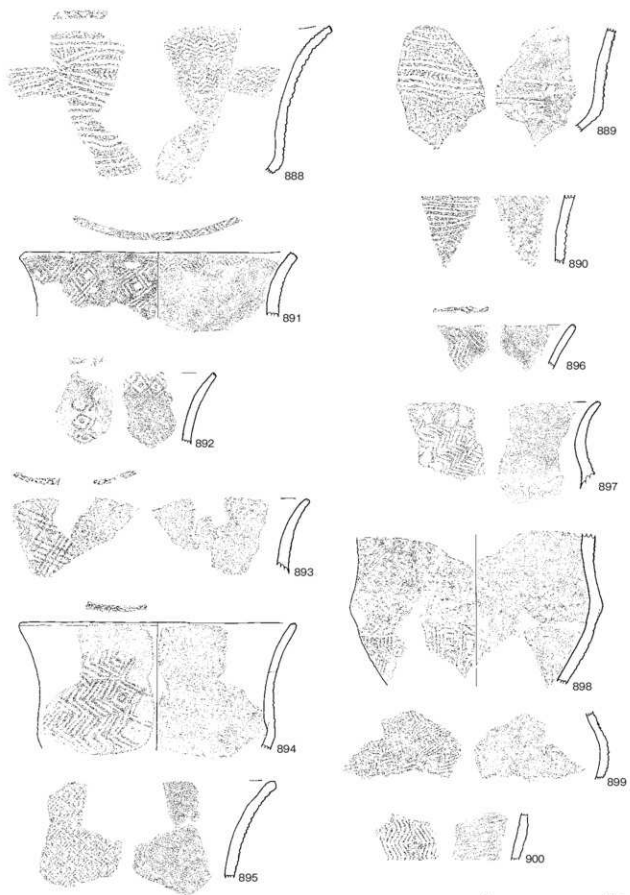
なる。また、口唇部、屈曲部下位の胴部下半にも一部にも施文する。895は口縁部が大きく外反する器形である。外面に明瞭な菱形押型文を縦位に施す。菱形押型文の中央部は、縦線状の文様となる。内面には指おさえ痕が多く確認できる。色調は灰黄褐色である。896は器壁が薄く0.5cmである。外面に浅い菱形押型文をやや斜位に施す。さらに口唇部にも一部施文している。内面は丁寧なナデを行う。897は外面に浅い菱形押型文をやや斜位に施す。菱形押型文の中央部は一部線状となるが、大半は判然としない。屈曲部が剥落しており、施文がどこまで及ぶかは不明である。内面には細かい繊維状が確認でき、丁寧なナデを行っている。

898～900は胴部である。898は屈曲部付近の破片である。屈曲部の接合や成形は、877に類似する。外面は胴部上半に菱形押型文を縦位に施した後、丁寧なナデを行う。胴部下半は明瞭な菱形押型文をやや斜位に施す。菱形押型文の中央部は粒状の文様となる。内面は胴部上半に横方向の繊維状の細かい擦痕が確認でき、丁寧なナデを行っている。胴部下半には指おさえ痕が、多く確認できる。899は外面の胴部上半は縦位に、胴部下半は横位に明瞭な菱形押型文を施す。菱形押型文の中央部は粒状の文様となる。内面は非常に丁寧なナデを行い、器面の凹凸は少ない。900は胴部下半の破片と考えられる。やや間延びした菱形押型文を縦位に施す。菱形押型文の中央部は粒状の文様となる。

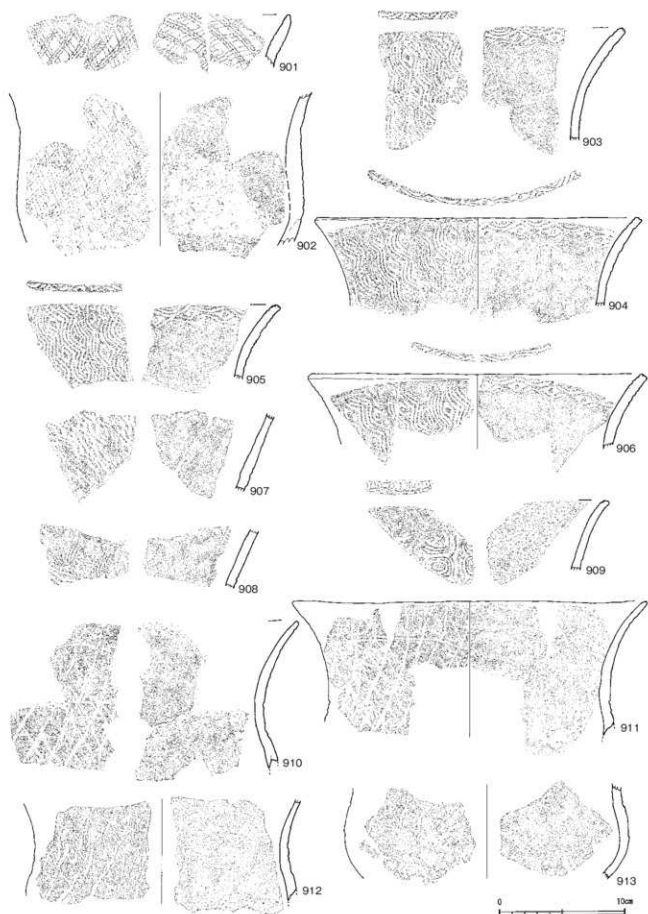
901～902は外面に斜格子状押型文を施す一群である。斜格子状押型文は、施文原単位上方向の異なる斜位の2本1単位の印刻を施すために斜格子状を呈する押型文が施されるものである。901は口縁部である。斜格子状押型文を外面は縦位に、内面は横位に施す。胎土に小礫、長粒の角閃石を多く含み、色調は灰黄褐色である。902は外面に胴部上半から屈曲部下位にかけて斜格子状押型文を縦位に施す。屈曲部付近が大きく剥落しており、施文範囲は判然としない。ただし、胴部上半の格子状押型文が明瞭であるのに対して、屈曲部付近は文様がナデ消された箇所がある。内面も屈曲部に近い胴部上半下位が大きく剥落している。胎土に小礫、長粒の角閃石を多く含む。色調は灰黄褐色である。文様、調整、胎土等が901と類似することから同一個体の可能性が高いと考えられる。

903～908は外面に同心円状押型文を施す一群である。同心円状押型文とは、同一原単位上方向の異なる波状の印刻を施し、同心円状を呈する押型文が施されるものである。同心円の内部には粒状の押型文が施される。

903～906は口縁部である。いずれも同心円状押型文を外面は縦位もしくはやや斜位に、口縁部内面は横位に、口唇部に施す。口唇部は原単位を器面に直交するように当て施文している。内面は丁寧なナデを行う。903は外面



第335图 XI类土器(4)



第 336 图 Ⅺ 类土器 (5)

に同心円状押型文を縦位に施す。内外面ともに丁寧なナデを行う。外面には煤状の付着物が多く確認できる。904・905は外面に同心円状押型文を縦位、やや斜位に施す。一部文様をナデ消す箇所がある。煤状の付着物が多く確認できる。903～905は外面の施文開始位置で一部異なるもの、文様、胎土、調整等で類似する点が多く、同一個体の可能性が高いと考えられる。906は外面に同心円状押型文を縦位、もしくはやや斜位に施す。胎土に粒子の小さい角閃石を多く含む、色調は灰黄褐色である。

907・908は胴部である。907は胴部上半の一部と考えられる。外面に同心円状押型文を斜位に施し、内面に指おさえ痕が確認できる。色調は灰黄褐色である。908は外面に浅い同心円状押型文を縦位に施した後、横位の沈線施す。内面は丁寧なナデを行う。

909は外面に同心楕円押型文を施すものである。外面に施文した後、口縁部上位の一部をナデ消している。口唇部内面にも明瞭な同心楕円押型文を施し、内面は丁寧なナデを行う。

910～913は外面に網目状撫糸文を施す一群である。

910・911は口縁部である。外面は軸に無節斜行縄文Rをやや間隔を空けて右巻き後、左巻きしたものを縦位に施している。内面は口縁部付近に横方向の擦痕が確認でき、丁寧なナデを行っている。911は口縁部外面に横位の沈線状の擦痕が確認できる。屈曲部付近は指おさえ痕が多く見られる。胎土に径0.1～0.3cm程度の黒雲母・金雲母を非常に多く含む、色調は褐色である。

912・913は胴部である。912は胴部上半、913は胴部上下下位から屈曲部付近である。913はやや丸みを帯びた屈曲部である。外面文様、内面調整、胎土、色調ともに910・911に類似する。このことから、910～913は同一個体の可能性が高いと考えられる。913の屈曲部下位から胴部下半には施文が見られず、丁寧なナデを行っている。施文は口縁部から胴部上半に限られると考えられる。いずれも外面に煤状の付着物が確認できる。

914～916は外面に撫糸文を施す一群である。916は施文は確認できないが、914・915と調整、胎土、色調等で類似することからここに含めた。914は口縁部が大きく外反し、胴部中央の屈曲部で底部に向けて直線的にすぼまる器形である。屈曲部内面は接合痕が確認でき、877のような屈曲部の接合と異なり、胴部上半を下半になで付けるような箇所は見られない。胴部下半上位の接合面にやや内傾するように胴部上半下位にあたる部分の粘土を輪積み成形していると考えられる。外面は無節斜行縄文Rの極めて細い原体を軸に密接に巻き、口縁部から胴部上半に縦位もしくはやや斜位に施す。口唇部にも同様の絡糸体で施文する。胴部下半は胴部上半と同じ原体を2本1単位で軸に左巻き後、右巻きしたものを縦位、斜位に施す。口縁部内面上位には外面の胴部上半に用いた

撫糸を横位に施す。一部指おさえ痕の箇所は、文様が消されている。口縁部内面下位は、斜格子状押型文を横位に部分的に施す。胴部内面は指おさえ痕が確認できる。胎土に長粒の角閃石を多く含む、色調は灰黄褐色である。915は屈曲部付近の胴部である。外面は胴部上半に無節斜行縄文Rの細い原体を軸に密接に巻いたものを縦位に施す。屈曲部下位では原体の擦痕が一部確認できるが、無文である。屈曲部内面に接合痕が確認できる。916は上げ底の底部である。底部円盤の外周に粘土を巻き付けて胴部を輪積み接合している。底部円盤の中心部分を上げ底状に高くなるように成形している。胎土に長粒の角閃石を多く含む、色調は灰黄褐色である。

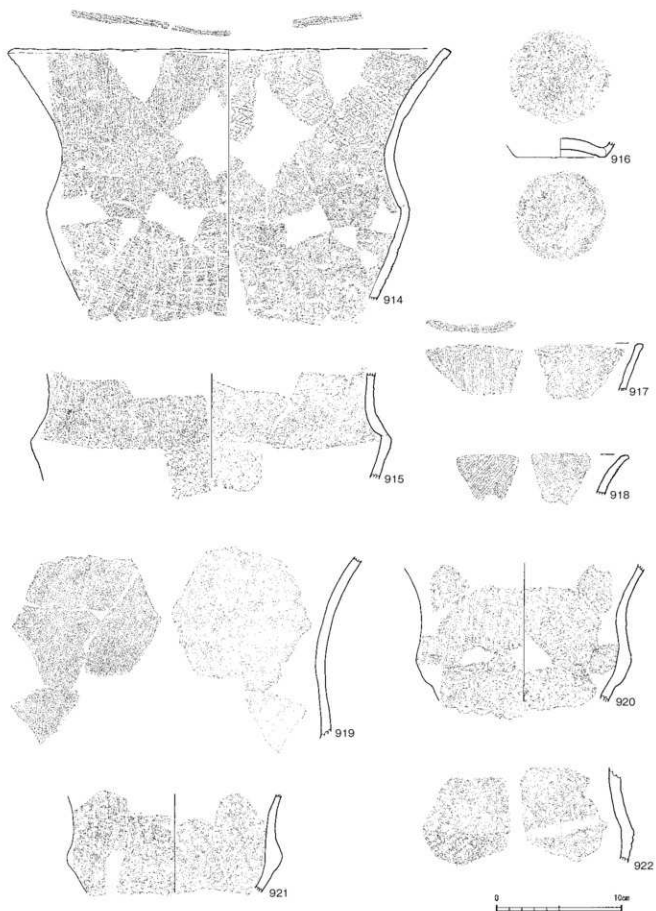
917～922は外面に細条線を施す一群である。

917・918は口縁部である。917は外面に3本1単位の細条線を縦位に施す。口唇部にも施文する。内面は指おさえ痕が多く確認できる。918は外面に3本1単位の細条線を右上がり斜位に間隔を空けて施す。内面に丁寧なナデを行う。胎土に金雲母を多く含む。

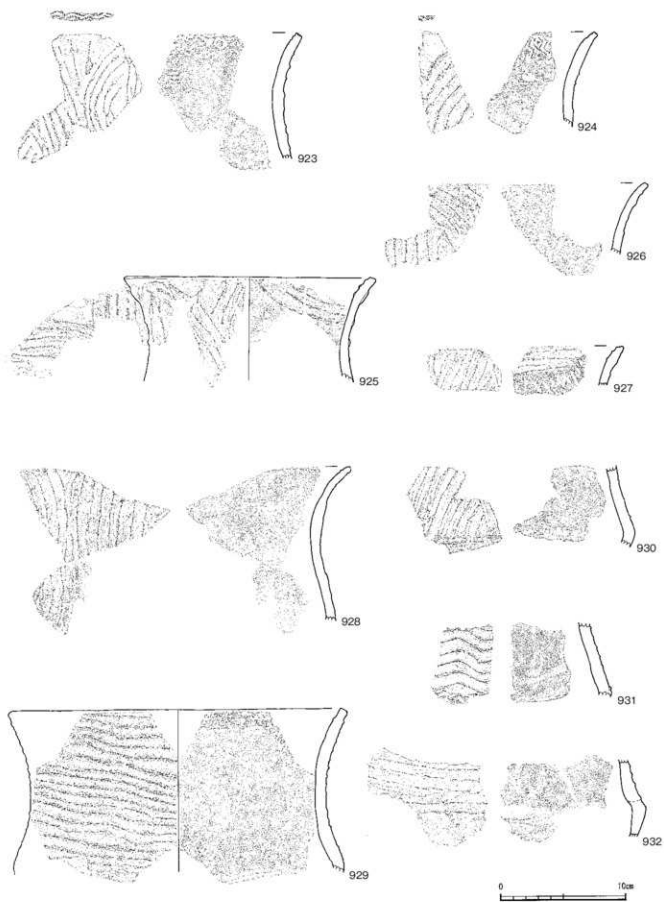
919～922は胴部である。919は胴部上半が大きく外反する屈曲部より上位の部分である。外面は樽山状の工具で右上がり斜位の細条線を施した後、右上がり斜位の細条線を施す。内面には横方向の擦痕と指おさえ痕が多く確認できる。胎土に径0.1～0.2cmの金雲母を多く含む。色調は褐色である。920・921は屈曲部付近である。外面は胴部上半に2～4本1単位の細条線を縦位、もしくはやや斜位に施す。胴部下半は、横方向の擦痕が一部確認でき、ナデを行う。屈曲部内面付近には、胴部上半下位を胴部下半上位になで付ける痕跡が確認できる。920・921は文様、調整、胎土等が類似することから同一個体の可能性が高いと考えられる。922の外面は胴部上半に細条線を方向を違えて斜位に施す。胴部下半は単節斜縄文LRを横位に施す。内面は指おさえ痕が確認できる。胎土に小礫を多く含む。

923～932は外面にミズばれ文を施す一群である。ミズばれ文とは、器面に微隆線を貼り付け後に、ヘラ状工具で微隆線両端をナデ付けるように調整し、ミズばれ状を呈する微隆線文のことである。

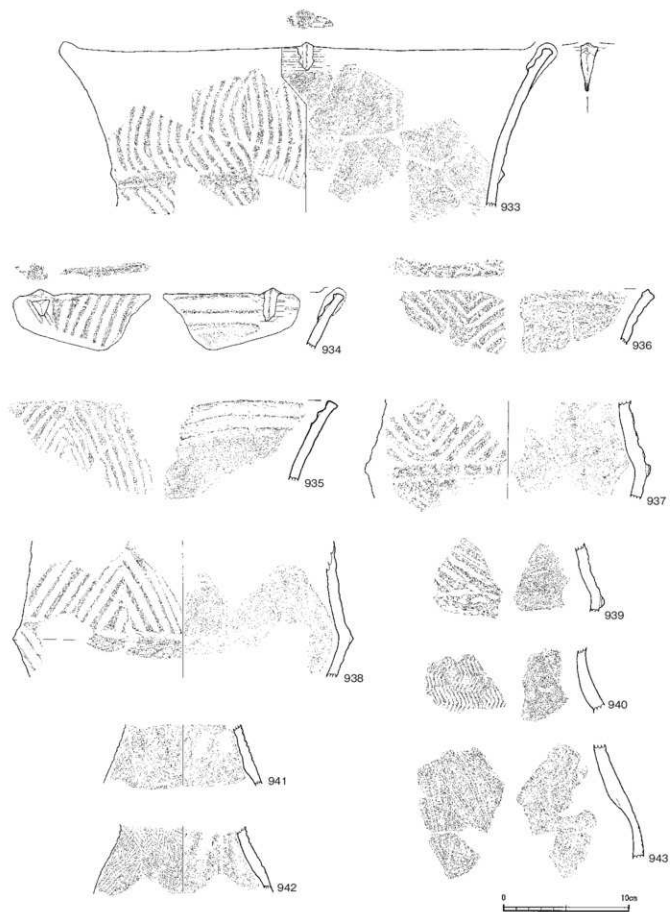
923～929は口縁部である。923～924は外面にミズばれ文を、内面に押型文。923は外面に幅0.2～0.3cmの粘土紐を縦位、弧状に貼り付ける。その後、幅狭のヘラ状工具で両端をナデ付けながら成形する。ミズばれ文で重弧文状のモチーフを描く。同心円押型文を口縁部内面は横位に、さらに口唇部にも施す。内外面ともに丁寧なナデを行う。胎土に角閃石を含む。924の外面は923と同様の重弧文状のモチーフの一部と考えられる弧状のミズばれ文を施している。口縁部内面には菱形押型文を縦位に施す。それより下位は丁寧なナデを行っている。胎土に小礫を多く含む。925～929は、内外面にミミ



第337图 Ⅺ类土器(6)



第 338 图 Ⅺ 类土器 (7)



第 339 图 Ⅱ 类土器 (8)

ズばれ文を施す一群である。925 はやや小型の器形である。外面に粘土紐を右下がり斜位、弧状に貼り付けた後に、右上がり斜位、縦位に貼り付け、重弧文状のモチーフを描く。内面にも横位の弧状のミズばれ文を施す。口縁部内面、口唇部に非常に丁寧なナデを行う。926・927の外面は925と同様のミズばれ文を施すが、927は口縁部内面に横位の直線状のミズばれ文を4段施す。いずれも内面に丁寧なナデを行う。928は外面にミズばれ文を縦位、やや斜位に施す。口縁部内面に、斜位のミズばれ文を施す。内面には指おさえ痕が確認でき、丁寧なナデを行っている。胎土に小礫を含む。929は内外面ともに直線状のミズばれ文を横位に施す。一部緩やかな波状を呈する箇所がある。外面は16段、内面は1段である。内面は口縁部に横方向の繊維状の擦痕が、屈曲部付近には、指おさえ痕が確認できる。指頭による成形を行った後、丁寧なナデを行ったと考えられる。

930～932は屈曲部付近の胴部である。930の外面は胴部上半に方向を違えて斜位のミズばれ文を施す。胴部下半は無文である。931は外面をミズばれ文で横位の波状のモチーフを描く。一部剥落しているが、屈曲部に粘土紐を貼り付け、山形押型文を横位に施している。内面にはナデを行っている。932は外面は胴部上半に横位のミズばれ文を施し、胴部下半は丁寧なナデを行い無文である。内面は屈曲部付近で接合痕が確認できる。

933～939は外面に沈線を施す一群である。

933～936は口縁部である。933は緩やかな波状口縁を呈する比較的大型の土器である。口縁部内面に断面三角形に成形した粘土紐を横位に3段貼り付けた後、口縁部内外面に楔状突起を縦位に貼り付ける。内面側の楔状突起は口唇部外面に上端部を引っかけるように貼り付け、内面側に垂下させている。外面は胴部上半下位に、口縁部内面に貼り付けものと同様の粘土紐を1段横位に貼り付け上下の区画を行う。その後幅0.4cmのヘラ状工具による幅広い沈線で縦位の重弧文状のモチーフを描く。沈線は区画より下位にも及ぶ。内面には斜位の繊維状の細かい擦痕が確認でき、丁寧なナデを行う。934は緩やかな波状口縁を呈すると考えられ、933と同様の楔状突起が確認できる。933～935は文様、調整等が類似することから同一個体の可能性が高いと考えられる。936は外面に幅0.5cmの幅広い沈線で「V」字状のモチーフを重ねて描く。口唇部内面に粘土紐を横位に貼り付けた後、棒状工具で口唇部外面から口唇部内面にかけて斜位の沈線を刻み状に施す。内面には丁寧なナデを行う。

937～939は胴部である。937の胴部下半には一部沈線状の凹部が確認できる。内面は横方向の繊維状が確認でき、ナデを行っている。胎土に小礫を多く含む。938は胴部上半から屈曲部付近である。屈曲部に粘土紐を貼り付けた後、浅い刻目を入れる。胴部上半は、ヘラ状工具

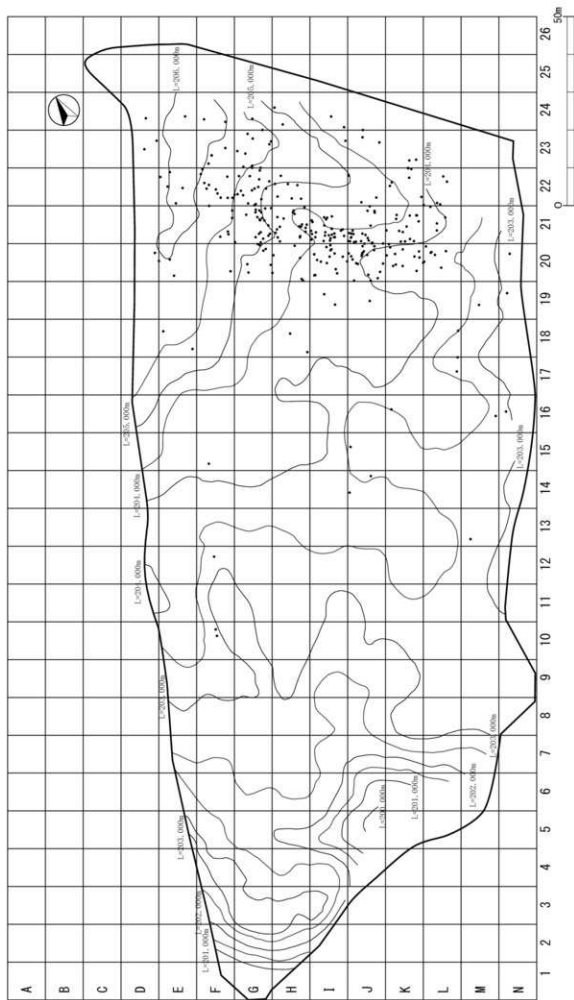
による幅広い深い沈線で山形のモチーフを重ねて描く。内面に指おさえ痕が確認できる。胎土に角四石を多く含む。色調は灰黄褐色である。937・939は文様、調整、胎土、色調等が類似することから同一個体の可能性が高いと考えられる。外面は屈曲部に粘土紐を貼り付けた後、棒状工具で縦位、斜位の刻目を入れる。胴部上半は、ヘラ状工具による幅広い深い沈線で波状のモチーフを重ねて描く。沈線を施す前に何らかの施文が行われているが、判然としない。

940～943は壺形土器である。いずれも頸部付近である。内面には頸部を成形するためと考えられる棒状工具による縦位の調整痕が確認できる。940は外面に明瞭な山形押型文を縦位に施す。胎土に小礫を含む。941・942は文様・調整・胎土等が類似することから同一個体の可能性が高いと考えられる。外面に山形押型文を横位に施す。頸部付近は器面が傾斜し、径も小さいことから原体を回転させる幅が狭く、文様が一部乱れる箇所がある。内面は肩部の湾曲に沿うように棒状工具による縦位の調整痕が確認できる。胎土に小礫を多く含む。943は外面に2～4本1単位の細条線を方向を違えて縦位、やや斜位に施す。肩部には、棒状工具による横位の刺突が2段確認できる。胎土に小礫を多く含む。

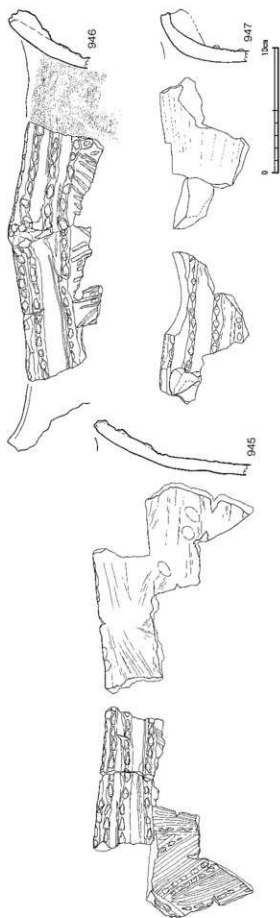
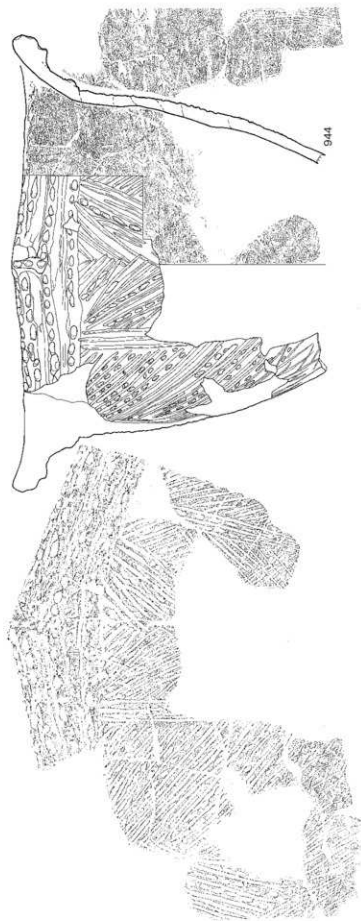
(13) 壺類土器 (第340～343図 944～956)

壺類土器は口縁部が大きく反し、胴部中央でやや膨らみ、底部にむけてすぼまる器形を呈する。文様は口縁部と胴部の2帯構成で、外面に刻目突帯文、沈線文、刺突文等を施す一群である。口唇部に刻目を入れ、口縁部、胴部上半に瘤状突起を貼り付けるものもある。

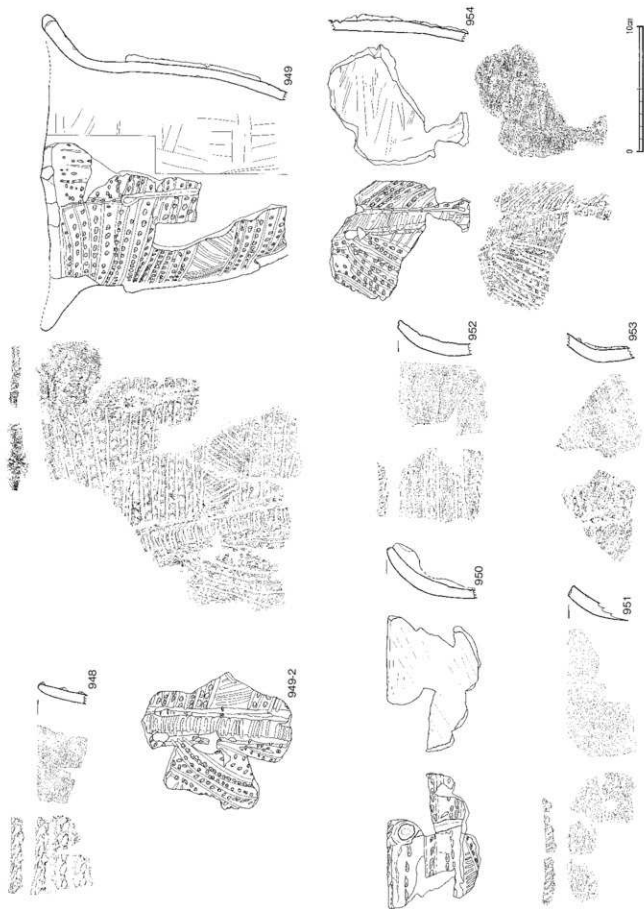
944～952は口縁部である。944は口縁部下半まで復元することができ、4単位の波状口縁を呈すると考えられる。波頂部の外面に縦長の瘤状突起を貼り付けた後、瘤状突起を起点として横位に2段、瘤状突起より下位に1段の計3段の刻目突帯を施す。粘土紐貼り付け後、刻目を入る際に、起点となった瘤状突起にも縦位に2段の刺突を施し、口唇部にも同様の刻目を入れる。刻目突帯間には、棒状工具による横位の沈線を部分的に施される。胴部は口縁部の3段目の刻目突帯より4本もしくは6本1単位の縦位の沈線を施し、削付けを行う。区画内に斜位の沈線を複数施した後、方向を違えて施文する。縦位、斜位の沈線間には一部列点状の刺突を施す箇所がある。口縁部の刻目突帯の刺突がための長粒状で先端を丸く加工した棒状工具による施文であるのに対して、胴部の刺突は沈線に用いたものと同様の先端を細く加工した棒状工具によるものと考えられる。内面には多数の内接合の痕跡が確認できる。口縁部から胴部上半は丁寧なナデを行っている。胴部下半は縦位、斜位の棒状工具による調整痕が確認できる。945は944と文様構成、調整、胎土等が類似することから同一個体の可能性



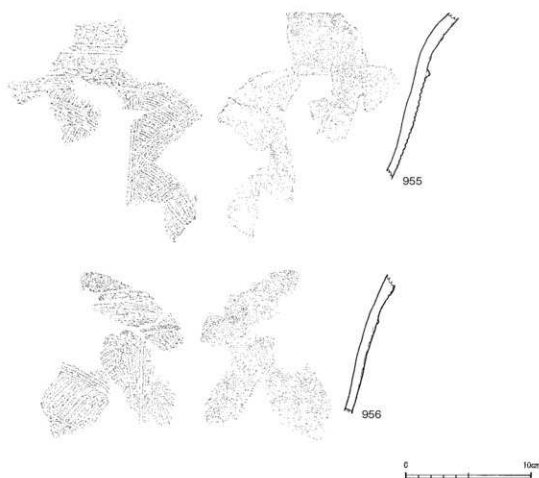
第 340 图 铜器出土分布图



第 341 图 双河新石器 (1)



第 342 図 Ⅱ期新石器 (2)



第343図 皿類土器(3)

が高いと考えられる。内面に指おさえ痕が確認できる。946も944同様に4単位の波状口縁を呈すると考えられる。波頂部より口縁部外面に瘤状突起を貼り付け、そこを起点に2段の刻目突帯を貼り付ける点も944と同様である。ただし、3段目の刻目突帯は瘤状突起のやや左下の2段目の刻目突帯上より貼り付けを開始し、全周していない。瘤状突起の口唇部近くの刺突は口唇部の刻目の上に施されている箇所があり、口唇部の刻目が終了した後には施されている。胴部の施文や口縁部内面の調整は944と同様である。947は緩やかな波状口縁を呈する器形である。波頂部より口縁部外面に瘤状突起を貼り付けた後、微隆線状の刻目突帯を横位に4段施す。3段目と4段目の間には、沈線状の工具痕が一部確認できる。口唇部平坦面に沈線を施すが、口唇部の残存がわずかなため全周するかは不明である。内面はナデを行っている。948は口縁部外面に単節斜行縄文RLを縦位に施した後、微隆線状の刻目突帯を3段施す。口唇部には棒状工具を斜位に寝かせるように当て刻目を入れている。内面

は丁寧なナデを行う。949は口縁部～胴部下半まで復元することができる。4単位の波状口縁を呈すると考えられる。波頂部には小突起を作り出す。胴部上半より垂下する貼付突帯で胴部の割付けを行う。貼付突帯は上位に波頂部と同じような小突起をもつものや、2本1単位のものがある。口縁部外面は、貼付突帯の延長線上に縦位の沈線を施す。さらに波頂部付近の口縁部外面にも1.2cm～2.0cmの間隔で縦位の沈線を施す。縦位の貼付突帯、縦位の沈線の施文が完了した後、口縁部より等間隔で横位の沈線を施し、沈線間に列点状の刺突を施す。ただし、胴部下半には沈線の間隔が3cm程度空く箇所があり、そこには斜位の沈線を方向を違えて施文する。2本1単位の縦位の貼付突帯上には浅い刻みを入れた後、突帯間に横位のやや太い沈線を等間隔で施す。区画された胴部は斜位、弧状の沈線を施し、沈線内に列点状の刺突を施す箇所がある。内面は口縁部～胴部上半は横位のケズリを行う。胴部下半は縦位のケズリを行った後、丁寧なナデを行っている。950は口縁部外面に径1.2cmの円

形刺突のある瘤状突起と縦位の貼付突帯を施した後に、横位の列点状の刺突を3段～4段施す。2段目の刺突の両端には横位の沈線が施される。口縁部と胴部との境付近には横位の微隆線状の刻目突帯が、その下位には斜位の沈線が2本施される。この刻目突帯と斜位の沈線間に短沈線を、斜位の沈線間に列点状の刺突を施している。また、口唇部には斜位の刻目を施す。胎土に白色粒子、金雲母を含む。951は口縁部外面に先端を尖らせた棒状工具による横長の刺突を2段施す。口唇部外端部に浅い刺突を施した後、平坦に成形した口唇部に斜位の明瞭な刻目を入れる。952は口縁部外面に2本1単位の沈線を2条施し、それぞれの沈線間に951と同様の横長の刺突を施す。さらに、その下位に同様の刺突を1段施す。3段目の刺突の両端には沈線はない。口唇部外端部に浅い刺突と口唇部平坦面に斜位の刻目を入れる。胎土に金雲母を多く含む。

953～956は胴部である。953は外面に単節斜行縄文LRを縦位に施す。その後、縦位の微隆線状の刻目突帯、横位の刻目突帯の順に貼り付けている。内面は横方向の細かい縦横縞が確認でき、丁寧なナダを行っている。954は外面に2本1単位の縦位の微隆線状の刻目突帯を貼り付け、その内側に縦位の浅い沈線を一本施文する。その後、横位の浅い沈線を等間隔に施す。刻目突帯の外側は斜位の沈線を比較的短い間隔で施し、沈線間には棒状工具の先端による列点状の刺突を施す。内面は上位を横位のケズリを、下位を縦位のケズリを行った後に丁寧なナダを行っている。955は文様構成から口縁部下位から胴部上半付近と考えられる。口縁部外面付近に横位の2本1単位の沈線を施した後、沈線間とその上下を含む3段に横長の列点状の刺突を施している。胴部上半との境付近に微隆線状の刻目突帯を1条施している。刻目突帯より上位は浅い沈線を1条巡らせている。胴部は縦位の沈線で割り付けた後、斜位の沈線で区画内をさらに分割している。沈線間には列点状の刺突を施している。その後区画内には、斜位の沈線を充填している。内面は丁寧なナダを行っている。956は文様構成等において955とはほぼ同様であるが、胴部を区画する縦位の沈線の両端にそれぞれ蛇行する沈線が施される点が異なる。

(14) Ⅱ類土器 (第344～377図 957～1173)

Ⅱ類土器は口縁部が大きく外反し、胴部中央でやや膨らみ、底部にむけてすままる器形を呈する。文様は口唇部もしくは口縁部、頸部、胴部の3帯構成となるが、分類は以下のように行った。

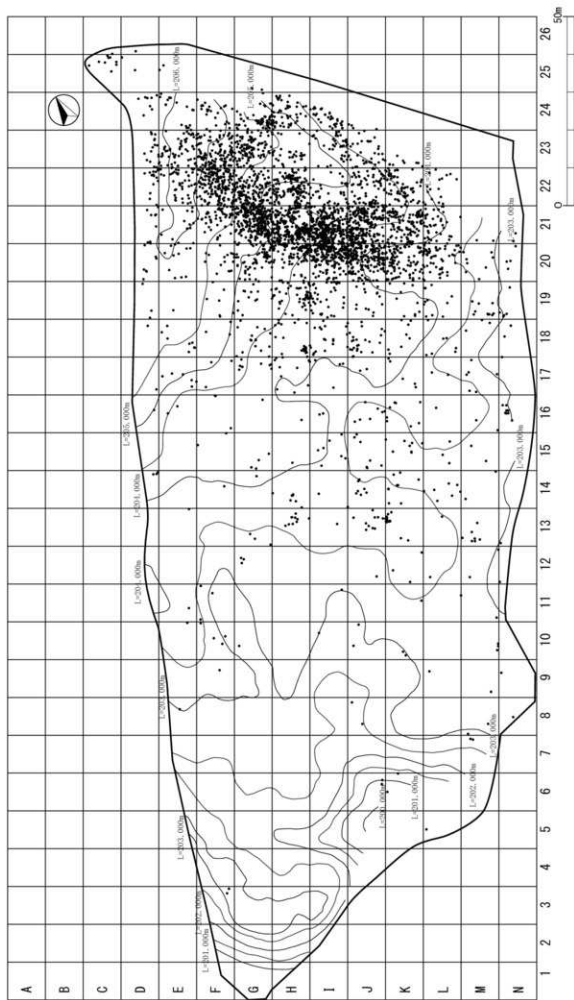
まず、口唇部外端部が肥厚する一群と口縁部上位がやや肥厚する一群に大別した。なお、口縁部が肥厚しないものの口縁部上位が肥厚する一群と同様の施文を行うものは後者に含めた。さらに、口唇部外端部が肥厚する一群は口縁部から頸部外面にかけての文様構成や文様要素に

より分類した上で、肥厚部の文様構成や文様要素等により細分した。口縁部上位がやや肥厚する一群と同様の施文をもつ一群は、口縁部上位外面の文様構成や文様要素等により細分した。

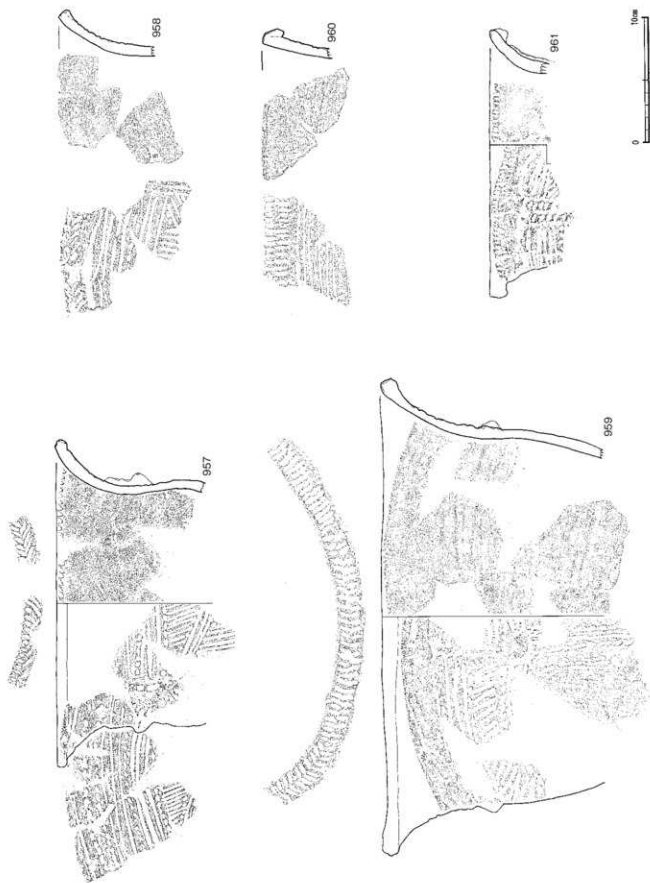
957～1036は口唇部外端部が肥厚する一群である。

957～966は口縁部から頸部外面に横位の沈線、刺突を施す一群である。一部縦位の沈線、刺突を先に施文し、器面の割付けを行うものもある。

957～966は口唇部外端部の肥厚部に羽状の沈線、短沈線や刺突を施す一群である。一部、肥厚部に直線状に沈線を施すものも含む。957は口唇部外端に微隆線状の突帯を貼り付けて、わずかに厚く成形する。頸部と胴部上半との境付近に刻目突帯と瘤状突起を縦位に貼り付け、横位の沈線を施し、沈線間には刺突を施文する。胴部は瘤状突起を起点に3本1単位の沈線を斜位に施す。横位の沈線と斜位の沈線による区画内は、沈線に沿って刺突を施した後、縦位の沈線で充填する。958の胴部は沈線と刺突で文様が構成される。959は肥厚部に2本の沈線で羽状、直線状の文様を施す。頸部に瘤状突起を貼り付け、その上位の口縁部から頸部にかけては縦位の刺突を施す。その後、上位に横位の沈線を3条、下位には間隔を空け1条、さらに沈線に沿うように刺突を施す。頸部付近の刺突間には斜位の沈線を充填する。胴部は瘤状突起の下より縦位の沈線、刺突を施文する。区画された胴部は単節斜行縄文RLを縦位に施す。960～961は肥厚部の中央部から端部までの幅でそれぞれ縦位の短沈線を施す。961は口縁部から頸部に2本1単位の突帯を縦位に貼り付けた後、口唇部外端に突帯を貼り付け肥厚部を成形する。また、口縁部から頸部にかけて横位の沈線と刺突を施す。962は肥厚部に刻目状の短沈線を施す。肥厚部よりやや下がった位置に刻目突帯を横位に1段施し、やや間隔を空けて、横位の沈線を密接して施す。その後、沈線の上位、中位、下位に1段ずつ刺突を施す。胴部上半は横長の瘤状突起と2本1単位の縦位の刻目突帯を施す。その後、器面に4本1単位の横位の沈線を施し、その沈線の上位と下位に刺突を施文する。頸部との間には斜位の沈線で鋸歯状のモチーフを描く。胴部下半は刻目突帯を起点に斜位の沈線を施した後、沈線に沿って刺突を施す。区画内には縦位の沈線を施文する。963は口縁部から胴部下半まで復元できる。粘土を折り返し厚く成形する。口縁部から頸部には横位の沈線を4条施し、沈線間に刺突を施文する。1条目の沈線より上位の肥厚部直下には、刺突の施文後に縦位の短沈線を密接に施す。胴部は逆「U」字状の2本1単位の縦位の刻目突帯とやや短めの縦位の刻目突帯を交互に4本ずつ施す。逆「U」字状の刻目突帯間には横位の沈線を等間隔に施す。やや短めの刻目突帯と逆「U」字状の刻目突帯間には斜位の沈線が施され、刺突や「く」の字状、逆「く」の字状の沈



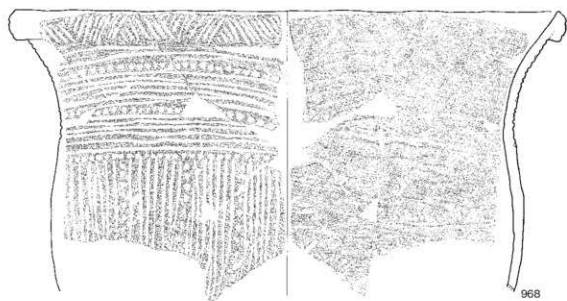
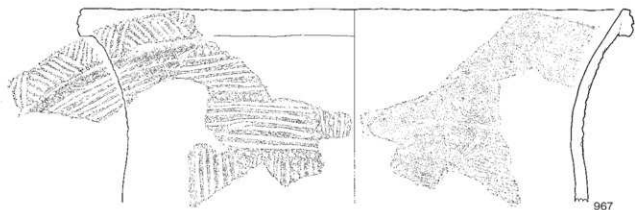
第 344 图 L型土器出土分布图



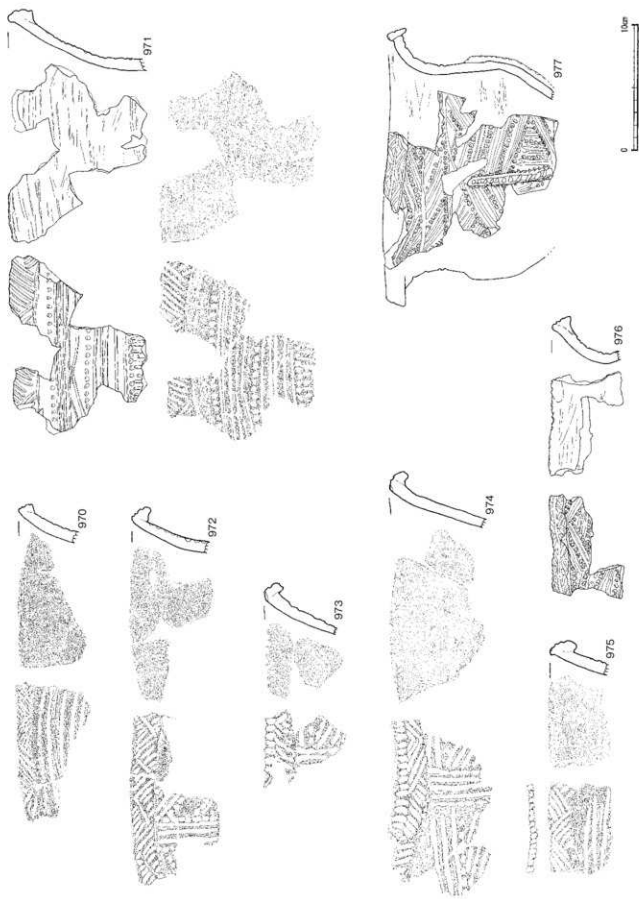
第 345 图 双环土器 (1)



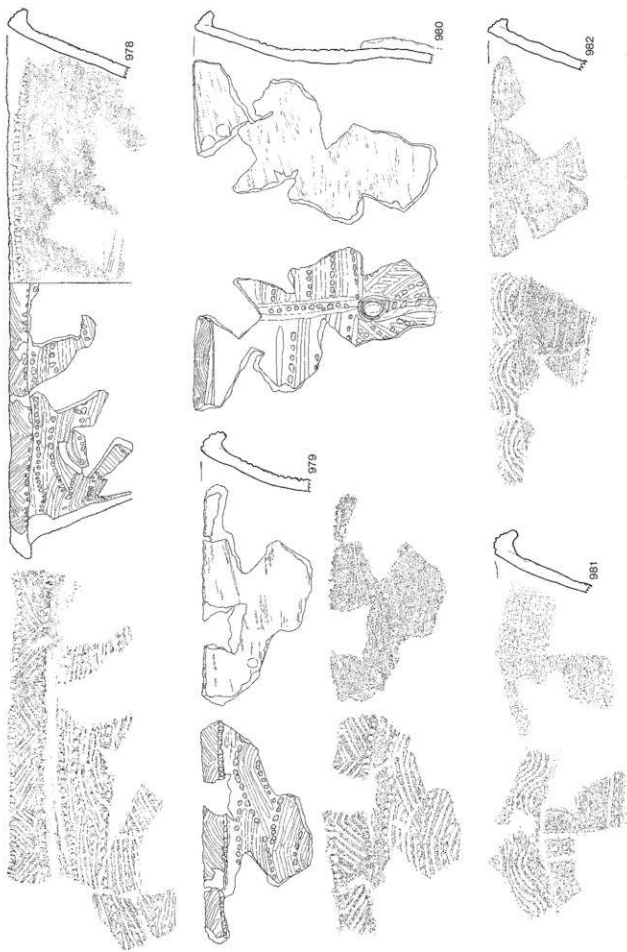
第346图 双纹土器(2)



第347图 双纹土器(3)



第 348 图 西汉土器 (4)



第 349 图 新石器土器 (5)

線が充填される。短めの刻目突帯の上位には、重弧文状のモチーフが描かれる。964~966は波状口線を呈すると考えられる。964は波頂部に突起を作り出し、肥厚部と一体化した成形を行う。波頂部下の口縁部外面に縦位の微隆線状の突帯を施した後、口縁部外面には横位の沈線を施す。波頂部に斜位の沈線を施した後、肥厚部には刺突で羽状の文様を施す。965は肥厚させた波頂部から縦位の突帯の貼り付けを行う。その際、波頂部付近の外面に径1.3cm程度の円形の浅い凹みを作る。波頂部を含む口唇部に扁平な突帯を貼り付け、口唇部と同様の羽状の刺突を施す。口縁部外面には横位の沈線が施される。966は口唇部外端に突帯を貼り付けた後、口縁部外面に横位の微隆線状の突帯を貼り付ける。その後、波頂部付近の口縁部外面には複数の突帯を貼り付け、逆三角形の突起を成形し、口唇部の刺突、横位の突帯の刻目、波頂部の突起上の刺突が同一の棒状工具で施されたと考えられる。

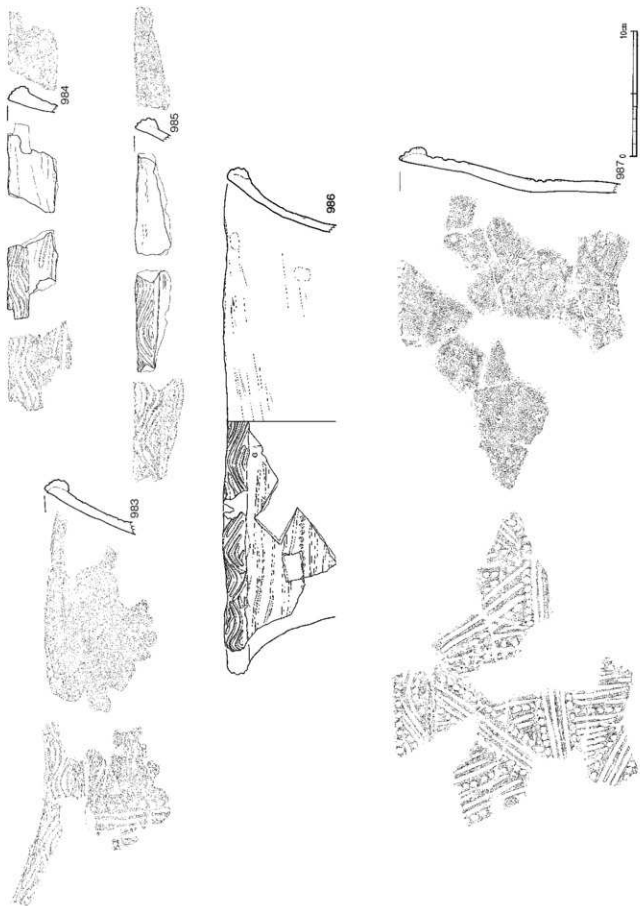
967~979は口唇部外端の肥厚部に斜位の沈線を方向を違えて施す一群である。967は肥厚部に右下がり斜位の沈線を数本施した後、右上がり斜位の沈線を施したと考えられる。胴部は縦位の浅い沈線を施し、沈線間に縦位の刺突を施す。968は967と文様構成、胎土、調整等類似することから、同一個体の可能性が高いと考えられる。969は口唇部上端が欠損する。口唇部外面に粘土を貼り付け肥厚部を作り出した際の接合痕が確認できる。970は肥厚部に右上がり斜位の沈線を数本施した後、右下がり斜位の沈線を施す。971の胴部は縦位の沈線を密接に施す。972は肥厚部に右上がり斜位の沈線を1本ずつ間隔をあけて施すことにより肥厚部を斜位に区画し、区画内を右下がり斜位の沈線を施し充填する。973~977は肥厚部に沈線で施文し、肥厚部内端に刻目を入れる。973・974は肥厚部に斜位の沈線を方向を違えて施した後、肥厚部内端に刻目を入れていく。口縁部から頭部の施文は、肥厚部直下よりやや下がった位置より行っている。974は肥厚部の外端側の斜位の沈線は、数本単位で同一方向を施文後に、方向を変えて左から右へ施文している。口縁部から頭部の縦位、斜位の刺突の一部は、刺突器具を器面から離さずに施文するたれ押しきりとなっている。977は口縁部が外反し、胴部が球状を呈する小型の器形である。肥厚部中央部に横位の沈線を施し上下を区画し、それぞれに斜位の沈線により山形のモチーフを描く。その後口唇部内端に刻目を入れる。胴部は縦位の刻目突帯を施した後、刻目突帯両端に刺突を施す。その後、斜位の沈線と刺突を胴部全体に施す。沈線と刺突に区画された一部は、斜位、縦位の沈線や縦位の刺突を充填する。976は977と文様、胎土、調整等が類似することから、同一個体の可能性が高いと考えられる。978・979は肥厚部に沈線で山形のモチーフを描く。ま

た、肥厚部の内外端に刻目を入れる。978は口縁部から頭部にかけて横位、弧状の沈線と刺突で文様を構成する。978は979と文様、胎土、調整等が類似することから、同一個体の可能性が高いと考えられる。

980~991は口唇部外端の肥厚部に波状の沈線を横位に施し、重弧文状のモチーフを描く一群である。口縁部から頭部には横位、斜位の沈線と刺突を施す。980は口縁部から頭部に縦位の沈線、刺突を施文後に肥厚部より下がった位置より横位の沈線、刺突を施す。胴部上半は楕円状の凹部のある瘤状突起と縦位の刻目突帯を施した後、その両端より斜位の沈線を施文する。斜位の沈線間には縦位の沈線や刺突を充填する。981・982は980と同様、胎土、焼成、調整等が類似することから、同一個体の可能線が高いと考えられる。981の観察により、欠損のために判然としなかった980の口縁部外面に、縦位の沈線や刺突が肥厚部直下から施文が始まっていることが確認できる。987・988は肥厚部上端に棒目を入れ、口縁部から頭部にかけては縦位の刻目突帯で区画する。その区画内と胴部上半は沈線、刺突で文様を構成する。988は口縁部を折り返すようにして肥厚部を作り出し、波状、斜位の沈線を施文し、沈線間に刺突を施す。口縁部~頭部は縦位の扁平な突帯を貼り付け後、2本の沈線を縦位に深く施文し、一部微隆線を3本貼り付けたように成形する。その後、その微隆線に刺突を施す。横位、斜位の沈線で区画後、区画内の沈線に沿って刺突を施し、縦位の沈線を充填する。胴部上半は横位の刺突を施した後、縦位の沈線を施文する。987と988は文様、胎土、調整等が類似することから、同一個体の可能性が高いと考えられる。989~991は肥厚部上下の両端に刻目を入れる。なお、987~990は口縁部から頭部にかけて横位の施文ではないが、口唇部外端の肥厚部や胴部の文様形態から、ここに含めた。

992・993は口唇部外端の肥厚部に縦位の沈線、刺突を施文後に、横位の沈線を施す一群である。肥厚部の上下端に刻目、胴部に結節縄文を施す。992は口唇部外端に肥厚部を成形し、口縁部~頭部に縦位の突帯を施し、縦位の沈線、刺突で器面を削付けた後、横位の沈線を充填する。横位の沈線を施した後、肥厚部の上端、縦位の貼付突帯上、口縁部~頭部の沈線間に、同一の棒状工具で刻目、刺突を施すと考えられる。胴部は単節斜行縄文RLとLRを結節して縦位に施す。993も同様の文様構成であるが、結節する胴部の方向が992と逆である。結節部には無節斜行縄文Lが確認できる。口縁部から頭部にかけて焼成後に外面より穿孔した補修孔が2か所確認できる。

994~997は口唇部外端の肥厚部に縄文を施す一群である。994・995は胴部に結節縄文を施す。994は995と口唇部外端部の肥厚部や胴部文様等が類似するが、口縁



第 350 图 新石器 (6)



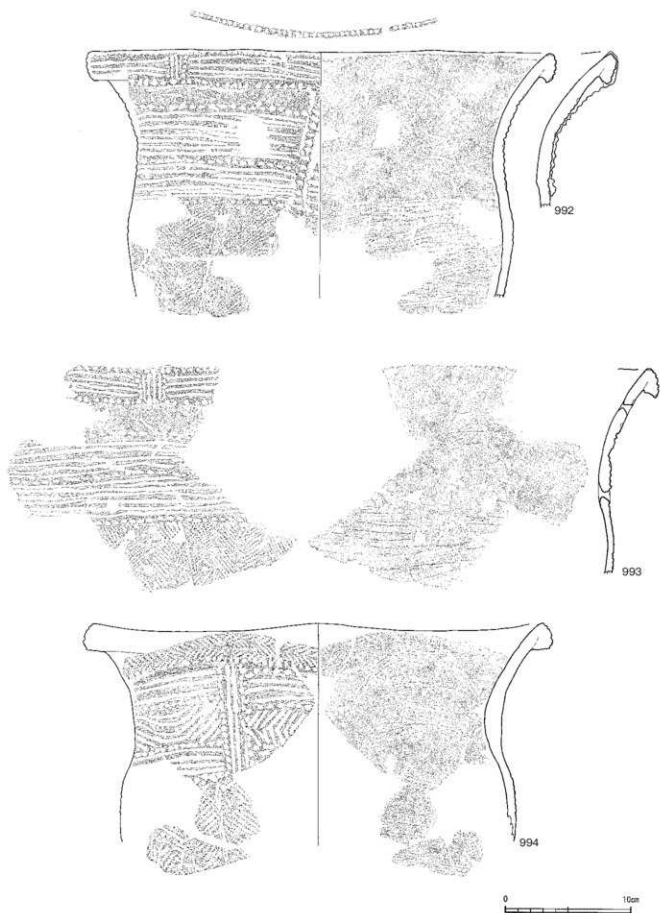
第 351 図 Ⅷ類土器 (7)

部から頭部の肥厚部下は横位の沈線のみで刺突を施さない箇所がある。995 は肥厚部の上位に単節斜行縄文 RL を、下位に単節斜行縄文 LR を横位に施し、肥厚部下端に刻目を入れる。口縁部から頭部は、縦位の沈線、刺突を施文後、横位の沈線、刺突を施す。頭部付近の横位の刺突間には、沈線による重弧状、「く」の字状のモチーフを描く。胴部は単節斜行縄文 LR と単節斜行縄文 RL の原体を結節して縦位に施したと考えられる。結節部には、無節斜行縄文 R と無節斜行縄文 L の両者が確認できる。ただし、結節部が「S」字状、「Z」字状を呈さないため、原体押圧の可能性もある。996・997 は肥厚部下より口縁部から頭部に縦位の刻目突帯や瘤状突起を貼り付けた後、口縁部のやや下がった位置より横位の沈線、刺突を施す。文様、胎土、調整等が類似することから同一個体の可能性が高いと考えられる。996 は肥厚部に単節斜行縄文 LR を横位に施す。肥厚部下より縦位の刻目突帯とその下にやや小ぶりの瘤状突起を貼り付けた後、横位の沈線を 3 条施し、その上下端に横位の刺突を

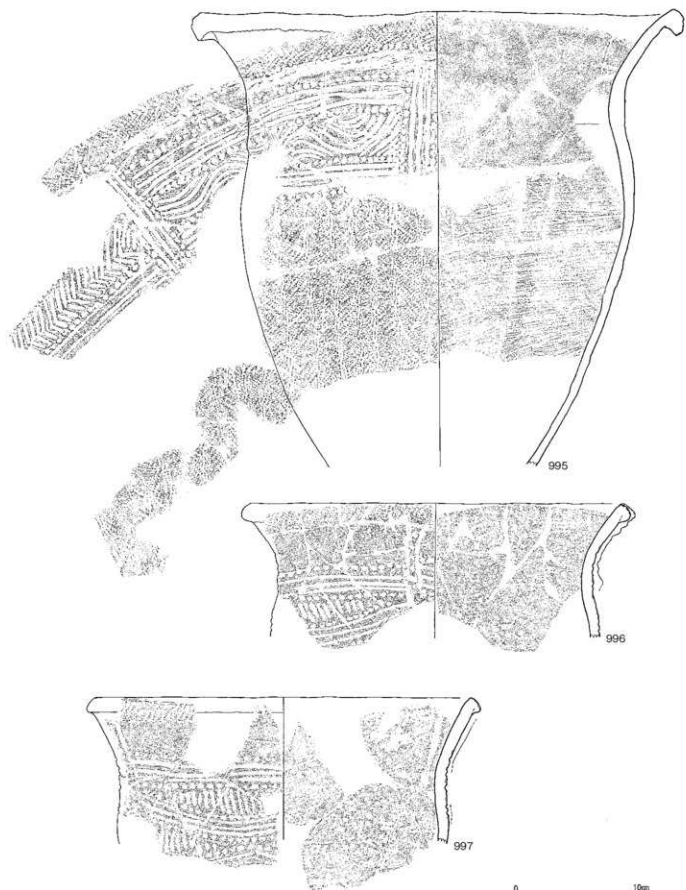
施文する。胴部は瘤状突起より連弧状に沈線を施す。997 の胴部文様より 996 の連弧状の沈線の両端にも刺突を施したと考えられる。その後、横位の刺突と連弧状の刺突との間に短沈線を施す。997 は胴部の連弧状の沈線、刺突より下に斜位の沈線、刺突や縦位の短沈線が確認できる。

998～1011 は口縁部から頭部に縦位もしくは斜位の沈線を施す一群である。

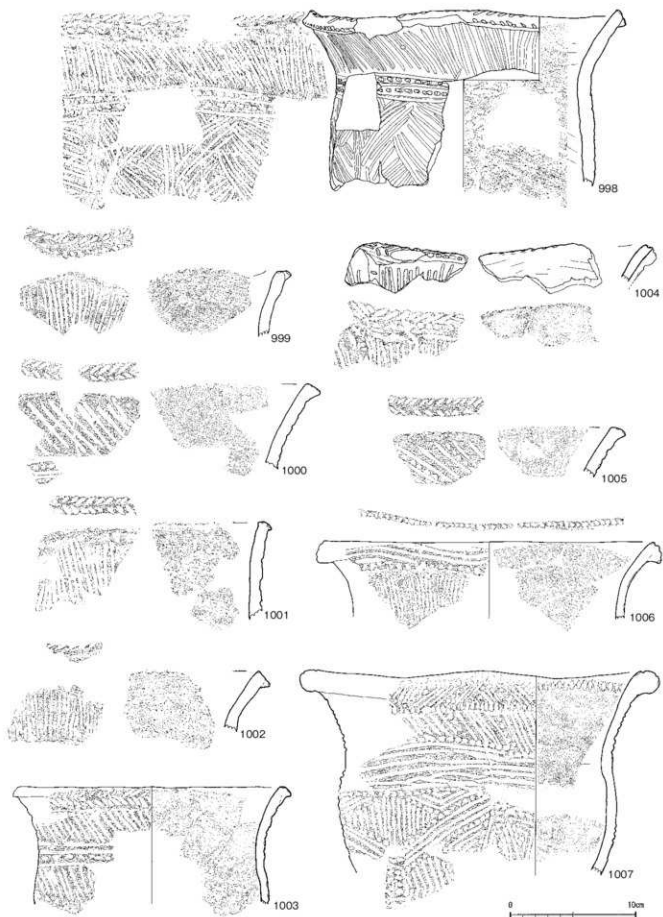
998～1005 は口唇部外端の肥厚部に羽状の刺突を施す一群である。998 は 4 単位の波状口縁を呈すると考えられる。頭部に横位の沈線を 3 条施文後、沈線間に刺突を施す。その後、肥厚部下より口縁部から頭部に斜位の沈線を施す。胴部は縦位の沈線で器面を割付けた後、斜位の沈線を施す。999～1002 も口縁部から頭部にかけて、998 と同様の施文を行っている。999 は波状口縁を呈すると考えられる。1003 は口縁部から頭部に縦位の沈線、刺突を施文した後、胴部との境付近に横位の沈線、刺突を施す。その後、口縁部から頭部に斜位の沈線を施文す



第 352 図 双類土器 (8)



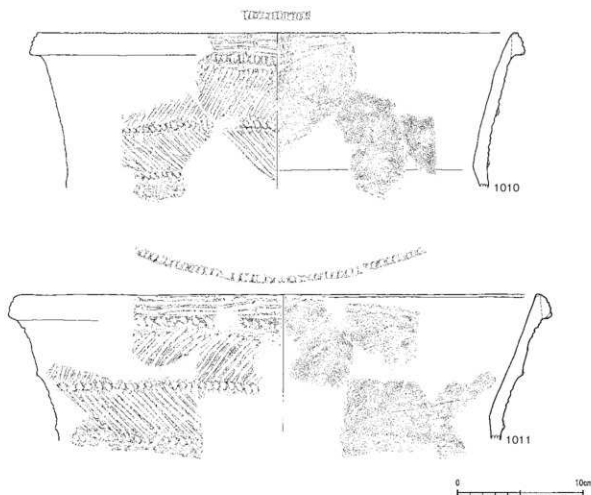
第353图 卣類土器(9)



第 354 图 双鬲土器 (10)



第 355 图 双耳土器 (11)



第 356 図 XV類土器 (12)

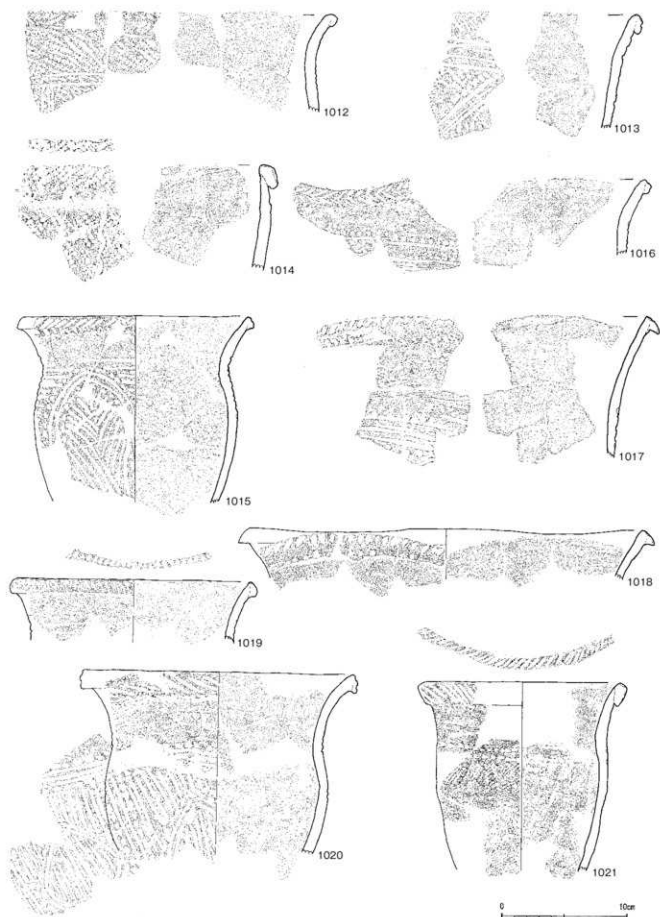
る。胴部は斜位の刺突を施す。斜位の刺突と胴部境付近の横位の沈線と区画された中に斜位の沈線を充填する。1004 は波状口縁を呈すると考えられる。口縁部外面に縦位の突帯を貼り付けた後、口唇部外端の肥厚部を成形する。波頂部には斜位の沈線を、口縁部外面には縦位の沈線を施す。1005 は口縁部外面に斜位の沈線を施し、一部沈線間に刺突を施文する。

1006～1008 は口唇部外端の肥厚部に沈線を施し、上下端に刻目を入れる一群である。1006 は肥厚部に波状の沈線を施す。口縁部から頸部には浅い沈線を縦位に密に施す。1007 は丸みを帯びた口唇部外端の肥厚部に斜位の沈線、刺突を施す。肥厚部よりやや下がった位置に、横位の浅い沈線を数条施した後、沈線の上下端に横位の刺突を1段ずつ施す。その後、肥厚部下の口縁部に斜位の沈線と刺突を施す。胴部は長さの異なる刻目突帯を縦位に交互に貼り付けた後、刻目突帯の上端部間に3本1単位の斜位の沈線を施す。その後、沈線の両端に刺突を施文し、胴部の割付けを行う。斜位の沈線と刺突で菱

形状の区画を作り、「V」字状のモチーフを描いた後、菱形の区画内に縦位の沈線を充填する。刻目突帯間を結ぶ斜位の沈線、刺突より下は、「く」の字状、逆「く」の字状のモチーフを沈線で描く。一部沈線間に刺突を施す箇所もある。1008 は肥厚部に横位の沈線を施す。口縁部以下の文様は、1007 に類似するが刻目突帯上位の頸部付近に粒状の突起を貼り付ける。

1009～1011 は口縁部から頸部に刻目突帯を施した後、斜位の沈線を上下方向を変えて施文する一群である。1010・1011 は文様、胎土、調整等が類似することから、同一個体の可能性が高いと考えられる。1009 は胴部に単節斜行縄文LRと単節斜行縄文RLの原体を結節して縦位に施す。結節部には無節斜行縄文Rが確認できる。

1012～1014 は口唇部外端部に折り返し口縁状の肥厚部をもち、口縁部から頸部に単節斜行縄文を施す一群である。1012 は肥厚部に斜位の沈線を施し、口縁部から頸部に単節斜行縄文LRを縦位に施し、頸部付近に横位の沈線、刺突を施す。横位の沈線、刺突より下に縦位の



第 357 图 双纹土器 (13)

沈線を施文する。1013は肥厚部に斜位の沈線を施し、口縁部から頭部にかけて単節斜行縄文RLを横位に施し、肥厚部下に沈線を横位に施す。その後、斜位の沈線、刺突を施す。1014は肥厚部に単節斜行縄文LRを横位に施し、口縁部から頭部に単節斜行縄文LRを結節したものを縦位に施す。結節部は0段rの捻りが確認できる。

1015~1035は肥厚部直下に無文帯を有し、その下位に横位の沈線、刺突を施す一群である。

1015~1028は口唇部外端の肥厚部に羽状の刺突、斜位、縦位の沈線を施す一群である。斜位の沈線間に刺突を施すものや、口縁部から頭部が無文だけのものも含む。1015は口縁部から胴部下半まで復元することができる。頭部から胴部に2本1単位の沈線で逆「U」字状のモチーフを描き、両端に刺突を施し、器面の割付けを行う。その後、頭部から胴部上半に横位の沈線、刺突を施す。逆「U」字状の区画内は斜位の沈線を数本施文後、方向を変えて施す。また、一部沈線間に刺突を施文する。1016・1017は992などと文様が一部類似するため、口縁部から頭部に縦位の沈線、刺突を施文する一群の一部の可能性もある。1018は肥厚部の上下端より刺突を施す。1019は肥厚部に直線状の縦位、斜位の沈線を施した後、上端部にも刻目を施す。1020・1021は口縁部から胴部下半まで復元することができる。1020は肥厚部に右下がり斜位の沈線を施す。胴部に縦位の沈線と刺突を一定の間隔で施文した後、胴部下半に弧状のモチーフを沈線で描き、沈線に沿って刺突を施す。横位、縦位の沈線で割付けられた内部や弧状のモチーフの内部に縦位の沈線を施す。1021は肥厚部に右下がり斜位の沈線を施した後、肥厚部上端に刻目を入れる。頭部に横位の刺突を2段施した後、無節斜縄文Lを胴部上半は横位に、胴部下半は横位、縦位に施す。1022は口唇部外端に貼り付けた肥厚部との接合痕が明瞭に確認できる。肥厚部には右下がり斜位の沈線を施した後、右上がり斜位の沈線を施す。1023は口唇部外端部が僅かに肥厚している。肥厚部上端に刻目を入れている。口縁部下位から頭部には、単節斜行縄文RLを横位に施文後、横位の沈線、刺突を施す。1024は肥厚部に斜位の沈線を明瞭に施し、肥厚部下端に刻目を入れる。1025は波状口縁を呈すると考えられる。1025は肥厚部に斜位の明瞭な沈線を数本施した後、方向を変えて施文している。肥厚部下端には、明瞭な刻目を施す。1026・1027は肥厚部の上下端に刻目を入れる。1028は肥厚部に斜位の沈線と山形モチーフを描いた後、沈線間に列点状の刺突を施文する。肥厚部の上下端には、刻目を入れる。

1029~1032は口唇部外端の肥厚部に横位の刺突を密接に施す。肥厚部直下は無文とし、肥厚部よりやや下がった位置より横位の沈線、刺突を施す一群である。1029は肥厚部の上下端に刻目を入れる。胴部境との頭

部に刻目突帯を施し、口縁部下位から頭部の横位の沈線、刺突と刻目突帯間には、波状の沈線を施す。1030は肥厚部に縦位の刺突を6段施した後、横位の刺突を4段施し、肥厚部上端に刻目を入れる。1031は肥厚部上端に刻目を入れるが、下端はほとんどが欠損している。

1033は口唇部外端が僅かに肥厚する。肥厚部には縦位の短沈線を施す。口縁部外面には刻目突帯を1段施す。さらに、それよりやや下がった位置に横位の刺突を施す。肥厚部と刻目突帯の間に、焼成後に内外面から穿孔した補修孔が1か所確認できる。

1034・1035は口唇部外端の肥厚部の上下端に刻目を入れる一群である。1034は肥厚部に横位の沈線を施す。口縁部から頭部に横位の刺突を2段施文した後、縦位の沈線を施す。1035は胴部に斜位の沈線、刺突を施す。

1036は口唇部外端の肥厚部に縦位の刺突を施し、幅広い突帯を縦位に貼り付け、突帯上位に横位の沈線を施す。口唇部内面に棒状工具で円形の刺突を施し、その周囲に同心円状の沈線を施文する。同心円状の端部より、斜位や横位の沈線を施す。

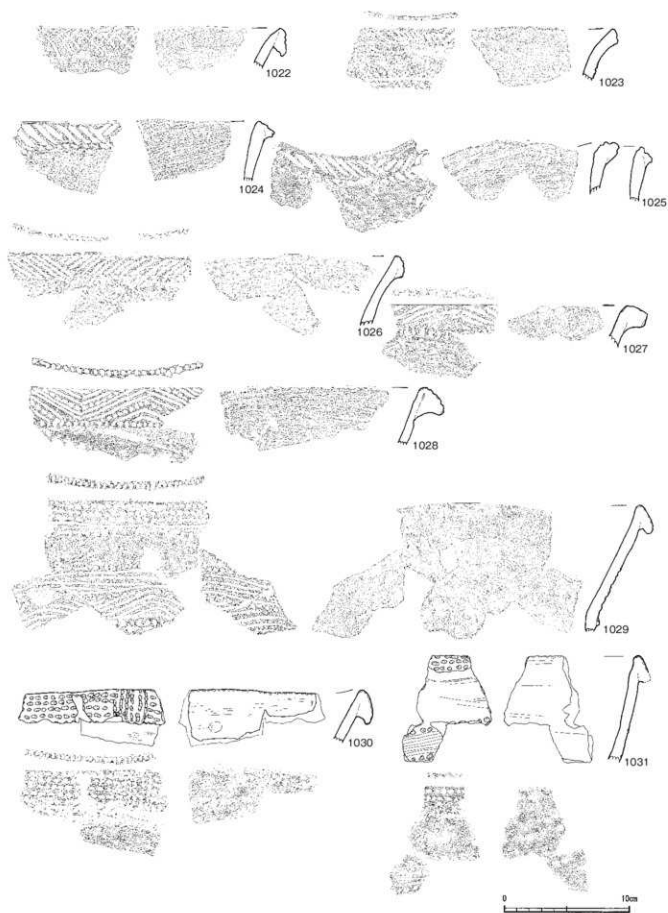
1037~1100は口縁部上位がやや肥厚する一群である。口唇部外端に肥厚部をもつものに比べ、肥厚部はさほど厚くない。肥厚部には沈線文、刺突文、縄文等を施す。口縁部上位がやや肥厚する一群と同様の文様をもち、口縁部上位が肥厚しないものも含む。口縁部上位の肥厚部、肥厚部下から胴部にかけての文様構成や文様要素等により細分した。

1039~1047は肥厚部に羽状の沈線を施す一群である。

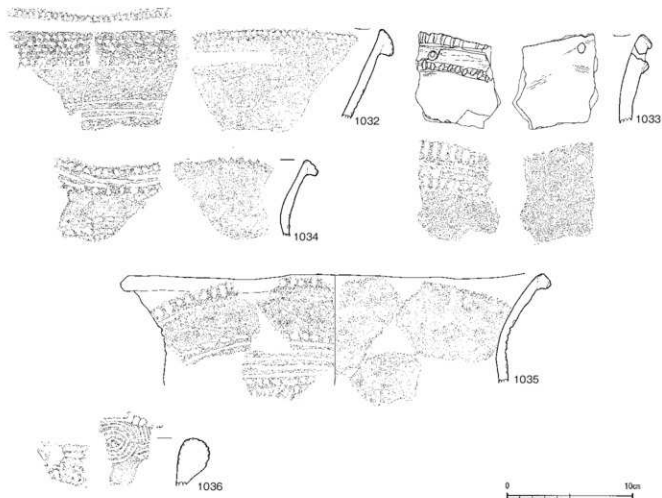
1037・1038は肥厚部下から頭部に縦位の押引状の連続刺突を施した後、横位の連続刺突を施し、刺突間に波状の沈線を施す一群である。いずれも波状口縁を呈すると思われる。1037は頭部と胴部の境付近に横位の連続刺突が確認できる。

1037~1041は肥厚部下から頭部に横位の沈線、刻目突帯を施した後、沈線間、刻目突帯間に刺突を施文する一群である。胴部には単節斜行縄文RLを横位に施文する。1039・1040は波状口縁を呈すると考えられ、1039は口縁部が3分の1程度残存しており、4単位の波状口縁となる可能性が高い。

1042~1047は肥厚部の上端にあたる口唇部にのみ刻目を入れ、肥厚部下から頭部に横位の刻目突帯を施す一群である。1044には刻目突帯がないが、文様、調整等が1043と類似することから、ここに含めた。いずれも波状口縁を呈すると考えられる。1042は肥厚部に羽状の太めの沈線を施す。波頂部のみ肥厚部は羽状の沈線の下位の部分のみ施し、上位は重弧文状の沈線を施す。その後、沈線間に刺突を2段施文する。肥厚部下から頭部にかけて刻目突帯を2段施し、間隔を空けて胴部との境付近に1段施す。刻目は肥厚部の沈線の施文に用いた棒状



第358图 双鬲土器(14)



第 359 図 Ⅷ類土器 (15)

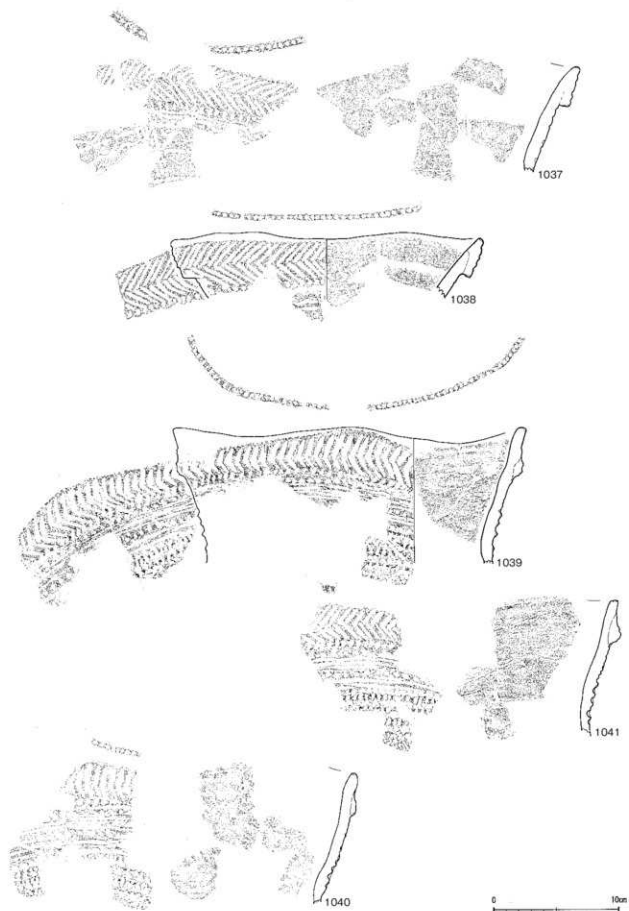
工具で、突帯の下方より施している。胴部は単節斜行縄文LRを横位に施文したと考えられるが、無節斜行縄文Rが確認できる結節部は縦位の施文であり、縄文と結節部を分けて施文したのか判然としない。1043・1044は肥厚部の上方と下方からそれぞれ棒状工具を押し当てて施文を行っている。1045は肥厚部と口縁部下位の刻目突帯の間に、1047は肥厚部下の刻目突帯の下に沿うように波状の浅い沈線を施す。1046は肥厚部のやや間延びした羽状の沈線間に、横位の波状の沈線を施す。また、肥厚部と肥厚部下の刻目突帯の間にも同様の波状の沈線を施す。

1048～1057は口縁部上位の肥厚部に沈線や刺突、押し引きで渦文状のモチーフを描く一群である。なお、口縁部上位は肥厚しないものの、同様の文様をもつものは本群とした。

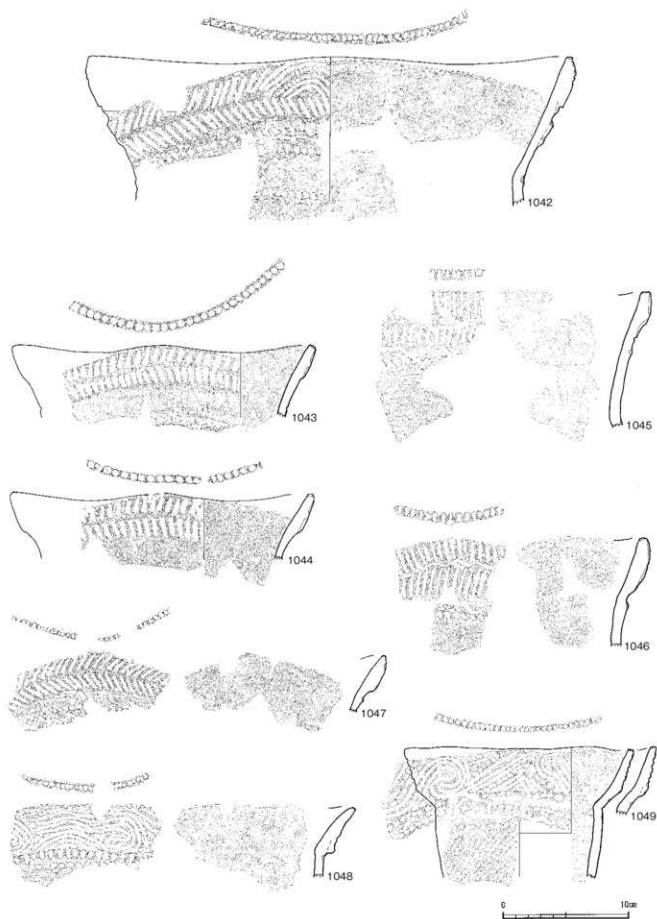
1048～1052は口縁部上位に沈線のみ、もしくは沈線と1段の刺突で施文を行う一群である。1048は肥厚部に波状の沈線で渦文状のモチーフを描き、肥厚部の上端に

刻目を、下端に刻目突帯を施す。肥厚部下の縫れ部に刺突を横位に1段施す。1049は肥厚部の渦文状のモチーフ間に斜位の沈線を施文する。沈線間に1段の刺突を施すが、一部2段の刺突を施文する箇所がある。その後、肥厚部の上下端に刻目を入れる。頸部には刺突を2段施文し、刺突間に波状の沈線を施す。胴部は単節斜行縄文RLを縦位に施す。1050は口縁部は肥厚しないが、渦文状のモチーフを沈線と1段の刺突で描く。1049同様に一部刺突が2段の箇所がある。口唇部外端と口縁部下位に横位の刺突を1段ずつ施す。口唇部に刻目を入れる。1051は肥厚部に沈線と「C」字状の刺突を施し、肥厚部の上下端に刻目を入れる。1052は渦文状のモチーフは確認できないが、口縁部外面に波状の沈線や1段の刺突を施すことから、その一部と考え、ここに含めた。口唇部に羽状の刺突を施す。

1053～1055は口縁部上位に沈線と2段の刺突で施文を行う一群である。いずれも波状口縁を呈すると思われる。1053は口縁部～胴部上半を復元することができ



第360图 刃類土器(16)



第361图 双鬲土器(17)

る。4単位の波状口縁を呈すると考えられる。肥厚部は沈線で渦文状のモチーフを描く。沈線間に2段の刺突を施す。肥厚部の上端にあたる口唇部に刻目を入れる。頸部は横位の刻目突帯や波状の沈線を施す。頸部と胴部の境付近に刻目突帯を1段施した後、胴部は単節斜行縄文LRの原体を結節したものを縦位に施す。結節部には無節斜行縄文Rが確認できる。1054は沈線や2段の刺突で渦文状のモチーフを描いたと考えられる。肥厚部の上端に刻目を、下端に刺突を施す。肥厚部下の口縁部下位に横位の鋸歯状の沈線を施す。1055は文様、胎土、調整等が1054と類似することから同一個体の可能性が高いと考えられる。

1056・1057は肥厚部に押し引きで渦文状のモチーフを描く一群である。いずれも口唇部に刻目を入れる。1056は口唇部外端に横位の刺突を、口縁部下位に押し引き状の横位の連続刺突を1段ずつ施す。1057は肥厚部を押し引きで施文を行うが、施文具が器面から離れ、一部刺突状を呈する箇所がある。

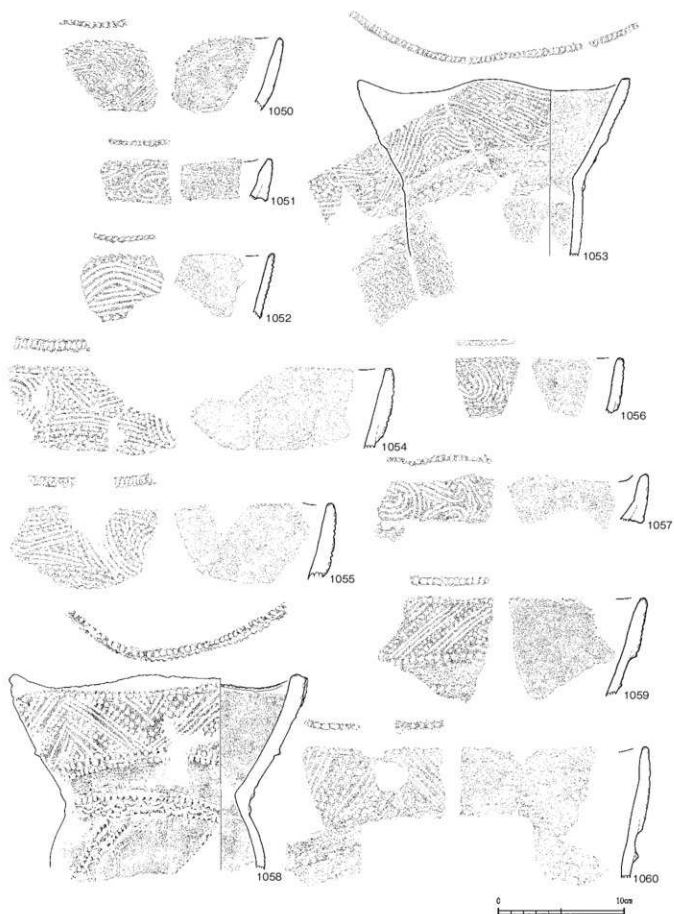
1058～1069は口縁部上位に斜位の沈線と刺突で山形状のモチーフを描く一群である。山形のモチーフは確認できないもののその一部と考えられるものや山形のモチーフが崩れたものも含む。口唇部に刻目を入れ、肥厚部下端に横位の刺突や刻目を施す。1058～1065・1067～1069は、波状口縁を呈すると考えられる。1058～1064は肥厚部下から頸部に横位の刻目突帯を施す。

1058は4単位の波状口縁を呈すると考えられる。肥厚する口縁部外面に斜位の沈線と2～3段の刺突により山形のモチーフを描く。縦位の刻目突帯を施す部分が1か所確認できる。口縁部外面の上位に横位の刺突を施した後、さらに口唇部外内端部にそれぞれ刻目を入れる。口縁部外面の下位には横位の刻目突帯を施した後、その下に横位の刺突を施文する。口縁部外面の上下でそれぞれ2単位の刺突を施文したものと類似したような効果となっている。頸部と胴部との境付近に刻目突帯を2段施し、刻目突帯間に波状の沈線を1条施文する。胴部には2段の刻目突帯を斜位に間隔を空けて施文する。1059は肥厚部に3本の斜位の沈線、2段の斜位の刺突でモチーフを描き、一部波状の沈線も施す。肥厚部の上下端に刻目を入れた後、さらに口唇部にも刻目を入れる。頸部に刻目突帯を1段施す。1060は肥厚部に斜位の沈線、4段の刺突でモチーフを描く。頸部に刻目突帯を1段施し、その下に浅い波状の沈線を2条施文する。1061は1058・1059が口唇部の刻目と口縁部上位の横位の刺突や肥厚部の刻目が一部重なるように施文していたのに対して、肥厚部上端の横位の刺突がやや離れて施文されている。胴部には刻目突帯を3段施す。1062は1061と文様、調整、胎土等が類似することから、同一個体の可能性が高いと考えられる。1063は沈線と2段の刺突でや

や丸みを帯びた山形のモチーフを描く。肥厚部の上端と下端と肥厚部直下に2段の刺突を施す。頸部付近には刻目突帯を2段施す。1064は文様、胎土、調整等が1063と類似することから、同一個体の可能性が高いと考えられる。1065・1066は肥厚部下端に棒状工具を器面に対して縦位に当て刺突を行うため、他と異なり短沈線状を呈している。肥厚部には斜位の沈線と刺突を施す。肥厚部下位には鋸歯状の沈線を施す。1067は肥厚部を斜位の沈線、1～2段の刺突で山形のモチーフを描き、山形の区画内に鋸歯状の沈線を施す。肥厚部下端に刻目を入れ、同様の施文具で肥厚部直下に米粒状の刺突を行う。いずれも施文具を器面に対して縦位に当てていると考えられる。1068は肥厚部を浅い沈線と押し引き状の連続刺突でモチーフを描く。肥厚部下端に刻目を入れる。1069は肥厚部の上下端に横位の刺突を1段施した後、肥厚部に斜位の沈線、2段の刺突を施す。刺突と斜位の沈線間に鋸歯状、波状の沈線を施す箇所がある。肥厚部下端の刺突の下、頸部、頸部と胴部境付近に横位の刺突を1段ずつ施し、刺突間に斜位の沈線を上下方向を違えて施文する。胴部は単節斜行縄文LRを施しているが、糸と節がほとんど残存していないため、施文の方向は判然としない。横位の刻目突帯を施し、その下に鋸歯状の沈線を描く。

1070～1073は口縁部上位の肥厚部もしくは口縁部上位に斜位の沈線や刺突で「く」の字状、逆「く」の字状のモチーフを描く一群である。「く」の字状のモチーフがやや崩れている1073も含む。いずれも波状口縁を呈すると考えられる。1070～1072は口唇部に刻目を入れる。1070は肥厚部に斜位の明瞭な沈線と逆「く」の字状のモチーフを描き、沈線の屈折部に横位の刺突を施す。その後、肥厚部の上下端に刺突を施文する。頸部に横位の刻目突帯を施す。1071は口縁部上位に4段の刺突を施す。1072は肥厚部に斜位の沈線と3段の刺突で「く」の字状のモチーフを描き、肥厚部の上下端は、それぞれ2段の刺突を施す。1073は肥厚部に斜位の沈線と2段の刺突でモチーフを描き、肥厚部上下端にそれぞれ1段の刺突を施し、肥厚部直下にも横位の刺突を1段施文する。肥厚部下端から頸部にかけて斜位の刻目突帯を施した箇所が僅かに確認でき、「ハ」の字状に2段貼り付けたと考えられる。施文は横位の刺突より先である。

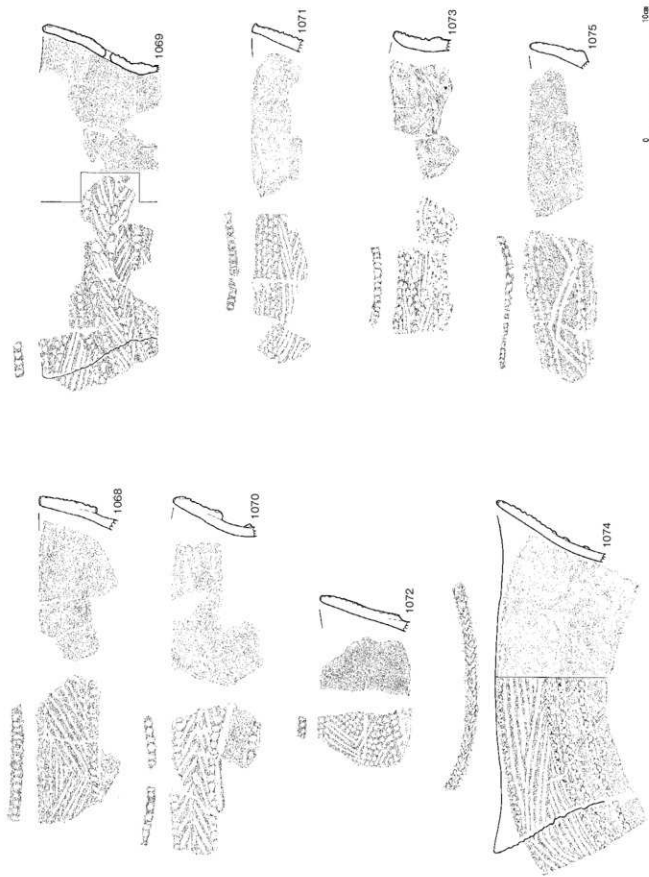
1074～1079は口縁部上位の肥厚部もしくは口縁部上位の上下端に横位の刺突、刻目突帯を施し、その内部に沈線のみでモチーフを描く一群である。1074・1075は山形、1077～1079は「く」の字状のモチーフを描くと考えられる。いずれも波状口縁を呈すると考えられる。1074は口唇部に羽状の刺突を、頸部に刻目突帯を2段施す。1075は肥厚部上下端に、それぞれ2段の押し引き状の連続刺突を施す。1076は肥厚部上端に2段、下端に1段の押



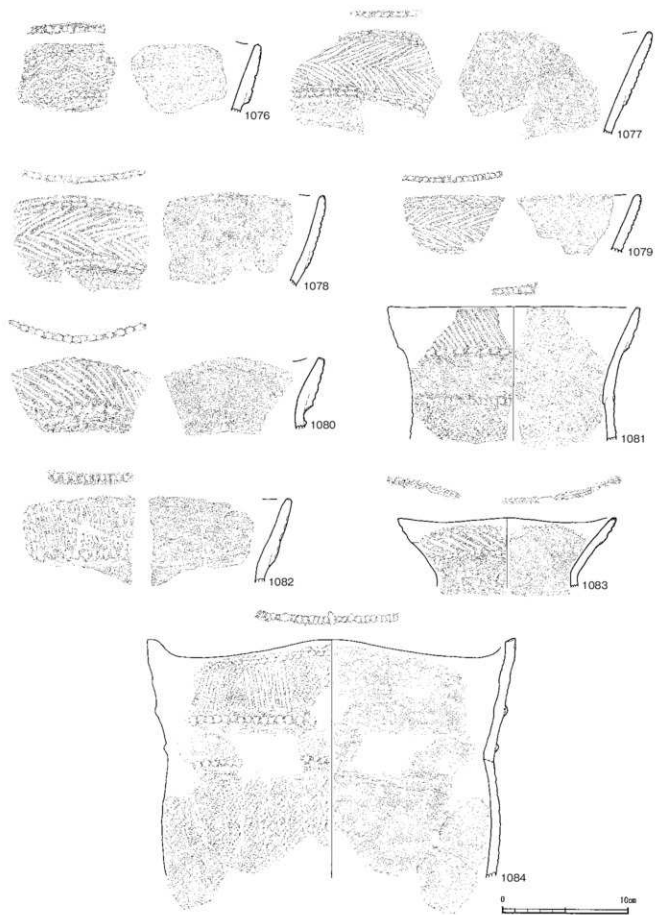
第362图 刃類土器(18)



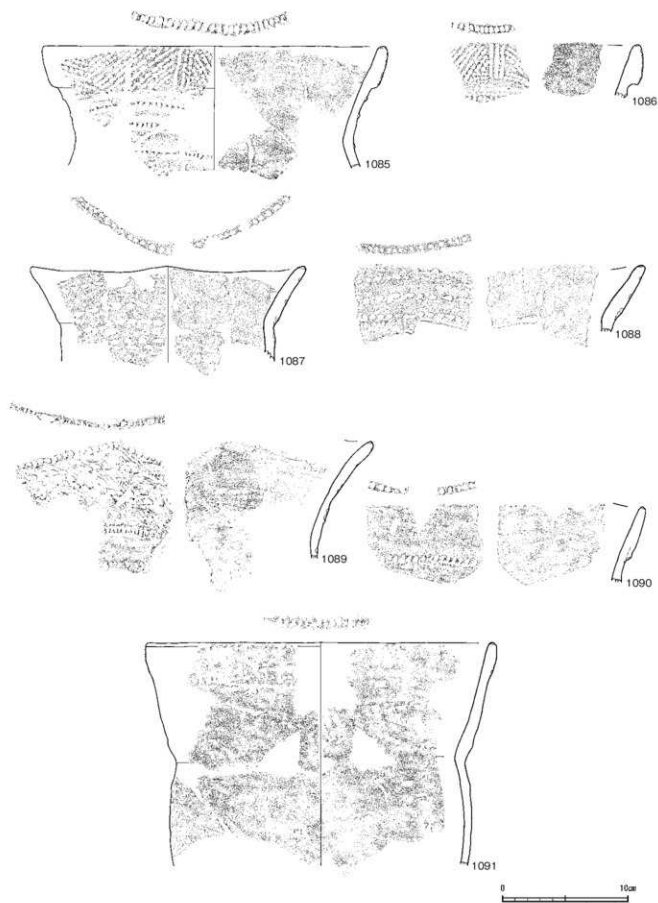
第363图 双纹土器(19)



第 364 図 新野土器 (20)



第365图 双纹土器(21)



第 366 图 卣類土器 (22)

引き状の連続刺突を施す。肥厚部に波状の浅い沈線を3条施す。

1080~1084は口縁部上位の肥厚部もしくは口縁部上位に斜位の沈線を主体とした施文を行う一群である。いずれも口唇部に刻目を入れる。1080・1083・1084は波状口縁を呈すると考えられる。1080~1082は肥厚部の下端のみに横位の刺突を施す。1083は肥厚部の上下端に横位の刺突を施す。1084は肥厚しない口縁部上位の先端には横位の刺突、下端には刻目突帯を巡らす。1080は頸部に刻目突帯を1段施す。1081の頸部は無文で、胴部は単節斜行縄文LRを結節したものを縦位に施す。1082は肥厚部の沈線間に縦位の刺突を施す。1083は口縁部が大きく外反する器形である。肥厚部に斜位の浅い沈線を施す。1084は口縁部上位に単節斜行縄文RLを間隔を空けて縦位に施した後、その間に斜位の沈線を密接して施文する。口縁部下位と頸部と胴部境付近に、刻目突帯を施す。胴部は単節斜行縄文RLを結節したものを縦位に施す。結節部には無節斜行縄文Lが確認できる。

1085~1091は口縁部上位の肥厚部もしくは口縁部上位に刺突を主体とした施文を行う一群である。口唇部には刻目を入れる。1085は肥厚部に縦位の連続刺突を3段施した後、斜位の連続刺突で「V」字状のモチーフを描く。頸部に刻目突帯を3段施し、胴部に単節斜行縄文RLを施す。条と節がわずかに確認できる程度で、施文の方向は不明である。1086は文様、胎土、調整等が1085と類似することから、同一個体の可能性が高いと考えられる。ただし、肥厚部の縦位の連続刺突の下位の両端部分に横位の連続刺突を部分的に施す。1087は波状口縁を呈すると考えられる。肥厚部に刺突を横位に3段、頸部に2段施す。1088は文様、胎土、調整等が1087と類似することから、同一個体の可能性が高いと考えられる。1089は口縁部が大きく外反し、波状を呈すると考えられる。口縁部外面に無節斜行縄文Lを縦位に施した後、口唇部外端部に横位の刺突を1段、やや下がった位置に1段施し、その下に波状の刺突を2段施す。頸部に縦長の刺突を横位に2段、頸部と胴部との境付近に刺突が一部確認できる。1090は波状口縁を呈すると考えられる。肥厚部の下端に施文具の先端を右上がり斜位に傾けて、横位の刺突を行う。1091は口縁部上位に横位の刺突を施し、口唇部に刻目を入れる。横位の刺突の上に、波状の短沈線が一部確認できる。頸部以下は無文である。胴部に煤状の付着物が確認できる。

1092~1099は口縁部上位の肥厚部に縄文もしくは結節縄文の結節部を施す一群である。口唇部に刻目を入れる。1092は波状口縁を呈すると考えられる。断面より肥厚部を成形した際の接合痕が確認できる。肥厚部に単節斜行縄文LRを横位に施す。肥厚部の下端の下方より刺突を施す。また、頸部に施文した刺突が一部確認でき

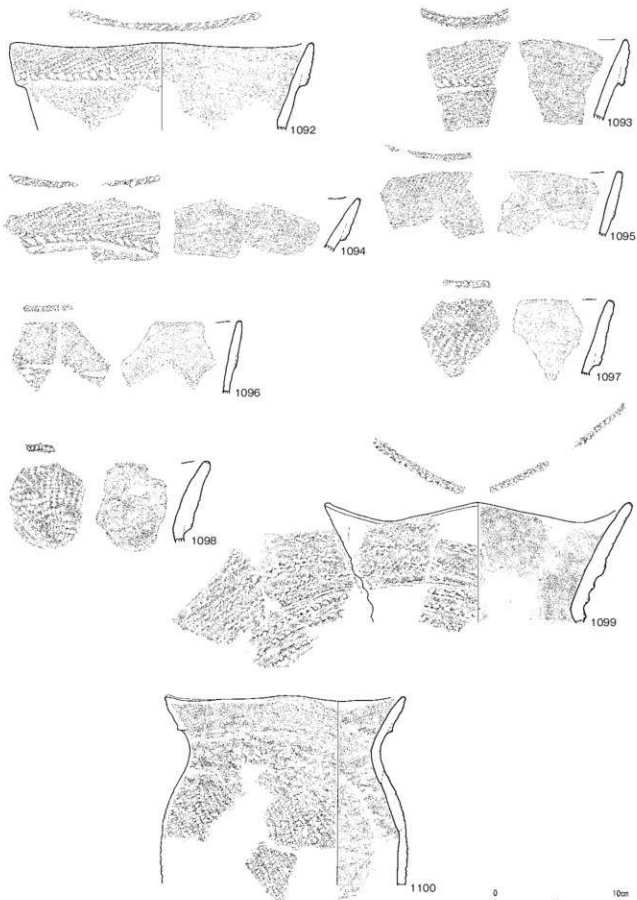
る。1093・1094は文様、胎土、調整等が1092と類似することから、同一個体の可能性が高いと考えられる。1095は緩やかな波状口縁を呈すると考えられる。口縁部上位がわずかに肥厚し、肥厚部に単節斜行縄文LRを横位に施す。1096は文様、胎土、調整等が1095と類似することから、同一個体の可能性が高いと考えられる。1097・1098は肥厚部上位に単節斜行縄文RLを、下に単節斜行縄文LRを横位に施文する。肥厚部の下端に横位の刺突を1段施す。1098は波状口縁を呈すると考えられる。1099は口縁部が大きく外反し、4単位の波状を呈すると考えられる。肥厚部に結節縄文の結節部のみを横位に3段施す。結節部は無節斜行縄文Rが確認できる。頸部に刻目突帯を3段施文する。

1100は口縁部から胴部上半までで復元することができる。4単位の波状口縁を呈すると考えられる。胴部上半がやや丸みを帯びる器形であるが、内面には成形時の内傾接合痕や指おさえ痕が確認できる。口縁部上位がわずかに肥厚する。肥厚部、頸部は無文である。胴部は単節斜行縄文LRを縦位に施す。

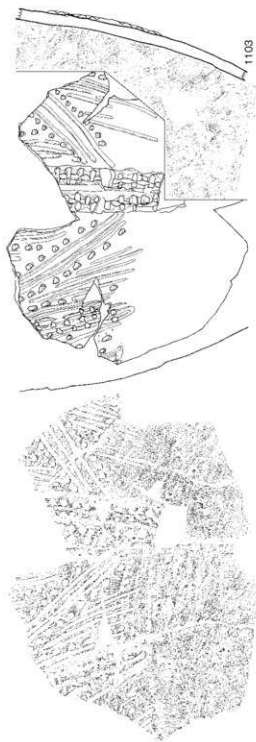
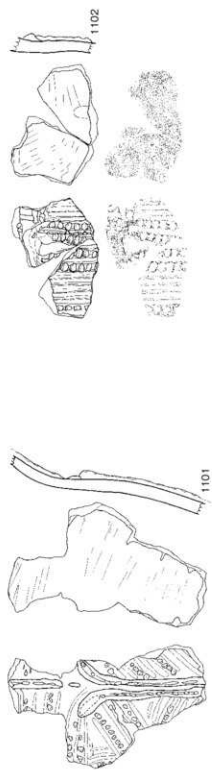
1101~1145は胴部である。一部底部付近までのものも含む。

1101~1118は縦位の刻目突帯、突帯を施す一群である。

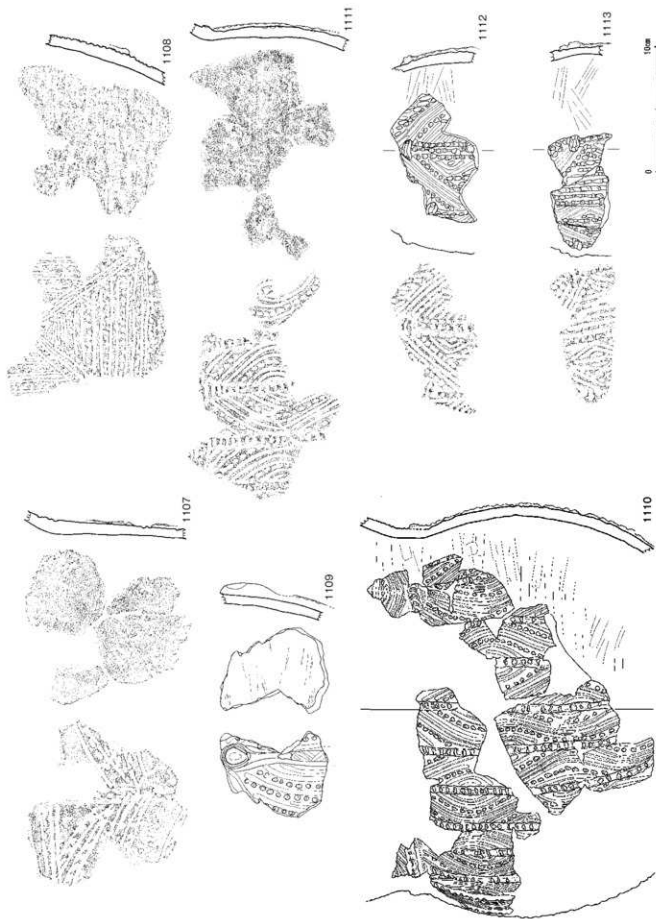
1101~1108は縦位の刻目突帯を施文後に、横位、縦位、斜位の沈線、刺突を施す一群である。1101は口縁部下位から胴部下半と考えられる。口縁部下位から頸部にかけて縦位の刻目突帯を施文後に、横位の沈線、刺突を施す。胴部は左右向きの異なる蕨手状の刻目突帯を縦位に施した後、斜位の沈線を施文する。沈線間には縦位の浅い沈線や刺突を施す。1102は頸部から胴部上半付近であるとされる。頸部には横位の沈線、刺突を施文後、縦位の沈線を施す。胴部は刻目突帯を逆「U」字状に貼り付け、さらにその内側に縦位の刻目突帯を2本施す。刻目突帯の両端に、縦位の浅い沈線、刺突を施す。1103は胴部下半とされる。縦位の刻目突帯を4本もしくは3本施す。4本の刻目突帯を垂下させ施文した部分は、1102より逆「U」状の刻目突帯とその内部に貼り付けた2本の刻目突帯の下部付近とされる。刻目突帯間は斜位の沈線、刺突を施す。1104は縦位の刻目突帯を2本施文後、頸部付近に横位の沈線、刺突を施した後、刻目突帯の両端より斜位の沈線、刺突を施す。横位、斜位の沈線、刺突で区画された内部に、縦位の沈線を施す。1105は縦位の刻目突帯を2本施した後、1104と同様の割付けを行い施文しているが、1104が2本の刻目突帯の刻目が羽状を呈するのに対して、1105は2本とも右下がりの斜位の刻目を施す。1106は頸部と胴部境付近から胴部上半の一部とされる。頸部と胴部境付近は、横位の沈線、刺突を施す。胴部は頸部より下がった位置に縦



第367图 双纹土器 (23)



第 368 图 西汉时期 (24)



第 369 图 西汉时期 陶器 (25)

位の刻目突帯を施文する。その後、斜位の沈線を交互に施文し、「V」字状のモチーフを描いていく。一部沈線間に刺突を施す。1107・1108は刻目突帯の下部のみが残存している。1107は頭部から胴部との境付近まで横位の沈線を施した後、胴部は刻目突帯を起点に斜位の沈線を施す。沈線を深く施し、刻目突帯の一部が押し出され、刻目突帯が途切れたような箇所がある。また、斜位の沈線間に刺突を施している。1108は沈線、刺突で「へ」の字状のモチーフで器面を割付けた後、「へ」の字状の上位を縦位の沈線、刺突で、下位を横位の沈線、刺突で施文する。

1109～1114は縦位の刻目突帯を貼り付け後、弧状の沈線、刺突でモチーフを描く一群である。1109は頭部から胴部上半付近と考えられる。楕円状の凹部を呈する瘤状突起を貼り付けた後、やや太めで高さのある刻目突帯を縦位に貼り付ける。刻目は瘤状突起付近の突帯上部に右上がり斜位の刻目を施し、下部に右下がり斜位の刻目を施したと考えられる。その後、瘤状突起付近より弧状の沈線を施し、器面の割付けを行った後、曲線状の沈線と刻目突帯間に、沈線、刺突を施す。1110は口縁部下位から底部下付近と考えられる。胴部中央で膨らみ球状の胴部を呈する。口縁部下位から頭部にかけて、横位、斜位の沈線を施した後、横位の刺突を施す。頭部と胴部境に横位の刻目突帯を1段施す。胴部は縦位の刻目突帯を3.0～3.6cmの間隔で施文する。刻目突帯間は刻目突帯の左右で異なる方向の弧状の沈線、刺突を施し、弧状のモチーフを描く。1112は縦位の刻目突帯の上端部や中間部分に横位の突帯を貼り付け、突帯状に横位の短沈線を施す。縦位の刻目突帯の両端は、縦位の押し引き状の連続刺突をそれぞれ1段ずつ施す。刻目突帯間を斜位の沈線、刺突で割付けを行った後、刻目突帯の両端に沈線で弧状のモチーフを描いたと考えられる。1113も1112と同様、刺突による割付けの方法は類似しているが、刻目突帯の片方にのみ縦位の押し引き状の刺突を行う点や木葉状のモチーフを刻目突帯間に描く点異なる。1114の刻目突帯間の施文は縦位、横位の沈線が主であるが、一部曲線状の沈線、刺突が確認できることからここに含めた。

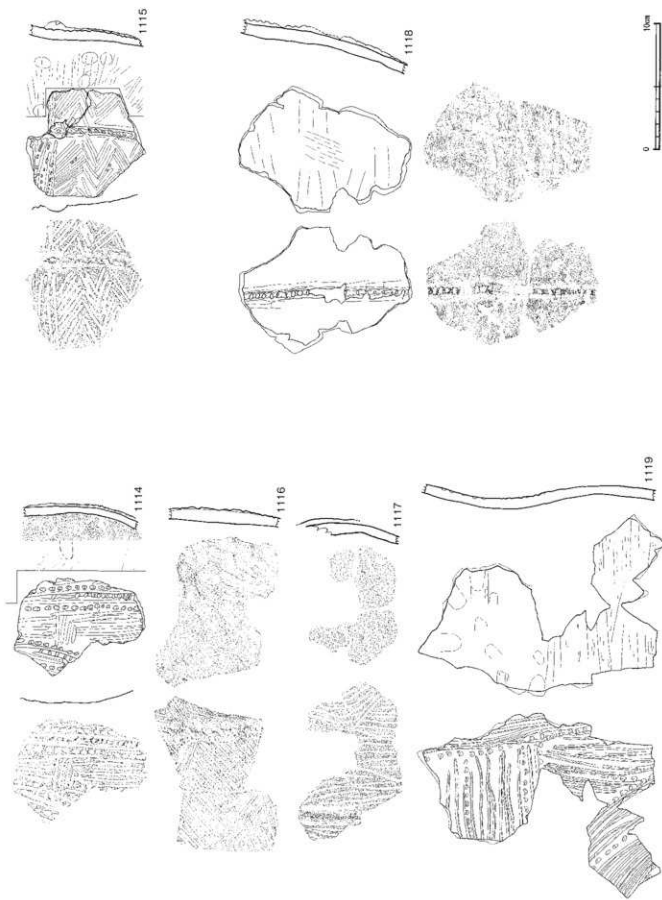
1115～1117は縦位の刻目突帯もしくは突帯施文後に突帯間を沈線のみで施文する一群である。1115は刻目突帯上部に小振りの瘤状突起を貼り付け、突起上に円形の刺突を1か所施す。瘤状突起より上の頭部から胴部との境付近までは、横位の沈線、刺突を施文し、刻目突帯間は、右下がり斜位の沈線を1段施した後、斜位の沈線で「く」の字状のモチーフを描く。1116は縦位の刻目突帯と斜位の浅い沈線で胴部の割付けを行った後、右上がり斜位の浅い沈線で区画内を充填する。1117は縦位の突帯を貼り付けた後、弧状、縦位の浅い沈線を施す。

1118は胴部下半付近と考えられる。縦位の刻目突帯を貼り付けている。刻目突帯の両端は無文である。

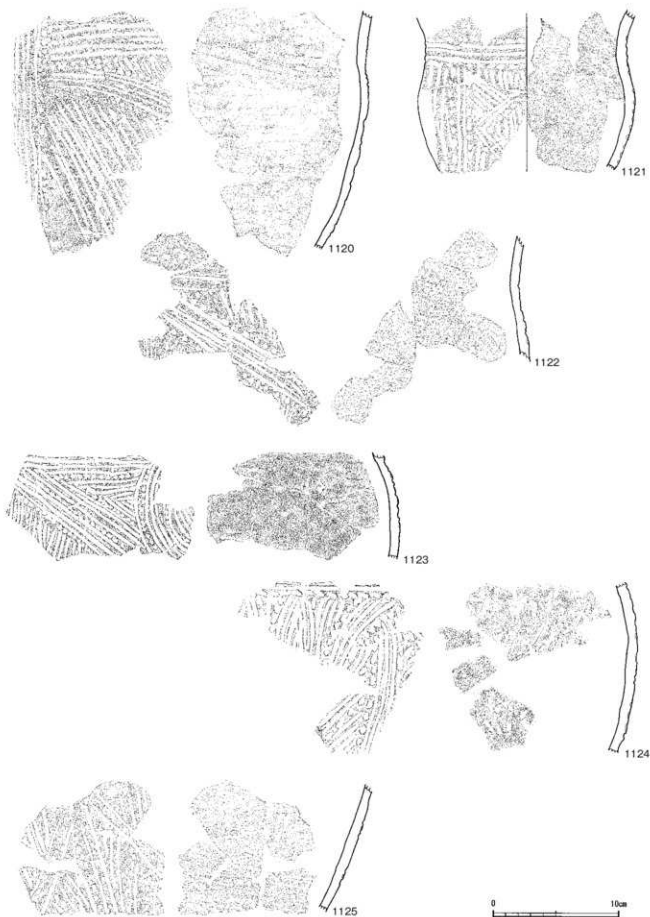
1119～1125は沈線、刺突で施文する一群である。縦位の刻目突帯を施し、沈線、刺突を施文する一群の一部の可能性もある。1119・1120・1122は口縁部下位から胴部上半付近と考えられる。1119は口縁部下位から胴部上半に浅い縦位の沈線、刺突を施し、胴部まで器面の割付けを行った後、頭部と胴部境付近までは横位の沈線、刺突を施す。胴部は縦位、斜位の沈線、刺突を施す。1120は縦位の沈線、刺突による割付けは1119と類似するが、頭部付近の沈線、刺突で区画された内部は斜位の明瞭な沈線を施す点異なる。胴部中央から下半付近は斜位の浅い沈線を施す。1122は口縁部下位から頭部にかけて横位の刺突、沈線を施す。胴部は斜位の沈線、刺突で器面の割付けを行った後、横位、斜位の沈線、刺突で区画された内部は縦位の沈線を、斜位の沈線、刺突より下位は、先端を細く加工した工具で、縦位の沈線を施す。1124は胴部中央がやや膨らむ器形である。頭部と胴部境付近に、横位の沈線、刺突を施し、胴部は弧状の沈線、刺突を施文する。1123は胴部が球状を呈する胴部上半付近である。頭部と胴部境付近に横位の沈線を施文後、弧状の沈線、刺突を施す。その後、斜位の沈線、刺突を施し器面の割付けを行った後、区画内を横位、縦位、斜位の沈線、横位、斜位の刺突で施文する。1121は口縁部下位から胴部下半を復元することができる。口縁部下位から頭部に横位の沈線、刺突を施文後、胴部に縦位の沈線、刺突を施し、胴部中央付近に、斜位の沈線、刺突で菱形のモチーフを描く。その後、縦位の刺突間に縦位の沈線、菱形のモチーフの外側を縦位、斜位の沈線、内側を縦位の沈線で施文する。

1126～1128は主に沈線で施文する一群である。1126は頭部から胴部境付近に横位の刻目突帯を施した後、斜位の浅い沈線で横長の菱形のモチーフを描き、菱形の区画内に縦位の沈線を施す。1127は横位の沈線、斜位の沈線を施した後、縦位の明瞭な沈線を施文する。1128は文様、調整、胎土等が1127と類似することから、同一個体の可能性が高いと考えられる。

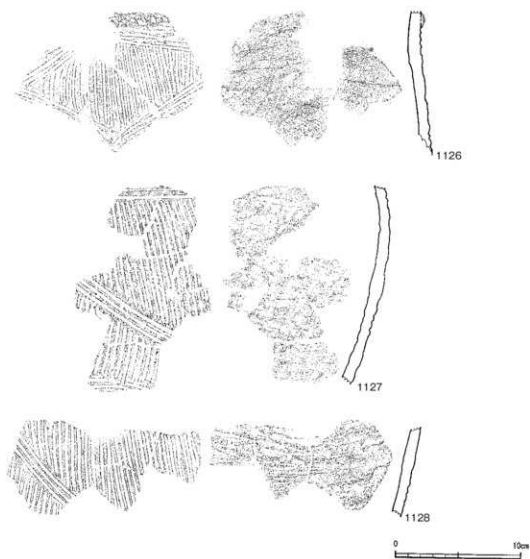
1129～1142は縄文もしくは結節縄文を施文する一群である。結節部のみを施文するものも含む。1129は口縁部下位から胴部上半付近であると考えられる。口縁部下位から頭部にかけて横位の刻目突帯を施し、胴部には単節斜行縄文LRを結節したもの縦位に施す。結節部には無節斜行縄文Rが確認できる。1130は文様、調整、胎土等が1129と類似することから、同一個体の可能性が高いと考えられる。1131は頭部から胴部上半付近と考えられる。頭部から頭部と胴部との境付近に横位の刻目突帯を施し、刻目突帯間に波状の浅い横位の沈線を施す。胴部には単節斜行縄文LRを結節したものを縦位に



第 370 图 西汉时期土器 (26)



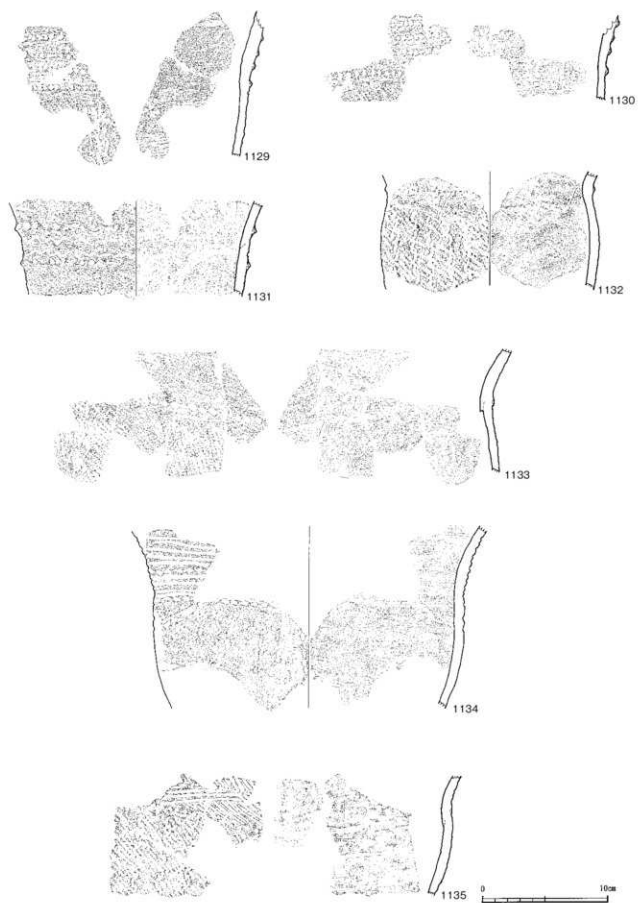
第 371 图 双纹土器 (27)



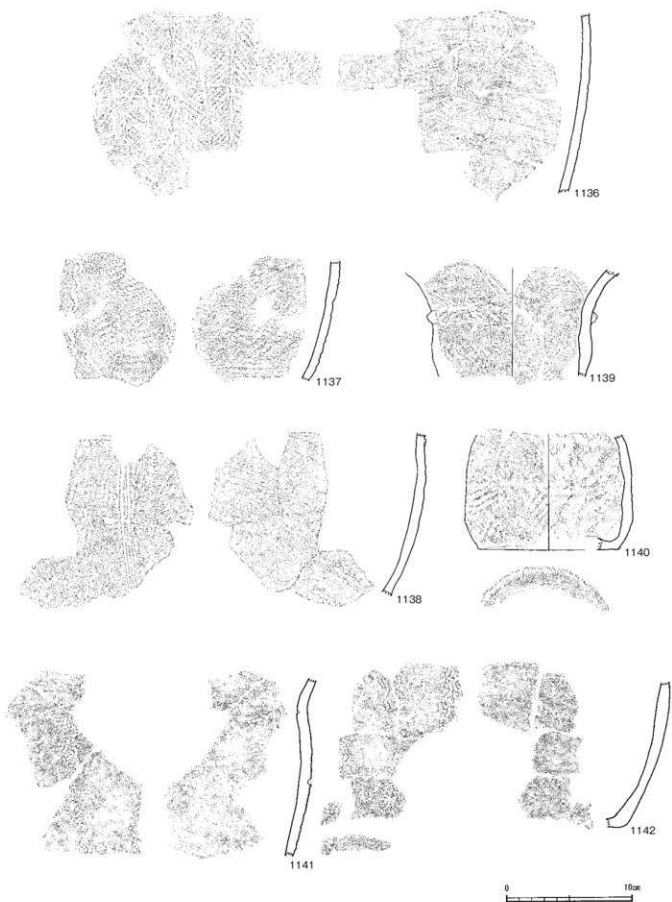
第 372 図 Ⅱ類土器 (28)

施す。結節部には、無節斜行縄文 R が確認できる。1132 は頸部から胴部上半付近であると考えられる。頸部に刻目突帯を 1 段施し、胴部には単節斜行縄文 LR を結節したものを縦位に施す。結節部の間隔は約 1.5cm である。1133 は口縁部下位から胴部上半付近と考えられる。頸部付近は無文である。頸部と胴部境付近に刻目突帯を 1 段施した後、胴部には単節斜行縄文 LR を結節したものを縦位に施す。1134 は口縁部下位から胴部下半付近と考えられる。口縁部下位から頸部に横位の沈線と刺突を施し、胴部は単節斜行縄文 RL を縦位に部分的に施す。縄文をナデ消した箇所がある。縄文間には波状の垂下する沈線や縦位の刺突を施す。1135 は頸部から胴部下半付近と考えられる。頸部と胴部との境付近に横位の沈線、刺突を施した後、斜位の沈線を施す。胴部には単節斜行縄文 LR を結節したものを縦位に施す。1136 は単

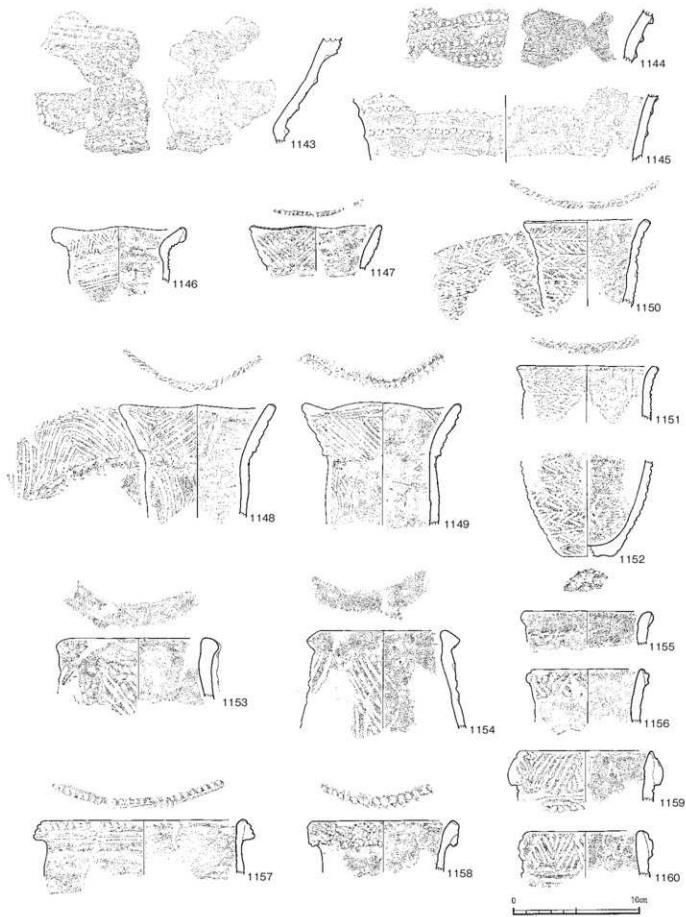
節斜行縄文 LR と単節斜行縄文 RL を結節して縦位に施したと考えられる。結節部には無節斜行縄文 R と無節斜行縄文 L の両者が確認できる。結節部が「S」字状、「Z」字状を呈さないことから結節縄文ではなく、原体押圧の可能性もある。文様、調整、胎土等が 995 と類似することから同一個体の可能性が高いと考えられる。1137 は単節斜行縄文 RL を結節したものを縦位に施す。1138 は頸部と胴部境付近に、横位の沈線、刺突を施す。胴部は単節斜行縄文 RL を縦位に部分的に施す。縄文をナデ消す箇所もある。その後、縦位の浅い沈線と刺突を施文する。1139 と 1140 は文様、調整、胎土等が類似することから、同一個体の可能性が高いと考えられる。1139 は頸部から胴部上半、1140 が胴部下半から底部付近である。1139 は頸部と胴部境付近に横位の刻目突帯を施した後、頸部に斜位の沈線を施す。胴部は単節斜行縄文 RL を横



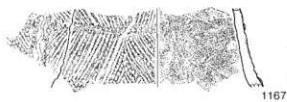
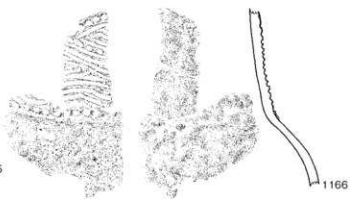
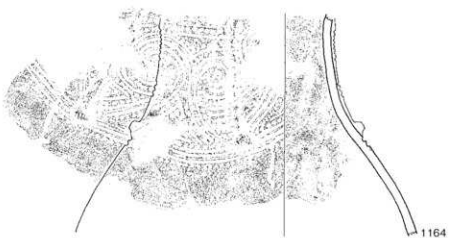
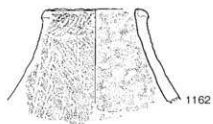
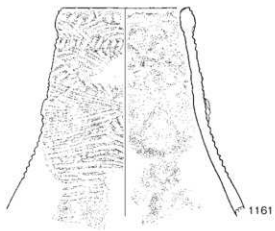
第 373 图 双鬲土器 (29)



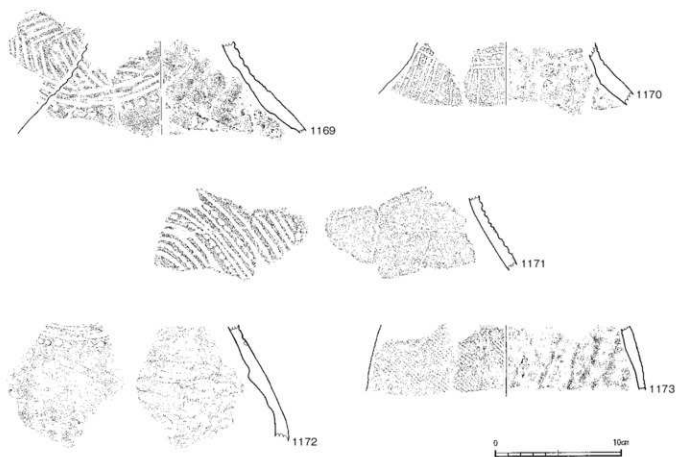
第374図 双類土器(30)



第 375 图 双纹土器 (31)



第376图 双纹土器(32)



第 377 図 ⅡⅡ類土器 (33)

位に施す。1140は胴部に単節斜行縄文RLを縦位、斜位に施す。底面境付近には刻目を入れる。底部円盤の外周に粘土紐を巻き付けて胴部は輪積み成形したと考えられる。1141・1142は胴部に結節縄文のみを施文する。文様、調整、胎土等が類似することから、同一個体の可能性が高いと考えられる。1141は頭部から胴部下半付近、1142は胴部下半から底部付近と考えられる。結節縄文の結節部のみを間隔を空けて縦位に施す。結節部には無節斜行縄文Rが確認できる。

1143～1145は頭部付近に刻目突帯のみを施文する一群である。1143は口縁部下位から頭部と胴部境付近と考えられる。口縁部外面の肥厚部の一部が確認できる。肥厚部下位に横位、斜位の沈線を施文後、沈線間に刺突を施す。口縁部下位から頭部に、横位の刺突を施文後、斜位の刻目突帯を施す。頭部と胴部境付近にも刻目突帯を1段施す。1145は刻目突帯より上位に一部沈線が確認できる。

1146～1152は口径が12.0cm以下の小型の深鉢形土器である。1146は口唇部外端の肥厚部に斜位の沈線を方向を違えて施文する。肥厚部下から胴部上半かけて横位

の沈線を密接に施し、沈線間に刺突を施す。1147は口縁部外面の肥厚部に斜位の沈線、刺突で山形、弧状のモチーフを描く。一部押し引き状の刺突を施す箇所もある。口唇部に刻目を入れ、肥厚部下端に横位の刺突を施す。1148・1149は4単位の波状口縁を呈すると考えられる。いずれも口唇部に刻目を入れる。1148は口縁部外面の肥厚部に、斜位、波状の沈線で山形、弧状のモチーフを描く。肥厚部下端と頭部に横位の刺突を施し、胴部に弧状の浅い沈線を施す。1149は肥厚部に横位、斜位の沈線、刺突を施す。肥厚部下と頭部に横位の刺突を2段施す。胴部に浅い沈線で弧状のモチーフを描く。1150・1151は口縁部から胴部下半にかけて横位の浅い沈線を施した後、斜位の沈線で羽状、「く」の字状のモチーフを描く。一部沈線間に刺突を施す箇所がある。いずれも口唇部に斜位の刻目を入れる。1152は胴部中央から底部と考えられる。1151と文様、調整、胎土等が類似することから同一個体の可能性が高いと考えられる。底部は上げ底状となっており、底部円盤の外周部に粘土紐を巻き付け高台状に成形している。

1153～1173は壺形土器である。

1153~1163は口縁部である。口唇部外端、口縁部上位の断面形態で細分した。

1153~1155は口唇部外端の肥厚部を成形後、縦位の刻目突帯を貼り付け、肥厚部下から頸部の器面の割付けを行い、斜位の沈線、刺突を施す。1154は頸部が肩部に向けてやや広がる器形であるが、施文は1153と同様である。縦位の刻目突帯も一部確認できる。

1156~1158は口縁部上位が折り返し口縁状の幅狭の肥厚部をもつ一群である。1156は肥厚部に斜位の沈線を施文する。頸部は無文である。1157は肥厚部に縦位の沈線を施した後、横位の沈線を施文する。その後、口唇部に刻目を入れる。1158は肥厚部に単節斜行縄文RLを横位に施文後、肥厚部の上下端に刻目を入れる。

1159~1160は口縁部上位が折り返し口縁状の幅広の丸みを帯びた肥厚部をもつ一群である。頸部がやや直口すると考えられる。1159は肥厚部に斜位の沈線、刺突を施し、頸部に横位の沈線、刺突を施文する。1160は肥厚部を斜位の沈線で山形のモチーフを描く。

1161~1163は口縁部上位がわずかに肥厚する一群である。肩部に向けて広がる器形である。1161は肥厚部に右下がり斜位、弧状の沈線を施し、肥厚部下端に縦位、もしくは斜位の短沈線を施文する。口唇部には刻目を入れる。肩部に横位の沈線を施文後、頸部中央にある小粒の刻目のある突起を起点に、斜位の沈線と刺突で波状のモチーフを描き、頸部の割付けを行ったと考えられる。その後突起付近に横位の沈線、刺突を施し、波状、横位の沈線、刺突で区画された頸部上半に斜位の沈線、刺突を、頸部下半を横位の沈線、刺突を充填する。1162は口唇部平坦面、口縁部上位の肥厚部に単節斜行縄文LRを横位に施す。頸部は単節斜行縄文LRを縦位に施文する。結節部と思われる箇所は、無節斜行縄文Rが確認できる。結節部が「S」字状、「Z」字状を呈さないことから原体圧痕の可能性もある。1163は頸部に横位の沈線を施し、口唇部外端部に刻目を入れている。

1164~1173は頸部から胴部上半付近であると考えられる。内面には指おさえ痕が確認できる。1164は頸部から肩部にかけて、縦位の刻目突帯と下端に小粒状の突起を貼り付ける。頸部上位と肩部に横位の沈線、刺突を施す。刻目突帯間には沈線と刺突で「9」の字、逆「9」の字状のモチーフを描き、空白部に横位、斜位の沈線を施文したと考えられる。肩部以下は無文である。1165は頸部が肩部に向けてやや広がる器形を呈すると考えられる。肩部に横長の突起を貼り付け、突起上に短沈線を2本施す。その後、肩部に横位の沈線、刺突を施文する。頸部は縦位、斜位の沈線、刺突を施す。1166は頸部が直口する器形であると考えられる。頸部と肩部との境付近に横位の刻目突帯を貼り付ける。頸部は波状の沈線、刺

突を施し、肩部以下は無文である。1167は頸部に縦位の刻目突帯を2段施した後、頸部中央付近に横位の刻目突帯を施文する。縦位の刻目突帯間には、波状の垂下する沈線を施す。横位の刻目突帯の上下それぞれに先端を細く加工した棒状工具で斜位の沈線と押し引きの連続刺突を施文する。施文具の先端を細く加工して施文しているため、他に比べ文様が精緻である。肩部の一部にも横位の刻目突帯が確認できる。1168は肩部付近である。円形の刺突のある突起を貼り付けた後、横位の沈線、刺突を施す。1169~1171は頸部下位から肩部付近である。1169は肩部に横位の沈線、刺突を施文し、頸部は沈線で「く」の字状のモチーフを描く。1171は横位の沈線、刺突を施文する。1170は縦位の浅い沈線を施した後、頸部と肩部の境付近に横位の沈線を施す。1172~1173は頸部から胴部上半付近であると考えられる。1172は頸部と肩部の境付近に横位の沈線と刺突を施す。内面には、内側接合の痕跡、指おさえ痕が多数確認できる。1173は節の小さい単節斜行縄文LRを結節したものを縦位に施文する。結節部には無節斜行縄文Rが確認できる。内面には斜位の指おさえ痕が見られる。

(15) XV類土器 (第378~403図 1174~1296)

XV類土器は胴部に地文として網目状熱糸文等を施し、口縁部がラップ状に外反し、胴部中央でやや膨らみ、底部にむけてすぼまる器形を呈する一群である。口縁部が屈曲しわずかに外反するものや、網目状熱糸文を施さずに器形や文様が類似したものを含む。

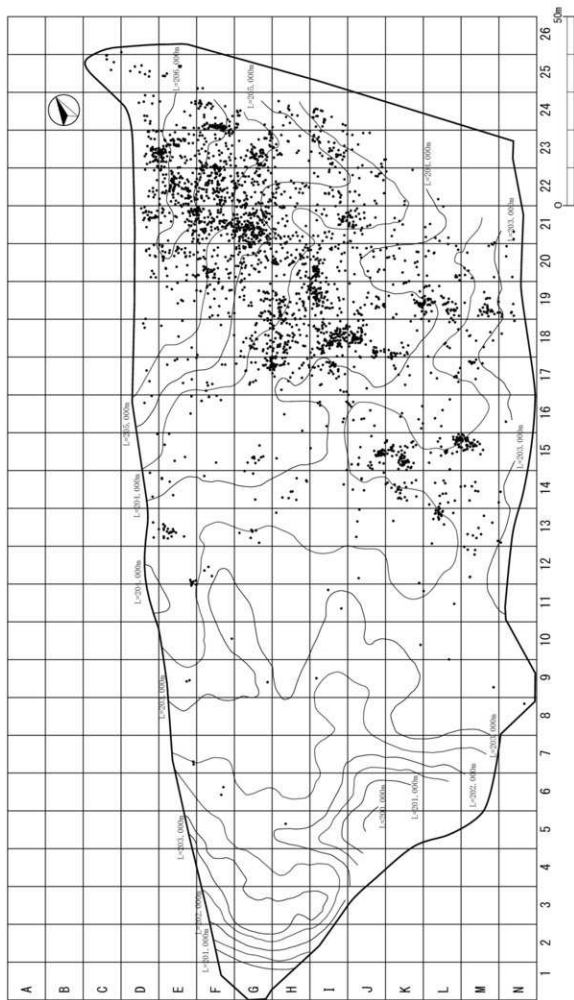
文様は多くが口縁部、胴部の2帯構成であるが、口縁部が屈曲する器形などで、口縁部、頸部、胴部の3帯構成のものもある。外面には網目状熱糸文、微隆線状の刻目突帯文、沈線文、刺突文等を施す。

本類土器は胴部に網目状熱糸文を縦位に施文する一群と、沈線で区画した内部に網目状熱糸文を施文する一群とに大別し、さらに口縁部の断面形態と口縁部文様で細別した。

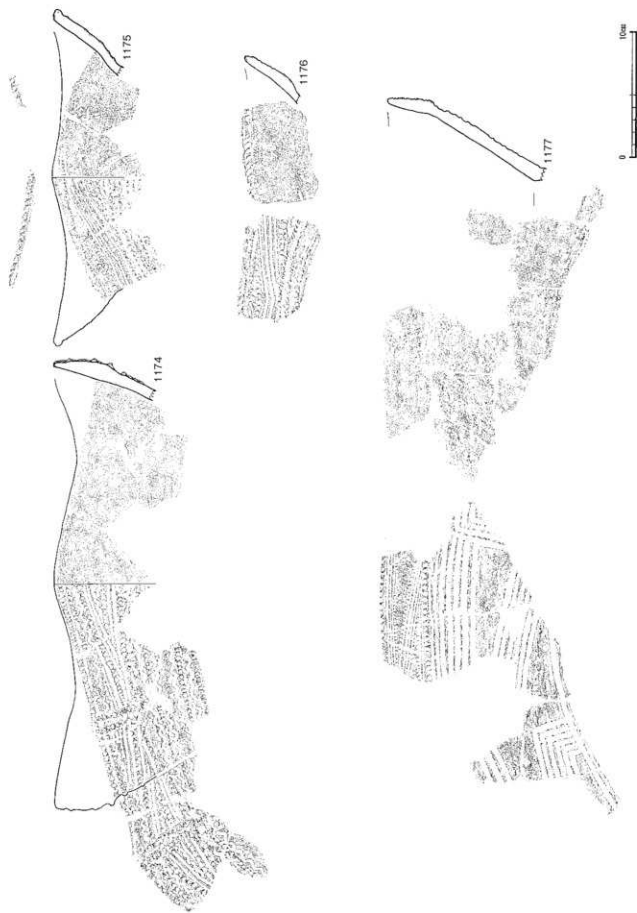
1174~1241は胴部に縦位の網目状熱糸文を施す一群である。

1174~1191は口縁部が屈曲し、わずかに外反する一群である。

1174~1176は口縁部に横位の微隆線状の刻目突帯を貼り付け、斜位の沈線と刺突で山形のモチーフを描く一群である。いずれも波状口縁を呈すると考えられ、口唇部には刻目を入れる。これらはXVI類土器の口縁部文様や文様要素に類似する。1174は4単位の波状口縁を呈すると考えられる。波頂部及び波頂部と波頂部の中間に口唇部から口縁部下部にかけて逆「U」字の微隆線状の刻目突帯を縦位に貼り付ける。波頂部付近の縦位の微隆線状の刻目突帯上に横位の短い微隆線状を貼り付けるものもある。口縁部に横位、斜位の微隆線状の刻目突帯で区



第 378 图 X 型土器出土分布图



第 379 図 XIV 期土器 (1)

画を設け、その中に斜位、波状の沈線、押し引きの連続刺突を施す。頸部は波頂部の延長線上に縦位の微隆線状の刻目突帯を3段施した後、横位の微隆線状の刻目突帯を3段施す。横位の微隆線状の刻目突帯間には、波状の沈線を施す。口唇部内端に刻目を入れる。胴部に網目状燃糸文を縦位に施すと考えられるが、わずかしか遺存していないため原体、巻き方は不明である。1175・1176は口縁部上位、下位に微隆線状の突帯を1段ずつ貼り付けた後、その内部に斜位の沈線を施す。横位の突帯の刻目、斜位の2段の刺突は、沈線の施文後に行われる。頸部に微隆線状の刻目突帯を横位に2段施す。また、口唇部内外端にそれぞれ刻目を入れる。1176は文様、調整、胎土等が1175と類似することから、同一個体の可能性が高いと考えられる。

1177~1184は屈曲した口縁部の上位、下位に横位の刺突を施し、横位の刺突間に斜位の刺突を施文する一群である。1182のみ口縁部形態とモチーフが他のものとやや異なる。屈曲部より下から頸部までが幅広であり、施文が口縁部、頸部、胴部の3帯構成であると考えられる。1177~1180は口縁部の上位、下位に沈線も施し、口唇部に刻目を入れる。口唇部の刻目と口縁部下位の刺突は同一の施文具で行われたと考えられる。1179~1182は口唇部外端部に刻目を施す。頸部には横位、斜位の沈線を施す。1177は屈曲より下の口縁部下位から頸部までが非常に幅広である。頸部と胴部との境付近に先端を0.4cm幅のヘラ状に加工した施文具で横位の明瞭な沈線を密接に施した後、横位の沈線間にクランク状のモチーフを沈線で描く。斜位の沈線を施す箇所もある。1178は文様、調整、胎土等が1177と類似することから、同一個体の可能性が高いと考えられる。1179は口唇部外端部と口縁部屈曲部にヘラ状工具を器面に対して縦位に当て、刻目と刺突を施している。口縁部は横位の沈線を上位に1条、下位に2条施した後、斜位の細い沈線と円形の刺突で山形のモチーフを描く。屈曲部より下は横位の沈線を密接に施す。1180は文様、調整、胎土等が1179と類似することから、同一個体の可能性が高いと考えられる。1181も1179と同様にヘラ状工具を器面に対して縦位に当て施文を行ったと考えられる。口縁部上位と下位に円形の刺突を1段ずつ施し、内部に斜位の沈線と刺突で山形のモチーフを描く。1182は口縁部が大きく内傾するように屈曲している。口縁部の上位、下位に横位の刺突を施す。刺突間に円弧状のモチーフを沈線で描き、その後斜位の沈線、刺突を施文する。頸部と胴部境付近に横位の沈線を施文後、屈曲部の下から頸部にかけて横長の「S」字状のモチーフを2本沈線で描き、その両端に刺突を施す。胴部に0段の撚りを軸に右巻き後、左巻きした網目状燃糸文を縦位に施す。撚りの方向は条が摩滅しており不明である。

1183~1187は口唇部外端に刻目を入れ、屈曲部付近に横位の刺突を施す。口縁部は刻目と刺突間に沈線、刺突、もしくは沈線のみで施文する一群である。1183は口縁部に斜位の沈線、刺突を施す。屈曲部直下・頸部と胴部の境付近に、横位の沈線をそれぞれ2条~3条施す。横位の沈線間には斜位の沈線で山形のモチーフを描く。胴部は0段rの撚りを左巻き後、右巻きした網目状燃糸文を縦位に施す。1184は口縁部に斜位の沈線、刺突を施す。1185は口唇部の刻目の下位と屈曲部の刺突の上位に沈線を施した後、その間に波状の沈線を斜位に施す。1186は弧状のモチーフや横位、斜位の沈線を、1187は円弧状のモチーフや横位の沈線を施す。

1188~1190は口縁部を沈線のみで施文する一群である。いずれも口縁部の上下に横位の沈線を施し、横位の沈線間に斜位の沈線で山形のモチーフを描く。また、口唇部には刻目を入れる。1188は口縁部から胴部下半付近まで復元することができる。頸部は無文で、胴部は無節斜行縄文Rを右巻き後、左巻きした網目状燃糸文を縦位に間隔を空けて施文した後、横位の沈線を頸部と胴部の境付近に2条、胴部下半に3条施す。1189は文様、調整、胎土が1188と類似することから、同一個体の可能性が高いと考えられる。1190は波状口縁を呈すると考えられる。口唇部内外端に羽状の刻目を入れる。

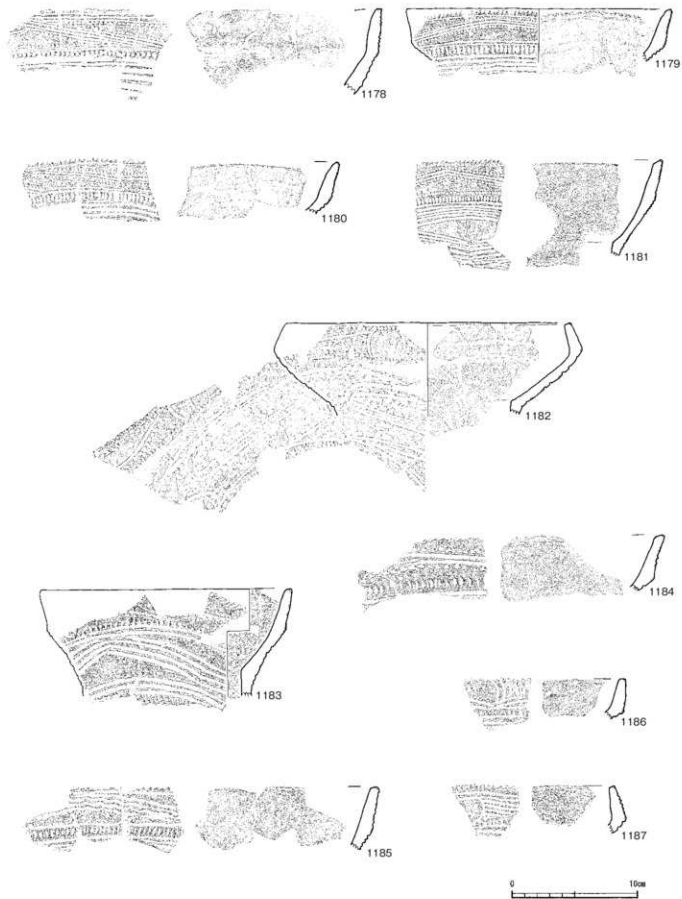
1191は口縁部上位に無節斜行縄文Rを右巻き後、左巻きした網目状燃糸文を横位に施した後、横位の沈線を施文する。口唇部内外端に細かい刻目を入れる。外面は、口縁部下位より下が脱落しており文様等不明である。

1192~1220は幅の広い口縁部がラッパ状に大きく外反する一群である。

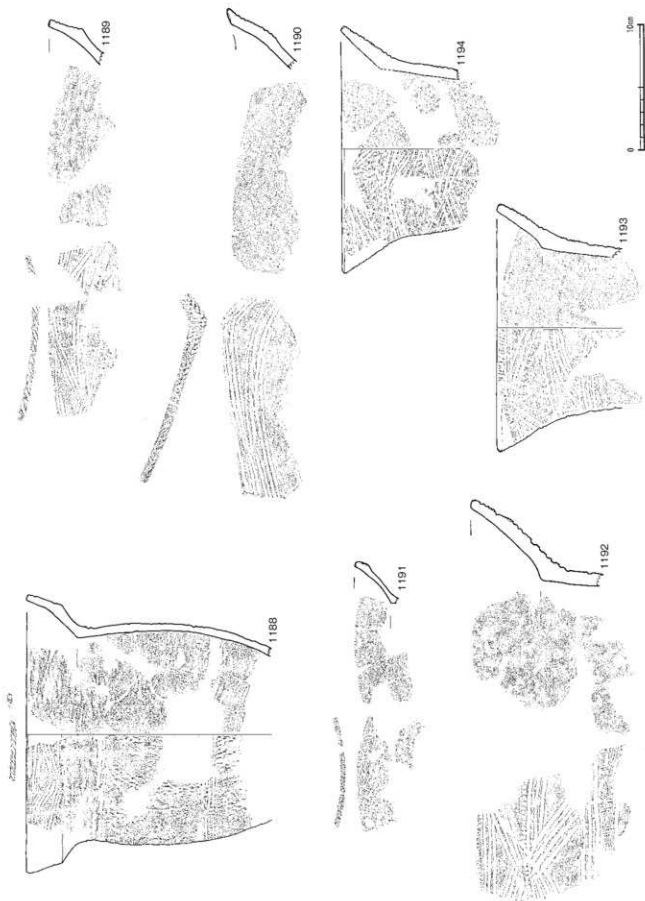
1192~1194は口縁部に斜位の沈線、刺突で山形のモチーフを描く一群である。1192は口唇部外端部に刻目を入れる。口縁部上位及び頸部付近に施した横位の沈線と口縁部中央付近に施した横位の沈線及び刺突で区画を設け、その中に斜位の沈線で山形のモチーフを描く。胴部には無節斜行縄文Lを軸に左巻きした燃糸を縦位、横位に施す。胴部上半に一部横位の沈線が確認できる。

1193・1194は口唇部外端に刻目を入れる。口縁部下位から頸部付近に横位の沈線を2条施し、刻目は横位の沈線間に斜位の沈線、刺突で山形のモチーフを描く。山形のモチーフ内に波状の垂下沈線を施す。網目状燃糸文は施文しないものの、他のXV類土器と文様、調整、胎土等が類似することから、ここに含めた。1193は頸部、胴部に斜位の沈線、刺突で、菱形のモチーフを描き、モチーフの内部には、口縁部と同様の波状の垂下沈線を施す。1194は器形、文様、調整、胎土が1193と類似することから、同一個体の可能性が高いと考えられる。

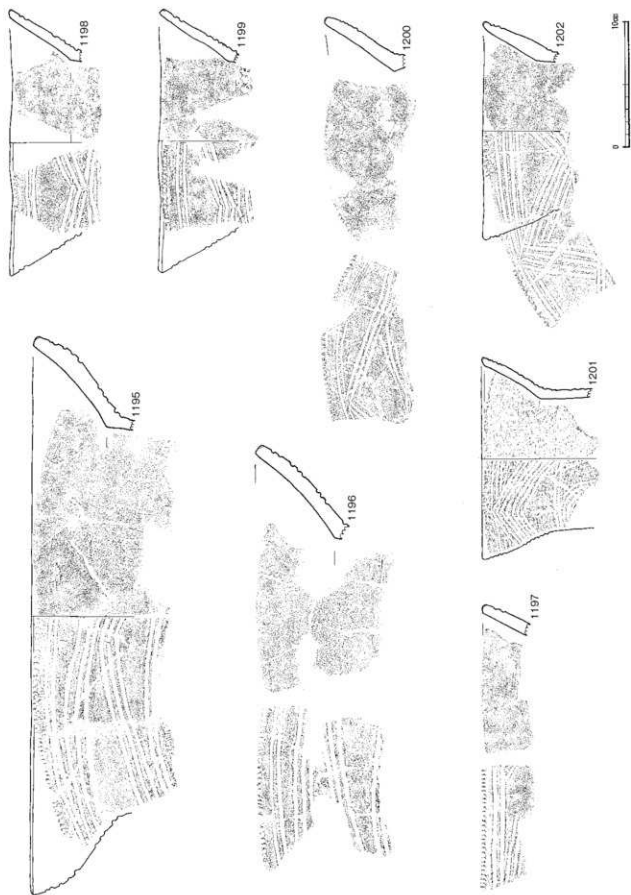
1195~1205は口縁部上位に横位の沈線を施した後、斜位の沈線で山形、菱形のモチーフを描く一群である。



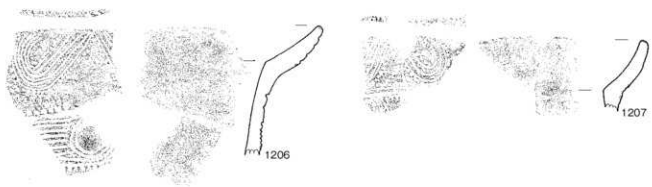
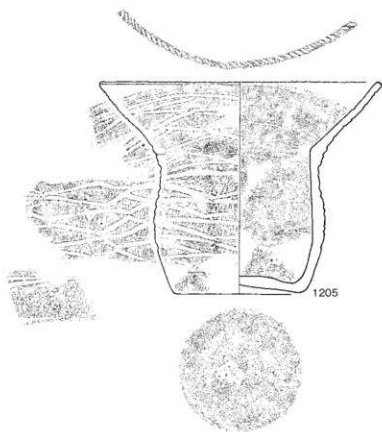
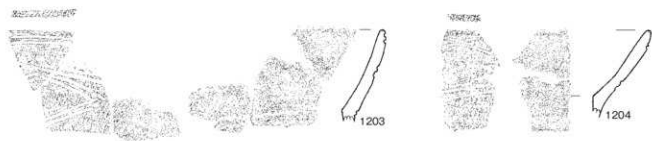
第380图 XV类土器(2)



第 381 図 XIV 朝土器 (3)



第 382 図 XIV 期土器 (4)



第383図 XV類土器(5)



第 384 図 XV 類土器 (6)

1204 は口縁部上位に横位の沈線を施文しないが、口縁部文様が 1203 と類似することから、ここに含めた。いずれも口唇部に刻目を入れる。頭部付近に横位の沈線を施す。一部横位の刺突を施すものもある。1198～1200 は緩やかな波状口縁を呈すると考えられる。

1195～1200 は山形のモチーフを 3 本の斜位の沈線で描く一群である。1195 は口縁部上位と頭部に横位の沈線を 2 条施した後、横位の沈線間に山形のモチーフを 2 段描く。また、口唇部外端に刻目を入れる。胴部は巻き方向は不明だが、無節斜行縄文 R の捻糸文を施したと考えられる。1196 は文様、調整、胎土が 1195 と類似することから、同一個体の可能性が高いと考えられる。1198 は口縁部上位に横位の沈線、口縁部下位に横位の沈線と刺突を施した後、山形のモチーフを描く。口唇部外端部に刻目を入れる。1199 は文様、調整、胎土が 1198 と類似することから、同一個体の可能性が高いと考えられる。1200 の口縁部の施文は口唇部の上方より刻目を入れていく。

1201・1202 は口縁部の山形のモチーフを 5 本以上の多数の沈線で描く一群である。口唇部外端部に刻目を入れる。1201 は口縁部上位、頭部に横位の沈線を施した後、口縁部に 6～7 本の沈線でモチーフを描く。胴部は円弧状のモチーフを沈線で描いたと考えられる。1202 は 5～6 本の沈線でモチーフを描く。

1203・1204 は口縁部に網目状捻糸文を縦位に施した後、斜位の沈線で菱形のモチーフを描く一群である。口唇部に刻目を入れる。網目状捻糸文は 0 段 1 の撚りを右巻き後、左巻きしたものである。1203 は口縁部上位に横位の沈線を施す。

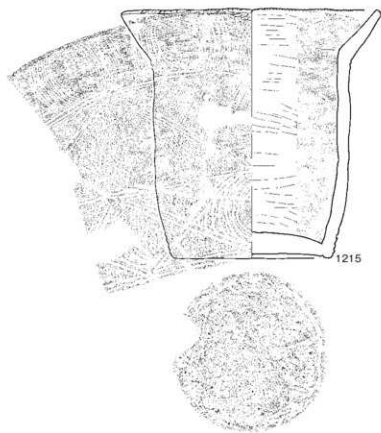
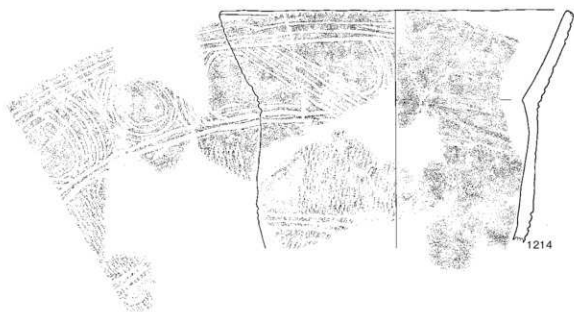
1205 は完形に復元することができた。胴部に無節斜行縄文 R を軸に右巻き後、左巻きした網目状捻糸文を縦位に間隔を空けて施した後、口縁部から胴部下半付近まで、横位、斜位の沈線で横に間延びした山形、菱形のモチーフを描く。胴部は粘土紐を底部円盤外周の上に乗せ輪積み成形したと考えられる。底部外面より指頭で押し出すようにして底部を上げ底状に成形している。



第 385 図 XIV 期土器 (7)



第 386 図 XIV期土器 (8)



第387図 XV類土器(9)

1206～1220 は口縁部に沈線、刺突もしくは沈線のみの曲線的なモチーフを描く一群である。

1206～1208 は口縁部に沈線と刺突で「J」字状、逆「J」字状のモチーフを描く一群である。1206・1207 は口唇部に斜位の刻目を入れる。1206 は口縁部に「J」字状のモチーフを描く。頭部以下に0段rの撚りを左巻き後、右巻きした網目状摺糸文を縦位に施す。その後、頭部、胴部上半に横位の刺突を施した後、胴部上半に円形のモチーフを沈線で描く。1207 は頭部に横位の沈線、刺突を施した後、口縁部に斜位の沈線、刺突を施した後、逆「J」字状のモチーフを描く。1208 は網目状摺糸文等の地文は施さないものの横長の「J」字状、蕨手状、円形のモチーフを口縁部に沈線と刺突で描く。1206・1207 と文様が一部類似することからここに含めた。完形に復元することができた。胴部中央、底面境付近に横位の沈線を施した後、横位の沈線間に斜位の沈線で菱形状のモチーフを描く。一部三角形に区画された部分には内部に円形の刺突を沈線に沿って施す。胴部下半の菱形状のモチーフの内部に弧状の沈線を施す箇所がある。

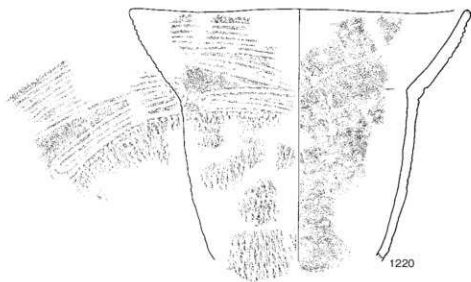
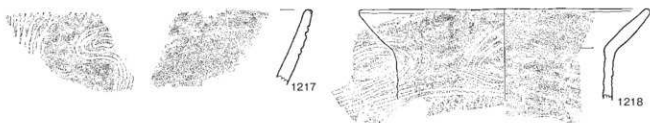
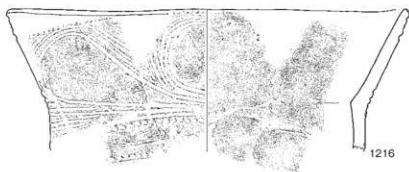
1209～1214 は口縁部上位、頸部付近に横位の沈線を施す。その内部に渦文状、弧状、円形等の曲線状のモチーフを沈線で描く一群である。口唇部に刻目を入れる。1209 は口縁部から胴部下半まで復元することができる。口縁部上位、頸部付近にそれぞれ3条の横位の沈線を施す。口縁部上位の沈線は部分的にさらに1本加わる箇所がある。横位の沈線間には、斜位の沈線を施す。その後、沈線による渦文状のモチーフを描く。内側の円弧状のモチーフは外形部分を施文した後、内部の施文を行っている。無節斜行縄文Rを軸に右巻き後、左巻きした網目状摺糸文を密接に施文する。その後、胴部中央に横位の沈線を施す。沈線で横長の間延びした「S」字状のモチーフを描く。1210 は口縁部から胴部下半まで復元することができる。口縁部は横位の沈線間に、斜位の沈線で山形のモチーフを描き、その後、縦長の弧状のモチーフを描く。胴部は無節斜行縄文Lを軸に密接に右巻き後、左巻きした網目状摺糸文を縦位に施す。その後、頭部と胴部境付近、胴部中央付近にも横位の沈線、刺突を施文する。胴部下半は斜位の沈線で山形、もしくは菱形状のモチーフを描いたと考えられる。1211 は器形、文様、調整、胎土が1210 と類似することから、同一個体の可能性が高いと考えられる。口縁部に1212 は渦文状のモチーフを描いた後に斜位の沈線を施しているが、1213 は斜位の沈線を施した後に、弧状のモチーフを描いている。1214 は口縁部から胴部下半まで復元することができる。口縁部は弧状、円形のモチーフを明瞭な沈線で描く。胴部は無節斜行縄文Lを軸に右巻き後、左巻きした網目状摺糸文を縦位に幅広く施す。胴部下半に横位の沈線を施す。一部斜位の沈線が確認できる。

1215～1219 は口唇部外端部より頭部付近にかけて渦文状、弧状、楕円状、円形等のモチーフを沈線で描く一群である。頭部付近に横位の沈線、刺突を施すものもある。1215～1217 は口唇部に刻目を入れる。1215 は完形に復元することができた。口縁部上位に無節斜行縄文Rを軸に右巻き後、左巻きした網目状摺糸文を横位に施した後、口唇部外端部と頭部付近の横位の沈線との間に弧状のモチーフを沈線で描く。胴部は口縁部と同じ網目状摺糸文を縦位に施した後、沈線で菱形状、円形のモチーフを描く。底面境付近にも横位の沈線を施す。底部円盤の外周部分に粘土紐を巻き付け、胴部を輪積み成形する。底部は上げ底状である。1216 は頭部付近に横位の沈線、刺突を施す。1217 は口唇部外端部に刻目を入れる。口縁部に明瞭な沈線で円弧状のモチーフを描く。1218 は口縁部に楕円状のモチーフを沈線で描く。胴部は0段1の撚りを軸に右巻き後、左巻きした網目状摺糸文を縦位に施した後、頸部付近に横位の沈線を施す。1219 は口縁部に横長の弧状のモチーフを沈線で描く。外面には煤状の付着物が確認できる。

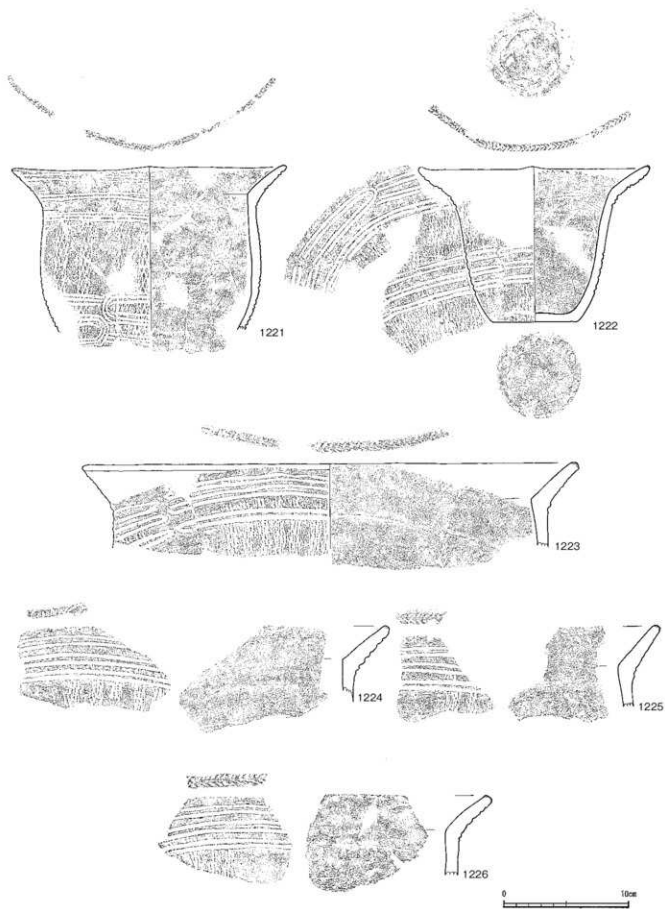
1220 は口縁部から胴部下半まで復元することができる。緩やかな波状口縁を呈すと考えられる。口縁部上位に横位の沈線、頭部に横位の沈線、刺突を施す。口縁部中央から頭部にかけて、横長の「S」字状のモチーフを沈線で描く。胴部は無節斜行縄文Rを軸に右巻き後、左巻きしたものを密接に施文する。

1221～1241 は幅の狭い口縁部が反転する器形である。胴部に網目状摺糸文を間隔を空けて施文した後、頭部、胴部に横位の沈線を施す。底面境付近に横位の沈線を施すものもある。いずれも口縁部に刻目を入れる。網目状摺糸文は多くが無節斜行縄文Rを軸に右巻き後、左巻きしたものである。口縁部の施文の有無で細分した。

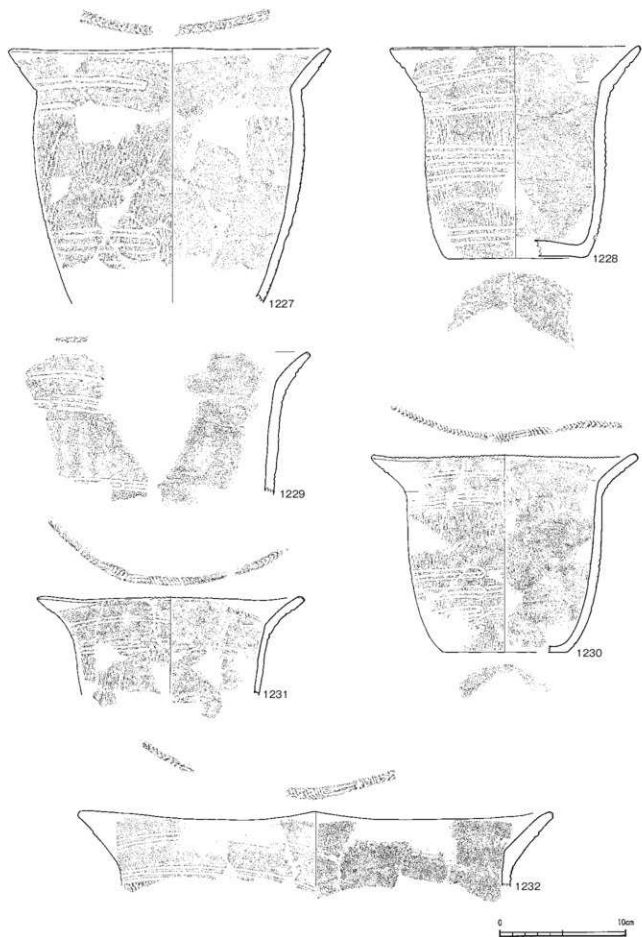
1221～1226 は口縁部中央付近に2本の横位の沈線を施す一群である。1221 は口縁部から胴部下半まで復元することができる。緩やかな波状口縁を呈すと考えられる。胴部に網目状摺糸文を施した後、口縁部上位、口縁部中央付近、頭部、胴部下半に横位の沈線を施す。1222 は完形に復元することができた。4単位の波状口縁を呈すると考えられる。2本の横位の沈線を波頂部下より施文を開始し、波頂部と波頂部の中間付近で端部を曲線状に繋げ、口縁部中央付近に横位の沈線を施したと考えられる。頭部、胴部下半にも横位の沈線を施す。胴部下半は2本単位の横位の沈線を3段施す。それぞれの沈線の端部を丸く曲げている。1223～1226 は口縁部の幅が特に狭く、そのためそれぞれ沈線の間隔も狭くなっている。1223～1225 は口唇部に羽状の刻目を入れる。網目状摺糸文は0段1の撚りを軸に右巻き後、左巻きしたものを口縁部下位付近から縦位に施している。1223～1226 は器形、文様、調整、胎土が類似することか



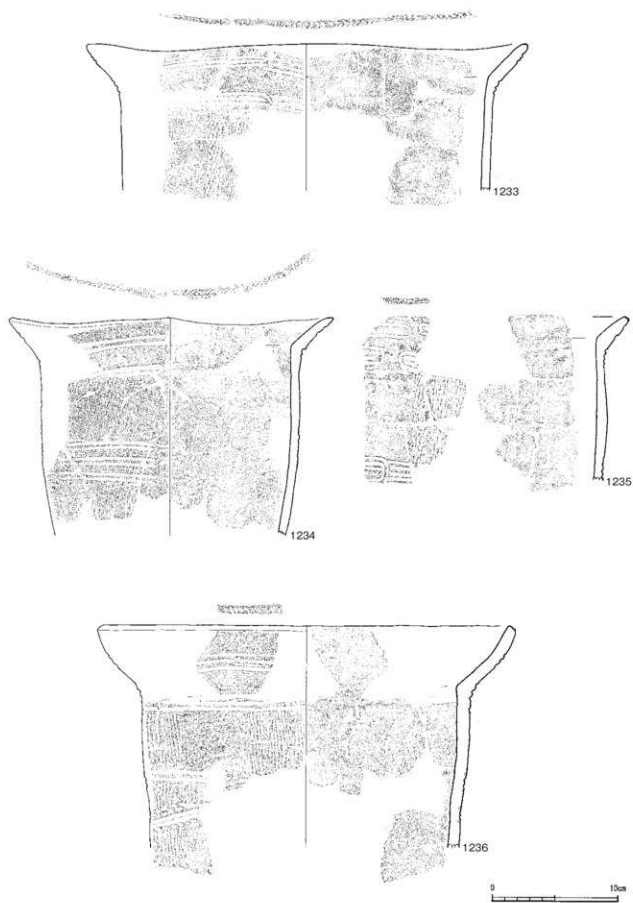
第388図 XV類土器(10)



第389図 XV類土器(11)



第 390 図 XV類土器 (12)



第 391 図 XV 類土器 (13)

ら、同一個体の可能性が高いと考えられる。1227は口縁部から胴部下半まで復元することができた。緩やかな波状口縁を呈すると考えられる。口唇部に羽状の刻目を入れる。胴部下半に横位の沈線を施す。網目状摺糸文は非常に細い無節斜行縄文Lを軸に右巻き後、左巻きしたものを縦位に間隔を開けて施文している。1228は完形に復元することができた。口唇部外端部に刻目を入れる。口縁部中央、頸部、胴部中央、胴部下半にやや浅い横位の沈線を施す。網目状摺糸文は0段1の撚りを左巻き後、右巻きしたものを縦位に施す。やや上げ底気味の底部である。底部円盤の外周部分に粘土紐を巻き付け、胴部を輪積み成形したと考えられる。1229は胴部中央付近に横位の沈線を施し、端部を曲線状に繋げた後、横位の沈線の施文を始めている。1227・1231～1234は、緩やかな波状口縁を呈すると考えられる。1230～1232の口唇部は波頂部付近に横位の沈線を施し、その両端には斜位、羽状の刻目を入れる。1230は完形に復元することができた。非常に細い網目状摺糸文を縦位に施した後、口縁部中央、頸部、胴部中央から下半に沈線を施文したと考えられる。胴部の横位の沈線は2本1単位で3段施している。1231は器形、文様、調整、胎土が1230と類似することから、同一個体の可能性が高いと考えられる。1232は網目状摺糸文がわずかしこ残存していないため、撚り、巻き方が不明である。1233・1234の口唇部には羽状、斜位の刻目を入れる。1233は刻目が外端部に及ぶ箇所もある。1234は胴部中央に2本1単位の沈線が3段施される。網目状摺糸文の絡糸体の幅は1.0cm程度で端部が明瞭である。1235は口縁部、頸部の横位の沈線の上下の間隔がそれぞれ広い。胴部は0段1の撚りを左巻き後、右巻きしたものを縦位に施し、胴部下半に横位の沈線を施している。1236は胴部に摺糸文が縦位に施されている。摺糸文は無節斜行縄文Rを軸に密接に左巻きしたものである。胴部中央付近に、斜位の沈線、刺突で菱形のモチーフを描いていると考えられる。

1237～1241は口縁部が無文の一群である。1237は口縁部から胴部下半まで復元することができる。口唇部に刻目を入れる。頸部から胴部に無節斜行縄文Lを軸に右巻き後、左巻きしたものを間隔を開けて縦位に施した後、頸部に横位の沈線を5条施す。一部斜位の短沈線を施する箇所がある。胴部中央に横位の沈線を3条施し、胴部下半には斜位の沈線で山形もしくは菱形のモチーフを描いたと考えられる。沈線間に縦位の波状の沈線を施す箇所がある。1238は口縁部から胴部下半までを復元することができる。胴部に無節斜行縄文Lを軸に右巻き後、左巻きしたものを縦位に施した後、頸部、胴部中央から胴部下半に横位の沈線を施す。胴部下半の横位の沈線間に弧状の沈線の一部を施している。1239・1240はともに口唇部に羽状の刻目を施す。1240は胴部

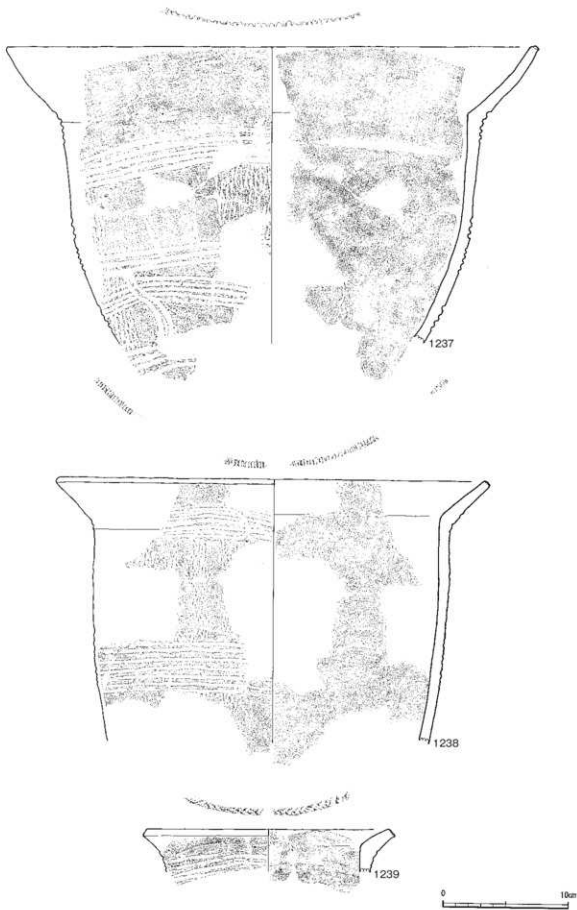
に0段1の撚りを左巻き後、右巻きしたものを縦位に施す。頸部に横位の沈線を施す。1241は4単位の波状口縁を呈すると斜えられる。波頂部付近の口唇部に縦位、その両端に刻目の刻目を入れる。胴部付近に階段線状の刻目突帯を3段施す。

1242～1250は網目状摺糸文、縄文を施した後、両端に沈線を施し区画を行ういわゆる磨消縄文を施す一群である。沈線を施した後、沈線間からはみ出した網目状摺糸文、縄文はナゲ消したと考えられる。地文と沈線の施文順序が判然としないものは、充填縄文の可能性もある。網目状摺糸文の多くは、無節斜行縄文Rを軸に右巻き後、左巻きしたものである。口縁部の断面形態と口縁部文様で細別した。

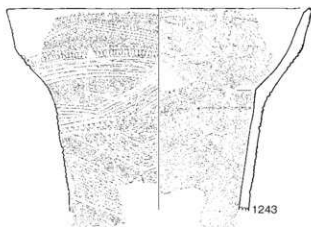
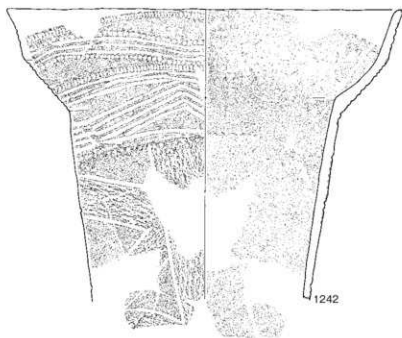
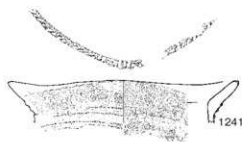
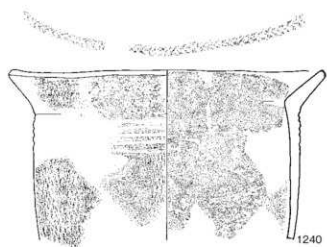
1242～1244は口縁部が「く」の字状に屈曲しながら外側に開く一群である。1244は口縁部の屈曲の程度が他に比べ弱いものの、口縁部文様が類似することからここに含めた。口唇部の刻目と屈曲部の横位の縦長の刺突の刺突は、同一のヘラ状工具を器面に対して縦位に当て施文していると考えられる。屈曲部の横位の縦長の刺突の上下に横位の沈線、刺突を施す。その内部に斜位の沈線、刺突で山形のモチーフを描く。1242は口唇部の刻目と屈曲部に縦長の刺突を横位に施す。その後、浅い3条の斜位の沈線で山形のモチーフを描く。沈線の両端には凹形の刺突を1段ずつ施す。屈曲部の横位に施された縦長の刺突より下と頸部にそれぞれ横位の浅い沈線を施した後、頸部に浅い斜位の沈線で山形のモチーフを描く。頸部の沈線の下には刺突を施す。胴部は網目状摺糸文を幾何学的に施文した後、沈線を施したと考えられる。口縁部外面に煤状の炭化物が大量に付着した箇所がある。1243は口唇部の刻目と屈曲部付近の横位に施された縦長の刺突との内側に、それぞれ1段ずつ横位の刺突を施している。横位の刺突で区画された内部に、浅い斜位の沈線と刺突で山形のモチーフを描く。横位の沈線を屈曲部の縦長の刺突の下に5条、頸部に1条施す。胴部は横位の沈線の下に横位の逆「C」字状の刺突を1段施す。胴部は網目状摺糸文を山形に施文した後、両端に沈線を施文していると考えられる。1244は口唇部の刻目の下、屈曲部付近の横位の刺突の上とそれぞれ横位の沈線、刺突を施文し、口縁部の区画を行う。区画内に沈線と刺突で山形のモチーフを描く。口縁部下から頸部に網目状摺糸文でやや間延びした山形のモチーフを描き、その両端に沈線を施文する。その後、屈曲部下の横位の沈線は、頸部の網目状摺糸文と沈線の施文が終わった後に、山形のモチーフの頂点を結ぶように施文している。胴部も頸部と同様の網目状摺糸文を幾何学的に施し、両端に沈線を施していると考えられる。

1245～1250は口縁部がラッパ状に開く一群である。

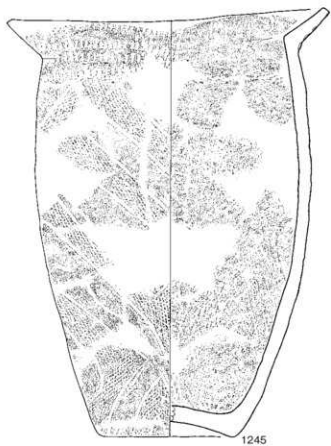
1245・1246は口縁部から頸部に刺突を施し、胴部に網



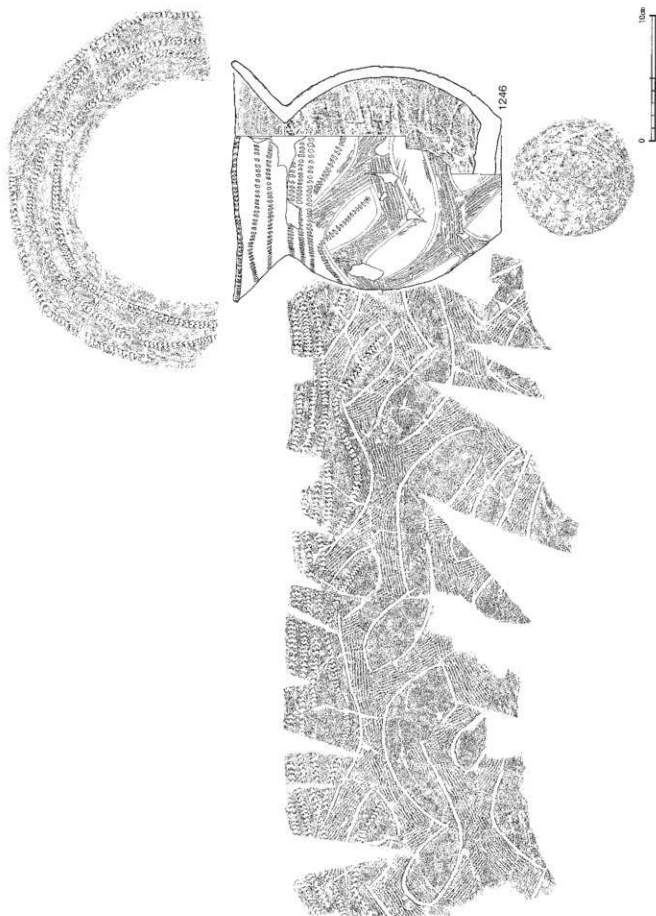
第392図 XV類土器(14)



第 393 図 XV 類土器 (15)



第394図 XV類土器 (16)



第 395 図 XIV 期土器 (17)

目状摺糸文、摺糸文を施し、両端に沈線を施文する一群である。いずれも完形に復元することができた。底部は上げ底状である。1245は縦長の器形である。口唇部外端、口縁部中央、頸部付近にへら状工具による縦長の刺突を横位に施す。胴部に網目状摺糸文を幾何学的に施し、両端に沈線を施している。網目状摺糸文は0段1の撚りを軸に右巻き後、左巻きしたものである。1246は口縁部が直線的に大きく開き、胴部は中央で膨らみ、底部に向けて曲線的にすぼまる球状の器形である。4単位の波状口縁を呈すると考えられる。口唇部に貝殻の腹縁部により刻目を入れている。同様の施文で、口縁部、頸部から胴部上半に刺突を施している。口縁部では刺突で山形のモチーフを描いている。胴部上半は幾何学的に施文した摺糸文に沿うように連続刺突文が施文されている箇所もある。胴部は無節斜行縄文Rの摺糸を幾何学的に施し、両端に沈線を施す。沈線間からはみ出した摺糸はナゾ消したと考えられる。刺突は口縁部中央に横位、斜位に2段、頸部から胴部上半に3段施す。一部胴部の網目状摺糸文間にも斜位の刺突を施している。

1247~1249は口縁部に網目状摺糸文を施し、その両端に沈線を施文する一群である。口唇部外端に刻目を入れる。1248・1249は口縁部上位に横位の沈線を1条施す。1247は頸部に横位の沈線、刺突を施す。口縁部には0段1を軸に左巻き後、右巻きした網目状摺糸文で波状のモチーフを描き、その両端に沈線を施す。胴部にも口縁部と同様の施文を行う。1248も1247と同様の施文を行うが、網目状摺糸文は無節斜行縄文Rを右巻き後、左巻きしたものである。また、頸部に波状の沈線を横位に施した箇所がある。1249は口縁部の施文、原形も1248と同様である。ただし、胴部の網目状摺糸文は一部沈線は確認できるものの、区画された沈線が確認できないことから、網目状摺糸文を縦位に施しただけの可能性もある。

1250は区画された沈線内に刺突を施す。器形、口縁部文様等が他のXV類土器と類似することから、ここに含めた。口縁部から胴部下半まで復元することができた。口唇部に羽状の刻目を入れる。やや縦長の器形である。口縁部上位、頸部に横位の沈線、刺突を施した後、胴部に斜位の沈線を間隔を空けて施文する。沈線間に刺突具を右下から器面に当て、斜位の沈線と平行するように左上から右下に向けて施文し、次の段に移行し施文したと考えられる。下に位置する斜位の沈線側の刺突がやや詰まった間隔となっている箇所がある。

1251~1277は胴部である。

1251~1269は網目状摺糸文もしくは摺糸文を縦位に施文する一群である。

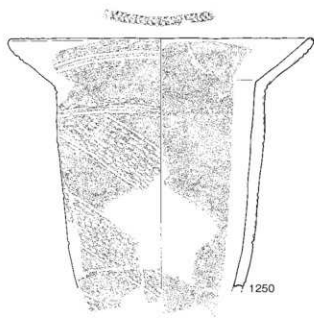
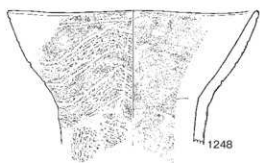
1251~1254は口縁部付近から胴部上半付近であるとされる。1251は頸部に横位の沈線、刺突を施し、口縁部下位から頸部に斜位、縦位の弧状沈線を施す。胴部

は無節斜行縄文Lを軸に右巻き後、左巻きした網目状摺糸文を縦位に施し、胴部中央付近に横位の沈線を施した後、縦位の沈線を施す。横位の沈線の上下に頸部と同様の横位の刺突を施す。1252は口縁部上位、頸部に横位の沈線を施した後、口縁部下位に斜位、弧状の沈線を施す。胴部に網目状摺糸文を縦位に施文している。網目状摺糸文は0段1の撚りを軸に右巻き後、左巻きしたものである。1253は頸部付近から胴部無節斜行縄文Rを軸に左巻きした網目状摺糸文を縦位に施した後、頸部に横位の沈線を施す。口縁部に斜位の沈線で山形、菱形のモチーフを描いたと考えられる。胴部上半に横位の沈線を施す。頸部と胴部上半の沈線間に斜位の沈線で山形のモチーフを描く。1254は口縁部下位から頸部付近とされる。口縁部下位に横位の明瞭な沈線を施した後、口縁部下位から頸部にクランク状のモチーフを明瞭な沈線で描く。屈曲部に施したと考えられる縦長の刺突も上位に一部確認できる。

1255は口縁部下位から底部とされる。頸部から胴部中央にかけてやや膨らみ、底部にむけて曲線的にすぼまる器形である。頸部に縦位の沈線を施文後、横位の沈線を施す。一部縦位の沈線間に斜位の沈線で「×」状のモチーフを描く箇所がある。胴部は無節斜行縄文Rを軸に右巻きしたものを縦位に施文する。胴部中央、胴部下半、底面境付近に横位の沈線を施す。一部それぞれ沈線間に弧状の沈線を施文する箇所がある。

1256~1261は口縁部下位、頸部付近から胴部上半付近とされる。頸部に横位の沈線を2~3本施す1256は、口縁部下位から頸部に横位の沈線を施文している。1256・1257の網目状摺糸文は無節斜行縄文Rを軸に右巻き後、左巻きしたものである。1258~1260の網目状摺糸文は、0段1を軸に右巻き後、左巻きしたものである。1261の網目状摺糸文は無節斜行縄文Lを軸に右巻き後、左巻きしたものである。

1262~1269は胴部中央から胴部下半付近とされる。1262・1263は胴部中央、胴部下半に横位の沈線を施す。1262の網目状摺糸文は無節斜行縄文Rを軸に右巻き後、左巻きしたもので、1263の網目状摺糸文は0段1の撚りを軸に左巻き後、右巻きしたものである。1264は上位、下位に沈線を横位に施文した後、両端に円形の刺突を施したと考えられる。外面に煤状の炭化物が付着した箇所が確認できる。網目状摺糸文は無節斜行縄文Rを軸に左巻き後、右巻きしたものである。1265は底部に向けて直線的にすぼまる円筒形に近い胴部である。無節斜行縄文Lを軸に右巻き後、左巻きしたものを縦位に間隔を空けて施す。その後、横位の沈線、刺突を施し、沈線間に菱形、弧状のモチーフを沈線で描く。1266は文様、調整、胎土等が1265と類似することから、同一個体の可能性が高いと考えられる。1267・1269は底部にむけ



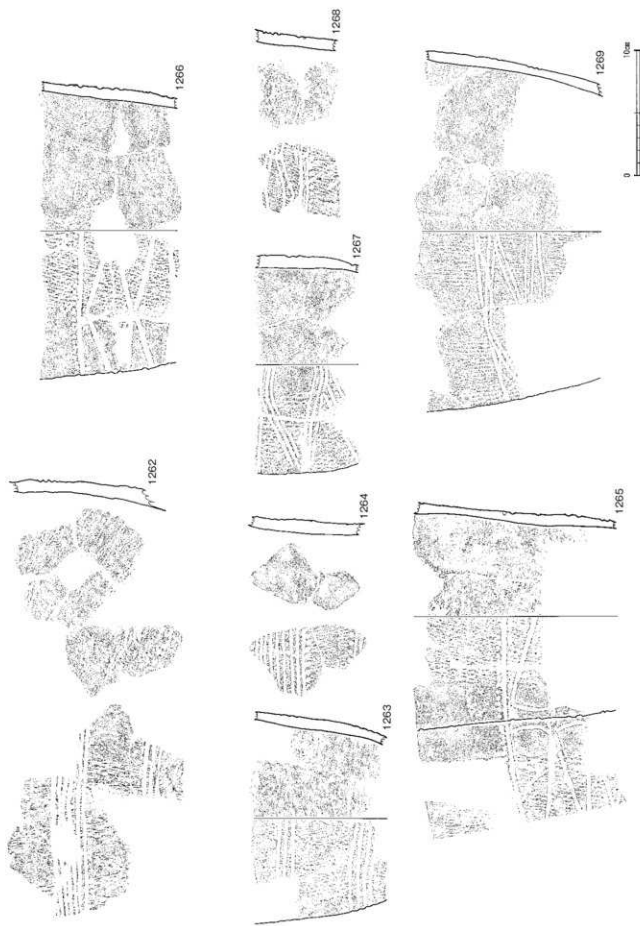
第396図 XV類土器(18)



第 397 図 XIV 類土器 (19)



第 398 图 XIV 朝土器 (20)



第 399 図 XIV 朝土器 (21)

て曲線的にすばまる器形であると考えられる。1267は無節斜行縄文Lを軸に右巻き後、左巻きしたものを縦位に施した後、沈線で横位の沈線を施す。その後、曲線的な菱形のモチーフを沈線で描く。1268は横位の沈線、刺突を施した後、横長の菱形のモチーフを描いたと考えられる。1269は無節斜行縄文Rを軸に密接に左巻きした捻糸を縦位に施し、横位の沈線を胴部中央、胴部下付付近に1条ずつ施したあと、沈線間に2本1単位の沈線で菱形のモチーフを描く。

1270・1271は網目状捻糸文、捻糸文は施さないものの、沈線と刺突で胴部に山形のモチーフを描く一群である。他のⅣ類土器と文様、調整、胎土等が類似するのでここに含めた。1270は口縁部下位から胴部中央付近であると考えられる。頸部に横位の沈線を4条施した後、上下端に凹形の刺突を施す。口縁部下位から頸部にかけて斜位の沈線と逆三角形の刺突が確認できる。山形のモチーフの一部と考えられる。胴部には斜位や横位の沈線、刺突が確認できる。同じく山形のモチーフの一部と考えられる。斜位の沈線と刺突で囲まれた内部に無節斜行縄文Lの原体押圧を模したような刺突が1段施されている。1271は頸部から胴部下付付近と考えられる。横位の沈線を頸部、胴部中央付近に施した後、横位の沈線間の上位に山形のモチーフを描き、山形のモチーフの端部を胴部中央付近の横位の沈線と弧状の沈線で繋いでいる。山形のモチーフの上に、弧状の短沈線が施されている。また、沈線の施文が完了した段階で、刺突の施文が行われたと考えられる。これは横位の沈線、刺突の施文の完了後に斜位の沈線、刺突を施す1270とは異っている。

1272・1273は頸部に横位の刻目突帯を施す一群である。1272は口縁部下位から胴部上半付付近と考えられる。頸部に刻目突帯を2段施文する。胴部に無節斜行縄文Rの原体の一部が僅かに確認できるため、網目状捻糸文もしくは捻糸文の可能性もある。1273は口縁部下位から胴部中央付近と考えられる。口縁部付近と頸部に微隆線状の刻目突帯を1段ずつ施す。口縁部外面付近に大量の煤状の炭化物が確認できる。

1274・1275は捻糸文を施文後に両端に沈線を施文する一群である。1274は無節斜行縄文Lを軸に左巻きしたものを斜位に施している。1275は無節斜行縄文Rを軸に左巻きしたものを縦位、斜位に施している。

1276・1277は斜位の沈線で区画した内部に斜位の刺突を施す一群である。器形、口縁部文様等他のⅣ類土器と類似することから、ここに含めた。1276は頸部から胴部上半付付近と考えられる。頸部と胴部上半に横位の刻目突帯を施文後に、刻目突帯の両端に横位の浅い沈線を施す。その後、斜位の沈線で「V」字状のモチーフを描き、内部に斜位の刺突を2段施す。1277は斜位の沈線を間

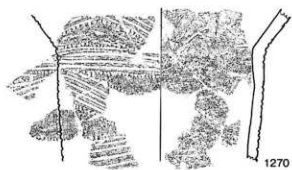
隔を開けて施文する。沈線間に刺突具を右下から器面に当て施文している。文様、調整、胎土等が1250と類似することから、同一個体の可能性が高いと考えられる。

1278～1293は底部で、上げ底状を呈するものが多い。1278～1284は胴部外面に網目状捻糸文、捻糸文を縦位に施し、胴部下半もしくは底面境付近に横位の沈線を施す一群である。網目状捻糸文は1278・1279が0段1の捻りを軸に右巻き後、左巻きしたもので、1280～1283は無節斜行縄文Rを軸に左巻き後、右巻きしたものである。1278は胴部下付付近から底部と考えられる。胴部下半に横位の沈線を5条施す。底部円盤の外周部分に粘土紐を巻き付けて、胴部を輪積み成形したと考えられる。1279～1281は底面境よりやや高い位置に横位の沈線を施す。1282は上げ底状の底部で、底部円盤の外周部分に粘土紐を巻きつけ、わずかに高台状に成形している。底面境付近に横位の沈線を施す。1283は底面境付近に横位の沈線を施している。その後、縦位の短沈線を一部施文している。やや上げ底気味の底部である。1284は底面境付近に横位の沈線と縦位の短沈線が確認できる。

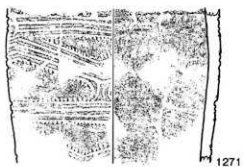
1285～1287は胴部下半から底面境付近に斜位の沈線を施す一群である。1285は胴部下半から底面境付近と考えられる。底部にむけて直線的にすばまる円筒形の器形である。0段rの捻りを軸に右巻き後、左巻きした網目状捻糸文を縦位に施す。胴部下半、底面境付近に横位の沈線を施した後、斜位の沈線で菱形のモチーフを描く。1286は無節斜行縄文Lを軸に左巻き後、右巻きした網目状捻糸文を縦位に施した後、底面境付近に斜位の沈線を施す。一部弧状の沈線を施す箇所もある。1287は無節斜行縄文Lを軸に左巻き後、右巻きしたものを底面境まで縦位に施した後、網目状捻糸文が施されない部分に斜位の沈線を施す。

1288～1290は縦位の網目状捻糸文のみを施す一群である。ただし、沈線を施文する一群の一部の可能性もある。網目状捻糸文は1288は無節斜行縄文R、1289は無節斜行縄文L、1290は0段1の捻りを軸に右巻き後、左巻きしたものである。

1291～1293は捻糸文、縄文を施文した後に両端に沈線を施し区画を行う磨消縄文を施す一群である。1291・1293が単節斜行縄文LR、1292が無節斜行縄文Rを軸に密接に左巻きした捻糸文である。1291・1292は上げ底状の底部を呈する。1291は胴部が底部に向けて直線状にすばまる縦長の器形と考えられる。縄文を幾何学状に施文後、沈線を施したと考えられる。1292は胴部が底部に向けて直線状にすばまる器形である。捻糸文を斜位に施した後、沈線を施文している。外面には煤状の炭化物が確認できる。1293は縄文を横位の施文した後、先端を細く加工した棒状工具で沈線を施し、一部縄文をナデ消した箇所がある。



1270



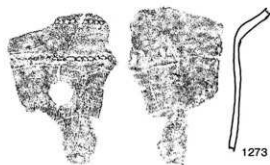
1271



1272



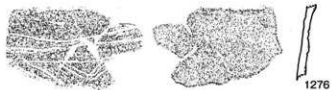
1274



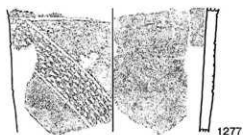
1273



1275



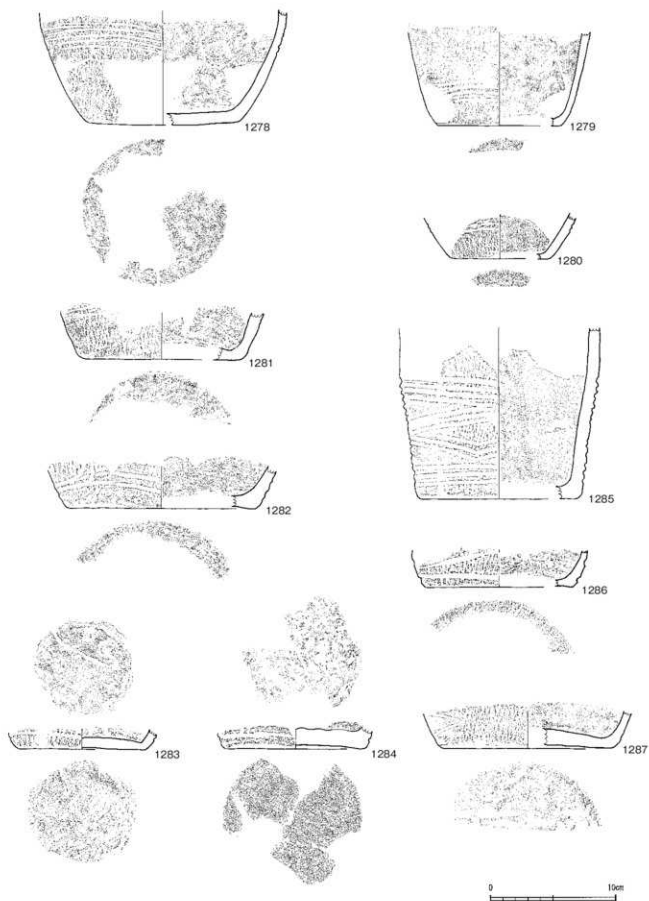
1276



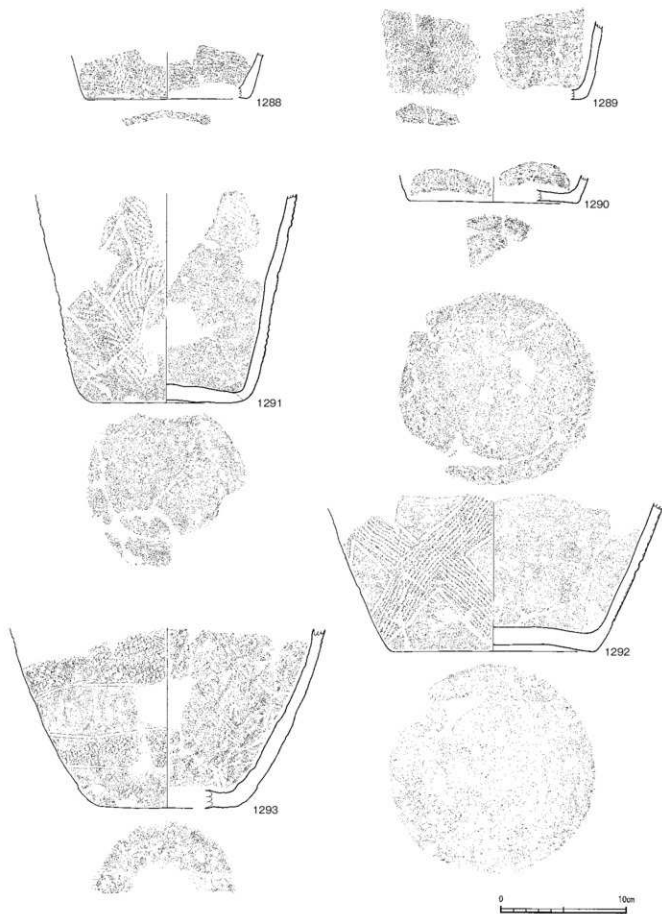
1277



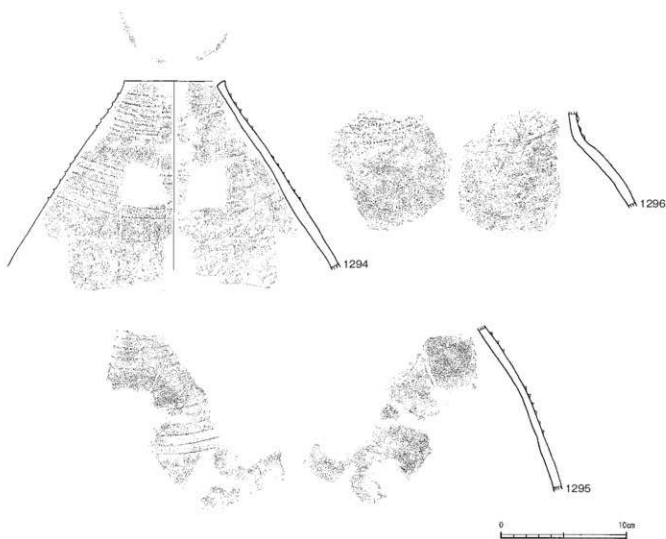
第 400 图 XV 類土器 (22)



第401図 XV類土器(23)



第 402 図 XV 類土器 (24)



第403図 XV類土器 (25)

1294～1296 は壺形土器である。口縁部から胴部中央に向けて「ハ」の字状に広がる器形と考えられる。口縁部から肩部、胴部上半の2か所に横位の微隆線状の刻目突帯を数段ずつ貼り付けている。明確に胴部下半と考えられるものや胴部下半まで接合する個体はないが、胴部下半から底部は無文と考えられる。1294 は口縁部から胴部中央付近と考えられる。口縁部から胴部中央に向けて直線的に広がる器形である。口唇部は内傾するように成形している。口縁部に5段、肩部には6段の横位の微隆線状の刻目突帯を貼り付けている。1295 は口唇部は残存していないもの、口縁部付近から胴部中央付近の破片と考えられる。文様、調整、胎土等が1294と類似することから同一個体の可能性が高いと考えられる。1296 は頭部から、肩部付近と考えられる。頭部付近に微隆線状の刻目突帯を3段施す。3段目の刻目突帯は、施文が途切れる箇所がある。頭部から胴部に向けて、やや曲線

的に広がる器形と考えられる。

第21表 I類土器観察表

※ () は推定

洞域 番号	分類	器種	出土区	部位	法量 (cm)		主文様・調整	胎土			色調		備考		
					口径	底径		目利	赤	黒	外面	内面			
247	I	深鉢	I 21	Ⅴ 口縁部	6.1		貝殻刺突文・ナデ					にぶい黄橙	にぶい黄橙		
	I	深鉢	H 22	Ⅴ 口縁部	7.0		貝殻刺突文・ナデ					黒灰	にぶい黄橙		
	I	深鉢	I 23	V a 口縁部	3.9		貝殻刺突文・ナデ					橙	暗灰黄		
	I	深鉢	H 22	Ⅴ 口縁部	3.7		貝殻刺突文・ナデ					橙	灰黄褐		
	I	深鉢	L 20	Ⅴ 口縁部	5.8		貝殻刺突文・ナデ					橙	にぶい褐		
	I	深鉢	-	-	口縁部	3.8		貝殻刺突文・ナデ					灰黄褐	暗灰黄	
	I	深鉢	F 17	Ⅴ 口縁部	2.9		貝殻刺突文・ナデ					黒褐	灰黄褐		
	I	深鉢	J 20	Ⅴ 口縁部	10.5		貝殻刺突文・ナデ					灰黄褐	赤褐		
	I	深鉢	J 20	Ⅴ 口縁部	6.0		貝殻刺突文・貝殻条痕文					橙	橙		
	I	深鉢	F 22	Ⅴ 口縁部	4.4		貝殻刺突文・ナデ					黒	黒褐		
	I	深鉢	D 23	Ⅴ 口縁部	3.1		貝殻刺突文・ナデ					灰褐	にぶい褐		
	I	深鉢	F 22	Ⅴ 口縁部	3.0		貝殻刺突文・ナデ					にぶい褐	にぶい橙		
	I	深鉢	J 21	Ⅴ 口縁部	5.2		貝殻刺突文・貝殻条痕文					ナデ・ケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
	I	深鉢	J 21	Ⅴ 口縁部	4.3		貝殻刺突文・貝殻条痕文					橙	にぶい黄橙		
I	深鉢	J 21	V 口縁部	3.9		貝殻刺突文・貝殻条痕文					ナデ・ケズリ	橙	にぶい黄褐		
I	深鉢	J 21	Ⅴ 口縁部	3.6		貝殻刺突文・貝殻条痕文					ナデ	橙	にぶい黄橙		
I	深鉢	J 21	Ⅴ 口縁部	14.0		貝殻刺突文・貝殻条痕文					ナデ・ケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙		

第22表 II類土器観察表 (1)

洞域 番号	分類	器種	出土区	部位	法量 (cm)		主文様・調整	胎土			色調		備考		
					口径	底径		目利	赤	黒	外面	内面			
249	II	深鉢	F 22	Ⅴ 口縁部	9.3		貝殻刺突文・貝殻条痕文					橙	にぶい黄橙	補修孔有り	
	II	深鉢	J 21	Ⅴ 口縁部	11.2		刺突文・貝殻条痕文					にぶい黄褐	橙		
	II	深鉢	J 19	Ⅴ 口縁部	6.3		貝殻刺突文・貝殻条痕文					にぶい黄橙	橙		
	II	深鉢	I 19	Ⅴ 口縁部	16.2		刺突文・貝殻条痕文					橙	橙	補修孔有り	
	II	深鉢	G 19	Ⅴ 口縁部	14.2	25.0	刺突文・貝殻条痕文					にぶい橙	橙		
	II	深鉢	F 22	Ⅴ 口縁部	9.8		刺突文・貝殻条痕文					にぶい橙	にぶい赤褐		
	II	深鉢	H 20	Ⅴ 口縁部	11.48	9.21	刺突文・貝殻条痕文					ナデ	橙		
	II	深鉢	H 22	Ⅴ 口縁部	10.1		刺突文・貝殻条痕文					ナデ・ケズリ	灰黄褐	灰黄褐	補修孔有り
	II	深鉢	F 20	Ⅴ 口縁部	10.8		刺突文・貝殻条痕文					ナデ・ケズリ	灰黄褐	灰黄褐	
	II	深鉢	H 17	Ⅴ 口縁部	11.4		刺突文・貝殻条痕文					ケズリ	橙	にぶい黄橙	
	II	深鉢	H 22	Ⅴ 口縁部	9.0		刺突文・貝殻条痕文					ケズリ	橙	橙	
	II	深鉢	G 23	Ⅴ 口縁部	10.5		刺突文・貝殻条痕文					ケズリ	にぶい褐	灰黄褐	補修孔有り
	II	深鉢	G 22	Ⅴ 口縁部	8.5		刺突文・貝殻条痕文					ケズリ	灰黄褐	灰黄褐	補修孔有り
	II	深鉢	J 21	Ⅴ 口縁部	8.7		刺突文・貝殻条痕文					ケズリ	橙	にぶい褐	
II	深鉢	J 18	Ⅴ 口縁部	14.3		刺突文・刺突文・貝殻条痕文					ケズリ	橙	明赤褐		
II	深鉢	K 21	Ⅴ 口縁部	14.2		刺突文・貝殻条痕文					ケズリ	橙	橙		
II	深鉢	F 23	Ⅴ 口縁部	12.31	8.23	刺突文・貝殻条痕文					ナデ・ケズリ	橙	橙	補修孔有り	
II	深鉢	J 19	Ⅴ 口縁部	25.2		刺突文・貝殻条痕文					ナデ・ケズリ	橙	橙		
II	深鉢	F 21	Ⅴ 口縁部	16.0		刺突文・貝殻条痕文					ナデ・ケズリ	明赤褐	灰黄褐		
II	深鉢	H 21	Ⅴ 口縁部	16.0		刺突文・貝殻条痕文					ナデ・ケズリ	にぶい褐	にぶい褐		
II	深鉢	I 20	Ⅴ 口縁部	19.6		刺突文・貝殻条痕文					ナデ・ケズリ	黒褐	暗灰黄	スス付着	
II	深鉢	F 23	Ⅴ 口縁部	13.2		刺突文・貝殻条痕文					ナデ・ケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄褐		
II	深鉢	J 20	Ⅴ 口縁部	6.9		刺突文・貝殻条痕文					ナデ・ケズリ	灰褐	灰褐		
251	II	深鉢	F 21	Ⅴ 口縁部	12.0		刺突文・流麗文・貝殻条痕文					ケズリ	黒褐	灰黄褐	
	II	深鉢	G 20	Ⅴ 口縁部	10.0		刺突文・流麗文・貝殻条痕文					ナデ・ケズリ	にぶい黄橙	灰黄褐	
	II	深鉢	G 22	Ⅴ 口縁部	9.6		刺突文・流麗文・貝殻条痕文					ナデ・ケズリ	灰黄褐	黒褐	スス付着
	II	深鉢	F 21	Ⅴ 口縁部	5.2		刺突文・流麗文・貝殻条痕文					ナデ・ケズリ	灰褐	灰黄褐	
	II	深鉢	I 21	V a 口縁部	10.0		刺突文・流麗文・貝殻条痕文					ナデ・ケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
	II	深鉢	G 19	Ⅴ 口縁部	4.3		刺突文・流麗文・貝殻条痕文					ナデ・ケズリ	にぶい黄橙	灰黄褐	
	II	深鉢	H 19	Ⅴ 口縁部	8.4		刺突文・流麗文・貝殻条痕文					ナデ・ケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
	II	深鉢	G 20	Ⅴ 口縁部	4.3		刺突文・流麗文・貝殻条痕文					ナデ・ケズリ	にぶい黄橙	灰黄褐	
	II	深鉢	I 20	Ⅴ 底部	22.4	21.1	刺突文・貝殻条痕文					ナデ・ケズリ	橙	橙	
	II	深鉢	G 23	Ⅴ 底部	12.0	7.3	貝殻条痕文					ナデ・ケズリ・指おき痕	明赤褐	明赤褐	
	II	深鉢	D 21	Ⅴ 底部	16.2		貝殻条痕文					ケズリ	にぶい黄橙	橙	
	II	深鉢	G 16	Ⅴ 底部	15.3		貝殻条痕文					ナデ・ケズリ	橙	灰黄褐	
	II	深鉢	G 22	Ⅴ 底部	8.3	11.6	貝殻条痕文					ナデ・ケズリ・指おき痕	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
	II	深鉢	E 23	Ⅴ 底部	9.8	12.5	貝殻条痕文					ナデ・ケズリ・指おき痕	橙	橙	
II	深鉢	F 24	Ⅴ 底部	10.8	9.8	貝殻条痕文・ナデ					ケズリ	明赤褐	橙		
253	II	深鉢	E 23	Ⅴ 底部	12.8	6.0	貝殻条痕文					ナデ・ケズリ・指おき痕	にぶい黄橙	橙	
	II	深鉢	J 22	Ⅴ 底部	13.0	2.4	貝殻条痕文・ナデ					ナデ・ケズリ	橙	にぶい褐	
	II	深鉢	K 21	Ⅴ 底部	16.8	6.3	貝殻条痕文・ナデ					ナデ・ケズリ	橙	橙	

第23表 II類土器観察表(2)

※()は推定

洞窟番号	図録番号	分類	器種	出土区	部位	法量 (cm)		主文様・調整		胎土				色調		備考			
						口径	底径	器高	外面	内面	目	質	色	肌	外面		内面		
253	294	II	深鉢	K 21	Ⅵ	底部	13.3	2.0	貝殻条痕文	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	○	○	橙	橙	
	295	II	深鉢	E 24	Ⅵ	底部	13.4	2.9	貝殻条痕文	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	○	○	明赤褐	明赤褐	
	296	II	深鉢	F 19	Ⅵ	底部	12.8	3.1	貝殻条痕文・ナデ	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	○	○	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
254	297	II	深鉢	F 21	Ⅵ	底部	9.6	4.3	貝殻条痕文	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	○	○	橙	橙	
	298	II	深鉢	G 20	Ⅵ	底部	11.0	5.8	貝殻条痕文	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	○	○	橙	橙	
	299	II	深鉢	D 20	Ⅵ	底部	8.0	5.1	貝殻条痕文・ナデ	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	○	○	にぶい橙	にぶい褐	
	300	II	深鉢	H 9	Ⅵ	底部	7.0	4.2	貝殻条痕文・ナデ	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	○	○	明赤褐	明赤褐	
	301	II	深鉢	G 19	Ⅵ	底部	15.4	2.6	貝殻条痕文・ナデ・キザミ	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	○	○	橙	灰黄褐	
	302	II	深鉢	F 21	Ⅵ	底部	16.6	2.0	貝殻条痕文・ナデ・キザミ	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	○	○	橙	灰黄褐	
	303	II	深鉢	F 22	Ⅵ	底部	12.0	1.9	貝殻条痕文・ナデ・キザミ	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	○	○	にぶい褐	にぶい褐	
	304	II	深鉢	E 21	Ⅵ	底部	9.2	3.5	貝殻条痕文・ナデ・キザミ	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	○	○	にぶい黄橙	橙	
	305	II	深鉢	E 19	Ⅵ	底部	8.0	2.2	貝殻条痕文・ナデ・キザミ	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	○	○	橙	にぶい褐	

第24表 III類土器観察表

洞窟番号	図録番号	分類	器種	出土区	部位	法量 (cm)		主文様・調整		胎土				色調		備考					
						口径	底径	器高	外面	内面	目	質	色	肌	外面		内面				
256	306	III	深鉢	G 21	Ⅵ	口縁部	15.0	11.2	貝殻刺突文・條痕文・貝殻条痕文	ケズリ	○	○	○	○	○	○	にぶい赤褐	橙			
	307	III	深鉢	G 21	Ⅵ	口縁部	15.0	7.8	貝殻刺突文・條痕文・貝殻条痕文	ケズリ	○	○	○	○	○	○	灰褐	明赤褐			
	308	III	深鉢	C 25	Ⅵ	口縁部	6.0	5.0	貝殻刺突文・條痕文・貝殻条痕文	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	○	○	灰褐	灰黄褐			
	309	III	深鉢	G 16	Ⅵ	口縁部	10.7	10.7	貝殻刺突文・條痕文・貝殻条痕文	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	○	○	橙	橙			
	310	III	深鉢	G 16	Ⅵ	口縁部	9.8	9.8	貝殻刺突文・條痕文・貝殻条痕文	ケズリ	○	○	○	○	○	○	にぶい褐	灰褐			
	311	III	深鉢	E 23	Ⅵ	口縁部	20.8	12.9	貝殻刺突文・條痕文・貝殻条痕文	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	○	○	○	橙	黒褐		
	312	III	深鉢	F 20	Ⅵ	口縁部	17.8	17.8	貝殻刺突文・條痕文・貝殻条痕文	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	○	○	○	にぶい黄	黒褐		
	313	III	深鉢	H 20	Ⅵ	口縁部	12.9	12.9	貝殻刺突文・條痕文・貝殻条痕文	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	○	○	○	黒褐	黒褐	補修孔有り	
	314	III	深鉢	F 20	Ⅵ	口縁部	13.4	13.4	貝殻刺突文・條痕文・貝殻条痕文	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	○	○	○	にぶい褐	にぶい褐	補修孔有り	
	315	III	深鉢	F 23	Ⅵ	口縁部	7.0	7.0	貝殻刺突文・條痕文・貝殻条痕文	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	○	○	○	灰褐	明褐		
258	316	III	深鉢	I 20	Ⅵ	口縁部	6.9	6.9	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	○	○	○	にぶい黄橙	暗灰黄		
	317	III	深鉢	H 21	Ⅵ	口縁部	6.8	6.8	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	○	○	○	にぶい黄	灰黄褐		
	318	III	深鉢	E 17	Ⅵ	胴部	18.3	18.3	刺突文・沈線文・貝殻条痕文	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	○	○	○	橙	橙		
	319	III	深鉢	E 21	Ⅵ	口縁部	11.8	15.5	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ケズリ	○	○	○	○	○	○	○	黒褐	にぶい赤褐		
259	320	III	深鉢	G 21	Ⅵ	口縁部	9.6	16.7	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ケズリ	○	○	○	○	○	○	○	にぶい赤褐	にぶい赤褐	補修孔有り	
	321	III	深鉢	G 21	Ⅵ	口縁部	6.1	6.1	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	○	○	○	灰褐	にぶい褐		
	322	III	深鉢	G 18	Ⅵ	胴部	12.8	12.8	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	○	○	○	明褐	明赤褐		
	323	III	深鉢	G 21	Ⅵ	胴部	9.0	9.0	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	○	○	○	灰褐	にぶい褐		
	324	III	深鉢	E 24	Ⅵ	胴部	17.2	17.2	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	○	○	○	○	明赤褐	明赤褐	
	325	III	深鉢	F 20	Ⅵ	口縁部	15.9	15.9	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ケズリ	○	○	○	○	○	○	○	褐	褐		
	326	III	深鉢	G 22	Ⅵ	口縁部	14.6	14.6	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ケズリ	○	○	○	○	○	○	○	灰褐	にぶい赤褐		
	327	III	深鉢	F 20	Ⅵ	口縁部	6.4	6.4	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	○	○	○	黒褐	明赤褐		
	328	III	深鉢	I 17	Ⅵ	胴部	6.2	6.2	貝殻刺突文・條痕文	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	○	○	○	にぶい黄	にぶい褐		
	329	III	深鉢	F 21	Ⅵ	胴部	15.2	15.2	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	橙	橙		
260	330	III	深鉢	G 20	Ⅵ	胴部	13.0	13.0	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ケズリ	○	○	○	○	○	○	○	にぶい黄	灰褐		
	331	III	深鉢	F 20	V b	口縁部	15.1	6.3	貝殻刺突文・條痕文	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	○	○	○	橙	にぶい黄褐		
	332	III	深鉢	H 3	Ⅵ	口縁部	7.1	7.1	貝殻刺突文・條痕文	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	○	○	○	橙	橙		
	333	III	深鉢	M 19	V b	胴部	9.6	9.6	貝殻刺突文・條痕文	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	○	○	○	にぶい褐	にぶい褐		
	334	III	深鉢	J 20	Ⅵ	胴部	6.7	6.7	貝殻刺突文・條痕文	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	○	○	○	にぶい橙	にぶい黄橙		
	335	III	深鉢	I 20	Ⅵ	胴部	9.9	9.9	貝殻刺突文	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	○	○	○	にぶい黄	にぶい黄褐		
	336	III	深鉢	F 21	Ⅵ	胴部	6.9	6.9	貝殻刺突文	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	○	○	○	にぶい黄	黒褐	補修孔有り	
261	337	III	深鉢	J 23	V b	胴部	5.5	5.5	沈線文・貝殻条痕文	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	○	○	○	明赤褐	灰褐		
	338	III	深鉢	F 20	Ⅵ	底部	4.4	4.4	沈線文・貝殻条痕文	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	○	○	○	にぶい黄橙	淡黄		
	339	III	深鉢	E 17	Ⅵ	底部	10.8	2.2	沈線文・貝殻条痕文	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	○	○	○	にぶい黄	にぶい赤褐		
	340	III	深鉢	F 22	Ⅵ	底部	8.9	1.9	沈線文・貝殻条痕文	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	○	○	○	褐	明赤褐		
	341	III	深鉢	H 5	Ⅵ	胴部	9.9	7.5	貝殻条痕文	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	○	○	○	にぶい黄褐	明赤褐		
	342	III	深鉢	J 21	Ⅵ	胴部	12.9	7.7	貝殻刺突文	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	○	○	○	にぶい黄橙	にぶい黄橙		
	343	III	深鉢	I 19	Ⅵ	底部	9.3	1.6	沈線文・貝殻条痕文	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	○	○	○	にぶい赤	明赤褐		
	344	III	深鉢	G 21	Ⅵ	底部	8.9	2.6	沈線文・貝殻条痕文	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	○	○	○	にぶい黄	橙		
	345	III	深鉢	G 21	Ⅵ	胴部	4.3	4.3	貝殻刺突文	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	○	○	○	にぶい黄褐	にぶい橙		
	346	III	深鉢	G 22	Ⅵ	底部	2.3	2.3	沈線文・貝殻条痕文	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	○	○	○	灰黄褐	灰黄褐		
347	III	深鉢	D 21	Ⅵ	胴部	2.1	2.1	沈線文・貝殻条痕文	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	○	○	○	にぶい褐	にぶい褐			

第25表 IV類土器観察表

※ () は推定

村区 番号	分類	器種	出土区	部位	法量 (cm)		主文様・調整	胎土				色調		備考				
					口径	底径		目	質	色	目	外	内					
263	IV	深鉢	H 21 VI	口縁部	8.0		具段刺突文・具段条痕文	ナデ	○	○	○	○	○	○	にぶい黄橙	にぶい黄橙		
	349	IV	深鉢	G 21 VI	口縁部	14.4	0.4	具段刺突文・具段条痕文	ナデ	○	○	○	○	○	○	明赤褐	黒	
	350	IV	深鉢	H 9 VII	口縁部	10.2	4.9	具段刺突文・具段条痕文	ナデ	○	○	○	○	○	○	明赤褐	明赤橙	
	351	IV	深鉢	G 21 VI	胴部			押引文・具段条痕文	ナデ	○	○	○	○	○	○	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
	352	IV	深鉢	G 21 VI	胴部			押引文・具段条痕文	ナデ	○	○	○	○	○	○	にぶい黄橙	灰黄	
	353	IV	深鉢	H 17 VII	胴部			具段刺突文	ナデ	○	○	○	○	○	○	赤褐	褐	
	354	IV	深鉢	H 17 VII	胴部			具段刺突文	ナデ	○	○	○	○	○	○	明赤褐	褐	
	355	IV	深鉢	H 17 VII	胴部			具段刺突文	ナデ	○	○	○	○	○	○	明赤褐	明赤褐	
	356	IV	深鉢	H 17 VII	胴部			具段刺突文	ナデ	○	○	○	○	○	○	明赤褐	明赤褐	

第26表 V類土器観察表 (1)

村区 番号	分類	器種	出土区	部位	法量 (cm)		主文様・調整	胎土				色調		備考				
					口径	底径		目	質	色	目	外	内					
265	V	深鉢	E 15 VII	口縁部	25.2	19.8	具段刺突文・具段条痕文	ナデ	○	○	○	○	○	○	橙	にぶい黄橙	スス付着	
	358	V	深鉢	E 19 VII	口縁部			具段刺突文・具段条痕文	ナデ	○	○	○	○	○	○	明赤褐	明赤褐	
	359	V	深鉢	D 16 VII	口縁部	20.4	4.4	具段刺突文・具段条痕文	ナデ	○	○	○	○	○	○	灰褐	明褐	
	360	V	深鉢	F 12 VII	口縁部	21.8	11.5	具段刺突文・具段条痕文	ナデ	○	○	○	○	○	○	にぶい黄褐	にぶい黄褐	
	361	V	深鉢	H 17 VII	口縁部	21.2	15.8	具段刺突文・具段条痕文	ナデ	○	○	○	○	○	○	橙	橙	
	362	V	深鉢	F 19 VII	口縁部	23.8	12.2	具段刺突文・具段条痕文	ナデ	○	○	○	○	○	○	明赤褐	橙	
	363	V	深鉢	E 20 VII	口縁部	21.6	11.4	具段刺突文・具段条痕文	ナデ	○	○	○	○	○	○	橙	橙	
	364	V	深鉢	G 16 VII	口縁部	17.5	6.1	具段刺突文	ナデ	○	○	○	○	○	○	橙	橙	
	365	V	深鉢	F 12 VII	口縁部		5.2	具段刺突文	ナデ	○	○	○	○	○	○	灰黄褐	にぶい褐	
	366	V	深鉢	G 18 VII	口縁部	18.2	4.6	具段刺突文・具段条痕文	ナデ	○	○	○	○	○	○	橙	にぶい黄橙	
266	V	深鉢	E 15 VII	口縁部	14.8	15.0	具段刺突文・具段条痕文	ナデ	○	○	○	○	○	○	明赤褐	にぶい褐		
	367	V	深鉢	E 15 VII	口縁部	21.3	13.1	具段刺突文・具段条痕文	ナデ	○	○	○	○	○	○	にぶい橙	橙	
	368	V	深鉢	L 14 VII	口縁部	30.0	22.1	具段刺突文・具段条痕文	ナデ	○	○	○	○	○	○	にぶい黄橙	浅黄橙	
	370	V	深鉢	G 17 VII	口縁部	14.6	8.2	具段刺突文・具段条痕文	ナデ	○	○	○	○	○	○	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
	371	V	深鉢	D 17 VII	口縁部		5.4	具段刺突文・具段条痕文	ナデ	○	○	○	○	○	○	灰灰	黄灰	
	372	V	深鉢	E 17 VII	口縁部	12.2	8.0	具段刺突文・具段条痕文	ナデ	○	○	○	○	○	○	にぶい黄	灰灰	
	373	V	深鉢	F 15 VII	口縁部	11.488.2	17.0	具段刺突文・具段条痕文	ナデ	○	○	○	○	○	○	にぶい黄	黒褐	
	374	V	深鉢	D 16 VII	口縁部		5.4	具段刺突文・具段条痕文	ナデ	○	○	○	○	○	○	灰黄褐	暗灰黄	
	375	V	深鉢	E 14 VII	口縁部	31.0	6.7	具段刺突文・具段条痕文	ナデ	○	○	○	○	○	○	にぶい橙	にぶい橙	
	376	V	深鉢	F 13 VII	口縁部	22.8	4.8	具段刺突文・具段条痕文	ナデ	○	○	○	○	○	○	橙	橙	
267	V	深鉢	E 16 VII	口縁部	24.6	13.829.1	具段刺突文・具段条痕文	ナデ	○	○	○	○	○	○	明赤褐	明赤褐		
	377	V	深鉢	M 17 VII	口縁部	19.2	11.2	具段刺突文・具段条痕文	ナデ	○	○	○	○	○	○	明赤褐	明赤褐	
	378	V	深鉢	G 17 VII	口縁部		8.8	具段刺突文・具段条痕文	ナデ	○	○	○	○	○	○	にぶい橙	明赤褐	
	380	V	深鉢	G 17 VII	口縁部	36.0	25.1	具段刺突文・具段条痕文	ナデ	○	○	○	○	○	○	橙	明褐	
	381	V	深鉢	E 17 VII	口縁部	23.0	12.2	具段刺突文・具段条痕文	ナデ	○	○	○	○	○	○	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
	382	V	深鉢	H 17 VII	口縁部		11.8	具段刺突文・具段条痕文	ナデ	○	○	○	○	○	○	にぶい黄橙	橙	
	383	V	深鉢	G 9 VII	口縁部		12.4	具段刺突文・具段条痕文	ナデ	○	○	○	○	○	○	明赤褐	にぶい黄橙	
	384	V	深鉢	F 24 VII	口縁部		9.2	具段刺突文・具段条痕文	ナデ	○	○	○	○	○	○	橙	橙	
	385	V	深鉢	K 21 VII	口縁部		13.2	具段刺突文・具段条痕文	ナデ	○	○	○	○	○	○	橙	橙	
	386	V	深鉢	H 21 VII	口縁部	17.2	6.0	具段刺突文・具段条痕文	ナデ	○	○	○	○	○	○	橙	橙	
269	387	V	深鉢	F 11 VII	口縁部	22.0	10.4	具段刺突文・具段条痕文	ナデ	○	○	○	○	○	○	にぶい橙	明赤褐	
	388	V	深鉢	I 18 VII	口縁部	19.6	5.2	具段刺突文・具段条痕文	ナデ	○	○	○	○	○	○	橙	橙	
	389	V	深鉢	F 22 VII	口縁部	13.2	10.8	具段刺突文・具段条痕文	ナデ	○	○	○	○	○	○	橙	橙	
	390	V	深鉢	E 13 VII	口縁部	17.0	14.8	具段刺突文・具段条痕文	ナデ	○	○	○	○	○	○	にぶい黄橙	灰黄褐	
	391	V	深鉢	F 24 VII	口縁部	13.6	5.7	具段刺突文・具段条痕文	ナデ	○	○	○	○	○	○	明赤褐	にぶい黄橙	
	392	V	深鉢	G 18 VII	口縁部	15.4	5.0	具段刺突文・具段条痕文	ナデ	○	○	○	○	○	○	にぶい黄橙	橙	
	393	V	深鉢	F 23 VII	口縁部	18.6	5.3	具段刺突文・具段条痕文	ナデ	○	○	○	○	○	○	にぶい黄橙	にぶい黄褐	
	394	V	深鉢	L 13 VII	口縁部		7.4	具段刺突文・具段条痕文	ナデ	○	○	○	○	○	○	橙	橙	
	395	V	深鉢	E 17 VII	口縁部	16.088.6	19.2	具段刺突文・具段条痕文	ナデ	○	○	○	○	○	○	黄灰	にぶい黄橙	
	396	V	深鉢	E 15 VII	口縁部	12.4	9.4	具段刺突文・具段条痕文	ナデ	○	○	○	○	○	○	にぶい黄橙	にぶい黄	
270	397	V	深鉢	E 15 VII	口縁部	14.3	5.8	具段刺突文・具段条痕文	ナデ	○	○	○	○	○	○	灰黄褐	灰黄褐	
	398	V	深鉢	D 23 VII	口縁部	13.6	7.2	具段刺突文・具段条痕文	ナデ	○	○	○	○	○	○	にぶい黄	灰黄褐	
	399	V	深鉢	E 15 VII	口縁部	15.0	4.8	具段刺突文・具段条痕文	ナデ	○	○	○	○	○	○	暗灰黄	にぶい黄橙	
	400	V	深鉢	E 15 VII	口縁部		4.2	具段刺突文・具段条痕文	ナデ	○	○	○	○	○	○	灰黄褐	黒褐	
	401	V	深鉢	E 24 VII	口縁部	17.8	11.5	具段刺突文・具段条痕文	ナデ	○	○	○	○	○	○	橙	灰褐	
	402	V	深鉢	J 12 VII	口縁部	21.0	10.4	刺突文・具段条痕文	ナデ	○	○	○	○	○	○	橙	にぶい黄橙	
	403	V	深鉢	F 21 VII	口縁部	22.0	22.5	刺突文・具段条痕文	ナデ	○	○	○	○	○	○	にぶい黄	にぶい黄橙	
	404	V	深鉢	F 16 VII	口縁部		9.2	刺突文・具段条痕文	ナデ	○	○	○	○	○	○	橙	橙	
	405	V	深鉢	F 17 VII	口縁部	19.8	17.4	刺突文・具段条痕文	ナデ	○	○	○	○	○	○	にぶい橙	にぶい橙	

第27表 V類土器観察表(2)

※()は推定

洞窟番号	図録番号	分類	器種	出土区	部位	法量 (cm)		文様・調整	胎土			色調		備考			
						口径	底径		目録	目録	目録	外面	内面				
272	406	V	深鉢	E 15	Ⅷ	口縁-底部	15.0	10.4	17.2	刺突文・貝殻条状文	ナデ	○	○	○	○	○	
	407	V	深鉢	E 16	Ⅷ	口縁部			6.7	刺突文・貝殻条状文	ナデ	○	○	○	○	○	
	408	V	深鉢	F 16	Ⅷ	口縁-腹部	18.0		10.0	刺突文・貝殻条状文	ナデ	○	○	○	○	○	スス付着
	409	V	深鉢	J 18	Ⅷ	口縁部			3.5	刺突文・貝殻条状文	ナデ	○	○	○	○	○	
	410	V	深鉢	J 20	Ⅷ	口縁部			4.4	刺突文・貝殻条状文	ナデ	○	○	○	○	○	
	411	V	深鉢	F 24	Ⅷ	口縁-腹部	23.4		10.6	刺突文・沈線文	ナデ	○	○	○	○	○	
	412	V	深鉢	M 17	Ⅷ	口縁部			6.4	刺突文・貝殻条状文	ナデ	○	○	○	○	○	
	413	V	深鉢	F 21	Ⅷ	腹部-腹部			11.7	貝殻刺突文・貝殻条状文	ナデ	○	○	○	○	○	
	414	V	深鉢	F 19	Ⅷ	腹部			17.8	貝殻条状文	ナデ	○	○	○	○	○	
	415	V	深鉢	L 18	Ⅷ	腹部-腹部			13.9	貝殻刺突文・貝殻条状文	ナデ	○	○	○	○	○	スス付着
273	416	V	深鉢	E 14	Ⅷ	腹部			15.9	貝殻刺突文・貝殻条状文	ナデ	○	○	○	○	○	
	417	V	深鉢	E 15	V	腹部			15.4	貝殻条状文	ナデ	○	○	○	○	○	
	418	V	深鉢	I 22	Ⅷ	腹部			11.7	沈線文・貝殻条状文	ナデ	○	○	○	○	○	
	419	V	深鉢	E 19	Ⅷ	腹部			11.1	貝殻条状文	ナデ	○	○	○	○	○	
	420	V	深鉢	F 18	Ⅷ	腹部			15.0	貝殻条状文	ナデ	○	○	○	○	○	
	421	V	深鉢	E 22	Ⅷ	腹部			8.7	貝殻条状文	ナデ	○	○	○	○	○	
	422	V	深鉢	E 17	Ⅷ	腹部-底部	14.2	10.9	13.9	沈線文・貝殻条状文	ナデ	○	○	○	○	○	
	423	V	深鉢	E 14	Ⅷ	腹部-底部	17.2	8.3	13.9	沈線文・貝殻条状文	ナデ	○	○	○	○	○	
	424	V	深鉢	E 16	Ⅷ	底部	14.6	7.0	12.9	沈線文・貝殻条状文	ナデ	○	○	○	○	○	
	425	V	深鉢	E 10	Ⅷ	腹部-底部	11.6	12.9	13.9	沈線文・貝殻条状文	ナデ	○	○	○	○	○	
275	426	V	深鉢	F 19	Ⅷ	底部	10.8	4.5	13.9	沈線文・貝殻条状文	ナデ	○	○	○	○	○	
	427	V	深鉢	D 18	Ⅷ	底部			5.8	沈線文・貝殻条状文	ナデ	○	○	○	○	○	
	428	V	深鉢	D 19	Ⅷ	底部	12.6	5.5	13.9	沈線文・貝殻条状文	ナデ	○	○	○	○	○	
	429	V	深鉢	D 15	Ⅷ	底部	8.2	3.8	13.9	沈線文・貝殻条状文	ナデ	○	○	○	○	○	
	430	V	深鉢	G 22	Ⅷ	底部			2.2	沈線文・貝殻条状文	ナデ	○	○	○	○	○	
	431	V	深鉢	E 14	Ⅷ	底部	8.0	3.0	13.9	沈線文・貝殻条状文	ナデ	○	○	○	○	○	
	432	V	深鉢	E 16	Ⅷ	底部	12.0	2.0	13.9	沈線文・貝殻条状文	ナデ	○	○	○	○	○	
	433	V	深鉢	E 14	Ⅷ	底部			3.5	沈線文・貝殻条状文	ナデ	○	○	○	○	○	
	434	V	深鉢	E 13	Ⅷ	上部			5.0	沈線文・貝殻条状文	ナデ	○	○	○	○	○	
	435	V	深鉢	F 16	Ⅷ	腹部-底部			7.2	貝殻条状文	ナデ	○	○	○	○	○	
276	436	V	深鉢	L 19	Ⅷ	底部	10.8	6.6		貝殻条状文	ナデ	○	○	○	○	○	
	437	V	深鉢	L 18	Ⅷ	腹部-底部	9.2	5.3		貝殻条状文	ナデ	○	○	○	○	○	
	438	V	深鉢	D 17	Ⅷ	底部			5.6	貝殻条状文	ナデ	○	○	○	○	○	
	439	V	深鉢	F 24	Ⅷ	腹部-底部	12.2	13.2		貝殻条状文	ナデ	○	○	○	○	○	

第28表 VI類土器観察表(1)

洞窟番号	図録番号	分類	器種	出土区	部位	法量 (cm)		文様・調整	胎土			色調		備考			
						口径	底径		目録	目録	目録	外面	内面				
278	440	Ⅵ	深鉢	E 16	Ⅷ	口縁部			4.0	貝殻刺突文	ナデ	○	○	○	○	○	
	441	Ⅵ	深鉢	L 17	Ⅷ	口縁部			5.7	貝殻刺突文	ナデ	○	○	○	○	○	
	442	Ⅵ	深鉢	F 22	Ⅷ	底部			5.3	貝殻刺突文	ナデ	○	○	○	○	○	
	443	Ⅵ	深鉢	I 13	Ⅷ	口縁-腹部	12.7		9.6	貝殻刺突文	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	○	
	444	Ⅵ	深鉢	G 4	Ⅷ	口縁-腹部			12.0	貝殻刺突文	ナデ	○	○	○	○	○	
	445	Ⅵ	深鉢	G 15	Ⅷ	口縁-腹部	23.0		8.7	貝殻刺突文	ナデ	○	○	○	○	○	
	446	Ⅵ	深鉢	G 20	Ⅷ	口縁-腹部			11.9	貝殻刺突文	ナデ	○	○	○	○	○	
	447	Ⅵ	深鉢	H 16	Ⅷ	口縁-腹部	13.5		11.3	貝殻刺突文	ナデ	○	○	○	○	○	
	448	Ⅵ	深鉢	G 21	Ⅷ	口縁部			3.6	貝殻刺突文	ナデ	○	○	○	○	○	補修孔有り
	449	Ⅵ	深鉢	G 21	Ⅷ	口縁部			7.7	貝殻刺突文	ナデ	○	○	○	○	○	
279	450	Ⅵ	深鉢	J 20	Ⅷ	口縁-腹部			8.7	貝殻刺突文	ナデ	○	○	○	○	○	
	451	Ⅵ	深鉢	K 16	Ⅷ	口縁-腹部	12.0		9.6	貝殻刺突文	ナデ	○	○	○	○	○	
	452	Ⅵ	深鉢	G 13	Ⅷ	口縁-腹部			11.3	貝殻刺突文	ナデ	○	○	○	○	○	
	453	Ⅵ	深鉢	G 13	Ⅷ	口縁部	26.0		8.7	貝殻刺突文	ナデ	○	○	○	○	○	補修孔有り
	454	Ⅵ	深鉢	M 16	Ⅷ	口縁部			6.5	貝殻刺突文	ナデ	○	○	○	○	○	
	455	Ⅵ	深鉢	G 17	Ⅷ	口縁-腹部	21.0		11.3	貝殻刺突文	ナデ	○	○	○	○	○	
	456	Ⅵ	深鉢	D 23	Ⅷ	口縁部			5.2	貝殻刺突文	ナデ	○	○	○	○	○	
	457	Ⅵ	深鉢	M 12	Ⅷ	口縁-腹部			8.4	貝殻刺突文	ナデ	○	○	○	○	○	
	458	Ⅵ	深鉢	H 15	Ⅷ	口縁部			7.9	貝殻刺突文	ナデ	○	○	○	○	○	
	459	Ⅵ	深鉢	H 23	Ⅷ	口縁-腹部			11.3	貝殻刺突文	ナデ	○	○	○	○	○	補修孔有り
280	460	Ⅵ	深鉢	L 16	Ⅷ	口縁部	18.3		11.8	貝殻刺突文	ナデ	○	○	○	○	○	
	461	Ⅵ	深鉢	L 16	Ⅷ	口縁-腹部	19.8		14.0	刺突文	ナデ	○	○	○	○	○	
	462	Ⅵ	深鉢	L 15	Ⅷ	口縁-腹部	19.4		7.4	刺突文	ナデ	○	○	○	○	○	補修孔有り
	463	Ⅵ	深鉢	K 16	Ⅷ	口縁部	16.0		5.6	貝殻刺突文	ナデ	○	○	○	○	○	

第29表 VI類土器観察表(2)

※()は推定

河川 番号	図録 番号	分類	器種	出土区	部位	法量 (cm)	文様・調整		胎土				色調		備考						
							外面	内面	目	黒	赤	青	外面	内面							
280	464	VI	深鉢	L13	Ⅵ	口縁部	6.8	貝殻刺突文	ナデ												
	465	VI	深鉢	M19	Ⅵa	口縁部	11.5	貝殻刺突文	ナデ												
	466	VI	深鉢	E21	Ⅵ	口縁部	3.9	貝殻刺突文	ナデ												
	467	VI	深鉢	G18	Ⅵ	口縁部	5.8	貝殻刺突文	ナデ												
	468	VI	深鉢	G23	Ⅵ	口縁部	3.9	貝殻刺突文	ナデ												
	469	VI	深鉢	J16	Ⅵ	口縁部	18.5	貝殻刺突文	ナデ												
281	470	VI	深鉢	G18	Ⅵ	口縁部	11.8	貝殻刺突文	ナデ												
	471	VI	深鉢	D17	Ⅵ	口縁部	5.1	貝殻刺突文	ナデ												
	472	VI	深鉢	H16	Ⅵ	口縁部	15.8	貝殻刺突文	ナデ												
	473	VI	深鉢	H16	Ⅵ	口縁部	9.1	貝殻刺突文	ナデ												
	474	VI	深鉢	F23	Ⅵ	口縁部	6.3	貝殻刺突文	ナデ												
	475	VI	深鉢	H22	Ⅵ	口縁部	9.2	貝殻刺突文	ナデ												
	476	VI	深鉢	G22	Ⅵ	口縁部	9.5	貝殻刺突文	ナデ												
	477	VI	深鉢	N9	Ⅵa	口縁部	11.0	貝殻刺突文	ナデ												
	478	VI	深鉢	H19	Ⅵ	口縁部	5.4	貝殻刺突文	ナデ												
	479	VI	深鉢	H21	Ⅵ	口縁部	15.5	貝殻刺突文	ナデ												
	282	480	VI	深鉢	G20	Ⅵ	口縁部	6.6	貝殻刺突文	ナデ											
		481	VI	深鉢	H14	Ⅵ	口縁部	11.6	貝殻刺突文	ナデ											
482		VI	深鉢	G23	Ⅵ	口縁部	4.7	貝殻刺突文	ナデ												
483		VI	深鉢	N15	Ⅵ	口縁部	6.4	貝殻刺突文・指おき裏	ナデ												
484		VI	深鉢	F21	Ⅵ	口縁部	15.0	貝殻刺突文	ナデ												
485		VI	深鉢	M10	Ⅵ	口縁部	5.4	貝殻刺突文	ナデ												
486		VI	深鉢	F21	Ⅵ	口縁部	20.0	貝殻刺突文	ナデ												
487		VI	深鉢	F21	Ⅵ	口縁部	3.9	貝殻刺突文	ナデ												
488		VI	深鉢	E20	Ⅵ	口縁部	14.4	貝殻刺突文	ナデ												
489		VI	深鉢	I13	Ⅵ	口縁部	13.4	貝殻刺突文	ナデ												
283		490	VI	深鉢	J18	Ⅵ	口縁部	6.0	貝殻刺突文	ナデ											
		491	VI	深鉢	F20	Ⅵ	口縁部	5.8	貝殻刺突文	ナデ											
	492	VI	深鉢	H19	Ⅵ	口縁部	10.8	貝殻刺突文	ナデ												
	493	VI	深鉢	G16	Ⅵ	口縁部	5.8	貝殻刺突文	ナデ												
	494	VI	深鉢	J19	Ⅵ	口縁部	4.4	貝殻刺突文	ナデ												
	495	VI	深鉢	F21	Ⅵ	口縁部	7.4	貝殻刺突文	ナデ												
	496	VI	深鉢	H15	Ⅵ	胴部	14.4	貝殻刺突文	ナデ												
	497	VI	深鉢	H15	Ⅵ	胴部	17.8	貝殻刺突文	ナデ												
	498	VI	深鉢	H16	Ⅵ	胴部	12.8	貝殻刺突文	ナデ・ケズリ												
	499	VI	深鉢	G4	Ⅵ	胴部	23.8	貝殻刺突文	ナデ・ケズリ												
	284	500	VI	深鉢	H20	Ⅵ	胴部	10.1	貝殻刺突文	ナデ											
		501	VI	深鉢	G23	Ⅵ	胴部	10.7	貝殻刺突文	ナデ											
502		VI	深鉢	G13	Ⅵ	胴部	12.1	貝殻刺突文	ナデ												
503		VI	深鉢	H13	Ⅵ	胴部	5.5	貝殻刺突文	ナデ・ケズリ												
504		VI	深鉢	F21	Ⅵ	胴部	13.0	貝殻刺突文	ナデ												
505		VI	深鉢	J22	Ⅵb	胴部	5.6	貝殻刺突文	ナデ												
506		VI	深鉢	I23	Ⅵb	底部	20.0	貝殻刺突文	ナデ												
507		VI	深鉢	D20	Ⅵ	底部	15.0	貝殻刺突文	ナデ												
508		VI	深鉢	I17	Ⅵ	底部	13.7	貝殻刺突文	ナデ												
285		509	VI	深鉢	G21	Ⅵ	底部	14.9	貝殻刺突文	ナデ											
		510	VI	深鉢	H14	Ⅵ	底部	14.6	貝殻刺突文	ナデ											
		511	VI	深鉢	K17	Ⅵ	底部	21.9	貝殻刺突文	ナデ											
	512	VI	深鉢	F17	Ⅵ	底部	19.5	貝殻刺突文	ナデ												
	513	VI	深鉢	K15	Ⅵ	底部	12.4	貝殻刺突文	ナデ・ケズリ												
	514	VI	深鉢	K12	Ⅵ	底部	13.5	貝殻刺突文	ナデ												
286	515	VI	深鉢	J20	Ⅵ	底部	14.0	貝殻刺突文	ナデ												
	516	VI	深鉢	H16	Ⅵ	底部	13.0	貝殻刺突文	ナデ・ケズリ												
	517	VI	深鉢	L15	Ⅵ	底部	9.6	貝殻刺突文	ナデ												
	518	VI	深鉢	J18	Ⅵ	底部	14.0	貝殻刺突文	ナデ												
	519	VI	深鉢	L15	Ⅵ	底部	9.8	貝殻刺突文	ナデ												
	520	VI	深鉢	G23	Ⅵ	底部	2.0	貝殻刺突文	ナデ												
	521	VI	深鉢	K19	Ⅵ	底部	1.7	貝殻刺突文	ケズリ												

第30表 Ⅷ類土器観察表

※ () は推定

洞内 観測 番号	分類	器種	出土区	部位	法量 (cm)		主文様・調整		胎土					色調		備考			
					口径	底径	外面	内面	目録	目録	目録	目録	目録	外面	内面				
288	Ⅷ	深鉢	E 19	Ⅷ	口縁部	4.3		短沈線文・貝殻刺変文	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	Ⅷ	深鉢	L 14	Ⅷ	口縁部	17.0		短沈線文・貝殻刺変文	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	Ⅷ	深鉢	G 17	Ⅷ	口縁部	23.4	16.2	30.7	短沈線文・貝殻刺変文	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	
	Ⅷ	深鉢	K 15	Ⅷ	口縁部	20.4	9.5		短沈線文・貝殻刺変文	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	
	Ⅷ	深鉢	D 17	Ⅷ	口縁部	19.6			短沈線文・貝殻刺変文	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	
289	Ⅷ	深鉢	I 19	Ⅷ	口縁部	18.3	8.9		短沈線文・貝殻刺変文	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	
	Ⅷ	深鉢	G 16	Ⅷ	口縁部	21.7	8.1		短沈線文・貝殻刺変文	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	
	Ⅷ	深鉢	G 17	Ⅷ	口縁部	6.3			短沈線文・貝殻刺変文	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	
	Ⅷ	深鉢	L 14	Ⅷ	口縁部	23.5	18.2		短沈線文・貝殻刺変文	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	
	Ⅷ	深鉢	L 21	Ⅷ	口縁部	28.8	11.0		短沈線文・貝殻刺変文	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	
290	Ⅷ	深鉢	M 21	Ⅷ	口縁部	6.5			短沈線文・貝殻刺変文	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	
	Ⅷ	深鉢	G 21	Ⅷ	口縁部	15.3			短沈線文・貝殻刺変文	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	
	Ⅷ	深鉢	G 20	Ⅷ	口縁部	23.4	14.6		短沈線文・貝殻刺変文	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	
	Ⅷ	深鉢	M 21	Ⅷ	口縁部	14.6			短沈線文・貝殻刺変文	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	
	Ⅷ	深鉢	G 15	Ⅷ	口縁部	10.7			短沈線文・貝殻刺変文	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	
	Ⅷ	深鉢	F 20	Ⅷ	口縁部	6.0			短沈線文・貝殻刺変文	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	
	Ⅷ	深鉢	I 15	Ⅷ	口縁部	18.8	6.4		短沈線文・貝殻刺変文	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	
	Ⅷ	深鉢	H 21	Ⅷ	口縁部	9.0			短沈線文・貝殻刺変文	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	
	Ⅷ	深鉢	K 21	Ⅷ	口縁部	6.5			短沈線文・貝殻刺変文	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	
	Ⅷ	深鉢	I 19	Ⅷ	口縁部	8.9			短沈線文・貝殻刺変文	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	
291	Ⅷ	深鉢	J 21	Ⅷ	口縁部	7.1			短沈線文・貝殻刺変文	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	
	Ⅷ	深鉢	F 20	Ⅷ	口縁部	34.6	9.7		短沈線文・貝殻刺変文	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	
	Ⅷ	深鉢	J 20	Ⅷ	口縁部	14.6	8.9		短沈線文	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	
	Ⅷ	深鉢	H 23	Ⅷ	口縁部	17.6	6.7		短沈線文・貝殻刺変文	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	
	Ⅷ	深鉢	I 14	Ⅷ	口縁部	25.8	28.0		短沈線文・貝殻刺変文	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	
	Ⅷ	深鉢	I 22	Ⅷ	口縁部	4.9			短沈線文	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	
	Ⅷ	深鉢	D 23	Ⅷ	口縁部	23.8	18.4		短沈線文・貝殻刺変文	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	
	Ⅷ	深鉢	J 20	Ⅷ	口縁部	21.7	17.5		短沈線文・貝殻刺変文	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	
	Ⅷ	深鉢	D 17	Ⅷ	胴部	12.8			短沈線文・貝殻刺変文	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	
	Ⅷ	深鉢	F 20	Ⅷ	胴部	8.0			短沈線文・貝殻刺変文	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	
292	Ⅷ	深鉢	F 23	Ⅷ	胴部	7.0			短沈線文・貝殻刺変文	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	
	Ⅷ	深鉢	F 22	Ⅷ	胴部	10.5			短沈線文・貝殻刺変文	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	
	Ⅷ	深鉢	F 23	Ⅷ	胴部	10.1			短沈線文・貝殻刺変文	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	
	Ⅷ	深鉢	F 19	Ⅷ	胴部	28.2			短沈線文・貝殻刺変文	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	
	Ⅷ	深鉢	F 4	Ⅷ	胴部	17.5			短沈線文	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	
	Ⅷ	深鉢	G 24	Ⅷ	底部	13.1	4.7		短沈線文・貝殻刺変文	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	
	Ⅷ	深鉢	G 13	Ⅷ	底部	7.5	9.4		短沈線文・貝殻刺変文	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	

第31表 Ⅷ類土器観察表 (1)

洞内 観測 番号	分類	器種	出土区	部位	法量 (cm)		主文様・調整		胎土					色調		備考			
					口径	底径	外面	内面	目録	目録	目録	目録	目録	外面	内面				
294	Ⅷ	深鉢	G 24	Ⅷ	口縁部	25.2	20.1		条線文・貝殻刺変文	ナデ・ケズリ・磨おさえ直	○	○	○	○	○	○	○	○	
	Ⅷ	深鉢	F 23	Ⅷ	口縁部	26.6	11.1		条線文・貝殻刺変文	ナデ・ケズリ・磨おさえ直	○	○	○	○	○	○	○	○	
	Ⅷ	深鉢	N 21	Ⅷ	口縁部	9.3			沈線文	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	○	○	○	○	
	Ⅷ	深鉢	L 13	Ⅷ	口縁部	8.1			条線文・貝殻刺変文	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	
	Ⅷ	深鉢	K 10	Ⅷ	口縁部	26.6	11.6		条線文・貝殻刺変文	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	
	Ⅷ	深鉢	L 14	Ⅷ	口縁部	19.6			条線文・貝殻刺変文	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	
	Ⅷ	深鉢	K 12	Ⅷ	口縁部	28.3	12.8		条線文・貝殻刺変文	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	
	Ⅷ	深鉢	I 4	Ⅷ	口縁部	19.0	17.9		短沈線文	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	
	Ⅷ	深鉢	D 22	Ⅷ	口縁部	6.1			条線文	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	
	Ⅷ	深鉢	F 10	Ⅷ	口縁部	20.0	10.5		条線文	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	
295	Ⅷ	深鉢	E 10	Ⅷ	口縁部	18.0	11.8		条線文	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	
	Ⅷ	深鉢	E 10	Ⅷ	口縁部	18.0	11.0		条線文	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	
	Ⅷ	深鉢	J 13	Ⅷ	口縁部	5.6			刺変文	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	
	Ⅷ	深鉢	H 19	Ⅷ	口縁部	2.8			短沈線文	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	
	Ⅷ	深鉢	I 16	Ⅷ	口縁部	8.2			沈線文	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	
	Ⅷ	深鉢	J 20	Ⅷ	口縁部	5.4			短沈線文	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	
	Ⅷ	深鉢	J 20	Ⅷ	口縁部	4.2			沈線文・短沈線文	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	
	Ⅷ	深鉢	D 22	Ⅷ	口縁部	4.9			沈線文	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	
	Ⅷ	深鉢	J 15	Ⅷ	口縁部	6.0			沈線文・短沈線文	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	
	Ⅷ	深鉢	K 13	Ⅷ	口縁部	6.3			沈線文・短沈線文	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	
296	Ⅷ	深鉢	F 10	Ⅷ	胴部	9.9			条線文	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	

第 32 表 V 類土器観察表 (2)

※ () は推定

洞窟番号	図録番号	分類	器種	出土区	部位	法量 (cm)		主文様・調整		胎土				色調		備考				
						口径	底径	高さ	外面	内面	粘り	黒	赤	黄	外面		内面			
296	580	V	深鉢	D 21	V	胴部	7.3	条線文	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	581	V	深鉢	M 15	V	胴部	5.5	条線文	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	582	V	深鉢	G 23	V	胴部	8.4	短沈線文	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	スス付着
	583	V	深鉢	G 19	V	胴部	6.4	沈線文	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	584	V	深鉢	H 19	V	胴部	11.3	沈線文	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	585	V	深鉢	I 17	V	胴部	17.3	沈線文	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	586	V	深鉢	E 22	V	胴部	5.8	沈線文・短沈線文	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	587	V	深鉢	L 16	V	胴部	6.4	沈線文・短沈線文	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	肩オリブノ
	588	V	深鉢	I 21	V	胴部	5.8	短沈線文	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	589	V	深鉢	K 13	V	胴部	11.9	刺突文	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
297	590	V	深鉢	M 11	V	胴部	8.7	刺突文	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	591	V	深鉢	K 20	V	胴部	4.2	刺突文	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	592	V	深鉢	F 9	V	底部	13.8	8.8	条線文	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	593	V	深鉢	G 21	V	底部	10.8	5.1	沈線文	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	594	V	深鉢	J 20	V	底部	10.4	3.9	沈線文	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	595	V	深鉢	I 20	V	底部	10.5	4.1	短沈線文	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	596	V	深鉢	D 18	V	胴部・底部	9.8		沈線文	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	597	V	深鉢	J 19	V	底部	12.9	2.9	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	598	V	深鉢	E 22	V	底部	8.8	2.0	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	底部本葉直
	599	V	深鉢	H 20	V	底部	1.6		ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	底部本葉直

第 33 表 IX 類土器観察表

洞窟番号	図録番号	分類	器種	出土区	部位	法量 (cm)		主文様・調整		胎土				色調		備考			
						口径	底径	高さ	外面	内面	粘り	黒	赤	黄	外面		内面		
299	600	IX	深鉢	G 21	V	口縁・胴部	28.8		貝殻条痕文	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	
	601	IX	深鉢	F 21	V	口縁部	7.5		貝殻条痕文	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	
	602	IX	深鉢	I 23	V	口縁部	4.9		貝殻条痕文	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	
	603	IX	深鉢	D 17	V	口縁部	16.2	6.7	貝殻条痕文	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	○	○	○	○	
	604	IX	深鉢	D 17	V	口縁部	6.3		貝殻条痕文	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	○	○	○	○	
	605	IX	深鉢	J 20	V	口縁部	21.3	7.2	貝殻条痕文	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	
	606	IX	深鉢	H 15	V	口縁部	6.5		貝殻条痕文	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	
	607	IX	深鉢	G 20	V	口縁部	22.4	15.1	貝殻条痕文	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	
	608	IX	深鉢	I 21	V	口縁部	23.4	12.5	貝殻条痕文	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	
	609	IX	深鉢	G 16	V	口縁部	6.9	5.5	貝殻条痕文	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	
300	610	IX	深鉢	M 13	V	口縁部	5.2		貝殻条痕文	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	
	611	IX	深鉢	J 19	V	口縁・胴部	13.6	10.1	貝殻条痕文	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	○	○	○	○	
	612	IX	深鉢	J 14	V	口縁部	9.4		貝殻条痕文	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	
	613	IX	深鉢	E 17	V	口縁部	18.0	6.1	貝殻条痕文	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	
	614	IX	深鉢	G 16	V	口縁部	17.6	5.6	貝殻条痕文	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	
	615	IX	深鉢	F 19	V	口縁部	12.9	12.8	貝殻条痕文	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	
	616	IX	深鉢	H 22	V	胴部	11.0		貝殻条痕文	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	○	○	○	○	
	617	IX	深鉢	H 15	V	胴部	10.0		貝殻条痕文	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	○	○	○	○	
	618	IX	深鉢	G 22	V	胴部	10.0		貝殻条痕文	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	

第 34 表 X 類土器観察表 (1)

洞窟番号	図録番号	分類	器種	出土区	部位	法量 (cm)		主文様・調整		胎土				色調		備考				
						口径	底径	高さ	外面	内面	粘り	黒	赤	黄	外面		内面			
302	619	X	深鉢	D 16	V	口縁部	35.6	14.4	貝殻条痕文	肩線文・ナデ・指おさえ痕	○	○	○	○	○	○	○	○	穿孔有り	
	620	X	深鉢	L 13	V	口縁部	34.9	8.7	貝殻条痕文	肩線文・ナデ・指おさえ痕	○	○	○	○	○	○	○	○		
	621	X	深鉢	D 16	V	口縁部	14.9		貝殻条痕文	肩線文・ナデ・指おさえ痕	○	○	○	○	○	○	○	○	スス付着	
303	622	X	深鉢	J 20	V	口縁部	37.8	9.9	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	穿孔有り
	623	X	深鉢	M 18	V	口縁部	10.9		ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	624	X	深鉢	I 24	V	口縁部	6.7		ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	625	X	深鉢	J 19	V	口縁部	9.5		ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	626	X	深鉢	G 23	V	口縁・胴部	15.7		ナデ	ナデ・指おさえ痕	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	627	X	深鉢	M 18	V	口縁部	11.1		ナデ	ナデ・指おさえ痕	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	628	X	深鉢	F 22	V	口縁部	44.4	11.1	ナデ	ナデ・指おさえ痕	○	○	○	○	○	○	○	○	○	穿孔有り
304	629	X	深鉢	H 18	V	口縁部	5.7		ナデ	ナデ・指おさえ痕	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	630	X	深鉢	G 22	V	口縁部	7.0		ナデ	ナデ・指おさえ痕	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	631	X	深鉢	F 19	V	口縁部	5.5		ナデ	ナデ・指おさえ痕	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	632	X	深鉢	E 21	V	口縁部	4.9		ナデ	ナデ・指おさえ痕	○	○	○	○	○	○	○	○	○	

第35表 X類土器観察表(2)

※ () は推定

調査 番号	分類	器種	出土区	部位	法原 (cm)		主文様・調整		胎土				色調		備考
					口径	底径	外面	内面	目付	片割	貫目	外面	内面		
304	633	X 深鉢 J	15 VI	口縁部	4.9		ナデ	ナデ・指おさえ痕	○	○	○	○	にぶい黄橙	にぶい黄橙	穿孔有り
	634	X 深鉢 E	16 VI	胴部	11.2		貝殻条痕文・ナデ	貝殻条痕文・ナデ	○	○	○	○	明赤褐	明赤褐	スス付着
	635	X 深鉢 G	17 VI	胴部	18.0		ナデ	貝殻条痕文・ナデ	○	○	○	○	明赤褐	明赤褐	
306	636	X 深鉢 D	16 VI	胴部	24.9		ナデ	貝殻条痕文・ナデ	○	○	○	○	明赤褐	明赤褐	
	637	X 深鉢 D	16 VII a	胴部	15.1		ナデ	貝殻条痕文・ナデ	○	○	○	○	にぶい赤褐	橙	
	638	X 深鉢 D	16 VI	胴部	18.4		ナデ	貝殻条痕文・ナデ	○	○	○	○	明赤褐	にぶい黄橙	
	640	X 深鉢 L	21 VI	胴部	8.8		ナデ・指おさえ痕	ナデ・指おさえ痕	○	○	○	○	橙	黒褐	
	641	X 深鉢 F	23 VI	胴部	9.3		ナデ・指おさえ痕	ナデ・指おさえ痕	○	○	○	○	灰黄褐	暗灰黄	
	642	X 深鉢 F	23 VI	胴部	14.7		ナデ・指おさえ痕	ナデ・指おさえ痕	○	○	○	○	灰黄褐	灰黄褐	
307	642	X 深鉢 E	22 VI	胴部	11.7		ナデ・指おさえ痕	ナデ・指おさえ痕	○	○	○	○	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
	643	X 深鉢 L	12 VI	胴部	19.7		ナデ・指おさえ痕	ナデ・指おさえ痕	○	○	○	○	橙	にぶい赤褐	
	644	X 深鉢 H	17 VI	胴部	11.7		ナデ・指おさえ痕	ナデ・指おさえ痕	○	○	○	○	褐	にぶい黄橙	
645	X 深鉢 I	20 VI	胴部	7.9		ナデ・指おさえ痕	ナデ・指おさえ痕	○	○	○	○	にぶい黄橙	にぶい黄橙		
646	X 深鉢 G	22 VI	底部	2.6	4.2	ナデ	ナデ	○	○	○	○	灰褐	にぶい黄橙	スス付着	

第36表 XI類土器観察表(1)

調査 番号	分類	器種	出土区	部位	法原 (cm)		主文様・調整		胎土				色調		備考
					口径	底径	外面	内面	目付	片割	貫目	外面	内面		
309	647	XI 深鉢 L	16 VI	口縁部	9.1		押型文	押型文・ナデ・指おさえ痕	○	○	○	○	褐	にぶい黄橙	スス付着
	648	XI 深鉢 L	20 VI	口縁部	6.2		押型文	押型文・ナデ	○	○	○	○	褐	橙	
	649	XI 深鉢 K	15 VI	口縁部	9.9		押型文	押型文・ナデ・指おさえ痕	○	○	○	○	褐	にぶい黄橙	スス付着
	650	XI 深鉢 L	17 VI	口縁部	6.1		押型文	押型文・ナデ・指おさえ痕	○	○	○	○	黒褐	黒褐	スス付着
	651	XI 深鉢 G	23 VI	口縁部	11.4		押型文	押型文・ナデ・指おさえ痕	○	○	○	○	褐	灰褐	
	652	XI 深鉢 I	21 VI	口縁部	11.4		押型文	押型文・ナデ・指おさえ痕	○	○	○	○	褐	褐	
	653	XI 深鉢 F	17 VI	口縁部	21.8	5.6	押型文	流黄文・ナデ・指おさえ痕	○	○	○	○	褐	黒褐	
	654	XI 深鉢 I	22 VI	口縁部	5.4		押型文	押型文・観文・ナデ・指おさえ痕	○	○	○	○	灰黄褐	灰黄褐	
	655	XI 深鉢 F	23 VI	胴部・底面	8.0		押型文	ナデ	○	○	○	○	橙	にぶい橙	
	656	XI 深鉢 F	23 VI	胴部	5.4		押型文	ナデ	○	○	○	○	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
	657	XI 深鉢 F	23 VI	胴部・底面	11.8		押型文	ナデ	○	○	○	○	にぶい黄橙	黒褐	
	658	XI 深鉢 E	16 VI	胴部	7.8		押型文	ナデ	○	○	○	○	にぶい黄橙	にぶい黄	
	659	XI 深鉢 M	17 VI	胴部	5.8		押型文	ナデ	○	○	○	○	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
	660	XI 深鉢 L	16 VI	胴部	4.9		押型文	ナデ	○	○	○	○	橙	にぶい黄橙	
	310	661	XI 深鉢 F	17 VI	口縁部	21.2	8.6	押型文	ナデ	○	○	○	○	にぶい黄橙	にぶい黄橙
662		XI 深鉢 J	20 VI	口縁・胴部	7.5		押型文	押型文・ナデ	○	○	○	○	灰黄褐	暗灰黄	
663		XI 深鉢 F	21 VI	口縁・胴部	37.4	17.1	押型文	押型文・ナデ・指おさえ痕	○	○	○	○	橙	橙	
664		XI 深鉢 E	22 VI	口縁・胴部	19.0		押型文	押型文・ナデ・指おさえ痕	○	○	○	○	灰褐	橙	
665		XI 深鉢 F	20 VI	口縁部	3.6		押型文	押型文・ナデ	○	○	○	○	黒褐	黒褐	
666		XI 深鉢 E	21 VI	口縁部	7.2		押型文	押型文・ナデ	○	○	○	○	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
667		XI 深鉢 E	24 VI	口縁部	6.7		押型文	押型文・ナデ	○	○	○	○	黒褐	黒褐	補修孔有り
668		XI 深鉢 J	20 VI	口縁部	4.6		押型文	押型文・ナデ	○	○	○	○	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
669		XI 深鉢 G	21 VI	口縁部	6.0		押型文	押型文・ナデ	○	○	○	○	にぶい褐	黒褐	
670		XI 深鉢 E	19 VI	口縁部	6.5		押型文	押型文・ナデ	○	○	○	○	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
671		XI 深鉢 E	25 VII a	胴部・底面	12.4		押型文	押型文・ナデ・指おさえ痕	○	○	○	○	灰黄褐	灰黄褐	
672		XI 深鉢 C	25 VII a	口縁部	6.5		押型文	押型文・ナデ	○	○	○	○	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
673		XI 深鉢 F	23 VI	口縁部	5.6		押型文	押型文・ナデ	○	○	○	○	にぶい黄橙	暗灰黄	
674		XI 深鉢 F	24 VI	口縁部	2.9		押型文	押型文・ナデ	○	○	○	○	にぶい黄橙	暗灰黄	
675		XI 深鉢 C	25 VII a	口縁部	6.8		押型文	押型文・ナデ	○	○	○	○	にぶい黄橙	黄褐	
312	676	XI 深鉢 G	21 VI	口縁部	17.3	9.1	押型文	押型文・ナデ・指おさえ痕	○	○	○	○	橙	黒褐	スス付着
	677	XI 深鉢 F	24 VII a	口縁部	28.5	8.7	押型文	刺突文・ナデ	○	○	○	○	にぶい黄橙	にぶい黄褐	
	678	XI 深鉢 D	22 VI	口縁部	7.3		押型文	刺突文・ナデ	○	○	○	○	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
	679	XI 深鉢 F	24 VI	口縁部	5.0		押型文	刺突文・ナデ	○	○	○	○	にぶい黄橙	黒褐	
	680	XI 深鉢 H	20 VI	口縁部	33.6	6.0	押型文	押型文・ナデ・ケズリ	○	○	○	○	灰黄褐	にぶい黄褐	
	681	XI 深鉢 E	24 VI	口縁部	19.7		押型文	押型文・ナデ・ケズリ	○	○	○	○	灰褐	橙	
	682	XI 深鉢 G	21 VII a	口縁部	5.0		押型文	押型文・ナデ・ケズリ	○	○	○	○	橙	にぶい橙	
	683	XI 深鉢 F	24 VI	口縁部	4.5		押型文	押型文・ナデ・ケズリ	○	○	○	○	灰褐	黒褐	スス付着
	684	XI 深鉢 H	22 VI	口縁部	29.2	6.7	押型文	押型文・ナデ・ケズリ	○	○	○	○	灰褐	明赤褐	
	685	XI 深鉢 D	25 VII b	口縁部	24.3	6.8	押型文	押型文・ケズリ	○	○	○	○	にぶい黄橙	暗灰黄	
	686	XI 深鉢 D	25 VII b	口縁部	2.9		押型文	押型文・ケズリ	○	○	○	○	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
	687	XI 深鉢 C	25 VII c	口縁部	4.9		押型文	押型文・ケズリ	○	○	○	○	にぶい黄橙	灰黄褐	
	688	XI 深鉢 G	20 VI	胴部	5.8		押型文	ナデ	○	○	○	○	にぶい褐	にぶい橙	
	689	XI 深鉢 F	18 VI	口縁部	5.2		押型文	ナデ	○	○	○	○	にぶい黄橙	橙	
	690	XI 深鉢 G	20 VI	胴部	5.4		押型文	ナデ・指おさえ痕	○	○	○	○	橙	にぶい黄橙	

第37表 XⅡ類土器観察表(2)

※()は推定

洞坑 番号	図 録 号	分類	形制	出土区	層位	部位	法量 (cm)		文様・調整		胎土		色調		備考
							口径	底径	外面	内面	胎土	器 底	外面	内面	
313	691	X	深鉢	E 19	VI	口縁部		6.6	押型文	ナデ	○	○	にぶい黄橙	橙	
	692	X	深鉢	G 21	VI	胴部		7.0	押型文	ナデ・指おさえ痕	○	○	にぶい黄	にぶい黄	
	693	X	深鉢	E 23	VI	胴部		4.0	押型文	ナデ	○	○	にぶい黄	オリーブ黒	
	694	X	深鉢	F 19	Ⅷ	口縁・胴部		30.2	押型文	ナデ	○	○	にぶい黄褐	黒褐	
	695	X	深鉢	E 21	Ⅷ	口縁・胴部		36.6	押型文	ナデ・指おさえ痕	○	○	橙	にぶい黄褐	
	696	X	深鉢	G 21	Ⅷ	口縁・胴部		17.4	押型文・沈線文	押型文・ナデ・指おさえ痕	○	○	灰黄褐	灰黄褐	
	697	X	深鉢	E 24	Ⅷ	口縁・胴部		30.0	押型文・沈線文	押型文・ナデ・指おさえ痕	○	○	灰黄褐	灰黄褐	
	698	X	深鉢	F 24	Ⅷ	胴部		8.3	押型文	ケズリ	○	○	にぶい黄褐	灰黄褐	
	699	X	深鉢	H 21	Ⅷ	胴部		6.3	押型文	ケズリ	○	○	にぶい黄橙	黒褐	
	700	X	深鉢	F 24	Ⅷ	胴部		3.7	押型文	ケズリ	○	○	橙	黒褐	
314	701	X	深鉢	G 24	Ⅷa	胴部		13.3	押型文	ケズリ	○	○	にぶい黄褐	黒褐	
	702	X	深鉢	G 22	Ⅷ	胴部		18.8	押型文	ケズリ	○	○	にぶい黄褐	黄褐	
	703	X	深鉢	G 20	Ⅷ	胴部		8.5	押型文	ケズリ	○	○	灰黄褐	にぶい黄	
	704	X	深鉢	G 20	Ⅷ	胴部		5.1	押型文	ケズリ	○	○	黒褐	にぶい黄褐	
	705	X	深鉢	H 21	Ⅷ	胴部・底面		4.0	押型文	ケズリ	○	○	にぶい黄褐	オリーブ黒	
	706	X	深鉢	G 24	Ⅷb	胴部		5.0	押型文	ケズリ	○	○	にぶい赤褐	灰褐	
	707	X	深鉢	F 24	Ⅷa	胴部		5.8	押型文	ケズリ	○	○	にぶい赤褐	黄灰	
	708	X	深鉢	G 22	Ⅷ	底部		9.1	押型文	ナデ・指おさえ痕	○	○	灰黄褐	灰黄褐	
	709	X	深鉢	F 24	Ⅷ	底部		11.6	押型文	ナデ	○	○	にぶい黄	にぶい黄	
	710	X	深鉢	F 20	Ⅷ	胴部・底面		7.5	押型文・ナデ	ケズリ	○	○	にぶい黄	黒褐	スス付着
315	711	X	深鉢	F 22	Ⅷ	底部		12.8	押型文・ナデ	ケズリ	○	○	暗灰黄	黒褐	スス付着
	712	X	深鉢	C 25	Ⅷ	底部		13.0	押型文・ナデ	ケズリ	○	○	にぶい黄	暗灰黄	
	713	X	深鉢	G 22	Ⅷ	底部		14.0	押型文・ナデ	ケズリ	○	○	にぶい黄橙	暗灰黄	
	714	X	深鉢	M 17	Ⅷ	底部		15.0	押型文・ナデ	ケズリ	○	○	暗灰黄	灰黄褐	
	715	X	深鉢	D 21	Ⅷ	底部		11.0	押型文	ナデ・ケズリ	○	○	にぶい黄褐	明赤褐	
	716	X	深鉢	G 22	Ⅷ	底部		10.0	押型文・ナデ	ケズリ	○	○	灰黄褐	黒赤褐	
	717	X	深鉢	D 22	Ⅷ	底部		2.0	押型文	ケズリ	○	○	にぶい黄橙	暗灰黄	
	718	X	深鉢	L 15	Ⅷ	口縁部		6.0	押型文	押型文・ナデ	○	○	褐	褐	
	719	X	深鉢	M 14	V	口縁部		3.4	押型文	押型文・ナデ	○	○	褐	褐	
	720	X	深鉢	L 16	Ⅷ	口縁部		9.7	押型文	押型文・ナデ	○	○	褐	褐	通線入り スス付着
316	721	X	深鉢	L 11	Ⅷ	口縁部		30.0	押型文	押型文・ナデ	○	○	褐	褐	
	722	X	深鉢	J 17	Ⅷ	口縁部		6.5	押型文	押型文・ナデ	○	○	褐	褐	
	723	X	深鉢	K 17	Ⅷ	口縁部		3.6	押型文	押型文・ナデ	○	○	褐	褐	
	724	X	深鉢	G 21	Ⅷ	口縁部		4.0	押型文	ナデ	○	○	褐	黒褐	スス付着
	725	X	深鉢	H 22	Ⅷ	口縁部		4.8	押型文	ナデ	○	○	にぶい黄	暗オリーブ褐	
	726	X	深鉢	F 23	Ⅷ	口縁部		7.0	押型文	ナデ・指おさえ痕	○	○	灰褐	にぶい黄	
	727	X	深鉢	K 20	Ⅷ	口縁部		5.4	押型文	ナデ・指おさえ痕	○	○	にぶい黄褐	黒褐	
	728	X	深鉢	M 19	Ⅷ	口縁部		5.7	押型文	ナデ・指おさえ痕	○	○	にぶい黄橙	灰褐	
	729	X	深鉢	N 16	Ⅷ	口縁部		4.8	押型文	押型文・ナデ	○	○	褐	褐	
	730	X	深鉢	M 21	Ⅷb	口縁部		4.7	押型文	ナデ・指おさえ痕	○	○	灰褐	灰黄褐	
317	731	X	深鉢	M 13	Ⅷ	胴部		7.4	押型文	ナデ	○	○	にぶい黄褐	にぶい黄褐	補修孔有り
	732	X	深鉢	M 19	Ⅷ	胴部		5.5	押型文	ナデ	○	○	にぶい黄褐	暗褐	
	733	X	深鉢	F 18	Ⅷ	底部		4.8	押型文・ナデ	ナデ	○	○	にぶい黄褐	黒褐	
	734	X	深鉢	G 21	Ⅷb	胴部・底面		4.8	押型文・ナデ	ナデ	○	○	にぶい黄褐	黒褐	
	735	X	深鉢	F 18	Ⅷ	底部		3.7	ナデ・指おさえ痕	ナデ・指おさえ痕	○	○	にぶい黄褐	にぶい黄褐	
	736	X	深鉢	G 19	Ⅷ	底部		5.6	ナデ・指おさえ痕	ナデ・指おさえ痕	○	○	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
	737	X	深鉢	F 22	Ⅷ	底部		2.1	ナデ・指おさえ痕	ナデ	○	○	オリーブ黒	にぶい黄	
	738	X	深鉢	F 12	Ⅷ	口縁・胴部		30.0	押型文	押型文・ナデ	○	○	灰褐	灰黄褐	
	739	X	深鉢	G 22	Ⅷ	胴部		9.3	押型文	ケズリ	○	○	にぶい黄	暗灰黄	
	740	X	深鉢	H 22	Ⅷ	胴部		10.2	押型文	ケズリ	○	○	にぶい黄	灰黄褐	
318	741	X	深鉢	H 20	Ⅷ	胴部		5.0	押型文	ケズリ	○	○	にぶい黄	暗灰黄	
	742	X	深鉢	H 22	Ⅷ	底部		2.9	押型文・指おさえ痕	ケズリ	○	○	にぶい黄	オリーブ黒	
	743	X	深鉢	M 13	Ⅷ	口縁部		30.4	押型文	押型文・ナデ	○	○	にぶい黄褐	にぶい黄橙	
	744	X	深鉢	F 22	Ⅷ	口縁部		7.5	押型文	押型文・ナデ	○	○	にぶい黄	にぶい黄	
	745	X	深鉢	I 17	Ⅷa	口縁部		35.1	押型文	押型文・ナデ	○	○	橙	暗褐	
	746	X	深鉢	E 24	Ⅷ	口縁部		5.0	押型文	押型文・ナデ・指おさえ痕	○	○	暗褐	暗褐	
	747	X	深鉢	F 24	Ⅷ	口縁部		4.9	押型文	押型文・ケズリ	○	○	暗赤褐	明褐	
	748	X	深鉢	F 24	Ⅷa	口縁部		5.1	押型文	押型文・ケズリ	○	○	にぶい赤褐	にぶい黄	
	749	X	深鉢	F 20	Ⅷ	口縁部		3.8	押型文	押型文・ケズリ	○	○	灰褐	にぶい黄	
	750	X	深鉢	L 22	Ⅷ	口縁部		3.6	押型文	押型文・ケズリ	○	○	にぶい黄褐	灰褐	
319	751	X	深鉢	E 19	Ⅷ	口縁・胴部		11.4	押型文	押型文・ケズリ	○	○	にぶい黄	にぶい黄	
	752	X	深鉢	E 24	Ⅷ	口縁部		6.2	押型文	押型文・ケズリ	○	○	灰褐	灰黄褐	
	753	X	深鉢	C 25	Ⅷ	口縁部		3.9	押型文	押型文・ケズリ	○	○	黒褐	にぶい黄	
	754	X	深鉢	E 24	Ⅷ	胴部		4.3	押型文・ナデ	押型文・ナデ	○	○	灰黄褐	灰黄褐	

第41表 Ⅱ類土器観察表(2)

※()は推定

洞域 番号	分類	器種	出土区	部位	法量 (cm)	文様・調整		胎土				色調		備考
						外面	内面	目	肌	口縁	底	外面	内面	
333	Ⅱ	深鉢 F 21 VI	Ⅵ	口縁部	4.0	押型文	ナデ・指おさえ痕	○	○	○	○	黒褐	明赤褐	
	Ⅱ	深鉢 F 20 VI	Ⅵ	胴部	8.5	押型文	ナデ・指おさえ痕	○	○	○	○	にぶい黄褐	にぶい黄褐	
	Ⅱ	深鉢 E 21 VI	Ⅵ	胴部	20.9	押型文	ナデ・指おさえ痕	○	○	○	○	にぶい黄褐	にぶい黄褐	
	Ⅱ	深鉢 K 10 VI	Ⅵ	胴部	7.1	押型文	ナデ・指おさえ痕	○	○	○	○	暗灰黄	暗灰黄	
	Ⅱ	深鉢 H 12 V a	Ⅵ	胴部	5.1	押型文	ナデ・指おさえ痕	○	○	○	○	灰黄褐	灰黄	
	Ⅱ	深鉢 E 24 VI	Ⅵ	胴部	9.2	押型文	ナデ・指おさえ痕	○	○	○	○	にぶい褐	にぶい褐	
	Ⅱ	深鉢 E 8 VI上	Ⅵ	胴部	8.3	押型文	ナデ・指おさえ痕	○	○	○	○	明褐	褐	
	Ⅱ	深鉢 K 18 VI	Ⅵ	胴部	8.3	押型文	ナデ・指おさえ痕	○	○	○	○	にぶい褐	にぶい黄褐	
	Ⅱ	深鉢 F 19 VI	Ⅵ	胴部	7.4	押型文	ナデ・指おさえ痕	○	○	○	○	にぶい黄褐	にぶい黄褐	
	Ⅱ	深鉢 M 13 VI	Ⅵ	胴部	12.3	押型文	ナデ・指おさえ痕	○	○	○	○	にぶい褐	にぶい褐	
334	Ⅱ	深鉢 H 12 V a	Ⅵ	胴部	8.2	押型文	ナデ・指おさえ痕	○	○	○	○	黒褐	灰黄褐	
	Ⅱ	深鉢 L 8 VI	Ⅵ	胴部	4.0	押型文	ナデ・指おさえ痕	○	○	○	○	褐	褐	
	Ⅱ	深鉢 M 9 VI上	Ⅵ	腹面・底面	5.6	押型文	ナデ・指おさえ痕	○	○	○	○	褐	明赤褐	
	Ⅱ	深鉢 M 20 VI	Ⅵ	口縁・胴部	11.7	押型文・沈線文	押型文・ナデ・指おさえ痕	○	○	○	○	黒褐	灰黄褐	
	Ⅱ	深鉢 M 19 VI上	Ⅵ	胴部	8.3	押型文・沈線文	押型文・ナデ・指おさえ痕	○	○	○	○	にぶい黄褐	暗灰黄	スス付着
	Ⅱ	深鉢 D 20 VI	Ⅵ	胴部	5.5	押型文・沈線文	ナデ・指おさえ痕	○	○	○	○	にぶい黄橙	灰黄褐	
	Ⅱ	深鉢 G 19 VI	Ⅵ	口縁部 21.1	1.1	押型文	押型文・ナデ・指おさえ痕	○	○	○	○	黒褐	褐	
	Ⅱ	深鉢 J 20 VI	Ⅵ	口縁部	5.7	押型文	押型文・ナデ・指おさえ痕	○	○	○	○	黒褐	褐	
	Ⅱ	深鉢 K 8 VI F	Ⅵ	口縁部	6.0	押型文	ナデ・指おさえ痕	○	○	○	○	灰黄褐	暗灰黄	
	Ⅱ	深鉢 G 22 VI	Ⅵ	口縁・胴部 21.8	18.0	押型文	ナデ・指おさえ痕	○	○	○	○	暗灰黄	黒褐	
335	Ⅱ	深鉢 H 19 VI	Ⅵ	口縁・胴部	7.7	押型文	ナデ・指おさえ痕	○	○	○	○	灰黄褐	にぶい褐	
	Ⅱ	深鉢 H 19 VI	Ⅵ	口縁部	4.0	押型文	ナデ・指おさえ痕	○	○	○	○	灰黄褐	にぶい黄褐	
	Ⅱ	深鉢 M 9 VI上	Ⅵ	口縁部	6.9	押型文	ナデ・指おさえ痕	○	○	○	○	褐	にぶい褐	
	Ⅱ	深鉢 G 19 VI	Ⅵ	胴部	11.9	押型文	ナデ・指おさえ痕	○	○	○	○	橙	にぶい褐	
	Ⅱ	深鉢 K 21 VI	Ⅵ	胴部	5.3	押型文	ナデ・指おさえ痕	○	○	○	○	にぶい黄橙	にぶい黄褐	
	Ⅱ	深鉢 I 24 VI	Ⅵ	胴部	4.7	押型文	ナデ・指おさえ痕	○	○	○	○	にぶい褐	にぶい黄褐	
	Ⅱ	深鉢 G 18 VI	Ⅵ	口縁部	4.0	押型文	押型文	○	○	○	○	灰黄褐	にぶい黄	スス付着
	Ⅱ	深鉢 G 18 VI	Ⅵ	胴部	12.0	押型文	ナデ・指おさえ痕	○	○	○	○	灰黄褐	浅黄	
	Ⅱ	深鉢 D 20 VI	Ⅵ	口縁部	9.9	押型文	押型文・ナデ・指おさえ痕	○	○	○	○	黒褐	灰黄褐	スス付着
	Ⅱ	深鉢 D 20 VI	Ⅵ	口縁部 25.4	7.0	押型文	押型文・ナデ・指おさえ痕	○	○	○	○	にぶい黄褐	黒褐	スス付着
336	Ⅱ	深鉢 D 20 VI	Ⅵ	口縁部	6.0	押型文	押型文・ナデ・指おさえ痕	○	○	○	○	灰黄褐	黄灰	スス付着
	Ⅱ	深鉢 D 20 VI	Ⅵ	口縁部 26.0	5.9	押型文	押型文・ナデ・指おさえ痕	○	○	○	○	灰黄褐	灰黄褐	
	Ⅱ	深鉢 G 15 VI	Ⅵ	胴部	8.8	押型文	ナデ・指おさえ痕	○	○	○	○	灰黄褐	浅黄	
	Ⅱ	深鉢 E 18 VI	Ⅵ	胴部	4.2	押型文・沈線文	ナデ・指おさえ痕	○	○	○	○	褐	灰褐	
	Ⅱ	深鉢 J 20 VI	Ⅵ	口縁部	5.5	押型文	ナデ・指おさえ痕	○	○	○	○	にぶい褐	橙	
	Ⅱ	深鉢 I 21 VI	Ⅵ	口縁・胴部	11.8	網目状懸糸文	ナデ・指おさえ痕	○	○	○	○	灰黄褐	にぶい黄褐	
	Ⅱ	深鉢 J 21 VI	Ⅵ	口縁・胴部 27.8	19.6	網目状懸糸文	ナデ・指おさえ痕	○	○	○	○	褐灰	暗灰黄	
	Ⅱ	深鉢 I 21 VI	Ⅵ	胴部	7.9	網目状懸糸文	ナデ・指おさえ痕	○	○	○	○	灰褐	暗灰黄	
	Ⅱ	深鉢 I 21 VI	Ⅵ	胴部	7.5	網目状懸糸文	ナデ・指おさえ痕	○	○	○	○	灰黄褐	灰黄褐	スス付着
	Ⅱ	深鉢 M 9 VI上	Ⅵ	口縁・胴部 34.5	19.9	懸糸文・網目状懸糸文	懸糸文・押型文・ナデ	○	○	○	○	灰黄褐	にぶい黄	
337	Ⅱ	深鉢 M 9 V c	Ⅵ	胴部	8.4	懸糸文	ナデ・指おさえ痕	○	○	○	○	浅黄	浅黄	
	Ⅱ	深鉢 J 9 VI	Ⅵ	底面	7.0	ナデ	ナデ・指おさえ痕	○	○	○	○	灰黄褐	暗灰黄	
	Ⅱ	深鉢 F 19 VI	Ⅵ	口縁部	3.4	細糸線文	ナデ・指おさえ痕	○	○	○	○	にぶい黄褐	黄灰	
	Ⅱ	深鉢 L 20 VI	Ⅵ	口縁部	3.3	細糸線文	ナデ・指おさえ痕	○	○	○	○	にぶい褐	橙	
	Ⅱ	深鉢 D 25 VI a	Ⅵ	胴部	14.3	細糸線文	ナデ・指おさえ痕	○	○	○	○	褐	明赤褐	
	Ⅱ	深鉢 G 19 VI	Ⅵ	胴部	11.8	細糸線文	ナデ・指おさえ痕	○	○	○	○	にぶい黄橙	黄灰	
	Ⅱ	深鉢 F 19 VI	Ⅵ	胴部	7.3	細糸線文	ナデ・指おさえ痕	○	○	○	○	にぶい黄褐	黒褐	
	Ⅱ	深鉢 I 20 VI	Ⅵ	胴部	7.5	細糸線文・縄文	ナデ・指おさえ痕	○	○	○	○	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
	Ⅱ	深鉢 H 20 VI	Ⅵ	口縁部	10.1	ミミズばれ文	押型文・ナデ・指おさえ痕	○	○	○	○	黒褐	明赤褐	
	Ⅱ	深鉢 E 20 VI	Ⅵ	口縁部	7.5	ミミズばれ文	押型文・ナデ・指おさえ痕	○	○	○	○	灰黄褐	黄灰	
338	Ⅱ	深鉢 H 18 VI	Ⅵ	口縁・胴部 19.4	8.3	ミミズばれ文	ミミズばれ文・ナデ・指おさえ痕	○	○	○	○	にぶい黄褐	にぶい褐	
	Ⅱ	深鉢 H 18 VI	Ⅵ	口縁部	5.7	ミミズばれ文	ミミズばれ文・ナデ・指おさえ痕	○	○	○	○	橙	橙	
	Ⅱ	深鉢 E 17 V a	Ⅵ	口縁部	5.1	ミミズばれ文	ミミズばれ文・ナデ・指おさえ痕	○	○	○	○	黒褐	にぶい黄橙	
	Ⅱ	深鉢 J 20 VI	Ⅵ	口縁・胴部	11.2	ミミズばれ文	ミミズばれ文・ナデ・指おさえ痕	○	○	○	○	黒褐	にぶい褐	
	Ⅱ	深鉢 E 23 VI	Ⅵ	口縁・胴部 26.2	12.3	ミミズばれ文	ミミズばれ文・ナデ・指おさえ痕	○	○	○	○	黒褐	にぶい黄褐	
	Ⅱ	深鉢 J 20 VI	Ⅵ	胴部	6.5	ミミズばれ文	ナデ・指おさえ痕	○	○	○	○	灰黄褐	にぶい黄褐	
	Ⅱ	深鉢 D 20 VI	Ⅵ	胴部	5.9	ミミズばれ文・押型文	ナデ・指おさえ痕	○	○	○	○	黒褐	にぶい黄橙	
	Ⅱ	深鉢 G 22 VI	Ⅵ	胴部	6.1	ミミズばれ文	ナデ・指おさえ痕	○	○	○	○	橙	橙	
	Ⅱ	深鉢 D 20 VI	Ⅵ	口縁・胴部 38.0	11.0	突帯・沈線文	ナデ・指おさえ痕	○	○	○	○	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
	Ⅱ	深鉢 D 20 VI	Ⅵ	口縁部	4.4	突帯・沈線文	突帯・ナデ	○	○	○	○	灰黄	黄灰	
339	Ⅱ	深鉢 D 20 VI	Ⅵ	口縁部	6.8	沈線文	ナデ・指おさえ痕	○	○	○	○	灰黄褐	灰黄褐	
	Ⅱ	深鉢 F 18 横断面	Ⅵ	口縁部	4.4	沈線文	突帯・ナデ	○	○	○	○	灰黄褐	にぶい黄橙	
	Ⅱ	深鉢 F 17 VI	Ⅵ	胴部	7.8	斜目突帯・沈線文	ナデ・指おさえ痕	○	○	○	○	にぶい黄橙	にぶい黄橙	

第42表 Ⅷ類土器観察表(3)

※()は推定

国庫 番号	分類	器種	出土区	部位	法量 (cm)		主文様・調整		胎土			色調		備考									
					口径	底径	外面	内面	引目	黒炭	赤	外面	内面										
339	Ⅷ	深鉢	D 20 VI	胴部		19.8	刻目突帯・沈漚文	ナデ・指おさえ痕	○	○	○	○	灰黄褐	にぶい黄橙									
															5.4	刻目突帯・沈漚文	ナデ・指おさえ痕	○	○	○	○	にぶい黄橙	にぶい黄橙
															5.3	押型文	ナデ	○	○	○	○	にぶい黄褐	にぶい黄褐
															4.8	押型文	ナデ・指おさえ痕	○	○	○	○	にぶい黄褐	にぶい黄褐
															5.2	押型文	ナデ・指おさえ痕	○	○	○	○	にぶい黄褐	にぶい黄褐
															9.0	沈漚文・刺突文	ナデ	○	○	○	○	にぶい黄橙	にぶい黄橙

第43表 Ⅷ類土器観察表

国庫 番号	分類	器種	出土区	部位	法量 (cm)		主文様・調整		胎土			色調		備考									
					口径	底径	外面	内面	引目	黒炭	赤	外面	内面										
341	Ⅷ	深鉢	J 24 VI	口縁部	34.8	35.0	朝目突帯・沈漚文・刺突文	ナデ・ケズリ・指おさえ痕	○	○	○	○	にぶい橙	橙									
															32.4	朝目突帯・沈漚文・刺突文	ナデ・ケズリ・指おさえ痕	○	○	○	○	橙	橙
															6.5	朝目突帯・沈漚文・刺突文	ナデ・ケズリ・指おさえ痕	○	○	○	○	灰黄褐	にぶい黄褐
															7.0	朝目突帯・沈漚文	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	にぶい黄橙	にぶい黄橙
															4.0	朝目突帯	ナデ	○	○	○	○	黒褐	黄橙
															19.4	朝目突帯・沈漚文・刺突文	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	にぶい褐	灰黄褐
342	Ⅷ	深鉢	I 21 V a	口縁部	21.5	7.0	朝目突帯・沈漚文・刺突文	ナデ	○	○	○	○	にぶい黄橙	にぶい黄橙									
															4.7	刺突文	ナデ	○	○	○	○	灰褐	にぶい黄褐
															5.8	沈漚文・刺突文	ナデ	○	○	○	○	灰黄褐	にぶい黄褐
															5.4	朝目突帯・刺突文	ナデ	○	○	○	○	灰黄褐	にぶい黄褐
															11.1	朝目突帯・沈漚文・刺突文	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	黒褐	黒褐
															12.3	朝目突帯・沈漚文・刺突文	ナデ	○	○	○	○	にぶい黄橙	橙
343	Ⅷ	深鉢	J 20 VI	胴部		11.1	朝目突帯・沈漚文・刺突文	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	灰黄褐	にぶい黄褐									
															11.1	朝目突帯・沈漚文・刺突文	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	灰黄褐	にぶい黄褐

第44表 Ⅷ類土器観察表(1)

国庫 番号	分類	器種	出土区	部位	法量 (cm)		主文様・調整		胎土			色調		備考									
					口径	底径	外面	内面	引目	黒炭	赤	外面	内面										
345	Ⅷ	深鉢	F 22 VI	口縁部	25.8	11.8	朝目突帯・沈漚文・刺突文	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	明赤褐	明赤褐									
															7.6	沈漚文・刺突文	ナデ・ケズリ・指おさえ痕	○	○	○	○	橙	橙
															17.5	沈漚文・刺突文	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	にぶい黄	にぶい黄橙
															5.6	朝目突帯・沈漚文・刺突文	ナデ	○	○	○	○	明赤褐	明赤褐
															4.7	朝目突帯・沈漚文・刺突文	ナデ	○	○	○	○	橙	褐灰
															21.7	朝目突帯・沈漚文・刺突文	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	灰黄褐	にぶい褐
346	Ⅷ	深鉢	H 20 VI	口縁部	18.0	20.0	朝目突帯・沈漚文・刺突文	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	にぶい黄褐	にぶい黄褐									
															4.4	朝目突帯・沈漚文・刺突文	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	橙	灰黄褐
															5.1	朝目突帯・沈漚文・刺突文	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	黒褐	明赤褐
															4.4	朝目突帯・沈漚文・刺突文	ナデ	○	○	○	○	にぶい橙	にぶい橙
															15.3	沈漚文・刺突文	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	灰黄褐	灰黄褐
															22.2	沈漚文・刺突文	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	灰黄褐	灰黄褐
347	Ⅷ	深鉢	K 20 VI	口縁部	20.0	20.0	沈漚文・刺突文	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	灰黄褐	灰黄褐									
															4.8	沈漚文	ナデ	○	○	○	○	にぶい褐	褐
															10.9	沈漚文・刺突文	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	灰黄褐	灰黄褐
															6.2	沈漚文・刺突文	ナデ	○	○	○	○	灰褐	黒褐
															5.8	沈漚文・刺突文	ナデ	○	○	○	○	明赤褐	明赤褐
															7.7	沈漚文・刺突文	ナデ	○	○	○	○	明赤褐	明赤褐
348	Ⅷ	深鉢	G 21 VI	口縁部	4.7	4.7	沈漚文	ナデ	○	○	○	○	にぶい黄褐	にぶい黄褐									
															5.5	沈漚文・刺突文	ナデ・ケズリ・指おさえ痕	○	○	○	○	にぶい黄褐	にぶい黄褐
															12.3	朝目突帯・沈漚文・刺突文	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	褐	灰褐
															9.8	沈漚文・刺突文	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	橙	にぶい褐
															8.7	沈漚文・刺突文	ナデ・ケズリ・指おさえ痕	○	○	○	○	橙	にぶい褐
															19.1	沈漚文・刺突文	ナデ	○	○	○	○	にぶい赤褐	にぶい赤褐
349	Ⅷ	深鉢	H 21 V a	口縁部	41.0	19.1	沈漚文・刺突文	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	にぶい赤褐	にぶい赤褐									
															7.7	沈漚文・刺突文	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	にぶい褐	にぶい褐
															7.8	沈漚文・刺突文	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	にぶい褐	にぶい褐
															7.2	沈漚文・刺突文	ナデ	○	○	○	○	褐灰	灰黄褐
															4.0	沈漚文	ナデ	○	○	○	○	暗灰黄	黒褐
															2.9	沈漚文	ナデ	○	○	○	○	にぶい黄橙	にぶい黄橙
350	Ⅷ	深鉢	H 21 VI	口縁部		8.6	沈漚文・刺突文	ナデ・指おさえ痕	○	○	○	○	褐灰	灰黄褐									
															17.3	朝目突帯・沈漚文・刺突文	ナデ	○	○	○	○	橙	にぶい黄橙
															11.5	朝目突帯・沈漚文・刺突文	ナデ	○	○	○	○	橙	にぶい黄橙
															4.7	沈漚文・刺突文	ナデ	○	○	○	○	橙	にぶい褐
351	Ⅷ	深鉢	G 24 VI	口縁部	23.8	4.1	沈漚文・刺突文	ナデ	○	○	○	○	灰褐	にぶい褐									
															4.1	沈漚文・刺突文	ナデ	○	○	○	○	灰褐	にぶい褐

第47表 煎類土器観察表(4)

※()は推定

例品 番号	図録 分類	器種	出土区	部位	法量 (cm)	主文様・調整		胎土			色調		備考			
						外面	内面	目	肌	骨	外面	内面				
370	1117	XV	深鉢 I 21	VI	胴部	7.8	刺目突帯・刺突文	ナデ・ケズリ・指おさえ痕					黒褐色	黒褐色		
	1118	XV	深鉢 K 21	VI	胴部	13.3	刺目突帯・沈線文	ナデ・ケズリ					にぶい褐色	にぶい黄褐色		
	1119	XV	深鉢 H 21	VI	胴部	18.4	沈線文・刺突文	ナデ・ケズリ・指おさえ痕					灰黄褐色	にぶい黄褐色		
371	1120	XV	深鉢 G 21	VI	胴部	18.9	沈線文・刺突文	ナデ・ケズリ・指おさえ痕					黒褐色	灰黄褐色		
	1121	XV	深鉢 L 21	VI	胴部	12.6	沈線文・刺突文	ナデ・ケズリ					灰褐色	黒褐色		
	1122	XV	深鉢 I 21	VI	胴部	10.0	沈線文・刺突文	ナデ・ケズリ					にぶい褐色	にぶい褐色		
	1123	XV	深鉢 K 22	VI	下胴部	8.4	沈線文・刺突文	ナデ・指おさえ痕					にぶい褐色	にぶい赤褐色		
	1124	XV	深鉢 H 21	VI	胴部	12.9	沈線文・刺突文	ナデ・ケズリ					灰黄褐色	にぶい褐色		
	1125	XV	深鉢 G 21	VI	胴部	10.1	沈線文・刺突文	ナデ・ケズリ					明赤褐色	にぶい黄褐色		
372	1126	XV	深鉢 H 21	VI	胴部	11.4	沈線文・刺突文	ナデ・ケズリ					にぶい褐色	にぶい褐色		
	1127	XV	深鉢 K 21	VI	胴部	15.7	沈線文	ナデ・ケズリ					にぶい赤褐色	にぶい赤褐色		
	1128	XV	深鉢 J 21	VI	胴部	7.0	沈線文	ナデ・ケズリ					明赤褐色	にぶい褐色		
373	1129	XV	深鉢 G 24	VI	a 胴部	11.4	結節縄文・刺目突帯	ナデ・ケズリ					明赤褐色	赤褐色		
	1130	XV	深鉢 G 24	VI	b 胴部	6.7	縄文	ナデ・ケズリ					にぶい赤褐色	赤褐色		
	1131	XV	深鉢 H 24	VI	a 胴部	7.5	結節縄文・刺目突帯・沈線文	ナデ・ケズリ・指おさえ痕					黒褐色	にぶい褐色		
	1132	XV	深鉢 J 21	VI	a 胴部	9.3	結節縄文・刺目突帯	ナデ					にぶい黄褐色	橙		
	1133	XV	深鉢 J 22	VI	a 胴部	9.8	結節縄文・刺目突帯	ナデ・指おさえ痕					明赤褐色	明赤褐色		
	1134	XV	深鉢 F 23	VI	胴部	14.1	結節縄文・沈線文・刺突文	ナデ・ケズリ					灰黄褐色	にぶい黄褐色		
	1135	XV	深鉢 F 23	VI	胴部	9.5	結節縄文・沈線文・刺突文	ナデ					褐色	黒褐色		
	1136	XV	深鉢 F 21	VI	胴部	14.2	結節縄文	ナデ・ケズリ					橙	にぶい黄褐色		
	1137	XV	深鉢 G 23	VI	胴部	9.3	結節縄文	ナデ・ケズリ					灰黄褐色	にぶい黄褐色		
	1138	XV	深鉢 F 23	VI	胴部	12.9	縄文・沈線文・刺突文	ナデ・ケズリ					にぶい黄褐色	灰黄褐色		
374	1139	XV	深鉢 G 21	VI	胴部-胴部	8.4	縄文・刺目突帯・沈線文	ナデ・ケズリ					にぶい黄褐色	褐色		
	1140	XV	深鉢 I 21	VI	胴部-胴部	11.0	11.0	縄文	ナデ・指おさえ痕				橙	褐色		
	1141	XV	深鉢 H 22	VI	胴部-胴部	14.1	結節縄文	ナデ					にぶい褐色	灰褐色		
	1142	XV	深鉢 G 23	VI	胴部-胴部	11.5	結節縄文	ナデ					にぶい褐色	灰褐色		
	1143	XV	深鉢 G 21	VI	胴部	8.3	結節縄文・沈線文・刺突文	ナデ					にぶい褐色	にぶい褐色		
	1144	XV	深鉢 J 23	VI	胴部	4.2	刺目突帯	ナデ					にぶい赤褐色	赤褐色		
	1145	XV	深鉢 G 21	VI	胴部	5.3	刺目突帯	ナデ					にぶい褐色	橙		
	1146	XV	小鉢	L 20	VI	口縁部	10.0	4.4	沈線文・刺突文	ナデ				にぶい褐色	にぶい褐色	
	1147	XV	小鉢	G 21	VI	口縁部	10.0	3.5	沈線文・刺突文	ナデ・指おさえ痕				にぶい褐色	にぶい黄褐色	
	1148	XV	小鉢	I 21	VI	口縁部	12.0	18.9	沈線文・刺突文	ナデ・指おさえ痕				にぶい褐色	明赤褐色	
375	1149	XV	小鉢	I 21	VI	口縁部	12.2	9.6	沈線文・刺突文	ナデ・指おさえ痕				にぶい褐色	にぶい褐色	
	1150	XV	小鉢	K 21	VI	口縁部	9.2	6.9	沈線文・刺突文	ナデ・ケズリ				灰黄褐色	にぶい褐色	
	1151	XV	小鉢	K 21	VI	a 口縁部	10.8	4.3	沈線文・刺突文	ナデ・ケズリ				にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
	1152	XV	小鉢	J 23	VI	胴部-胴部	4.0	7.6	沈線文・刺突文	ナデ・ケズリ				灰黄褐色	にぶい黄褐色	
	1153	XV	壺	I 21	VI	口縁部	12.4	4.8	刺目突帯・沈線文・刺突文	ナデ・指おさえ痕				にぶい褐色	にぶい褐色	
	1154	XV	壺	K 21	VI	口縁部	10.1	7.7	沈線文・刺突文	ナデ・指おさえ痕				にぶい褐色	にぶい褐色	
	1155	XV	壺	E 22	VI	口縁部	9.9	9.9	ナデ	ナデ				にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
	1156	XV	壺	K 22	VI	上口縁部	9.0	4.2	沈線文	ナデ				にぶい褐色	にぶい褐色	
	1157	XV	壺	I 21	VI	口縁部	15.6	4.3	沈線文・刺突文	ナデ・ケズリ				にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
	1158	XV	壺	H 21	VI	口縁部	10.9	4.0	縄文・刺突文	ナデ・ケズリ				にぶい褐色	にぶい黄褐色	
376	1159	XV	壺	K 21	VI	口縁部	10.4	4.0	沈線文・刺突文	ナデ・指おさえ痕				にぶい褐色	灰黄褐色	
	1160	XV	壺	E 22	VI	b 口縁部	9.2	3.6	沈線文	ナデ・ケズリ				にぶい褐色	にぶい褐色	
	1161	XV	壺	G 22	VI	口縁部	10.2	16.4	沈線文・刺突文	ナデ				にぶい褐色	にぶい褐色	
	1162	XV	壺	G 21	VI	口縁部	7.7	7.5	縄文・結節縄文	ナデ・指おさえ痕				明褐色	にぶい赤褐色	
	1163	XV	壺	G 21	VI	口縁部	8.4	4.3	沈線文・刺突文	ナデ				にぶい褐色	にぶい褐色	
	1164	XV	壺	I 21	VI	胴部-胴部	17.5	刺目突帯・沈線文・刺突文	ナデ・指おさえ痕					にぶい褐色	明赤褐色	
	1165	XV	壺	G 21	VI	胴部	13.2	沈線文・刺突文	ナデ・指おさえ痕					にぶい褐色	にぶい褐色	
	1166	XV	壺	K 22	VI	胴部-胴部	14.7	刺目突帯・沈線文・刺突文	ナデ・指おさえ痕					明赤褐色	明赤褐色	
	1167	XV	壺	I 24	VI	胴部	6.3	刺目突帯・沈線文・刺突文	ナデ・指おさえ痕					褐色	褐色	
	1168	XV	壺	F 23	VI	胴部	6.4	刺目突帯・沈線文・刺突文	ナデ・指おさえ痕					にぶい褐色	褐色	
377	1169	XV	壺	H 21	VI	胴部-胴部	7.3	沈線文・刺突文	ナデ・指おさえ痕				褐色	灰黄褐色		
	1170	XV	壺	K 21	VI	下胴部	17.0	沈線文	ナデ・指おさえ痕				明赤褐色	明赤褐色		
	1171	XV	壺	K 21	VI	胴部	5.9	沈線文・刺突文	ナデ・ケズリ				明赤褐色	明赤褐色		
	1172	XV	壺	K 21	VI	胴部	9.1	沈線文・刺突文	ナデ・指おさえ痕				明赤褐色	にぶい褐色		
	1173	XV	壺	G 23	VI	胴部	5.2	結節縄文	ナデ				明赤褐色	にぶい褐色		

公益財団法人 鹿児島県文化振興財団 埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(18)
東九州自動車道建設(鹿屋串良JCT~曾於弥五部IC間)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

天神段遺跡 3

(縄文時代早期編 第2分冊)

発行年 2018年3月
編集・発行 鹿児島県教育委員会
公益財団法人 鹿児島県文化振興財団 埋蔵文化財調査センター
〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号
TEL. 0995-70-0574 FAX 0995-70-0576
印刷所 株式会社 トライ社
〒892-0834 鹿児島県鹿児島市南林寺町12-6
TEL. 099-226-0815 FAX 099-225-7933

